
God Force **神と少年の非日常**

竹馬プシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

God Force 神と少年の非日常

【Nコード】

N8907L

【作者名】

竹馬プシー

【あらすじ】

俺は竹宮隼人。ごく普通に高校生活を過ごそうと思っていた。ある日俺は家に帰ろうとした時、俺と同じくらいの女性にあった。この女性と会ったことにより俺の日常は変わってしまった。

タイトル変更しました。

今後の予定 5月3日現在 (絶対に読んで!!) (前書き)

最初に、前回書いた予定は全部忘れてください。
後、これが書き終わったら前回は削除しますので。

今後の予定 5月3日現在 (絶対に読んで!)

竹馬プシーです。

それでは「Got Force 神と少年の非日常」の今後の予定を言います。

まず、「Got Force 神と少年の非日常」は合計十部で行きます。

前に続編を作ると言いましたが、一緒にしました。

なんですが、実は一つ重大な事が。

ブログを見ている方は分かると思いますが、「Got Force 神と少年の非日常」の修正版を書かせてもらっています。

第三部までの文が酷過ぎるものですから、一度書き直そうかなと思っ
ってね。

一応設定なども書き直していたりします。例えば「能力都市」の名前を「別次元都市」と変えて構造も変えていたりします。

っということですので、こちらの「Got Force 神と少年の非日常」は区切りが良い第六部で終了させてもらいます。

それで修正版である「真 Got Force 神と少年の非日常」の方で第十部まで書くと思います。多分こちらにもいつかは載せま
すので。

それとI F s t o r yは多分やらないと思います。本編一本で良いかなと思いましたので。

それでは。

プロローグ(前書き)

初投稿です。

プロローグ

高校一年生の夏、俺こと竹宮隼人は今までごく普通に生活をしてきた。

まあ、小学六年生のときに普通とはありえない非日常をしていたが、それは後に話そう。

だが、俺は家族以外に秘密にしていることがある。

それは、俺が超能力者であることだ。

別に超能力者はたくさんいるので友達とかに言っても良いんだが、

何故超能力者だと言わないのかというと、俺は南鳥島にある『能力都市』に住まなければいけないくなるのだ。

『能力都市』とは南鳥島に立てた都市で昔の南鳥島の跡形もなく、今は半径約10キロの円形の大きさがある。

また、『能力都市』でやる学校の内容は普通の学校と違い、能力の応用や能力のコントロールなどをやっているらしい。

ちなみに、俺がどんな能力なのかというと……いや、これも後で話そう。

俺はそうやって超能力者だと思わせないで中学校の時はそう生活してきた。

そして高校もそついう生活をしようと思っていた。

だが、このとき俺はこれまでの日常だったのが非日常になるとは知らなかった。

プロローグ（後書き）

意見、感想があったら言ってください。

第一話

俺こと竹宮隼人はいつもどおり学校が終わると買い物をして家に帰ってた。

「ふう、とりあえずこれで当分大丈夫だろ。」

俺は今、高校に通うために親と離れて東京に来ている。

まだ、このときはいつもの日常だと思っていた。

「さて、そろそろ家に着く……あれ？俺の家の前に居るのは誰だ？」

俺の家があるマンションに着き玄関の所まで歩いていたら、俺の家の玄関の前で俺と同じくらい年の女性が立っていたのだ。

「あの、俺に何か用ですか？」

俺が話しかけると、その女性は俺の方を向いた。

……綺麗だ。

髪は黒で長く、服装はシスターが着るような服を着ていた。

「あなたが竹宮隼人ですか？」

「そうだけど、俺に何か用ですか？」

「私は名前は雨宮優子。あなたに来て欲しいところがあるの。」

「来て欲しいところ？それはどこですか？」

俺は雨宮さんとの接点は無いのに一体何のようなのかと思いながら聴いていた。

だが、次に雨宮さんが言った言葉は俺の日常が変わる言葉だった。

「あなたには『能力都市』に来て貰います。」

「……………どうしてですか？」

察していたがまさか本当だと思わなかった。

「あなたも分かっているはずです。あなたは超能力者で超能力者は『能力都市』に強制的に連れて行かなければならない事を。」

「……………行かないといったら。」

俺はこれ以上俺が『能力都市』に行かない方法が無いのは知っているに聴いてみた。

「あなたを死なない程度で大人数であなたを倒し、何が何でも連れてきます。」

「…………………………」

今、死なない程度って言ったよ！！そこまでして連れて行くのかよ！！

「これであなたに拒否権はありません。ついて来ますね？」

「……分かった。」

「では明日の午後5時またここに来ますのでそれまでに準備して置いてください。それと、逃げ出しても監視をしている人がいるので余計なことを考えないでください。」

俺は雨宮さんの言う事を聴き、『能力都市』に行く事を決意した。

そして雨宮さんは明日来る時刻を言うと帰っていった。

「さて、仕方ない。準備でもするか。」

俺は家の鍵を開け、家の中に入ると明日の準備に取り掛かった。

第一話（後書き）

雨宮優子は多分聞いたことがある人もいると思いますが、別に俺が好きなキャラクターだから使ったわけであってあんまり気にしないでください。

それと意見、感想があればお願いします。

第二話（前書き）

全然進まないな……

第二話

翌日、俺はいつもどおりに起き、朝食を食べ、学校の仕度をして、そして、今日で通うのが最後になる学校に行った。

「まったく本当にいきなりだよな。あいつがどう思うか……」

あいつとは俺の幼馴染で俺が東京の方の高校に行くと言ったら何故かついて来た清水瑞希の事を言っている。

ちなみに何故俺について来たかと言うと、毎回言葉を濁して理由を分からないんだが。

「な〜に一人で考えているの？」

……どうして毎回瑞希の事を考えているとこいつは来るんだあ？

「お前には関係ねーよ。」

「そうかな。さっきまで私のことで考えてるような感じだった気がするよ?」

「俺は毎回お前の事を考えていると思っっている訳ねーだろ!」

そう。瑞希は俺が瑞希以外の事を考えている時も自分のことを考えていると思っっている。

まあ、今回はこいつの事を考えていたんだが。

「で、瑞希はこの前のテストの点数はどうだった？」

俺はこれ以上瑞希のペースに合わせるといろいろとめんどくさいので話を変え、この前やったテストの話をしてみた。

「結構良かったわね。隼人は？」

「俺も結構良かったぞ。あんだけお前と復習をしたんだからさ。」

「そりゃ私が手伝ったんだから当然でしょ。」

「……どちらかというと俺が手伝った気がするんだが……」

「あら、そうだったけ？」

「そつだよ……」

だめだ、話を変えてもこいつのペースになってしまう……

ちなみにこいつは俺達が通っている高校の受験をする時に試験二日前に俺の家に来て『勉強教えてー』。』と言ってきた事がある。

さらにこいつがこの高校に受かったのもまぐれにしか思えない。

要するにこいつは俺よりバカで、普通ならこの高校に受かる訳が無かったのだ。

まあ、多分こいつはまだずっと一緒に居ると思っっているんだろうが。

「また、何か考えて事している。また私の事でも考えてたの？」

「だから、お前の事を考えていないっつーの!!」

そんなこんなで俺達はそんな話をしながら、俺達が通う高校に着いたのだ。

「じゃあ俺は職員室に用があるから先に教室に行つといてくれ。」

「また問題でも起こしたの?」

「またって何だまたって!!俺がいつ問題を起こしたんだ!!」

「いつも起こしているじゃん。」

「いつも起こしてねーよ!!」

本当にこいつと話していると疲れる。

ちなみに俺達は同じクラスだったりする。

「とりあえず、先に行つといてくれ。」

「分かったわよ。」

俺は瑞希といったん離れ、職員室に向かった。

そして、俺は先生に転校の事と俺が超能力者だと言つ事を話し、教室に向かった。

教室に入ると、俺が転校するとも知らずに瑞希が話しかけてきてき

た。

そしてチャイムが鳴り、ホームルームが始まった。

第二話（後書き）

意見、感想があったら言ってください。

第三話

ホームルームが始まると、まず担任の先生が出席を取り、今日のお知らせを言うと先生が俺を呼んだ。

「今日で竹宮くんは転校することになりました。」

先生がそういうと、クラスのみんながざわめいていた。

「ほんの数ヶ月でしたが、今までありがとうございました。」

俺がそういうと何故か静まりかえった。

「そういうことだから今日一日、竹宮くんと最後のクラス生活を楽しみましょう。それじゃあこれでホームルームは終了。」

ホームルームが終了すると先生は教室を出て行き、その後俺は瑞希に腕を引っ張られ、生徒があんまり来ない所に連れて行かれた。

「朝、そんな事言っただけじゃなく！どうして転校なの？」

先ほどのアホな話とは違って、瑞希は真面目に言ってきた。

「ごめん。急に転校する事になったからな。」

「どうして急に転校の話になったの！」

「それは……言えない。」

「どうして！何で言えないの！！」

「……お前なら大体転校する理由が分かると思う。」

「だからどうして……まさか。」

ようやく俺が転校する理由が分かったようだ。

また、なぜ瑞希は俺が超能力者であるか知っているかと言うと、瑞希も超能力者でお互い超能力者という事もあるので、お互いに超能力者だという事も知っているのだ。

「そのまさかだ。俺は『能力都市』に超能力者だということがばれている。」

「でも、隼人は私と同じで『能力都市』が嫌い何でしょ！どうしてそんな所に行くの！」

そう。俺と瑞希は『能力都市』が嫌いだ。

『能力都市』は表面上、能力のコントロールとかそういうことをやっていると言っているが、実際は人体実験が行われているらしい。いや、行われているのだ。

普通みんなに羨ましがられるが、俺と瑞希は『能力都市』で人体実験を行われている事を知っているからあんな所は行きたくないのだ。

「しょうがないだろ！逃げたとしても強制で連れて行かれるんだから……」

「……いいわ。じゃあ私も行く。隼人だけにあんなところに行かせない。」

「お前は来るな。あんなところ、俺だけで十分だ。お前だけにはあんなところには来て欲しくない。」

いきなり何を言っているんだこいつは…

「でも…」

「それに俺は、瑞希に平和な日常をして欲しいんだ。あんな非日常なところに居てほしくねーんだよ。」

「……分かった。でもこれだけは約束して。向こう行っても絶対に死なないで。」

「ああ、約束する。」

俺は瑞希の肩を軽く叩き、先に教室に戻った。

「本当に鈍感なんだから。」

途中、瑞希からそんな言葉が聞こえたが意味が分からなかった。

第四話

学校が終わり、友達にお別れパーティしようぜっと言われたが、そんな暇は無いので『ごめん、すぐに帰って引越しの準備しなきゃいけないんだ。』っと言って一人で帰っているのだ。

いつもなら瑞希と一緒に帰るんだが今日は一緒に帰らなかった。

そして午後4時半に家に着いたのだが…

「何でもう居るんですか？」

「あら、居たら悪かった？」

まだ30分前なのに雨宮さんが家の前で立っていた。

「まあ、本当は話があつて少し早く来たんだけど。」

「ま、とりあえず中に入れてください。」

俺は立ち話もなんだから雨宮さんを家の中に入れた。

「それで、話つて何ですか？」

「『能力都市』に行く前に話そうと思ってね。今、『能力都市』では派閥争いが起きてるの。」

「え！？そつなんですか？」

知らなかった。俺は結構『能力都市』の情報を持っているんだが派閥争いなんていう情報は持ってなかったのだ。

「そうよ。今、『能力都市』内で二つに分かれていて、戦い合っているの。」

「雨宮さんはその中の派閥に入っているのですか。」

「ええ、そうよ。」

「なら、俺を雨宮さんの組織に勧誘しに来たということでもありませんね。」

「あなた鋭いわね。その通りよ。あなたを勧誘しに来たの。どのみちあなたは『能力都市』に連れて行かなければならなかったしね。」

まあ、大体そんな話をするからそんなことだと思ったただけだけど。

「あなた達の組織ともう一つの組織はどう違うのですか？」

これは大事なことだ。どうして二つに分かれているのか気になるからだ。

「私たちの組織『ユニオン』は元々『能力都市』を統括していた組織で6年前まで超能力者を普通に育ててきたの。」

確かに、6年前までは俺も『能力都市』に行きたいと思い、中学生から行くこと思っていた。

「だが、もう一つの組織『スキル』を統括している天壤という人が

不満をに思ってたらしくそれから二つに分かれたの。」

「それで天壤という人は何をしたのですか？」

「天壤という人は今でも酷いことをしているの。人体実験なんか普通にやっているのよ。許せないったらありゃしない。」

「人体実験……」

人体実験、俺が『能力都市』に行きたくなかった理由だ。

「そうよ。あの人は本当に酷い人だわ。有名な人体実験は、岐阜の小さな村で全員が超能力を使えるようにする実験があったの。」

「そのあと、その人たちは何者かによって一人残らず殺された事件でしょ。」

「どうして、あなたがそのことを知っているのですか？」

雨宮さんは俺がその事件のことについて知っていることに驚いていた。

そりゃそうだろう。あの事件は『能力都市』によってもみ消されたのだから。

また、俺がその事件を知っているかというと、俺はこの事件に関わっているからだ。

「あの事件の被害者の中に俺の祖母がいたんです。」

「でも被害者の親戚にもそんなことは何も言っていないはず。」

「確かにそうでしょう。でも、俺はその事件を調べまくった。そして、『能力都市』が関わっていることを知ったんだ。」

あの時は絶対に真相を掴む為にたとえどんなことをしようと思えばよ
うとしてようやく真相を掴んだのだ。

俺は『能力都市』が関わっていてそのことを隠そうとしていること
が憎く、許せなかったのだ。

だから、俺はそれ以降『能力都市』が今まで行われた人体実験をす
べて調べ、仕返しをしようとしたのだ。

「それでも、そんなことまで知れるはずが、」

「じゃあそこにある資料を見てください。今まで行われた人体実験
が事細かく書かれていますから。」

俺は天壤がいる『スキル』という組織が人体実験に関わっていたこ
とが分かり、『能力都市』全体が人体実験をしているわけではない
という事知ったので今まで調べた資料を雨宮さんに見せることに
した。

数分後、雨宮さんは俺が調べた資料をすべて見終わると驚いていた。

「どうやってこんな資料を調べたの？私たちが持っている資料より
詳しいわよ。」

「そこまで驚きますか？」

「驚くわよ。ここまで人体実験の情報を知っているなんて。私たちでも知らないわよ!」

俺、そこまで調べたのか？

「とりあえず、この話は後で聞くわ。もうそろそろ時間だから。」

「分かりました。」

兩宮さんがそういうと、俺は兩宮さんと一緒に家を出た。

多分、この家にも、この場所にも帰ってこないんだよな…

「何してるの？早く行くわよ。」

「あ、すみません。」

そして、俺は今まで住んでいた家を後にした。

第五話（前書き）

短いです。

第五話

家から出て数分後、俺達は港に居た。

「あれ？何故飛行機ではなく船で行くんですか？」

「飛行機だと敵に狙われたら、超能力で対抗できないでしょう。」

「なるほど……」

いつ狙われても良いように時間をかけても守る方が優先か。

「そういえば俺の荷物はどこにあるのですか？さっき家の中に入ったときには、もうなかったの。」

「それなら船の中に運んだわ。それにしても家の鍵をかけないで家を出るなんて泥棒にも入られたらどうするつもりだったの？」

「あ……」

忘れてた。朝から『能力都市』のことで考えてたからすっかり鍵をかけるのを忘れてた。

「まあ、そういって勝手に家に入ったけど。」

「ドアが開いてるからって勝手に家に入るな！！」

「あら？もしかして、何かいやらしいものでも入ってたのかしら？」

「そういつわけじゃない！！いやらしい物とか関係なく勝手に入るなって言ってるんだ！！」

「あら、いやらしい物が入ってないって否定しないんだ。」

「うぐっ。」

確かに否定できね。だって思春期だからしょうがないじゃん。

「まあ、そんなどうでもいい話はほっといてさっさと行くわよ。」

「どこがどうでもいい話なんだ！！」

「はいはい、さっさとしないと船が出発するから乗るわよ。」

「流された！！」

こいつ、瑞希並に疲れる…

とか言いながらも俺は兩宮さんについて行き、大型戦艦に乗った。

第五話（後書き）

意見、感想を願います

第六話（前書き）

前回同様、短いです。

第六話

数分後、船は出発し、俺達はその船の中にいた。

「はあ、もうあそこには帰らないんだろうな。」

「なんか退屈そうね。もしかして、幼馴染とかが恋しかったりして。」

「……そうなんだけどな。」

「あら、ボケたつもりだったんだけど？」

「ツツコンで欲しかったのかよ!!」

俺はいつからツツコミ担当になったんだ？

「そういえばさ、雨宮さんは何でいつも修道服なんですか？」

「それは秘密。」

「某生徒会の言葉をパクルな!!」
なぜ某生徒会の

「で、何の話だったけ？」

「もう良いです。」

これ以上ツツコンなら俺が疲れる気がしたので……

「何故さつきから修道服を着ているでしょう。別にシスターを目指していたわけでもなく、ただ単に着慣れているからよ。」

「……覚えていないですか……」

もうツツコムのが嫌になったので俺は小さな声でツツコンだ。

「それと、私を呼ぶときは雨宮さんじゃなくて雨宮で良いから。なんか堅苦しいから。」

「でも……」

俺が何かを言おうとした時異変が起こった。

「敵襲だ!!! 総員そなえろ!!!」

そう、『スキル』が戦闘機で攻めてきたのだ。

第六話（後書き）

次から戦闘シーンに入ります。

第七話

隼人 side

「やっぱり来たわね。」

つと雨宮と…雨宮は来るのが予測してたかのように言っていた。

そして雨宮は耳に何かを付け、何かを聞いていた。

「ええ、相手は三機ね。分かったわ。」

どうやら誰かと話していたらしい。

「あなたは船の中に入っていなさい。」

雨宮は俺に船の中に居ると言ったが、

「俺も戦います。」

俺は雨宮に戦うと言った。だが、

「駄目よ。私たちはあなたを『能力都市』に送る命令で動いているの。もしあなたが死んだら意味が無いでしょ。だから船の中に居て。」

雨宮は命令が出ているからって再度俺に船の中に居ると言われた。

「でも…」

「それにあなたの能力は私も知らないし、そのことであなたが足手まといになっただら困るだけだから。」

「……分かった。」

俺はここで雨宮に従う事にした。

だが、俺は納得がいかなかった。

俺が自分の部屋に入って数分後、敵の戦闘機との戦いが始まった。

その時の俺はやっぱり納得がいかなくて、どうして俺は戦わせてくれないのだろうと思っていた。

雨宮の言う事は分かる。でも、あの人たちは俺が思っていたより良い人たちだった。

俺のことをいろんなことで親切にしてくれたんだ。

特に雨宮は俺の近くにいてくれて、俺の話や雨宮のポケなどで楽しかった。

やはり、その人たちが戦っているのに、俺だけが戦っていないのは変だと思った。

だから、俺は部屋を出て外に向かった。

外に出ると戦艦の上に戦闘機が二機上空にいた。

先ほどの雨宮の会話から察すると、どうやら一機は倒したらしいな。

少し歩くと雨宮が遠くに見え、一つの戦闘機に向かって冷凍能力を使っていた。

どうやら雨宮は冷凍系能力らしい。

そして、雨宮は戦闘機を凍らせた。

だが、

「しまった！！こっちに向かってきやがった！！」

そう。雨宮が凍らせた戦闘機が操作不能になって、雨宮に向かって飛んできたのだ。

しかも、その戦闘機はでかいので雨宮は逃げられるわけも無いし、このまま直撃するとこの船にぶつかって沈没しかねない。

だから俺は雨宮の方に走っていた。

「雨宮！！しゃがんでろ！」

「あなた、船の中にいなさいって言ったのにどうして来たの！？このままだとあなたも死ぬ……」

「いいからしゃがめ!!」

俺が怒鳴ると兩宮は俺の言う事を聞き、しゃんだ。

そして俺はいつもポケットの中に入っているナイフを取り出した。

「あなた、まさかそのナイフであれを何とかしようと思っているの？そんなものであれを何とか出来るわけが、」

「……出来るんだよ。俺はこのナイフだけであれを何とか出来るよ。」

「どっせって、」

「じじするのさ!!」

俺はナイフを戦闘機の方に向け縦に振った。

そう。ナイフを振っただけなのだ。

「うそ…ナイフを振っただけなのに戦闘機が真っ二つに割れてるの……」

俺がナイフを振り終わると戦闘機は真っ二つに割れ、海に沈んでいった。

「俺の能力は空間切断と言い、俺が刃物や先端が尖った物で振るとそこから二百mの先まで切れるんだ。」

「だから、戦闘機が真つ二つに切れたのね。でも、どうして私を助けたの？」

「助けるのに理由なんかあるか？しいて言うなら俺は雨宮だけは特に失いたくなかった。」

「どうして？」

「雨宮にはもつと教えて欲しいことがあるし、それにこっちの人で初めての友達だからな。」

「……そう。とりあえず、ありがとうね隼人君。」

……今、初めて名前で言われたぞ。しかも苗字じゃなくて名前だったんだけど。

「とりあえず、今は戦闘中だったな。」

「そうだったね。じゃあ、最後の一機も墜落させるわよ。」

そして俺達は最後の二機を墜落させるために動いた。

優子 side

「雨宮！ー！しゃがんでろ！」

私はいきなり隼人君に叫ばれ驚いた。なんでここに居るの？

「あなた、船の中にいなさいって言ったのにどうして来たの!?!」
「のままだとあなたも死ぬ…」

「いいからしゃがめ!?!」

私は隼人君の怒鳴り声にビックリしてついしゃがんでしまった。

私がしゃがむと隼人君はナイフを取り出した。まさか、それで何とかしようと思っているの？

「あなた、まさかそのナイフであれを何とかしようと思っているの？そんなものであれを何とか出来るわけが、」

「……出来るんだよ。俺はこのナイフだけであれを何とか出来るよ。」

「どうやって、」

「じつするのさ!?!」

そういって隼人君はナイフを振った。そして私にはありえないものを見た。

「うそ…ナイフを振っただけなのに戦闘機が真っ二つに割れてるの……」

そう、隼人君はナイフを振っただけで戦闘機を真っ二つにしたのだ。

「俺の能力は空間切断と言い、俺が刃物や先端が尖った物で振るとそこから二百mの先まで切れるんだ。」

なるほど、だから真っ二つに割れたのか。

「だから、戦闘機が真っ二つに切れたのね。でも、どうして私を助けたの？」

私は何故私を助けたのか気になった。」

「助けるのに理由なんかあるか？しいて言うなら俺は雨宮だけは特に失いたくなかった。」

「どうして？」

「雨宮にはもつと教えて欲しいことがあるし、それにこっちの人で初めての友達だからな。」

初めてだった。私を友達と言ってくれた人なんて。

私は小さい時から『能力都市』に居て、学校でも私の友達は居なかった。

私は小学校、中学校はいじめられていた。

だから私はまたいじめられるかも知れなかったので、高校には行かず『ユニオン』の一員として働き、今の私がいる。

だが、竹宮隼人は私の事を友達と言ってくれた。

私はその言葉が嬉しかった。

「……そう。とりあえず、ありがとうね隼人君。」

「とりあえず、今は戦闘中だったな。」

「そうだったね。じゃあ、最後の一機も墜落させるわよ。」

そして私達は最後の一機を墜落させるために動いた。

でもどうしてだろう。私の胸が締め付けられているのは。

第七話（後書き）

意見、感想をお願いします。

第八話（前書き）

ちよつと早すぎたかも。

第八話

隼人 side

あの後、俺達は最後の機も墜落させ、戦艦はほとんど無事で事なきを得たのだ。

そして、今の俺はというと…

「あゝ、何で俺がこんなに祝福されているんですか？」

「だって、隼人君は戦闘機を二期墜落させたからよ。しかも一機は戦艦に衝突しそうだったのに隼人君が能力で切断したから戦艦は無事で済んだし、私なら出来なかったもん。」

そう、俺は戦闘機を二機墜落させたことと戦艦に衝突しそうだった一機を回避したという事で祝福されている。

……でも、その内の一機を墜落させたのは雨宮が凍らせたて海に墜落させようとしたのが、間違つて戦艦に衝突しそうになったもんだから、一機は雨宮が墜落させたようなもんな気がするけど…

「そういえば、隼人君は『能力都市』に行ったらどうするの？」

「どうするって、何を？」

「だから、今までどおりに高校に行くのかそれとも、私みたいに高校行かないで仕事に就くのか。まあ、大体の人は高校に行くって言

うけどね。」

確かにそうだ。向こうに着いたらどうするのか考えなきゃいけない。もちろん、俺の決心は決まっている。

「俺は、高校行かないで兩宮と一緒に『スキル』を倒すよ。」

「あら、意外ね。普通なら高校行くなって言うのに。」

確かに、今までの俺ならこのまま高校に行ってしっかり勉強するって言うだろう。でも、

「俺は『スキル』が許せない。実験の為に人間を使うのが絶対に許せないんだ。」

「そう、分かったわ。でも、勉強はどうするの？隼人君見た感じだと頭がよさそうなのに。」

「それは自分で自分なりに勉強するよ。高校も行って、『スキル』のことで学校をほとんど休んだら大変な事になるしね。」

「分かったわ。隼人君の意思なんだから私に止める権利も無いしね。それとこれからもよろしくね。」

「ああ、よろしくな。」

そう言って俺達は握手をした。

その時、兩宮の顔がほんの少し赤くなっていた気がするが気のせい

だろう。

優子side

「ああ、よろしくな。」

そう言っつて私達は握手をした。

でも何故だろう。どうして隼人君と握手した時こんなに胸が締めつけられるのだろう。

分からない。あの時、隼人君が私を助けた時から隼人君を見るときも胸が締めつけられるし。

「ん？雨宮どうした？」

どうやら隼人君は私が変わたと気づいたらしい。

「ごめん、ちょっと具合が悪いから部屋に戻るわ。」

「大丈夫か？何なら俺と一緒に連れて行ってあげようか？」

「大丈夫、一人で行けるから。」

「そう。あんまり無理するなよ。」

私は分かったつとと言うと。部屋に戻った。

隼人 side

「あいつ、いきなりどうしたんだろうっ?」

俺は雨宮が先ほどまであんなに元気だったのに、何故だろうっと思っ
ていた。

「後で見に行つてあげるか。」

俺は後で雨宮を見るとして今は…

「竹宮君、こっちに来て一緒に話そうぜ。」

「いや、こっちに来て話そうよ。」

「いや、こっちが先だ!!」

「いや、こっちが先だ!!」

今は、これを何とかしなければいけないな…

優子 side

あの後、私は部屋に戻りベッドの上に倒れた。

「はぁ、本当にどうしたんだろう私。」

さつきから、隼人君のことばかり考えてる。昨日初めて会ったばかりなのに。

しかも、隼人君のこと考えてると胸が締めつけられる。

隼人君ともっと一緒に居たい、一緒に話したい、一緒に戦いたい。

そこで私はやっと分かった。

「……そうか。私は隼人君のことが好きなのか。」

そう、私は隼人君のことが好きだ。この胸を締めつけられているのは隼人君が好きだからって。

そして、やっと私の胸を締めつけていたのが弱まっていた。

「とりあえず落ち着いたし、戻りますか。」

私は隼人君が好きだということを自覚したことで落ち着いたので、みんなが居るところに戻ることにした。

第八話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第九話

隼人 side

……おかしい。

あの後、雨宮が戻ってきたんだがおかしかった。

何がおかしかったのかと言つと、何故か俺に付きまどってくるし、俺がソファに座ったときに幅があるのに俺に近いし……訳分からん。

まあ、元気になったのは良いけどさ……

部屋に戻った間に何があったんだ？

そんな疑問を考えていたら俺の祝福パーティは終わり、今俺は自分の部屋に居る。

「本当に何があったんだろう？」

俺は未だに雨宮の変化に疑問を思っていた。

「まあ、良いや時間が時間だし明日になったら戻っているだろう。」

時間は午後11時だったので考えるのをやめ、俺は寝る事にした。

翌日、俺はいつもの習慣で午前6時半に起きてしまった。

朝食は午前7時半って言うたので、一時間何してしようかなってベットの上で横になりながら思っていた。

「そつえば瑞希のやつどうしているかな？」

俺は何もする事も無かったので幼馴染の事を考える事にした。

「昨日は瑞希に来るなつと言ったが、あいつのことだから来るような気がするんだよな…ん？」

そこで何か異変に気づいた。ベットが狭いことに。

そして俺が起き上がると、俺のベットに女の人がいた……誰？

その女は俺と同じくらいの年齢で、髪は茶髪だった。

すると、その女は俺が起き上がったせいで目が覚めたらしい。

「んー、あれ？どこどこ？」

「どこって俺の部屋なんだけど…ってオイ俺を抱きしめるなー！」

女は俺を抱きしめ、そのまま横になりまた寝てしまった。

要するに俺を抱き枕のように抱きしめたのだ。

(誰か助けてくれ!!!ここまでは俺の理性が!!!)

俺の中で理性と本能との戦いが起こっていた。

その時！俺の部屋のドアが開いた。

「隼人君、起きてる？って何してるの！！」

最悪の展開だ。何でここで雨宮が来るんだ！！

「ちょっと待て、これには訳が…」

「問答無用！！」

「ぎゃあああああ！！」

俺は雨宮に凍らされた。

優子 side

「さーて隼人君を起こしに行きますか。」

私は隼人君を起こしに行くために隼人君の部屋に向かっていた。

そして私は隼人君の部屋に着いて、ドアを開けた。

「隼人君、起きてる？って何してるの！！」

ドアを開けると、隼人君と女の人が抱きしめてた。

「ちょっと待て、これには訳が…」

「問答無用!!」

「ぎゃあああああ!!」

私はムカついたので隼人君を凍らせた。

そして隼人君と女を放し、女が起きた。

「ん？あれ？何で優子が居るの？」

「って、美羽！また自分の部屋と間違えたの!？」

「そう見たい。で、ここ誰の部屋？」

「ここは隼人君の部屋よ。美羽の部屋は隣でしょ。」

「そう、じゃあ戻るね。」

美羽はそういうとドアを開けた。って、

「って、そっちはちがーう!!そっちは浴室のドア!!玄関はそっち!!」

「ああ、こっちか。」

美羽はやっと玄関のドアを開けた。

私はちゃんと自分の部屋に戻ったか確認してから隼人君の部屋に戻

り、隼人君を凍らせている氷を溶かした。

隼人 side

「やっと溶けた。で、あの女はなんだったんだ？」

俺は雨宮にやっと溶かしてもらった。

そして、あの女のことについて聞いた。

「あの人は浅野美羽って言って私たちの仲間なんだけど、さっきみたいに自分の部屋を間違えたりするから毎回困るんだよね。」

「だから、俺の部屋と自分の部屋を間違えたのか。」

「そういうこと。それと、『能力都市』で隼人君が住むマンションの家の隣の家だから気をつけてね。」

「……マジで。」

「本当よ。」

毎回、浅野が俺の家で寝ていたら俺の理性がもつかな…

「あら、もうこんな時間ね。そろそろ朝食の時間だから行きましょ。」

「

そう言われて時間を見ると、午前7時15分を指していた。

「あ、本当だな。じゃあ行きますか。」

というところで俺達は食堂に向かった。

第九話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十話

朝食を食ってから数時間後、戦艦は『能力都市』に着いた。

「やっぱり、東京とは全然違うな……」

俺は『能力都市』を見て都心との違いを見て驚いていた。

「隼人君、荷物は家に送っておくからちょっと来て欲しいところがあるの。」

俺の隣に居た雨宮がそう言った。

「良いですけど、どこに行くのですか？」

「ちょっと会わせたい人がいるの。」

「分かりました。」

俺と雨宮は車に乗った。

「そつえば気になっていたんだけどさ。」

車の中で俺は昨日気になっていた事を聞く事にした。

「何？」

「昨日、パーティに戻った時、雨宮変じゃなかった？なんか俺に付きまといていなかったか？」

「べ、別に隼人君を付きまといてたのはちょっと用があったからよ！」

「それでその用ってなんだったんだ？」

「さっきの会わせたい人がいるって事よ。」

「ああ、そのことが。」

でも、この反応ってラノベとかで見たことあったような……何だっけ？

そんな事考えてたら、雨宮が小さい声で「どうして私は素直じゃないのよ！」と言ってた気がするが訳が分からなかった。

訳が分からなかったといえば、昨日俺が教室に戻ろうとした時に後ろから聞こえた瑞希の「本当に鈍感なんだから。」と言う意味も分からないままだな。

あれは一体どういう意味だったのだろうか？

「ところで、俺に会わせたい人物って誰なんだ？」

「あなたが知っている人で、『ユニオン』の副リーダをやっている人よ。」

「俺の知っている人？」

はて、『能力都市』に知り合いなんて居たっけ？

「まあ、会えば分かると思うわ。それ、にもう着いたから降りるわよ。」

「もう着いたの!？」

車に乗って十分しか掛かってないんだけど…

とりあえず俺は車から降り、雨宮に着いていった。

そして俺達はビルの中に入り、エレベーターに乗って上に上がった。

エレベーターが止り扉が開き、雨宮に着いて行って歩いていった。

すると雨宮は一つの扉で止まり、その扉を開いて中に入った。

そこに一人座っている人がいた。

「隼人君を連れてきましたよ。」

「雨宮君、ありがとう。それと久しぶりだね隼人君。ずいぶん会ってない間に大きくなったね。」

「もしかして、龍哉おじさん!？」

「その通りだよ。六年ぶりだから覚えて無かったかな？」

座っていた人は俺の親父の兄にあたる竹宮龍哉おじさんだった。

「まさか、龍哉おじさんが『能力都市』に居るなんて…」

「おや、知らなかったのかい？俺は六年前からいるけど。」

「え！？そうなの!？」

まったく知らなかった。龍哉おじさんが『能力都市』に六年間も居るなんて…

「それで、隼人君を呼んだけど、私はどうすれば良いのかしら？」

すると雨宮は龍哉おじさんに自分はどうすれば良いのか聞いた。

「雨宮君も話を聞いた方が良いと思うから、一緒に聞いてくれるかな。」

「分かりました。それで、話って何ですか？」

「さっき聞いたんだけど、隼人君が『スキル』の人体実験に調べていたらしいじゃないか。その資料はいまどっちが持っているのかね？」

「私が持っているけど。」

「じゃあそれを私に渡してくれないか？」

「はい。良いですけど。」

雨宮は龍哉おじさんに俺が調べた資料を渡した。

そして、龍哉おじさんは資料を見終わった。

「これは驚いたな。まさか俺達が調べたこと以上に調べてあるなんて。隼人君、これ全部一人で調べののか？」

「ええ、俺一人で全部調べた。」

本当は瑞希と一緒に調べただけど、瑞希と一緒に調べたと言うと瑞希も『能力都市』に連れて行かれてしまうから言わなかった。

「凄いな。とりあえずこれは貰って良いよな？」

「別に良いですけど。もう俺には必要の無い物ですから。」

「じゃあ貰っておく。」

そういつと龍哉おじさんは書類をしまった。

「それでこれからの事なんだが、隼人君は『ユニオン』の一員に入るんだよね？」

「ええ、そうですが。」

「じゃあこれからの事を言おう。今日一日はゆっくり休んでくれ。そして明日、『スキル』の本拠地に攻める予定だ。」

「え！？そんな事聴いてませんよ！」

あれ？雨宮知らなかったんだ。

「そりゃ聴いてないだろう。兩宮君たちが東京に言っている間に決まったんだから。だから浅野君にも言っといてくれ。」

「分かりました。それで何時から攻めるんですか？」

「明日の午前8時、ここに集合してくれ。」

「分かりました。」

「それと兩宮君は部屋の外に行ってくれるか？ちよつと隼人君と話したい事があるから。」

「分かりました。」

兩宮は龍哉おじさんの言われたとおり、部屋の外に出た。

「それで話って何ですか？」

「……隼人君、いつまで誤魔化すきだ。」

「何の事ですか？」

「じゃあこれを言えば分かるよね。殺人鬼、駿河大輔。」

「っ！！な、何故その名前を。」

「俺がそんな事を知らないと思ったのか。」

そう。駿河大輔は俺のもう一つの名前とも行っても良い。

俺は小学六年生と中学1、2年生の時、俺の能力、空間切断を使って人を殺した。

それも、何度も何度も切り刻んだりした。

警察が捜査しても凶器が分からず未だに捜査中で犯人も分かっていない。

そして、世間ではその犯人を何故かこう呼んだ。駿河大輔と。

別に犯人の本名と言うわけでもないのにそう呼ばれた。

「それに、表面上は無差別になっているけど、実際は違う。」

そうこの事件は表面上、無差別に殺しているとなっているが、そういうわけではない。しっかりとした理由がある。

「隼人君が殺した全員は『能力都市』に関連している事も知っている。」

そうなのだ。俺が殺した全員は『能力都市』に関連しているのだ。

「それで、俺にどうしろと言うのですか？」

「別にどうともしないさ。ただ、このまま逃げ続けるのかなって。」

「ええ、まだ終わっていませんから。」

そう。まだ捕まるわけにはいかない。まだ、終わっていないのだから。

ら。

「そうか別にどうでも良いけど。それともう一つ気になった事があるんだが。」

「何ですか？」

「何故、隼人君は空間切断しか使わない。まだ他の超能力もあるのは知っているんだから。」

「やっぱり、それを聞いてきましたか。」

「そりゃそうだろ。だって隼人君は竹宮家の現当主で、竹宮家は神に選ばれし一族なのだから。」

「そうなのだ。俺の竹宮家は神に一番近い一族の一つであるのだ。」

「そして、俺は今竹宮家当主なのだ。」

「竹宮家当主は十五歳になったら当主になり、竹宮家を統括しなければならぬ。」

「だが、今は当主が二十五歳になるまで前当主が統括している事になっている。」

「また、神に近い一族は竹宮家を含め八つあるらしい。」

「さらに、」

「その当主は代々、神の力を手に入れられるのだから。」

竹宮家当主は神の力を手に入れられるのだ。

「別に使っても良いですけど、忘れてませんか？竹宮家は苗字が竹宮に変わってから隠れ一族だって言う事を。」

そう。竹宮家は元々竹馬家という名前だったらしい。

「ほう、そういえばそうだったな。」

「だからあまり使わないですよ。」

「さすが、竹宮家当主だな。しっかり分かっている。」

本当の事いうと、別に当主だからって使うわけでもなく、ただ単に敵と戦う時に秘密の方が俺の有利だからっという事で能力を使わないだけなんだけどね。

「それだけですか？なら俺は帰りますけど。」

「ああ、それだけだ。にしても、本当に当主ぼくなってしまったな。」

「ありがとうございます。それでは龍哉おじさんまた今度。」

俺は龍哉おじさんにそう言つと俺は部屋から出た。

第十話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第一部 主要登場人物（前書き）

読み手から意見があったので訂正しました。

第一部 主要登場人物

竹宮 隼人（たけみや はやと）

竹宮家の一族で、十五歳で竹宮家当主でもある。

小学校六年生、中学校1、2年生の時、殺人鬼、駿河大輔という名前で何人も人を殺した事がある。

能力は空間切断であらゆる物をナイフや尖っている物で振れば二百m以内ならなんでも切断できるらしい。

また、それ以外にも能力を持っているらしい。

雨宮 優子（あまみや ゆうこ）

『ユニオン』の一員。

髪は黒くて、長い髪をしていて、服装は何故かいつも修道服を着ている。しかもツンデレである。

さらに、隼人に助けられた事によって隼人に好意を持っている。能力は冷凍系能力で、半径二百m以内なら凍らせる事が出来る。

浅野 美羽（あさの みう）

『ユニオン』の一員。

良く自分の部屋を間違えて隣の家に入ったりしたりする。

髪は茶髪で、いつもツインテールの髪型をしている。

戦うと何故か表情が変わり、冷酷で残酷な女になる。

能力は空間速度であらゆる物の速さを、速度に干渉した速度の減少を無視し、変化させる事が出来る。

例えば、銃が放た弾を空間速度により速さをマイナス（進んでいる方向と真逆方向に動かすこと）にしたり0にしたりする事も出来る。だが、速さは光速までしか変えられない。ある意味チートである。

清水 瑞希（しみず みずき）

隼人の幼馴染で小学校から高校一年の夏までずっと一緒の学校に行ってた。

また、隼人の事が好きでもある。

また、隼人と一緒に『能力都市』がやった人体実験を調べた事がある。

能力は不明。

竹宮 龍哉（たけみや りゅうや）

隼人の伯父にあたり、今は『能力都市』の統括理事の一人でさらに『ユニオン』の副リーダーでもある。

隼人とは六年ぶりに再会し、隼人が今までやった殺人のことを何故か知っている。

一応能力は持っているがあんまり使わないので不明である。

天壤（てんじょう）

『スキル』のリーダー。

元統括理事の一人だったが、人体実験を気にせずに行うことから統括理事からクビにされた。

だが、その事によって五年前に『スキル』という派閥を作った。

能力は不明。

第一部 主要登場人物（後書き）

うん…雨宮の能力名が思いつかない。

第十一話

龍哉おじさんと離れた後、俺と雨宮は車で今日から俺の家になるマンションに向かっていた。

「で、竹宮副リーダーと何を話していたの？」

「それは言える訳ねーだろ。雨宮を外に出したんだから。」

先ほどの話を雨宮に言える訳が無い。俺が元殺人鬼だって言う事を…

「それもそうね。私も聴いていい話なら外に出て言わないだろうし。」

「

「そうだろ。」

「

「ところで、竹宮副リーダーと知り合いならひょっとして隼人君って竹宮家の一族なの？」

「って雨宮、竹宮家の事を知ってたのかよ!!！」

「うん。前に竹宮副リーダーが言ってたけど。」

龍哉おじさん、何で雨宮に教えているんですか!!！」

竹宮家は隠れ一族で竹宮家の情報は教えてはいけなかったはずなんですか!？」

「う、うん。そうだけど…。」

たね。」

「……分かったよ。」

俺は雨宮にそこまで言われたので一緒に行くことにした。

そして数十分後、車は俺のマンションに着いた。

「じゃあ、私の家は隣のマンションだから午後1時にその公園に集合ね。」

「分かった。じゃあ、また後でな。」

俺は雨宮と離れ、雨宮に言われた所にある家に向かった。

そして、エレベータに乗り、家のある階で降りると、何故か浅野が通路でウロウロしていた。

「あれ？浅野、何しているんだ？」

「あ、えつと……」

「竹宮隼人です。朝、俺の部屋で寝ていたじゃないですか。」

「ああ、優子に凍らされた人ですね。」

「なにその思い出し方!!」

「だって現に凍ってたじゃないですか。」

「そうだけども…」

確かに凍ってたけどさ、できればそれで覚えて欲しくない。

「ところでそこで何してたの？」

「あ、そうでした。実は鍵を無くしてしまい家に入れなかったんですよ。」

「それじゃあ管理人に言えば良いんじゃないのか？」

「それが、管理人は昨日親戚が何かあったらしく、いつ帰って来るのか分からないですよ。」

運悪いな。こういうときに鍵を無くすなんて。仕方ない。

「それじゃあ俺の家の中に入るか？まだ荷物とかで散らかってるけど。」

「本当ですか！！隼人さん、ありがとうございます。」

「みんな下の名前で言うんだな。まあ良いけど。」

「だって竹宮って呼んだら竹宮副リーダーのことを指しますから。」

なるほど、だから他のみんなも下の名前で呼んだのか。

俺は納得しながら浅野と一緒に俺の家に入った。

「結構凄い荷物の量ですね。何でこんなにいっぱいあるんですか？」

「まあ、俺の家柄と言っわけもあるからね。」

そりゃ驚くだろう。約五十個物のダンボールがあるんだからな。

しかも、その半分くらいは家柄関連や刀などだ。

「家柄っていう事は凄いとこで生まれたんですね。」

「まあな。とりあえず、そのソファに座ってくれ。俺は荷物を何とかしないといけないから。」

「いえ、私も手伝いますよ。」

「でも、」

「隼人さんの家に入れてくれたのに、何もしないのは私が気が済みませんか。」

でもさすがに女に手伝いをさせるのは俺が気に進まないが、「ここま
で言われるとな…」

「分かった。じゃあお願いするよ。」

ということ、俺と浅野の二人で午後12時45分まで荷物を整理した。

第十一話（後書き）

意見、感想をお待ちしています

第十二話（前書き）

短いです。

第十二話

午後12時45分、俺と浅野はひとまず休憩をする事にした。

「結構片付きましたね。」

「そうだな。そういえば、この後1時から俺は雨宮と出かけるけど、浅野はどうするんだ？」

「私も行きます。ここに居ても暇ですし。」

「分かった。じゃあとりあえず行きますか。」

俺達は家を出て、集合場所の公園に向かった。

「あれ、雨宮早いじゃないか。」

「別に早くていいでしょ。って何で美羽も居るわけ？」

「ああ、それは浅野が鍵を無くしたところを俺が見つけたんだ。」

「あんたまた鍵を無くしたの？しかも運悪く管理人が居ないときに。」

「またってまだ六回しか無くしてないよ。」

「六回も無くしてんじゃない！！！！」

先ほどまで心配した俺はなんだったんだ。

「それで、今日はどうするの？多分管理人は帰って来ないわよ。」

「だから今日、隼人さんに泊めてもらうの。」

「……………」

「な、何故雨宮の周りが凍っているの！？危ないから落ち着け！！」

「そうだよ！！私たちはそんな関係じゃないから優子、落ち着いて！！」

「二回死ね！！」

「何故そこでボケるんだ！！」

俺は凍る覚悟をした。

だが、俺は凍らなかった。

「あれ？凍ってない。」

「何で凍ってないのよ！！」

俺と雨宮は俺が凍ってない事に驚いてた。

「あのさ優子、私の能力を忘れてない？」

「そ、そうだった！あなたの能力はたしか、」

「私の能力は空間速度だよ。あらゆる物の速さを変えられるんだからね。」

「って言う事は今のは速さを0にしたのか？」

「そういうこと。私の前では凍るわけじゃない。」
「なるほど、だから俺は凍らなかったのか。」

「とりあえず、案内するから。二人とも着いてきて。」

「その前に、先に昼食を食べたいんだが。」

「私も。」

「あなた達まだ昼食ってなかったの？」

「まあ、俺と浅野はさっきまで俺の荷物を整理してたからまだ昼は食ってないんだよ。」

「分かった。じゃあ行くよ。」

俺と浅野は雨宮について行った。

第十二話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十三話

隼人 s i d e

昼食を取った後、俺達は雨宮の案内でいろんな所に行った。

時間は午後4時半俺達は最初に集合した公園に居た。

「ありがとな。俺の為に案内して貰って。」

「別に好きでやったわけだから気にしなくても良いわ。」

「それでも、な。」

「そう。あ、電話だ。」

俺が雨宮に感謝してたら、雨宮の携帯から電話が鳴った。

そして、雨宮が電話が終わると俺達の方を向いた。

「二人とも、この近くに『スキル』のすみかがあるらしいの。だからそこを攻め込めって。」

「それで場所は？」

「ここから数分のところにあるわ。さっさと行くわよ。」

「分かった。」

俺達は、『スキル』のすみかがある場所に向かった。

そして、その場所に着くと以外な場所だった。

「ここってさっき来たショッピングモールじゃねーか。」

そう、雨宮が案内された内の一つだった。

「でも、表面的にはそんなところに見えませんか？」

「そうね。じゃあ私は中にいる人を外に出し、その後外で誰かが入らないか確認するから、二人は『スキル』のメンバーを探して。」

「「分かった。」」

そういうと、俺達は中に入った。

「そういえばどうやって人を逃がすんだ？」

「簡単よ。こつやっつてするのー！」

雨宮は能力を使い、前に人が居るのに冷凍ビームを放った。

そして、人々はみんな逃げ出した。

「大丈夫なのか？人が凍ったりしないのか？」

「当たらないように放っているから大丈夫だから。それと予定通り私は外で誰かが入らないか確認するから後は頼んだよ。」

そついうと雨宮と離れた。

「とりあえずどこに居るか探しますか。」

「そうですね。じゃあ動き「ちょっと待て、何かがおかしい。」

俺が浅野が動こうとしたところを止めた。

そして、俺の予想通り異変が起こった。パンツッと鳴って

「な、何でいきなり停電したんですか。」

「そりゃ、雨宮が冷凍ビームを放ったからじゃねーか？」

「確かにばれない方が変ですからね。」

「さて、そろそろ来るな。」

俺がそう予想すると、後ろから明かりが灯った。

「浅野後ろー!!」

「マイナス三百m毎秒に!!」

浅野が言うつと後ろから飛んできた炎を跳ね返してしかも速さを早くして返した。

すると、速さが早すぎるせいか建物ごと溶けてしまった。

「ありゃりゃ、やりすぎちゃったね。」

やりすぎだと思う。まあ、建物を溶かしたおかげで日の光で明るくなったから良いけど。

しかも浅野の性格変わってね？

「さて、向こうは五人か。結構きついな。」

「そういえば私、物の速さを変える事しか出来ないからよろしく。」

「じゃあ、いつもはどうしているの？」

「いつもは拳銃を持ち歩いているんだけど、ほら鍵を無くしたから。」

「

「ああ、なるほどね。俺も刀を持ってこなかったけどナイフがあるからこれだけで大丈夫だろ。」

「じゃあ私は後ろにいるから後は任る。」

「さっきからごちゃごちゃうるせーぞー!!」

俺達が話していたら、五人のうちの一人が先ほどの炎を放った。

「なるほど、先ほどの超能力者はあなたですか。まずはあなたから殺してあげますよ。」

俺は炎を避け、ナイフを振った。

そしてその男の体は真っ二つに切断され、血が相当溢れた。

「き、貴様、何をした!!!」

「教えると思いますか。次は誰が死にますか？」

「ぜ、全員でかかれ!!!」

すると向こうは残り四人全員が一緒に能力を俺に向かって放ってきた。

「はあ、めんどくせーな。そんなの簡単に避けられるんだよ!!!」

俺は一つずつ避け、そして一人ずつナイフを振り、全員を殺した。

「こんなもんか？もっと張り合いがあると思ったのに……」

俺はこんなに張り合いが無いのにガツカリした。

そして俺は浅野を探した。

「浅野、どこ行った？」

「浅野っと言っやつはここに居るぜ。」

「!!!」

俺は声が聞こえる方を見ると、そこには男と男に捕まっている浅野

が居た。

「浅野！！大丈夫か！！」

「ごめん。すっかり余裕こいてたら捕まった。」

「まさか、お前が『ユニオン』に入っているとはな。駿河大輔！！」

「な、何故その名前を知っている。」

その名前の正体は誰も知らないはずなのに何故！！

「知ってるも何も俺は『スキル』の幹部だぜ。駿河の顔まで分からなかったが、能力は知ってたのさ。」

「なるほど、そういうことが。」

「さて、今この状況でお前の能力を使ったらこいつも死ぬ事になるぜ。」

「それはどうかな。」

「はあ？お前どうやってこの状況を、」

「こじつけるのさー！！」

俺は持っている能力、テレポートを使いその男の後ろにまわった。

「！！？どこ行っただ！！」

「後ろだよ。そして死ぬ。」

俺はナイフで直接男を切断した。

そして男は浅野を離れた。

「き、き…さま、ど、ど…うや…た。」

切断したのにこの男の気力は何なんだ？

「俺の能力は空間切断じゃないんだよ。それと空間切断は直接斬っても切断できるんだよ。」

「…そ…つい…う…こと…か。」

「それともう一つ、俺の名前を駿河大輔って呼んだやつは一回だけじゃあ済まないことを教えてやる。」

俺はその男をさらに7、8回切断した。

さすがに男は死んだだろう。

そして俺は浅野の所に行った。

「浅野、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。」

「なら良かった。」

俺がそういつと浅野はいきなり俺に抱きついた。

「浅野！？いきなりどうしたの？」

俺が浅野を離そうとしたが、

「もうちょっとこのままでいて。」

「……分かった。」

浅野は俺を抱きしめたまま話だした。

「私、戦う時人格が変わるんだけどね。その時は何も考えないんだけど……」

なるほど、だからさっき性格が変わっていたんだ。

「私、今回初めて捕まったの。その時、怖かったの。」

「うん。」

「だから隼人さんが助けしてくれた時嬉しかった。」

だから俺を抱きしめたのか。

「もう大丈夫か。」

「うん。じゃあ離すね。」

浅野はそういつと俺から離れた。

すると、浅野は何かに気づいた。

「あ、隼人さん返り血が付いてますよ。」

浅野が俺が着ている服を指すとそこには返り血が付いていた。

「あ、本当だな。どうするか…」

このまま外に出るわけもいけないしな…

「じゃあ、こここの階ちようど洋服売り場ですから一つ貰っていきましよう。」

「でもそれは犯罪なんじゃあ…」

「そもそも、私たちはそんな事しているじゃないですか。それに、隼人さんは元々殺人鬼のあなたが言いますか？」

「…やっぱり分かつちゃったか。」

そりゃ分かるよな。堂々と駿河大輔って言っちゃったんだから。

「別にあなたの過去が分かってても嫌いにはなりませんよ。私を助けてくれたのですから。」

「そうか。ありがとう。」

「感謝するのは私の方ですよ。さて、さっさと服を着替えましよう。」

「

「そうだな。 兩宮も待たせている事だしな。」

俺は服を着替えてから浅野と一緒に裏口から出た。

美羽 side

「うん。 じゃあ離すね。」

私は隼人さんを抱きしめていた腕を離した。

でも何でだろう。 もうちょっと抱きしめていたかったのは。

そして私は隼人さんの服に返り血が付いている事に気づいた。

「あ、隼人さん返り血が付いてますよ。」

私は隼人さんの服を指した。

「あ、本当だな。 どうするか…」

「じゃあ、ここの階ちようど洋服売り場ですから一つ貰っていきましよう。」

「でもそれは犯罪なんじゃあ…」

「そもそも、私たちはそんな事しているじゃないですか。 それに、隼人さんは元々殺人鬼のあなたが言いますか？」

「…やっぱり分かつちやつたか。」

うん、そりゃあの名前を聞いてしまったら分かつちやうよ。

駿河大輔は日本で史上最悪の殺人鬼なんだから。

「別にあなたの過去が分かつてても嫌いにはなりませんよ。私を助けてくれたのですから。」

そう。駿河大輔が隼人さんだとしても私は嫌いになりませんよ。だって私は隼人さんが好きになってしまったんですもの。

「そうか。ありがとう。」

「感謝するのは私の方ですよ。さて、さっさと服を着替えましょう。」

「そうだな。両宮も待たせている事だしな。」

隼人さんがそういって、服を着替え、裏口から出ると優子と合流した。

第十三話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十四話（前書き）

今まで題名に『第〓部』を付け加えました。

第十四話

午後6時、俺達はあのショッピングから歩いてまた先ほどの公園に居た。

「で、何でさっきより美羽が元気じゃない？何かあったのかしら？」

「……何故そこで俺を見る？別に何も無かったよ。」

あつたつと言っちゃあつたけど、言つと絶対に凍らされるから言わないでおこう。

「そう。まあいいわ。じゃあ、明日午前8時に分かっているね。」

「ん？何のこと？」

「そういえば美羽は居なかつたね。明日、『スキル』の本拠地に攻め込むの。それで明日午前8時に私たちの本拠地に集合なわけ。」

「そうなんですか。分かった、じゃあ優子また明日ね。」

「また明日。それと隼人君も遅れないでよ。」

「分かっているよ。」

「そう。分かっているなら良いけど。」

そういうと雨宮は自分の家があるマンションに戻った。

そして俺達も雨宮と離れると俺の家があるマンションのエレベーターに乗っていた。

「さて、帰ったらさっきの続きをやりませんといけませんね。」

「そうだな。また手伝うのか？」

「もちろん。どうせ今日は家に入れないんですから。」

「分かった。」

すると、エレベーターが俺の家の階があるところに止まり俺達は俺の家に向かって歩いていった。

「そういえばお前、寝る服は？」

「あ……忘れてました。で、どうしましょっか？」

おいおい、それ忘れるところか？

「そういえば、東京に行った時に持っていった服はどうしたんだ？」

「あれは、『能力都市』出たときようですので、戦艦の中に置いたままなのですよ。」

「そう。で、どうする？」

「仕方ありません。この服のままあなたの家で寝ます。今お金も持ち歩いてないのでこれしか方法がありません。」

そう。と俺が言うと、俺の家の玄関に着き、鍵を外しドアを開けて家の中に入った。

そして、家の中に入ると俺達はまた荷物の整理をした。

第十五話

一時間後、俺達は荷物の整理をしていたら浅野が何かに気になったらしい。

「ねえ、この古い書物はなんですか？」

「ん？それは代々、竹宮家当主が持っていないければならない書物なんだ。」

「そうなんですか。でもこれなんて書いてあるんですか？特別な文字で書かれているから分からないんですけど。」

「それは竹宮家が考えた独自の文字で書かれているからな。俺だつてそれを解読するのに一ヶ月はかかったんだから。」

本当の事言つと、それを解読したのは六月という最近なんだよな…しかもあの時いきなり親父が電話してくるまで忘れてて、親父にもすっごく怒られたし。

「そうなんですか。」

「それと、その書物の内容は言えないんだ。だから竹宮家独自の文字で書かれているんだし。」

しかも、その書物の中に書かれているものは竹宮家当主が受け継ぐ神の力の事が書かれているから絶対に言えないんだよな。

さらにその事を他の人に言ったら、俺は死ななければいけないんだから。

要するにそれほど凄いことが書かれているのだ。

「そうですね。それともう一つ気になったことがあるんですけど。」

「ん？何の事だ？」

「どうしてこんなに刀が多いのですか？普通、六本も持ってないですよ。」

浅野は七本の刀が置いてある場所をさして言っていた。

「ああ、あれか。あれは代々、竹宮家当主が持っていているんだ。しかも、浅野は見えないと思うけどあそこにはもう一本あるから。」

「ええ！？じゃあもう一本はどこにあるんですか？」

「残り一本は竹宮家以外の人は見えない特殊な刀なんだよ。そして他の刀も特殊な刀なんだ。」

上から順番に炎刀、雷刀、氷刀、水刀、風刀、魔刀、無刀という名前が付いている。

炎刀は炎、雷刀は雷、氷刀は氷、水刀は水、風刀は風が出てきて、魔刀は魔物の力を宿しており、無刀は透明の刀なんだ。

「そうなんですか。ってそんなこと話している暇ではないでしたね。」

「

「そうだったな。やっと三分の二くらいしか片付いてないし。」

危ない、危ない。話していたから片付ける事を忘れるところだった。

「これはどこに置けば良いですか？」

「ああ、それはそっちな。」

「じゃあ、これは？」

「それはそっち。」

そんなこんなで最後のダンボールになった。

「さて、これで最後のダンボールだな。」

「そうですね。とりあえずそっちに運びますね。」

浅野はダンボールを持ち上げようとした。

「って重っ！！隼人さん、この中に何を入れたのですか！？」

「あれ？そんな重い物なんかあったっけ？」

「とりあえず手伝ってくださいよ！！マジで重いんですから。」

「分かった。俺も手伝うよ。」

浅野が一人で持つのは大変そうだったので俺も一緒に運んだ。

そして運び終わると、すぐに開けた。

その中には、俺が知らないものが入っていた。

「「な、何これ……」」

中に入っていたものは手紙一枚とたくさんの鉄板だった。

こんなことするやつなんて俺の知り合いで一人しかいない。

それでも俺は一応その手紙を読んだ。

「やつほー。元気にしている？この手紙を読んだっていうことは届いたんだね。」

「本当は手紙だけを渡そうと思ったのだけど、なんかつまらないから一つ10キロの鉄板を十個入れてみちゃった。」

「もっと凄いものを入れようと思ったのだけど、めんどくさいからやめた。」

「それで本題なんだけど……何か忘れちゃった。てへ。」

「特に手紙を送る必要も無かったんだけど、それじゃあつまらなかつたから送っちゃいました。」

「じゃあ隼人、また会えたら会おうね。瑞希より。」

俺は手紙が読み終わると近所迷惑と言つ事を気にせず大声で言った。

「みいーーーーーずうーーーーーきいーーーーー
ー！ー！何も書く用が無いなら書くんじゃねー！」

「は、隼人さん、落ち着いてください。大声を出したら他の人に迷惑ですからー！」

「はあーはあー、ごめん。つい叫んじゃって。」

しかし瑞希やつ、いつも度が凄過ぎるんだよ……

「とりあえずこれ、どうしますか？」

「あいつの家に手紙」と返す。「

「即答！ーまあ、そつだよね。これ邪魔だし。」

「じゃあこれは端っこに置いて、午後7時半を過ぎてるし夕食にしますか。」

「確かにもうこんな時間だね。それに疲れた。早く食べよう。」

「じゃあ俺は夕食を作るから。」

そついうと俺は夕食を作り台所に向かった。

第十五話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十六話

夕食が作り終わり食べ終わると、一応管理人が帰ってきたか確認しに行った。

「やっぱり居ませんね。」

「そうだな。今日は諦めるしかないか。あ、そうだ。先に風呂入って良いぞ。その間に俺は浅野の服を洗濯して乾かしておくから。」

さつき、洗濯機を確認したら乾燥機付いており、さらに洗濯して乾燥するまで一分しかかからないらしい。

「そうですか。じゃあお言葉に甘えて、」

浅野は俺の家に戻ると、すぐに風呂場に向かった。

「さて、その間に俺は洗濯しないとな。」

俺は浅野の服を持ち、全て洗濯した。

そして、洗濯と乾燥が終わると俺は風呂場にいる浅野に話した。

「浅野、服ここに置いとくからな。」

「分かったー」

浅野からそれを聴くと、俺は刀が置いてある和室に向かった。

「さて、明日の準備でもしておきますか。」

俺は和室の扉を閉め、七本の刀を研ぎはじめた。

俺が刀を研いでいると、和室の扉が開く音がした。

「ん？なんだ浅野か、ってなんちゅうかつこをしているんだ！！」

俺が浅野の方を見ると浅野は服を着ておらず、何故かタオル一枚で巻いていただけだった。

「服はどうした服は！！」

「服は向こうに置いてあるよ。」

「じゃあ何故着ない！！」

「だって、隼さんがどういつ反応をするか見てみたかったです。」

「とりあえず服を着ろ！！」

俺がそういうと、浅野は「ちえ、つまんないの。」と言いながら服を着に行った。

俺にどんな反応がほしかったんだ。

数分後、浅野はちゃんと服を着て和室に戻って来た。

「そういえば浅野、明日の準備はしたのか？」

「したいんだけど、家の鍵を無くしたからできないんだ。」

「あ、そうだったな。じゃあ明日はどうするんだ？」

「多分、優子の補佐をすることになると思う。」

「そうか。じゃあお互い頑張ろうぜ。」

浅野が「うん。」と言うと、俺達は寝ることにした。

「じゃあ浅野はベットで寝て良いから。」

「良いんですか？私がベットを使って。」

「別に良いよ。俺はこの和室で布団を敷いて寝るから。」

「分かりましたじゃあおやすみなさい。」

「おやすみ。」

浅野はベットで、俺は布団で寝ることにした。

だが俺は忘れてた。今日の朝に何があったのかを。

第十六話（後書き）

意見、感想をお待ちしています

第十七話 行間一

Outside

「それで、予定通りに進んでいるのか？」
とあるビルの一つの部屋で二人が話していた。

「ああ、予定通りに進んでる。でも何故今になって攻め込むんだ？
一年前から『スキル』の本拠地を知ってたのに。」

そのうちの一人、竹宮龍哉が言った。

「それは私よりお前の方が分かるんじゃないか？竹宮龍哉。」

「まさか、俺の甥を呼んだ理由はこのためか！！」

龍哉は怒鳴り声で言った。

「フツ、そうだとも。そうじゃなければ『能力都市』に呼ぶわけ無
いだろ。」

もう一人の男は微笑みながら言った。

「なら何故、お前の子も呼ばないんだ！！」

「呼ばない理由はこの派閥争いが終わった後に何かが起こるからだ。」

「

「もう派閥争いの後起こる事件が分かっているのか？」

そう。男の能力は未来予知。だからこそ男の言ったことは当たっているのだ。

「ああ。それともう一つ、明日で『スキル』は滅びる。」

「それは本当か？」

「本当だ。俺がそこで嘘を付いて何の得になるんだ。」

「それもそうか。そうと分かれば俺は帰る。俺も準備があるからな。」

「そうか、でもこれは予知できなかったから言うておく。」

「なんだ？」

「絶対に死ぬな。俺の唯一の話し相手が死ぬのは困るからな。」

「分かってるよ。清水統括理事長。」

「今は清水だ。気をつける。」

龍哉は話し終わると部屋から出て行った。

「さて、明日は楽しみだ。」

清水はまた微笑んだ。

第十七話 行間一（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十八話 行間二（前書き）

続けて投下。短いです。

第十八話 行間二

Outside

そして、『スキル』の本拠地でも二人の男が話していた。

「なるほど、『ユニオン』はあの殺人鬼を取り入れたか。」

『スキル』のリーダー天壤が言った。

「はい、こちらはどう動きますか？」

「人質を捕ろう。『ユニオン』のリーダーかつ『能力都市』の統括理事長の子供、清水瑞希を捕らえる。」

「分かりました。今すぐ捕まえるように東京にいるメンバーに言っ
ときます。」

「頼んだ。」

天壤と話していた男は東京にいる『スキル』のメンバーに連絡するため、部屋を出て行った。

「さて、これからどうなるか楽しみだ。」

天壤は一人で微笑んでいた。

そして、連絡を聴いた『スキル』のメンバー達は清水瑞希が住んでいる家に向かっていた。

「分かってるな。ターゲットを起こさずに捕らえるんだ。」

「了解!!」

そして、『スキル』のメンバー達は清水瑞希を捕らえるために作戦を開始した。

第十八話 行間二（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十九話

翌日、午前6時半昨日と同じ理由で起きてしまった。

そして、朝っぱらから事件が起こった。

「うーん…ん？何だこの感触？」

俺が目を開けると、何かに触っている感じがあった。

「一体この感触は何だ、って浅野!？」

俺が触っていたのは浅野の体だった。

「ってこれって昨日と同じじゃねーか!！」

俺が離れようとしたが、昨日と同じく浅野に抱きしめられていた。

「おい、浅野起きろ。このままじゃ俺が動けないから。」

「うーん…」ギユウ

「オイ、さらに抱きしめるな!！」

さらに抱きしめられてしまった。

「やばい、俺の理性が危ないからマジで起きてくれ!！」

俺の理性が危険を示していた。

「もう、駄目…」

俺の理性が完全に本能に負けていた。

「うん？あれ、隼人さん？」

どうやら浅野が起きたようだ。でも、

「ごめん、浅野さん。」

俺はもう遅かった…

だが、浅野の反応もおかしかった。

「隼人さんなら良いですよ。」

浅野は何故が良いって言うてくれた。

もしかして、浅野は俺の事が好きなのか？

「あの…」

俺が言おうとしたとき、電話が掛かってきた。

「あ、電話が掛かっていますよ。」

「あ、うん。そうだね。」

いつの間にか俺の理性は戻っていた。

そして、俺は電話に出た。

「もしもし、竹宮ですけど」

「隼人か。俺の事分かるよな？」

「杉山か？一体朝からどうしたんだ？」

杉山っていうのは俺が通ってた高校の友達だ。

「今すぐテレビをつける！！大変な事が起こってるぞ！！」

「ん？分かった。」

俺は杉山に言われてテレビをつけた。

『事件が起こった場所は マンションの208号室でそこに住んでいた清水瑞希さんが誘拐されました。』

瑞希が誘拐されたってどういう事だ！！

俺はそのニュースを見逃さなかった。

『今日午前1時頃、隣の家から暴れている声がした模様で警察に通報して、警察が中に入ったところ暴れた形跡があった模様。』

『犯人は誰か分かっておらず、行方も分かっておりません。警察は……』

俺はテレビをつけながら杉山と話した。

「そう。清水が誘拐されたんだ。だから、隼人に聴きたかったんだ。」

「俺に？」

「ああ、清水が誘拐される理由を知っているんじゃないかと思ってな。何か分かるか？」

「いや、分からない。」

「一つだけあるんだが、それは杉山には言えない。」

それは瑞希が超能力者だと言うことだからだ。

「そうか、できるだけ俺も俺なりに調べてみるよ。今日は土曜日だしな。」

「頼むな。俺も調べるけどあんまり無茶はするなよ。」

「分かってるよ。じゃあな。」

俺は電話を切った。

「隼人さん、いきなりどうしたんですか？」

電話を切るとすぐに浅野が近づいて話してきた。

「……お前には言ってたよな。あのダンボールを送ってきた人がい

たじゃん。」

「ああ、その人がどうしたんですか？」

「その人、清水瑞希って言うんだけど、誘拐されたらしいんだ。」

「えっ！！そうなのですか？ん？清水瑞希ってどこかで聞いた事があるような……。」

「瑞希を知っているのか！？」

「清水瑞希…ああ！！思い出しました！！」

浅野は瑞希について何か思い出したようだ。

「何を思い出したんだ！！」

「ち、近すぎですよ！！少し離れてください！！」

「あ、ごめん。」

俺はつい浅野に近づいてしまったようだ。

「それで、何で瑞希を知っているんだ？」

「それは、私たち『ユニオン』のリーダーの娘の名前が清水瑞希なんですよ。」

ちよっと待て、ひょっとして『ユニオン』のリーダーって……

「ねえ、一つ聞いていい？」

「何ですか？」

「『ユニオン』のリーダーって清水信之さんじゃないよね？」

「な、何で知っているんですか！！」

やっぱり瑞希の父親だった。

「どうしてってあの誘拐された瑞希は信之さんの父親だよ。」

「え！？私は同姓同名だと思ってました。」

まず先に同一人物だと思わないか？

「じゃあ大変じゃないですか！！早く探さないと！！」

「分かってる。けど、瑞希は普通の誘拐なら誘拐されないはずだ。」

「何ですか？」

少しは考えろよ。

「信之さんが超能力者なら娘も超能力者つという事だろ。」

「ああ、そうですね。なら何故誘拐されたのでしょうか？」

「超能力者を誘拐できるのは超能力者しかいないだろ。だから、あの誘拐した犯人は超能力者だ。」

「なるほど。」

浅野は納得していた。

「だから、瑞希は『能力都市』に移動されているはずだ。そして、その犯人は信之さんを恨んでいる人物。」

「まさか『スキル』が誘拐したのですか!？」

「多分そうだろうな。だから、俺は幼馴染の瑞希を誘拐した『スキル』を絶対許せない。」

そして、天壤というやつを必ず殺す!!

「隼人さん凄い意気込みですね。」

「まあな。さて、集合は午前8時だったなとりあえず朝食を食ったら着替えて行くか。」

「そうでしょうか。」

俺はそういつと朝食を作りに行った。

第十九話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十話

朝食を食べ終わると、時間は7時半を過ぎており俺達は『ユニオン』の本拠地に向かった。

そして7時50分、俺達は本拠地のロビーに着いた。

「ちょっと早過ぎたな。」

「そうですね。まあ、早過ぎるのに損は無いんですけど。」

「そうだな。」

「おやおや隼人君に浅野君、ちょっと早過ぎるんじゃないか？」

いつの間にか龍哉おじさんが俺達の床下から出てきた。どこから湧き出てるんだ。

「どこから出て来てるんですか!?!」

「どこって床下からだけど?」

「そういつことじゃなくて、どうして床下から出て来るのか聞いてるんです!?!」

「隼人君、そんなこと気にしちゃダメだよ。こつこつのは秘密のほつが読んでる人に面白いのだから。」

「読んでる人つて誰のこと!?!」

「ま、そんなことは良いから隼人君、俺に聴きたい事があるじゃないか？」

そうだった。俺は龍哉おじさんに聴きたい事が二つあるんだった。

「で聴きたい事って何なんだ？」

「まず一つ目、瑞希が誘拐されたことについてだ。」

先にこつちの事が聴きたかったからこつちから聴くことにした。

「それは後で話そうと思ってたんだ。だが、それは後でついて来て欲しい。会わせたい人がいるのでね。」

「会わせたい人？それって信之さんのこと？」

「おや、知ってたのかい？なら会わせたい理由も分かるね？」

「何となく。」

「他には？」

「二つ目、何故雨宮に竹宮家の事を教えた？竹宮家のことは他の家系には言ってはならないはずだ。」

「ああ、そのことか。それは…」

「それは、私が竹宮家の近くにいた水本家だからよ。」

雨宮の声が突然聞こえた。

そして俺はありえない事を聞いた。

「水本家だつて、お前の苗字は雨宮じゃないか。」

「雨宮は養子として育てられた名前よ。」

水本家だつて、そんなありえない!!

「あ、ありえない。水本家は十年前に全員松本家に殺されたはずだ!!」

そう。だから水本家が一人も生き残つて無いはずなのだ。

「そうよ。私達の家系は家柄戦争で巻き込まれ、松本家に滅ぼされた。」

「なら何故、お前は生きているんだ!!」

「あの時、私は竹宮家の家にいたのよ。隼人君は覚えてないかも知れないけど、十年前に私達は一度会っているのよ。」

「俺達が一度会つてる?」

「ええ、一日だけね。そしてその日に水本家は滅ぼされたわ。そして私は養子として雨宮と言う所で育てられたのよ。」

雨宮の昔にこんなことがあったなんて……

「ごめん。俺、そんなことも知らないで…」

「べつに良いわ。隼人君に再び会った時、懐かしく感じただけで嬉しかったから。それに…」

「それに？」

「やっぱり何でもない。」

何を言おうとしたのだろうか？ま、気にしなくて良いか。

「さて、時間も8時を過ぎたことだし。作戦を言おう。」

いつの間にか俺達が話している間に結構な人がいた。

「まず隼人君以外全員で『スキル』の本拠地の出入口全て攻め込んでくれ。グループ分けは任せる。それと浅野君、これを。」

「あ、はい。」

浅野は龍哉おじさんから拳銃貰っていた。

「あの、どうして。」

「昨日、家の鍵を無くして隼人君の家に泊まったらしいじゃないか。」

なんで龍哉おじさんが知ってるんだ？

「ど、どうして知ってるんですか!？」

どうやら浅野も俺と同じことを思ったらしい。

「昨日、夜に雨宮君に電話したら、愚痴を聞かされてね。ま、面白いことを知ったから良かったけど。」

「そ、それだけは隼人君には絶対に言わないで下さい!!」

雨宮は赤くなって言っていた。なんでだ？

「まあ、面白いから言わないでおこう。とりあえず今は作戦だ。」

そつだ。今はそんなことを考えてる暇は無い。

「それで俺はどうすれば良いのですか？」

「隼人君は屋上から攻めてくれ。多分『スキル』の方が危うくなったら上に逃げるしか無いからな。」

「でも俺一人だけで良いのですか？」

「逆に二人以上だと邪魔になるだろ。」

確かに俺は仲間がいると逆に邪魔になるから一人の方が良いしな。

「ということ全員、『スキル』を倒すぞー!」

「「「「「おー!!」「」「」「」

みんなは『スキル』の本拠地に向かった。

そして、俺もみんなと一緒に『スキル』の本拠地に向かおうとしたが、

「隼人君はまだ行かなくて良いよ。」

龍哉おじさんに肩を捕まれたからだ。

「なんでですか？」

「さっき言っただろ。会わせたい人がいるって。」

「あ、そうだった。それで、どうすれば良いのですか？」

「俺について来てくれ。」

「分かった。」

俺は龍哉おじさんについて行った。

第二十話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十一話

隼人 side

俺は龍哉おじさんについて行く途中、龍哉おじさんは俺に話しかけてきた。

「そういえば隼人君、その刀七本全部持ってきたんだね。」

「そりゃそうだ。俺は一応主だし、全部持っていたほうが倒し方が変えられるし。」

「そう。さて、着いたぞ。」

龍哉おじさんは一つの扉の前に立ち止まった。

そこは、暗証番号や指紋検査などたくさんのセキュリティで守られていた。

「あの龍哉おじさん、何でこんなにセキュリティが凄いですか？」

「ああ、これは信之が『ユニオン』のリーダーで、『能力都市』の統括理事長だからさ。」

「そうなんだ……って、ええええええええ！？信之さんって『能力都市』の統括理事長なの！？」

「あれ？言わなかったっけ？」

「言ってるよ！！ってか、信之さんってそんな凄い人だったの！？」

「まあ、言っていなかったらとしても今言ったから良いか。」

「良くない！！俺の気持ちの整理が出来てない！！」

「そんなこと言っていないでほら、扉が開いたから入るぞ。」

俺は龍哉おじさんに無理やり入れられ、扉は閉まった。

まだ、信之さんにどうあって良いか迷っていた。

「おや、やっと来たね隼人君。久しぶりだね。」

「あ、えっと…」

「別に緊張しなくても良いよ。昔みたいに普通に話してくれれば良いから。」

「そうですね。」

「話したいことは聴かなくても分かる。どうせ、瑞希が誘拐された事だろ。」

相変わらず、信之さんは言わなくても分かるなよな。

「それが俺の能力だからな。」

「読まれた!!」

「それは良いとして、で、隼人君はどうするつもりなんだ？」

「瑞希を助ける。たとえ何があっても…」

俺は何がなんでも瑞希を助ける。たとえ俺が死にそうでも…

「…そうか。なら、瑞希を助けてくれ。瑞希は俺の一人娘なんだから。」

「言われなくても分かってるつもりさ。じゃあ俺も『スキル』の本拠地に向かうよ。」

そういうと俺はテレポートで『スキル』の本拠地に向かった。

outside

「隼人君も成長したな。」

「俺も昨日驚いたさ。もう当主って感じた。」

隼人がテレポートした後、龍哉と信之はまだ話していた。

「それにしても、隼人は風哉に性格が似ているな。龍哉と風哉は全然似ても兄弟だったのにな。」

風哉とは隼人の父親のことだ。

「それを言うな。俺も気にしているんだから。」

「まだ気にしていたんだ。それは良いとして、今日はどうなるのか。」

「どうなるって『スキル』が負けることは分かっているんだろ。」

「そうだが、それでも気になるんだ。」

信之は『スキル』が負けることは分かるが、どういつ風になるのかは分からないので気になってしまふのだ。

「そうか。じゃあ俺も行くから。」

「向こうの指揮は任せたぞ。」

「ああ。任せろ。」

龍哉はそういって、部屋を出て行った。

「さて、パフォーマンスの時間だ。」

信之は微笑みながら独り言を言った。

第二十一話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十二話

優子 side

「全員、位置についた？」

私達は『スキル』本拠地に居て、無線機でみんながそれぞれの位置についたか聴いていた。

出入り口は全部で七つ、だから私は竹宮副リーダーが来る前に私の指揮で七グループに分けたのだ。

ちなみに私達、グループ1は第一出入り口の前で隠れている。

『こちらグループ5、地下駐車場にたどり着いた。』

『グループ2、水道管につながっている通路に着いた。』

『グループ7、裏路地からつながっている出入り口に着きましたですけど。』

『こちらグループ4、外階段に着きました。』

『グループ6、第二出入り口に着きましたよ。』

『グループ3、もう一つの裏出入り口に着きました。』

「全員着いたね。じゃあ予定通り、グループ2は地下にある電気室

に向かい、グループ4は外階段を壊して。そのあと、私たちグループ1に合流して。他は『スキル』のメンバーを追い込んで。」

『『『『『了解!!』『』『』『』『』』

そして、私達は行動を開始した。

隼人 side

「どうやら始まったようだ。」

俺は一度テレポートをやめ、とあるビルの一つに止まり、『スキル』本拠地を見ながら言った。

なぜなら、『スキル』の本拠地の建物で爆発する音がしたからだ。

「俺も早く行かないとな。」

俺はまた建物の屋上をテレポートをして、どンドン『スキル』の本拠地に向かっていった。

龍哉 side

「おや、始まったようだね。」

俺は車を運転しながら言っていた。

「さて、俺がついている頃にはどうなっているだろうね？」

俺は『ユニオン』のメンバーがどこまでやれるか気になっていた。

outside

「天壤様大変です！！『ユニオン』のメンバーが全出入り口から進入してきました。」

「やっぱり来たか……」

天壤はワインを飲みながら溝口に言った。

溝口とは天壤の幹部の一人で『スキル』のリーダーだ。

「みんなに伝える。全員『ユニオン』に戦えと。指揮はその場に居る幹部に任せる。」

「分かりました。」

「それと、もう一つ、へりを屋上に着かせる。俺が逃げるから。」

天壤がそういうと、溝口は『スキル』の全員に『ユニオン』に戦えと命じるために出て行った。

そしてみ天壤は隣の部屋に行った。

「さて、元気にしているか清水瑞希よ。」

天壤は拘束されている瑞希のガムテープを剥がし、瑞希に話しかけた。

「わ、私に何をするつもりなの？」

「お前を人体実験として使うんだよ。」

「人体実験ですって。」

瑞希は天壤が言った言葉に動揺した。

「どうした。いきなり動揺して。」

「な、何であんた達はそうやって普通の人たちを人体実験を続けるの！？そこまでして超能力者を育てたいの！？」

瑞希は怒鳴りながら言い放った。

「何だ。お前は知っているのか。ああ、そうだ。俺は超能力者を育てるなら人体実験だろうと普通にやるさ。」

「人を何だと思っているの！！」

瑞希は能力を使おうとしたが使えなかった。

「ッ！？どうして、どうして私の能力が使えないの！？」

「簡単な事さ。その拘束しているその手錠は超能力を封じられるん

だ。」

「なんですて!!!」

「だからお前は何も出来ない。ただ、そこで助けを待っているしかな。そして、俺はその間に逃げているからな!!!」

瑞希は歯を食いしばり、天壤は微笑みだした。

だがその時、天壤の携帯に電話が掛かった。

「いきなりどうした。」

「大変です!!先ほど、ヘリを屋上に着かせたんですが、何者かによって破壊されました!!!」

「どういうことだ!!!詳しく教えて!!!」

「って、うわああああ!!!く、来るな、こっちに来るんじゃない!!!」
「ブツッ」

突然電話が切れた。

「オイ、そうなったんだ!?オイ!!!」

天壤は電話に切れたことにすぐには気づかなかった。

「クソッ、一体どうなったんだ?」

「あら、どうしたの?何か予想外のことが起きたって感じだけど?」

先ほどとは逆に瑞希が微笑み、天壤が歯を食いしばっていた。

「まだ後にやろうと思っていたが仕方ない。お前、さっさとついて来い！！」

天壤は瑞希の手を掴み、どこかに移動しようとした。

「離して！！何をするつもりなのよ！！」

「お前をすぐに人体実験に使ってやる！！今すぐにだ！！」

天壤は瑞希に八つ当たりをし、瑞希を人体実験の被験者にするために瑞希と一緒に人体実験がある場所に向かった。

第二十二話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十三話

隼人 side

「とりあえず、屋上からは逃げられないだろう。」

俺は今『スキル』の本拠地の屋上に居て、先ほどへりを壊し、屋上にいた人たちをナイフで殺したばかりだ。

「さて、俺も動きますか。」

俺は屋上から下の階に降りていき、瑞希を探しに行った。

だが、簡単には進まずにいた。

階段の下から『スキル』のメンバーが階段を上ってくる音がしたのだ。

「仕方ない。まだ使いたくなかったが使うか。」

俺は七つの刀のうち、水刀を取り出した。

そして俺はある言葉を唱えた。

「五大元素の一つの『水』よ。我の力となりて刀として表れる！！」
すると、水刀から水が出てきていた。

そして俺は水刀を地面に刺した。

「水すいの川がわ!!!」

俺がそう言つと、水刀から水が相当溢れ出てきた。

そしてその水は人が上れないくらいに急流となっており、階段を下つていった。

すると、下のほうから、『な、何だこれは!!!』『流される!!!』『手すりに捕まれ!!!』『無理だ!!!捕まっても水で流されてしまふ!!!』などと言っていた。

数分後、俺は刺した水刀を抜き、水刀を閉まった。

水刀をしまつと水刀から水は出なくなった。

「さて、今度こそ探しに行くか。」

俺は上の階から一つずつ部屋を開け、しらみ潰すことにした。

美羽 side

「結構、簡単なものですね。」

私はグループ7の中に所属していて、グループ7のリーダーをしている。

また、グループ7はまだ一階にいた。

「浅野さん、何か音がしませんか？」

グループ7の一人、佐藤という男がそう言った。

「音？確かに何かだんだん近づいてきているね。この音は水？何で水の音が…」

何故水の音が聞こえるのか気になったが、すぐに分かった。

なぜなら、私達の先の階段から相当の水と流されている人がいたから。

「な、何なんですか！？あの水は！！」

「みんな！！私の後ろにいて！！」

私がそういうと、みんなは私の後ろに移動した。

「速度を0にする！！」

私がそういうと、水は壁があるみたいに私の前で止まり、他の方向に流れていった。

「一体なにがあったのでしょいか？」

佐藤が私に聴いてきた。

「何があったのか分かりませんが、上で何かがあったようです」

ね？」

「そうですね。一体誰が……」

佐藤がそう言ったが私には心当たりがあった。

（隼人さんが持っていたあの七本の刀、確かそれぞれ特殊な刀って言うてたきがする。さらに、隼人さんは屋上から攻めているから、あれは隼人さんがやったというのですか？）

私はあの水を起こしたのが隼人さんなら、あの刀はあれだけの力があるのかと黙っていた。

「とりあえず、ここに立っていないで行きませんか？」

「あ、ああ。そうですね。じゃあ行きましょう。」

「あの浅野さん、どうかしましたか？」

佐藤は私が少し変だと感じたようだ。

「別に。ただ、考え事していただけです。」

「そうですね。それにしてもグループ2は何をしているのか？もう停電していい気がするんだが。」

「確かにそうですね。一体グループ2に何があったのか？」

私たちはグループ2に何があったのか気になっていたが、考えている暇もないのでとりあえず先に進む事にした。

「グループ2一体どうしたの？まだ停電していないじゃない？」

私は電気室に向かったグループ2がまだ停電させていないので無線機で連絡していた。

また、私たちグループ1はグループ2が電気室を壊さないので、急ぎよエレベーターの前で待機しているのだ。

『こちらグループ2、すみません。今、電気室の前にはいるのですが…』

「なら、早く入って電気室を壊しなさいよ！！」

『それが、電気室に入る扉のセキュリティが何故か凄く、なかなか入れないのですよ。』

「なら扉ごと壊せばいいじゃない！」

『扉を壊そうと一回試みたのですが、壊れなかったのです。』

まさか、電気室にそんな頑丈にしているなんて！

「…分かったわ。引き続き頼むね。」

私は連絡を切り、グループ1に命令した。

「今から二つに分けるわ。」

私は電気室が壊されるのを待つのにそんなにエレベーターに要らなかったので二つに分けることにした。

私を含め半分はエレベーター前に残り、残りをグループ6と合流するよう言った。

そして、半分の人たちが移動しようとした時、音がした。

「なに、この音は？」

何の音が気になっていたらすぐに分かった。

「雨宮さん大量の水がこちらに向かってきます!!」

「みんな私の後ろにいて!!」

みんなを後ろに移動させると、私はこちらに向かっている水を凍らせた。

「とりあえず、これで大丈夫ね。じゃあ、半分の方はグループ6に合流して。」

「了解!!」

半分の方はグループ6に合流するために向かった。

「さて、この氷はどうするか？」

私は目の前の氷をどうするか考える事にした。

第二十三話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十四話

Outside

天壤は瑞希を連れて、実験場所に向かっていった。

その向かっている途中、天壤に電話がかかった。

「一体何のようだ。」

「それが、屋上に向かわせた人達が大量の水で一階まで流され、さらには下にいた『ユニオン』の一人によって水ごと凍らせられました！」

それを聴くと天壤の表情が変わった。

「何だと！？ならまずい！！屋上に相当の人数を送らせたのだぞ！！」

「はい。だからこちらの戦力は50人いるかいなか…」

「そいつら全員を集める！！そして、そいつら全員で対抗しろ！！そしてまだ残ってる幹部は屋上から侵入してきた人を殺せ！！」

「分かりました。」

天壤はそう命令すると電話を切った。

「クソッ、完全にこちらの不利になっているではないか！」

「……………」

瑞希はなにかを話そうとしたが話せなかった。いや、話すことが出来ないので。

「さて、お前に舌を噛まれると困るからな。詰め込ませてもらった。」

そう。瑞希は今口の中に何かを詰め込まされているのだ。

「さて、着いたぞ。」

天壤は人体実験のする実験場所に着いてしまった。

隼人 side

「さて、上の階は調べたな。」

俺は屋上から順に探し、今は屋上から三階降り、十三階にいる。

「ん？誰だ。」

俺は奥から誰かが近づいてるのに気づいた。

「私は『スキル』の幹部の一人、天野と申します。まさかあの水をやったのが駿河大輔だったとは。」

近づいてきた男は三十代くらいで、天野と名乗った。

「お前も俺の正体を知ってるのか？」

「ええ、『スキル』の幹部以上の人間は駿河大輔の顔を知っていません。」

天野と言う人はそう言いながらだんだんと俺に近づいて来ていた。

「それで、俺を殺しに来たのか？」

「その通りだ。でも、少し話しかったものでな。もう少し話さないか？」

「そんなつもりではない。俺達は人質を捕らえられているんだから。」

「そうだ。こんなやつと話している暇ではない！」

「そうか。なら死ね。」

天野がそういうと、天野は姿を消した。

「どこ行った!!」

「こつちだ。」

「!?!」

いつの間にか天野は俺の後ろにいで、銃で俺を撃とうとした。

だが、俺は急いでテレポートをして回避した。

「おや？何故空間切断以外の能力が使えるんだ？駿河大輔は空間切断しか能力を持ってなかったはず！」

「俺がいつ、空間切断しか使えないと言った？」

俺はそういうと、空間切断で天野を切断しようとしたが、また姿を消した。

そしてここで天野の能力が分かった。

「まさかお前もテレポートか！？」

「その通りだ！！」

天野は先ほどと同じく、俺の後ろにまわり、銃で俺を撃とうとした。

「同じ攻撃が効くか！！」

俺はすぐに後ろに向き、銃だけ切断した。

「チツ、銃が切断されたか。だが、俺は銃以外にも持っているんだよね！！」

天野はそういうと、ポケットからナイフ取り出した。

（ナイフ？一体ナイフで何を……まさか！！）

俺は天野が何をしてくるのか分かると、すぐにテレポートした。

そしてテレポートした後、俺が居た場所を見たら、先ほど天野が持っていたナイフが落ちていた。

「やっぱり避けられたか。」

天野は避けられるのが分かっているような言い方だった。

(このままじゃあちがあかない。仕方ない。これを使うか。)

俺は無刀を取り出した。

「?なにしているんだ?まるで刀があるような動きをして?」

天野からは俺が刀を持っているのが分からないのでそう言った。

「幻想を現実に変えられる『無』よ。我が力となりて刀として表れる!」

俺はそう唱えるとすぐに無刀を天野の方に振った。

「ハッ!ナイフを持ってないのに何を……」

天野はそれ以上の言葉は無かった。

なぜなら空間切断によって体を切断したからだ。

「さて、少し時間をかけてしまったな。」

俺は少し急いで瑞希を探しはじめた。

だが、

「ってまだいたのかよ……」

俺の前にまた人が居た。

「仕方ない。俺の邪魔するやつは一人残らず殺す!!」

俺はそう決心すると、戦い始めた。

第二十四話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十五話

優子 side

「大変な事になったわね…」

私の方に残っているグループ1は大変な自体になっていた。

「何で半分減らしたとたんに50人くらいの『スキル』のメンバーが攻めてきたのよ!!」

最悪の展開だったわ。そこまで考えてなかったもんだから。

「とりあえず、今は逃げるわよ!!」

向こうは50人だがこちらは半分にしたおかげで30人しか居なかったから私達は逃げる事にしたのだ。

「グループ5、今どこに居る?」

「こちらグループ5、今、4階を搜索しています。」

「今すぐ一階に戻ってきて!!今、私達グループ1が50人くらいの『スキル』のメンバーに追われているの!!」

「え?50人くらいなら大丈夫じゃないんですか?こちらは60人ずつ分けたんですから。」

グループ5のリーダーがそう言った。

「確かにそうなんだけど、ちょっと敵が来なかったもんだから半分以上をグループ6に送らせてしまったのよ！」

『そうなんですか！？じゃあ今すぐそちらに向かいます！！なるべく逃げておいてください。』

「分かってる。そちらこそ早く来ないとぶち殺すわよ。」

そういつと無線を切り、私達は逃げる事に専念した。

美羽 side

私達、グループ7は今二階に居るんだが、一つだけおかしかった。

「おかしい。どうして未だに敵が出てこないのですか？」

そう。先ほどの水で流されている人以外の『スキル』のメンバーを見ていなかったのです。

「ねえ佐藤、あなたもおかしく思わないですか？」

私は佐藤にどう思うか聞いてみた。

ちなみに、佐藤とは話し相手としてさつきから良く話している。

「確かに変だ。普通何もしてこない方がおかしい。」

「何かありそうですね。」

私達は不思議に思いながらも進む事にした。

「なあ、浅野。ちょっと思うんだが…」

あれから少し歩いたら突然佐藤が私に話しかけてきた。

「何？」

「二手に分けないか？こんなに人数もまとめる必要ないだろう。」

「それもそうですね。じゃあ半分の方は私に、のこり半分の方は佐藤について行って。」

「了解！！」「」

「それと佐藤、一応無線機を持っておいて。」

「分かった。」

私は佐藤の案にのり、二手に分かれた。

だが、このとき私は気づかなかった。これは佐藤の策略だったなんて…

outside

（さて、やっと浅野と分かれられたな。浅野の能力は厄介だったからな。浅野以外の人なら多分全員倒せるだろう。）

そう。佐藤は『スキル』のスパイだったのだ。

そして佐藤はみんなを連れ、あまり人が来ない場所に向かっていた。

「あの、どこに向かっているのですか？」

すると、佐藤について行った一人が言った。

「ちょっと奥から探そうと思ってね。それだけだ。」

「そうですか。」

そういうと佐藤は目的地に着いた。

そして、佐藤について行ったみんなが入ると佐藤は動き出した。

outside

「さて、始めるとするか。」

天壤は瑞希を逃げないように拘束して、実験台にのせた。

またこの実験は、まず瑞希を洗脳してから瑞希に全ての能力を使わせる能力実験だった。

「まずは、お前を洗脳してやることからやってやる。」

天壤はそういうと、実験を開始した。

また画面には洗脳まで20分と表示されていた。

第二十五話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十六話

美羽 side

佐藤と離れて数分後、私は佐藤に連絡を取ろうとした。

「佐藤、聴こえる？そっちはどう？」

「……………」

私は佐藤の返事が無い事に疑問に思った。

すると、向こうから何かが聴こえた。

『と…、き…ま…ル…ス…た…！？』

ん？向こうで何が起きてるのですか？

私は耳を無線機に近づけ、やっと聞き取れた。

『ああ、そうだ。だからさっさと死んでくれ。』

（え？どういうこと？しかもこの声佐藤の……まさか。）

私は想像したくない事がよぎった。

数分後、声は聞こえなくなった。

「ねえ、誰か返事して。一体何が起きたの？」

私は再度呼びかけ、誰か返事が来るのを待っていた。

すると、誰かが無線機を取る音がした。

「浅野さんですか、どうしたのですか？」

そして、聴こえたのは佐藤だった。

「どうしたはこっちが聴きたい！一体何があったんですか!？」

「ああ、それは……………」

私は絶対に聴きたくない言葉を聞いた気がした。

「え、もういつかい言って。」

だから私は聞き間違えで欲しいと思ったのもう一度聞くことにした。

「だから、俺が連れて行った『ユニオン』のメンバーを一人残らず殺したんですよ。」

「う、嘘でしょ。お願いだから嘘だと言って。」

「本当だ。俺は『スキル』のスパイなんだよ!！」

「……………」

「おや、怖じ気ついちゃったか？まあ良いや。俺はこれで失礼するから。」

私は怖じ気ついていた。

でも、

「……ま……なさ……。」

「あん？何か言ったか？」

「そこで待ってなさいって言うてんだよお、さーとう。私がそっちに行つてブチコロシに行くからよお。」

でも私は佐藤を絶対許さない。たとえ何度殺してでも。

「……お前本当に浅野か？」

多分佐藤は今の私が本当に浅野なのかと思っっているんだろう。そりゃそつだ。だって今の私は佐藤を殺すという感情しかないんだから。

「そつだよお。私はあの浅野美羽だよお。」

「……ふっ、ふはははははは。」

いきなり佐藤が笑い出した。

「何がおかしいんだあ？」

「俺を殺しに行く？そんなの、俺が逃げれば良い話じゃねーか。ど

「うやって追っただ？」

「なら逃げれるものなら逃げてみなさいよお。」

「なら、逃げてやるぜ。」

そういうと佐藤の声が無線機から聞こえなくなった。

「あ、浅野さん？これからどうするのですか？」

私と一緒に行動していた一人がそういった。

「あんた達は優子が居るグループ1に合流でもしてなさい。私はあのクズやるうを打ち殺してくるからさあ。」

「わ、分かりました。」

そういうとグループ7は私を置いてどこかに行った。

そして私はみんなが行ったのを確認すると、独り言を言った。

「まってなさいよお、さーとう。今からブチコロシに行くからよお。」

私は念のために佐藤がどこに居るか確認するために付けて置いた発信機を頼りに佐藤を探しに行った。

第二十六話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十七話（前書き）

ちよつと変かも知れない

第二十七話

美羽 side

四年前、私が中学一年生のとき、私は始めて人を殺した。

しかも、殺したのは私の両親だ。

私は別に殺した時何も感じなかった。

その時の私は他の人とは違い、全然感情が無く無表情だった。

私は、人を殺すのに罪悪感が無かった。

それから私は次々に無差別に殺し、計十人を殺した。

でも私は警察に捕まらなかった。

なぜなら、私が起こした事件は別の事件と一緒にされたからだ。

そう。それは一年前から起きていた無差別殺人事件と。

そして、その犯人の正体分らず、その犯人を何故かこう呼んでいた。駿河大輔と。

なぜ、一緒にされたか分からないが、多分殺し方が似ていたからだと思います。

そう。何故か似すぎていたのだ。私と駿河大輔の殺し方が。

切断の仕方から何もかも。

でも私はその事件のおかげで救われた。多分、その事件が起きてなかったら私は警察に捕まってたかもしれないからだ。

ニュースでは犯人は一人だと思っているが、実際はあの事件の犯人は二人なのだ。

そして隼人さんが駿河大輔だったと知った時私は驚いた。こいつが駿河大輔だったのかつて。

だって、全然無差別に殺すような人という感じが無かったし、しかも捕まった私を助けてくれたのだ。

私は逆に何でこんな人があの殺人鬼だったんだろうと思ったくらいだ。

だからあの時、私と隼人さんの殺人には絶対に何かが違うと思った。

私が今の位に感情があるようになったのは中学三年生のときだ。

中学三年生の時はもう『能力都市』にいたのだが、多分その時に『能力都市』に居なかったら今の私はいないと思う。

私は『能力都市』である人にあつたから今の私がいる。

未だに戦うときは無表情になってしまい多重人格みたいになってしまいが、それでもその人には救われたのだ。

そしてその人とは、雨宮優子のことだ。

優子はこんな無表情で感情が無い私に近づき、毎日話してくれたのだ。

私は最初の頃、毎日話してくる優子を拒絶していて、私は優子から離れていた。

だが、『スキル』との戦いの時、私が戦っていたら後ろに敵が居るのに気づかず、一度殺されそうになった。

その時、優子が私を助けてくれて何故助けてくれたのって聞いたら、優子はこう答えた。

『仲間を助けるのは当たり前でしょ。それに、私達は『友達』でしょ。』

優子は私のことを友達と言ってくれたのだ。

私はその後、『なんで友達なの？私なんかあなたを特に拒絶してたのに…』と言った。

だが優子は『あなたは私と似ているの。私は今、学校でいじめられて孤独感を出しているところか。』と言ったのだ。

私は始めて似ている人に出会ったと思い、少し嬉しかった。

それから、私はだんだんと感情が出てきたのだ。

だから私は優子に感謝している。

優子が感情を教えたくれたから、楽しみを知った。

優子が感情を教えてくれたから、悲しみを知った。

優子が感情を教えてくれたから、泣くことが出来るようになった。

そして何より、優子が感情を教えてくれたから、隼人に恋することが出来た。

全て優子のおかげだ。優子のおかげで今の私がいる。

だが、そのおかげで私は許せない人たちが出てきた。

それは人を人体実験を使う人や、裏切りやスパイなどで人を騙して人を殺す人、そして、昔の私みたいに無差別に殺す人は逆に許せなくなつた。

だから私は隼人に会うまで駿河大輔が許せなかつた。

そして今、私は佐藤が許せない。『スキル』のスパイだった事までは良い。だが、その後300人の人を殺したのが許せないのだ。

だから私は無表情になろうと感情が無くなろうと今は絶対に、

「待っているよ。さーとう。」

絶対に佐藤をブチコロしてやる。

第二十七話（後書き）

なんか、浅野が麦野に似てきちゃった。多重人格にはしようと思っ
ていたのだが、ここまで麦野に似せるつもりまでは無かった…

それと意見、感想をお願いします。

第二十八話

優子 side

「はあ、はあ、完全にはさまれたわね…」

私達グループ1は50人くらいの『スキル』の人達に逃げ続けていたが、挟み撃ちをされ、逃げ場がなくなってしまった。

「これは助けが来ない限り、完全に負けたわね…」

私は負けを覚悟した時、突然異変が起こった。

『な、なんだ!!』

『おい、どうした!!』

『一体何が起こったんだ!!』

一瞬で『スキル』の人達のうち15人くらいの人が吹っ飛ばされたのだ。

「まったく、遅れてきてみたら大変な事になっていないか雨宮君。これじゃあ指揮を任せたのにこれじゃ任せた意味が無いではないか。」

「竹宮副リーダー!!どうしてここに!？」

竹宮副リーダーが何故かここに来ていたのだ。

「元々、俺も行く予定だったから別に驚く事でもないだろう。それにしても、今度から雨宮君に指揮を任せるのは止めた方良いな。」

「うう、すみません。」

私は竹宮副リーダーが言われた事に何も言えなかった。

「まあそれは終わったら話そう。今はこいつらを何とかしないとないとな
!!!」

竹宮副リーダーは、持っていた刀を一振りしただけで、『スキル』の人達を全員吹っ飛ばした。

「とりあえず、今はこちらが不利だ。とりあえず逃げるぞ。」

「はい。分かりました。」

私は竹宮副リーダーに従い、逃げる事にしようとした。

すると、前からやっとな援軍が来てくれた。

「援軍がやっとな来たわね。でも人数が少なくないかしら?」

私が援軍を見たら、人数は少なかった。

「あなた達どこのグループなの?」

だから私はグループ5の人達ではない気がしたので聞いてみた。

「私たちはグループ7です。浅野さんに言われたのでこちらに来ました。」

グループ7の一人がそう答えた。

「美羽がグループ1に向かうように言ったの？それで美羽はどうしたの？」

「浅野さんは一人で『スキル』のスパイだった佐藤を倒しに行きました。」

「スパイですって！！なら一体そちらでは何があったの！？」

私は少し怒鳴りながら言った。

「それが、浅野さんがグループ7を浅野さんと佐藤の二つに分けたんですけど、佐藤がスパイだと知ったのはその後だったのでその時には遅く、佐藤について行った人達は全員佐藤に殺されたらしいのです。」

その言葉を聞いて私は嫌な予感がした。

「……………ねえ、その時の美羽っておかしくなかった？人格が変わったように…」

「はい、そうでした。あれは浅野さんなのかって思いました。」

私は最悪の展開だと思った。

「竹宮副リーダー、ここは任せても良いですか？」

「いきなりどうしたんだ。別に任されても良いが？」

「私は美羽を止めに行きます。あの状態の美羽を止められるのは私だけですから。」

「分かった。だがあんまり無茶をするんじゃないぞ。」

「分かってます。」

というと私は竹宮副リーダー達と別れた。

「美羽、あんまり暴走しないでね。あんたは昔の美羽じゃないんだから。」

私は独り言を言いながら美羽を探しに行った。

outside

「さて、もうすぐ洗脳が終わるな。」

天壤は画面を見ながらそう言った。

「さて、これからどうなるのか楽しみだ。」

天壤は微笑みながら言った。

だが、

「そんなに楽しみなら今すぐでもやろうぜ天壤。」

突如、声が聞こえた。

「ほう。やっと来たか、駿河大輔！！」

姿を現したのは駿河大輔こと竹宮隼人だった。

「まったく、ここまで来るまで結構手間かせやがって。あんなに幹部を全員殺すのは。」

その時、天壤はにやけていた表情が消えた。

「まさか、屋上から進入したのはお前だったのか？」

「その通りだよ。まったくめんどくさかったよ。」

「しかも『スキル』の幹部を全員殺しただと？」

「そうだが？さて、早く瑞希を返してくれないかな？」

「ふっ、なら俺を倒してからだ！！」

そついうと、隼人と天壤の戦いが始まった。

瑞希が洗脳されるまで後5分。

第二十八話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第二十九話（前書き）

やっと第一章の最終部に入りました。

第二十九話

隼人 side

俺は天壤との戦いが始まると、すぐにナイフを取り出し、天壤がいる方に振ろうとした。

だが天壤は姿を消した。

「どこ行つた!!!」

俺は天壤を探したが、天壤は見つからなかった。

すると、俺は誰かに蹴られた。

「ぐはっ!?!」

俺は何がなんだか分からなかった。

すぐに後ろを向いたが、誰もいなかった。

「おや、どうしたんだい?まだ、始まったばかりだぜ。」

天壤の言葉が聞こえると、俺はまた蹴られた。

そこで俺はやっと気づいた。誰もいない訳じゃない。天壤が見えないのだ。

「なるほど。お前は消えているだけなのか。」

俺がそういうと、天壤は姿を現した。

「ようやく気づいたようだな。そうだ。俺の能力は透明幽霊と言って簡単に言えば透明人間だ。」

「やっぱりな。それが分かれば十分だ。」

「ほう。なら俺を倒して見る。」

すると天壤はまた姿を消した。

だが、俺には策があった。

まず雷刀を取り。こう唱えた。

「五大元素の一つの空によって生まれる『雷』よ。我の力となりて刀として現れよ!!」

すると雷刀からバチバチと鳴っていた。

俺は雷刀の先を地面に付け、俺の周りを一回転させた。

そして俺はこう言った。

「雷柱!!」

そういうと、さっき雷刀がなぞった所から上に電撃の柱がでてきた。

「これなら、お前の攻撃は効かないは…」

電撃の柱をだしたのに蹴られた。

そして、自分がだした電撃の柱に当たってしまった。

「うあ`あ`あ`あ`あ`あ`!!!」

俺はそのまま気絶してしまった。

o u t s i d e

佐藤は逃げていた。

「チツ、なんで俺が逃げなきゃいけないんだよ!!!」

佐藤は走りながらそう言った。

そして、佐藤の後ろには人がいた。

「逃げてねえーで戦えよお、さーとう。」

もはやさっきまでの面影がない浅野美羽が佐藤を追っていたのだ。

(何なんだよ!!!あの浅野の変貌ぶりはよ!!!戦うしかないのか?)

佐藤は逃げながら戦うのか考えてた。

(いやこのまま逃げられる訳が無い。なら、戦って浅野を倒そう。
それしかない!!)

佐藤は回れ右をし、浅野を倒す事にした。

第二十九話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第三十話

美羽 side

「やっと戦う気になったようねえ。」

私は佐藤がやっと戦う気になったので微笑んだ。

「……戦う前に一つ聞きたい。」

「何かしら。遺言として聞いてあげるわ。」

私は一度拳銃を構えるのをやめ、佐藤の話聞くことにした。

「浅野、お前の変貌ぶりは何だ？普通そこまで変わるか？」

「なんだそんな事？まったく聞いて損したわ。」

私は何を言い出すのかと思った。

「いいから答える。」

「私に命令するんじゃないよ屑が。次命令したらすぐに殺すわよ。」

「……………」

「まあいいわ。答えてあげるわ。私の過去をねえ。」

私はめんどくさかったけど、佐藤に言う事にした。

「先に言っとくけど、昔、私は殺人鬼だったのよ。」

「さ、殺人鬼……」

「そうよ。四年前、中学一年生の時に私は両親を殺したわ。」

「……………」

「あら、怖じ気ちやっただかしらあ。」

「……………続けてくれ。」

そう。と言い、私は続ける事にした。

「私はそれから次々に人を殺したわ。その時、私は勝手に家に侵入をして殺した事もあつたし、嘘について人を殺した事もあつたのよ。」

「ならなぜ、俺を殺そうとするんだ？お前は俺と同じく嘘をついて人を殺しただけじゃねーか。」

「そうね。だからこそ、あなたを許せねえーんだよ。」

「どづいづことだ？」

佐藤は多分自分がやった事を許せないのだろうと思っっているだろう。

「私は昔、感情が無かったのよ。でも、それは優子に助けてもらった。」

「優子って雨宮のことか？」

「そうよ。まあ、話ははしよるけど、簡単に言つと優子が私に感情を教えてくれたのよ。」

「それが、昔と何が関係しているんだ？」

「私に感情が出てきたとき、私は昔を振り返つたのよ。そして、こつ思つたのよ。自分がやってきた事は愚かで、バカだと思ひ、自分を殺したいと思つたくらいにねえ。」

「まさかそれで、」

「その通り。私は自分で自分が許せない。そして、私と同じような事をする人も許せないんだよお！！」

私は話し終わると銃を佐藤に向けた。

「これで分かつたでしょお。私があなたに許せない事があ。」

「……そんな事が。」

「何ですて。」

この男、私の言った事をそんな事つて言いやがった。

「そんなくだらないことで俺が許せないだと、笑わせる。そんなや

つらそこら中に居るじゃねーか。聞いて損したわ。」

「く、くだらないだとお!!！」

「くだらないさ。それに、お前だってそんなだったんだろう。だつたらそんなくだらないことしてないで今を生きれば良いじゃねーか。」

「きいーーーーーさあーーーーーまあーーーーー!!！」

私は佐藤の両足をまず撃った。

「貴様だけはクロス。絶対にブチクロス。何がくだらないだ。何が今を生きれば良いだ。お前に何が分かる!!！私の気持ちも知らないで、分かった口で言うんじゃねえ!!！」

私は佐藤に容赦なく銃を撃ち、途中で動かなくなったが、私は撃ち続けた。

途中から近くに尖った物があつたので、銃から尖った物でめつた刺しにした。

数分後、私はもはや佐藤の跡形や形が分からないまでグチャグチャにするまで決り続けた。

「はあ、はあ、き、貴様なんて人間の屑だ。はあ、はあ、」

私はそういつとどこかに行こうとした。

「美羽？」

どこかに行こうとした時、聞き覚えがある声があった。

「……………優子、何のようかしらっ。」

そう。優子が近くにいたのだ。

第三十話（後書き）

意見、感想をお願いします。

第三十一話

優子 side

私は美羽を探すため、美羽がいた二階を探していた。

美羽がああなった理由は分かる。

なぜなら美羽に感情を戻したのは私なのだから。

だから美羽は多分佐藤がさらに何かを言われてさらに許せなくなつて佐藤を絶対に殺すだろう。

さらに死んだとしてもまだ佐藤が許せなく何度も銃の弾がなくなるまでを撃ち続けると思う。

だから私は美羽を止めに行く。今の美羽はあの時の美羽じゃないんだから。

そして、私は美羽を見つけた。

だが、私が美羽を見つけたときにはもう遅かった。

だって、美羽の近くに誰だかわからない死体があったから。

多分あれは佐藤だろう。そして、美羽は佐藤を殺したのだろう。

そして、私は気もち悪くなりながらも美羽を呼んだ。

「美羽？」

すると、美羽はこちらを向いた。

私は美羽の体を見て驚いた。美羽の体は返り血が相当付いてたのだ。

「……優子、何の用かしら？」

美羽は私に気づいた用で、私の方を向いた。

「美羽、もしかしてこれあなたがやったの？」

「そうだけど、それが何？別に『スキル』の人を殺しても良いんでしょ。」

美羽は殺したのに罪悪感が無いような言い方だった。

……私が初めて美羽に会ったときのようにだった。

「でも、そこまでやらなくても……」

「何？優子はこいつの事を許すの？」

「そついうわけじゃなくて私は……」

「言い訳なんか聞きたくない！！優子もこいつと同じく死んじやえは良いんだ！！」

美羽は私に死ねば良いのと言い、銃を私に向けた。

「あんたを信用した私がバカだったよ！！あんたも死んじゃえ！！」

美羽は銃の引き金を引こうとした。

だが、私は怯えもしなく、こう言った。

「…良いよ。私を殺しても。」

私は美羽に殺される覚悟が出来ていた。

「な、何をいきなり言ってるの？私は本気で殺すよ？」

「なら、私を殺せば良いじゃない。別に私は何もしないから。」

私はそういうと美羽に近づきながら言った。

「や、やめて、これ以上近づくと撃つから近づかないで。」

美羽は後ろに少しづつさがっていた。

「だから、私は死ぬ覚悟が出来てるの。撃ちたいなら撃てば良いじゃない。」

私は美羽が言った事を無視して歩いた。

「だから。これ以上近づかないで！！」

美羽はそういうと、私に銃を撃った。

そして、私のわき腹に当たり、私はその場に倒れて意識を失った。

美羽 side

「う、うあああああああああああ!!」

私は間違えて優子に撃ってしまった。

私はなんてことをしたんだろう。私を助けてくれた優子を銃で撃つてしまうなんて…

私は銃を捨て、すぐに優子に駆け寄った。

「優子、死らないで。全部私が悪かったから死らないで。」

優子に声をかけても優子から返事が無かった。

「ゆうこ、おねがいだから、しらないで、おねがいだから。」

私は泣きながら優子に言いかけていた。

すると、そこに竹宮副リーダーの姿が見えた。

「おい!!大丈夫か!?!」

竹宮副リーダーはすぐに優子と私に駆け寄ってきた。

「わたしが、ぜんぶ、わるいん、です。つみは、うけます、から、

ゆづこを、たすけて。」

私は優子が助かるなら罰でもなんでも受けるつもりだった。

「とりあえず浅野君の能力で血が溢れないように止める！！少しならそれで持つから。」

「…分かりました。」

私は竹宮副リーダーに言われたとおり、能力で出血している部分の速さをゼロにして血を溢れないようにした。

「とりあえず、血は溢れなくなったな。じゃあ病院に向かうぞ。」

「はい。」

竹宮副リーダーは優子を肩にのせ、私と一緒に病院に向かった。

第三十一話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第三十二話

隼人 side

俺は気絶されてから数分後、目を覚ました。

「ここは…」

俺は目が覚めて少し経つと、動こうとした。

「あれ？動けない。」

俺は手を手錠で付けられていて、体は鎖で動けなかった。

そして、誰かがこちらに近づいてきた。

「やっと目覚めたか。」

「て、天壤！！」

天壤を見たとなん、気絶する前のことを思い出し、すぐにテレポ―トで脱出しようとした。

「あれ？能力が使えない。」

俺は何故か能力が使えない事に不思議に思った。

「そりゃそうだ。その手錠は能力が使えないようにするからな。」

「じゃあ、俺の刀とナイフはどうした!!」

「そこに六本置いてあるぞ。」

ん？六本？残り一本は？

すると、俺のズボンに無刀がついていた。

（ああ、なるほど。無刀は竹宮しか見えなかったな。だが、今はまだ使うべきじゃないな。）

俺はチャンスが来た時に無刀を使う事にした。

「そう。じゃあ瑞希はどうなっている!!」

そして俺は天壤に瑞希がどうなっているか聞いた。

「あいつなら、もう洗脳が終わっちゃったぜ。今は全ての能力が使えるようにする実験をやっている。後五分で終わるぜ。」

「貴様あ!!」

「さあ、俺を恨めばいいさ。お前も清水瑞希と同じ運命をたどるんだからな!!」

天壤がそういうと、俺は画面を見て残り一分だった。

（俺は無力だ。こういうときに何も出来ないし誰も助けられない。ごめん、瑞希。）

俺は自分の無力さに悔しかった。

「あと、三十秒。」

と天壤が言った瞬間、異変が起こった。

「って、停電!?!」

俺と天壤はいきなりの停電に驚いていた。

「クソッ!!後数秒なのに何でこういうことになるんだ!!」

(今だ!!)

俺は無刀を使って、鎖と手錠を斬った。

俺の七つの刀は物なら何でも切れるんだ。

そして、俺は刀とナイフを取り、天壤の首筋に無刀を近づけた。

「チェックメイトだな。天壤。」

「そいつはどうかな?」

「どういうことだ?」

俺がそういうと、俺は何故か宙に浮いた。

そして、俺は吹っ飛ばされた。

(この技、どこかで…まさか!)

俺はこの技に見覚えがあった。

暗くてあんまり良く分からなかったが天壤の近くにもう一人誰かがいたのだ。

「み、瑞希…」

そう。天壤の近くにいたのは瑞希だった。

だが、俺が知っている瑞希では無かった。

「実験は停電で失敗で終わったんじゃないのか!」

「確かに全ての能力を使えるようにする実験は失敗したが、洗脳は成功しているんだよ。」

「なん、だって。」

天壤からそれを聞いて、俺は瑞希を救えなかった事に悔しかった。

「さあ、清水瑞希よ。あいつを殺さない程度で痛めつけてやれ。あいつは俺の実験体として使うからな。」

「分かりました。」

瑞希は天壤の命令で動いていた。

「天壤様の命令どおり、あなたを殺さない程度に倒します。」

「瑞希、止めてくれ。俺は、お前と戦いたくない。」

「あなたが戦いたくなくても、私は戦う気があります。」

瑞希がそういうと、俺は瑞希の能力、サイコキネシスによってまた宙に浮かせられ、吹っ飛ばされた。

「ほらどうした！！先ほどまでの意気込みはどうしたんだ！！」

天壤は俺が戦えない事が分かっているのにそんな事を言った。

「瑞希、思い出してくれ。お前はそんな事をするやつじゃない！」

「……………」

瑞希は何も言わずに俺をまた吹っ飛ばした。

（俺は、どうすればいいんだ？瑞希を助ける事も倒す事も出来ない。何で俺は何も出来ないんだ。）

俺は自分を恨んだ。恨み続けた。瑞希に攻撃されながら自分を恨んだ。

俺は諦めかけていたその時、

ブウウ、ブウウ

俺の携帯のバイブがなったのだ。

第三十二話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第三十三話

俺は携帯を取り出し、電話に出た。

「もしもし、誰ですか？」

「おや、元気が無いね隼人君。どうしたんだい？」

電話の相手は龍哉おじさんだった。

「そりゃそうですよ。俺は何も出来なかつたんですから。」

「一体何があつたんだい？」

「それは…」

俺が話していたら瑞希が吹っ飛ばした。

「あがつ、」

今回吹っ飛ばされたところは悪く、思わず声をあげてしまった。

「大丈夫かい!!」

龍哉おじさんは俺のことを心配してくれた。

「大丈夫です。まだ、意識はあります。」

「今、誰と戦っているんだい？もしかして天壤か？」

「いや、天壤ではありませんよ。さっきまで戦っていましたが、」

「じゃあ、一体誰なんだ？」

「瑞希ですよ。天壤によって洗脳された瑞希ですよ。」

「な、なんだって？」

「分かるでしょ。俺がやられている理由が。俺には瑞希を傷つけることが出来ません。」

「……………」

「何も、出来ないんですよ。」

「……………ふ……けた……を……て……じ……よ。」

「ん？何か言いましたか？」

龍哉おじさんは何かを言っていた。

「ふざけた事を言ってんじゃねよって言ったんだよ隼人君。何もできないだ？何もしないうちで諦めてどうするだよ！！」

龍哉おじさんは俺に怒っていた。こんな怒った龍哉おじさんを聞いたのは初めてだ。

「お前は一応竹宮家当主だろ！！弱気になっっているんじゃね！！そんなんじゃ、竹宮家を統括できないぞ！！」

「……………」

「何もやってない内に諦めるなんて当主失格だ！！お前は何のために戦っているんだ！！」

（そつだ。最初は人体実験が許せなくて戦ってたが、今は瑞希やみんなを守るために戦っているんだ。）

俺は龍哉おじさんのおかげで目が覚めた。

「ありがとう、龍哉おじさん。もう大丈夫です。」

「やっと目が覚めたか。俺が行かなくても大丈夫だな。」

「ええ、大丈夫ですよ！！」

また瑞希が攻撃してきたので。すぐにサイコキネシスを回避した。

「そつか。なら、俺は雨宮君を何とかするから。」

「雨宮に何かあったのですか？」

「まあね。戦いが終わったら話すよ。今は隼人君の邪魔をするわけにはいけないし。」

「そうですね。じゃあ、戦いが終わったら聞きます。」

「それが良いよ。じゃあ、切るね。」

電話を切ると。俺は立ち上がった。

「おや？やっとな戦う気になったのですか？」

「そつだよ。やっとな目が覚めた。俺はバカだったよ。」

「一体何を吹き込まれたのか知りませんが、どうやって清水瑞希を傷つけないで戦うのですか？」

「そんなの言うわけが無いだろ。それに、俺はこの刀だけで戦つてやる。」

俺は魔刀を取り出し、こう唱えた。

「全てを地獄とかした『魔物』よ。我の力となりて刀として表れよ
！！！」

すると魔刀は俺の手に取り付いた。

「ぐっ、やっぱり俺の体力を奪うか。」

そつ。魔刀は俺の体力を奪う変わりにもの凄い力を得られるのだが…

「はっ、その刀だけで大丈夫なのか？」

「大丈夫さ。これの威力は凄いらさ！！！」

俺は魔刀を天壤に見せるために振った。

すると、魔刀で振った瞬間に魔刀振った軌道に沿って建物が切断さ

れ、切断された上部分がすべり落ちた。

俺の空間切断は振ってから五秒くらい掛かるんだが、魔刀は一秒も掛からないで切断してしまうのだ。

「これが魔刀の力さ。」

「な、何が起きた？一瞬の間に何が起こった？」

天壤は何が起こったのか分からないでいた。

「魔刀は俺の体力を奪う代わりに相当の力を手に入れられるんだ。ま、一度使つと一ヶ月くらいに使えなくなるが。」

「……だが、こちらには清水瑞希がいるんだぞ！！どうやってこいつと戦うつもりなんだ！！」

「それはもう策はあるんでね。」

「ふん、なら清水瑞希！！こいつを気絶させろ！！」

「分かりました。」

という俺も瑞希と戦うことにした。

第三十三話（後書き）

次回、本格的に隼人VS瑞希です！！

第三十四話

美羽 side

私と竹宮副リーダーは病院に着いた。

「あの、優子は大丈夫なんですか？」

「とりあえず、あなたの能力のおかげで血は大量に出ませんでしたので命は助かると思います。」

「そうですね。」

命が助かることを聞いた私はホツとした。

そして私達は治療室の前に着いた。

「これから治療室に入りますので、そこで座って待っててください。」

「私達は看護師にそう言われるとベンチに座って、優子が助かるのを待った。」

「それで、今は落ち着いているよね？」

優子が治療室に入ると、竹宮副リーダーが私に話しかけてきた。

「はい。今は少し落ち着きました。」

「そう。なら、あそこで何があったのか話してくれるかい？」

「分かりました。」

私は竹宮副リーダーにあそこで優子と何があったのか話し始めた。

「あの時、私は佐藤を追っていたんです。」

「何で佐藤君を追っていたんだい？」

「佐藤は『スキル』のスパイだったんです。」

「……………」

「それで、佐藤は私のグループ7の半分を全員殺したんです。」

「何で半分なんだ？」

「私がグループ7を半分に分けてしまったんです。私が半分に分けないければこんな事には……」

「そんな自分を責めてもしようがないよ。佐藤君が『スキル』のスパイだと知らなかったんだから。」

「ですが、」

「結果的に浅野君の作戦は失敗だったのかも知れない。だが、普通なら成功したはずだったんだよ。ただ、そのグループ7にスパイがいたから失敗したただけなんだから。」

「……………」

「だから浅野君は悪くないんだよ。」

竹宮副リーダーは私を責めなかった。逆に私に罪はないと言ってくれた。

そして、私は話を進めることにした。

「……………そして、私は佐藤が連れて行ったグループ7を殺したことで『スキル』のスパイだと知った時、私は佐藤を絶対に殺そうと思っただけです。」

「それは、昔の浅野君と同じだったから？」

「そうです。私は昔がやった罪は未だに許せないんです。それで佐藤が私と同じ事をしたとき、私の心が壊れたんです。」

「そう。その後は？」

「私以外のグループ7全員をどこかに行かせ、私は佐藤を追っただけです。」

「それで、」

「私はあの時佐藤には言わなかったのですが、一応居場所が分かるように佐藤に発信機を付けていたのですぐに見つけたのです。」

「じゃあ、雨宮君の奥で死んでいた誰だかわからないあの死体は佐

藤君なの？」

「そうです。そして私は佐藤に私の過去を話したのですが、全てを聞いたとき佐藤はくだらないと言ったのよ。」

「それで、佐藤君を殺したのかい？」

「そう。そしてその後優子が来て、私は気が狂ってて優子に銃を向けたの。」

「……………」

「だが、優子は怯えもしなく、優子は『良いよ。私を殺しても』
って言ったの。」

「それで、逆に浅野君が雨宮君を怯えちゃったわけか。」

「そう。私は優子に怯え、そして間違えて撃ってしまったの。」

「その後、俺が来たわけか。」

私はうんと頷いた。

「未だに浅野君は自分がやったことは許せなく、そしてそれを他の人がやっても許せないんだね。」

「はい。相変わらずそれに関しては自分で制御出来ないんです。」

「まあ、それはじっくり直すとして、大体は分かった。それもあまり自分を責めなくても良いんじゃないかな？」

「どうしてですか？私は誰だか分からないくらいに佐藤を殺したんですよ。それなのに、」

「それなのにどうしてっていう感じだな。確かに、浅野君がやった事は残酷だったかも知れない。だが、それはしょうがないんじゃないかな。」

「どうしてですか？」

「佐藤君は浅野君に言っではならないことを言ったんだから自業自得だよ。多分俺だって自分が言われたくないことを言われたら何をするか分からないから。」

「でも、」

「だから、自分を責めないことだね。分かったかい？」

「……はい。分かりました。」

私は竹宮副リーダーにそう言われたのでとりあえず頷いた。

「さて、後は隼人君だけだね。」

「隼人さんがどうしたんですか？」

隼人さんにも何か起きているのですか？

「隼人君は今、瑞希君と戦っているんだ。」

「瑞希さんって隼人さんのお友達なの？どうしてそうなっているんですか？」

私は訳が分からなかった。何故隼人さんが友達と戦わなきゃいけないのか？

「俺にもよく分からないけど、天壤に洗脳されたらしいんだ。」

「な、なんですか。」

「だから隼人君はこの戦いで自分にけじめをつけなければいけないんだから。」

私は隼人さんに何が起きているのか良く分からないが、心の中で『隼人さん、無事で帰ってきてください』と言った。

第三十四話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第三十五話

隼人 side

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

俺は瑞希に正面から突っ込んだ。

瑞希はサイコネシスを使って俺を止めようとした。

だが、俺はすぐに右に移動して避けた。

とっていた。

「しまった！！左腕が動かない！！」

俺の左腕だけ瑞希のサイコネシスによって止められていたのだ。

そして、瑞希は俺の左腕をそのまま曲がらない方に捻りやがった。

「うあああああああ！？」

俺の左腕は骨が折れる音が何回も鳴り、完全に左腕が使えなくなつた。

俺は何が起こったのか分からなかった。

「い、一体何が……っ！！」

俺はそこでやっと気づいた。俺の左腕が変な風に折れ曲がっていることに。

「おや？左腕が凄いいことになっているじゃないか。どうしたんだい？」

天壤は何があったのか分かっているくせにそういう言いやがった。

「分かっているくせにそういう事を言うんですね。」

「ふ、まあいいや。おい清水瑞希、さっさとこいつを倒せ。」

「分かりました。」

瑞希はそう言うとサイコキネシスを使う体制に入った。

「クソッ！」

俺はすぐに避けて、瑞希に近づいた。

だが、瑞希はすぐに俺に向かってサイコキネシスを使ってきた。

「しまった!!」

俺は瑞希のサイコキネシスに捕まり、吹っ飛ばされた。

「くっ、」

俺は吹っ飛ばされた後、すぐに立ち上がった。

「はあ、はあ、やっぱり、瑞希と戦うのは結構きついな。」

さらに俺は時間が経つにつれ、魔刀の代償として体力も奪われていたので疲れが出てきた。

「これに全てを賭けよう。体力も天壤に残さないといけないしな。」

俺は魔刀を右手だけで構え、瑞希が攻撃するのを待った。

そして、瑞希がサイコネシスを使う体制に入った。

「今だ!!」

俺はまず瑞希のサイコネシスをレポートで避け、瑞希の背中に移動した。

「ッ!!」

瑞希もすぐに後ろを向き、すぐにサイコネシスを使おうとした。

だが、俺はまた瑞希の背中にレポートし、今度は瑞希がふり向こうとした時にレポートで一回目のレポートをしたところに戻った。

「ごめん。瑞希。」

俺は瑞希に謝ると、右腕で瑞希を吹っ飛ばした。

普通なら吹っ飛ばないが、魔刀によって体中が強化されているので

瑞希は吹っ飛ばされたのだ。

そして、瑞希は吹っ飛ばされ、やっと止まると瑞希は立ち上がらなかつた。

どうやら気絶しているようだ。

瑞希が気絶しているのを確認すると、俺は天壤の方を向いた。

「さて、次はお前だぜ。天壤。」

「ほう。清水瑞希を吹っ飛ばして気絶させたか。でも、その左腕はもう使えそうにないな。」

「別に左腕がなくても何とかなるさ。」

「そう。なら手加減をしなくてもよさそうだな。」

「元々、するつもりなんてないだろ。」

「は、確かにそうだ。じゃあさっさとやろっぜ。」

「ああ、そうだな!!」

俺は今日最後の戦いを始めるのだった。

第三十五話（後書き）

いきなりなんです、まだ第二章の内容が決まっていませぬ。

そこで、読んでいる人に聞きたいんですが、第二章の敵がどういうのか決めて欲しいんです。

例えば、vsヴァンパイアや普通にvs超能力者など何でもいいです。

とりあえず意見をください。

第三十六話

隼人 side

俺は天壤に向かって魔刀で切断しようとした。

「ふ、甘いな。」

天壤は透明幽霊で姿を消した。

そして、俺は蹴られた。

「今の俺じゃあ吹っ飛ばされないぜ!!」

俺は魔刀で体中が強化されているので吹っ飛ばされなかった。

「なるほど、その魔刀とかいう刀、結構厄介だな。しかも、手に取り付いてるから刀とお前を分けることも出来ないか。なら、」

天壤は姿を消しながらそう言った。

その後、実験室にあった鉄の拳みたいなものが勝手に動きだし、鉄の拳が消えた。

「そこに居るのか!!」

俺は鉄の拳が消えたところに空間切断を放った。

だが、何も当たらなかった。

「チツ、外したか。」

「外してなんかいないさ。俺はこれを付けてからずっとここに居たさ。」

天壤は先ほどの鉄の拳を右腕に付けていて、俺が空間切断したところから姿を現した。

「な、なら何で切断されていない!？」

「それは、俺の能力名、透明幽霊から分かるんじゃないかな？」

「透明幽霊……まさか。」

俺はやっと天壤の能力が分かった。

「やっと分かったか。そうさ。俺は透明になっている間、幽霊になっているんだ。」

「幽霊。」

「要するに姿を消すだけじゃなくて俺自身が幽霊になるんだよ。」

「ゆ、幽霊ということは絶対に当たらないじゃないか!！」

「その通りだ。お前の攻撃は俺に当たらない。だから絶対に勝てないんだ。」

「な、なら、どうすれば良いんだ？」

俺は天壤からその言葉を聞いたとき、どうすれば良いのか考えた。

「自分で考えることだな！！」

天壤はまた姿を消した。

（落ち着け俺、まだ倒せないって決まった訳じゃない。考えろ、思考を止めるな。）

俺は攻撃が当たらない相手をどう倒せば良いのか考えていた。

「おい、そんな事していたら隙がありすぎだぜ。」

「しまっ、」

俺は考えていてばかりいたので天壤に多分右腕の鉄の拳の方でぶん殴られた。

「ガハッ、」

しかもぶん殴られたところが腹だった。

多分、魔刀を使ってなければ内臓が破裂していただろう。

それでも、すぐには痛すぎて動けなかった。

また、動けない間も天壤を倒す方法を考えていた。

そして、あることに気づいた。

（さてよ、天壤は能力を使っている時は確か何も当たらないはずなら、何で天壤の攻撃は当たるんだ？）

「ふ、もう動けないんだ。もう左腕も使えないようだし、実験をするには無理だから、死ね。」

だが、考えていたらまた天壤が一度姿を現し、また姿を消し多分攻撃してきた。

俺はまだ動けなかったので、どうしようもなかった。

（これを喰らったら俺は死ぬ！！）

俺は決死で体を動かそうとした。

（せめて右腕だけでも動いてくれ！！）

俺はせめて右腕が動いて欲しかった。

「動けええええええええ！！」

俺がそう思ったら右腕が動き、魔刀を振った。

すると、魔刀が何かを切断した。

それは天壤の左腕だった。

「うぎゃああああああ！！？」

天壤は左腕が切断されると悲鳴をあげた。

そして俺は疑問に思ったことがあった。

（ちょっと待て、何で天壤に当たったんだ？天壤の能力は透明の間、絶対に当たらないはず。）

俺は不思議に思った。そして、一つの結論が出た。

（まてよ。ひよっとしたら天壤は透明の間、幽霊になることも出来るし、幽霊にならないことも出来るんじゃないのか？）

俺はその結論が出たときに勝機があるんじゃないのかと思った。

そして、やっと体が動いたので俺は立ち上り、笑った。

「ふ、ふふふはははははははははは。」

「な、何がおかしい！！」

「いや、ちょっとな。天壤、お前の能力の弱点が分かってぜ。」

天壤の透明幽霊の弱点、それは天壤が攻撃してくる時、攻撃が当たるようにその時だけ幽霊にならないはずだ。

だから、天壤の透明幽霊はそれぞれ別々で、言い換えれば透明人間と幽霊人間の能力を持っているということだ。

多分天壤はその事を知っているだろう。だから自分の弱点だと分か

らないように透明幽霊と言い、同じ能力だと思わせたのだろう。

だが、それが分かればこっちのモンだ。

「は、だとしたらどうするんだ。俺は姿を消せるのにどうやって倒すんだ？」

「おや、否定はしないんだ。それと、どうやって倒すかは教ええると思うか。」

「そうか。なら俺を倒してみろ！！」

天壤はまた姿を消した。

だが、天壤は一つ忘れていた事があった。

天壤の切断した左腕から血が出ていることだ。

天壤の能力は透明人間は多分、天壤が触れているものしか消えないんだ。

しかも天壤は多分戦っている時に、血が垂れることなんか今まで無かったんだろう。

だから、天壤は気づかないんだろう。俺から血が見えていることに。

「死ねええええええええええ！！」

天壤は俺に近づき多分、殴ろうとした。

「今だ!!」

俺は膝で天壤の腹を蹴った。

「がはっ、」

天壤はそのまま吹っ飛ばされ、倒れた。

第三十六話（後書き）

前回も言いましたが、まだ第二章の内容が決まっていけません。だから、第二章の敵がどういう風にするのか決めて欲しいんです。例えば、vsヴァンパイアや普通にvs超能力者など何でもいいです。ので意見をください。

また、小説の意見、感想もお待ちしています。

第三十七話

隼人 side

天壤が倒れると、俺は魔刀を仕舞い、天壤に近づいた。

近づくと、天壤はまだ生きていた。

「……なぜ、分かった。」

「お前、気づいてないだろう。俺が切断した左腕から垂れた血が見えたことに。」

「そ、そんなばかな!! 見えるはずがっ、ゴホッ、ゴホッ。」

天壤は大声を出したとたん、血を吐きながら咳をした。

「あんま、大きな声で話さないほうが良いぜ。お前は俺とは違い、内臓が破裂しているからな。」

「そうか。でも、何故俺の血がお前に見えたんだ?」

天壤は未だに話かっていなかった。

「お前の能力の透明幽霊は自分が触れているものしか消えないんじゃないのか?」

「そうだが?」

「要するにお前から垂れた血はお前に触れていない。だから、俺にも見えたわけだ。」

「なるほど。そういうことが。自分で自分の能力を分かりきっていなかったなんてな。」

天壤は納得していた。

「それと、もう一つ聴きたい。何故俺を殺さなかった。お前は俺を恨んでいたはずだ。」

「確かに、お前を恨んでいるさ。お前のせいで俺は被験者の祖母を殺さなくてはならなかった。」

そう。俺は天壤のせいで祖母を殺さなくてはならなかった。

「なら、何故殺さない。」

「お前に一つ聴きたかったもんでな。ひよっとするとお前は知っているんじゃないかって思ってたね。」

「なんだ。」

「竹宮良鬼たけみやりょうきという名前は知っているか？」

「た、竹宮良鬼だと。何故その名前をお前が知っているんだ！！ゴホッ、ゴホッ、」

天壤は驚いた顔をしていた。

竹宮良鬼、俺の双子の兄だ。

兄は元々竹宮家当主になる男だった。

だが二年前、行方をくらました。

俺はその時、人体実験で兄が行方をくらましたことにあまり気にかけてなかったが、その後、天壤がやった人体実験の実験場所の写真が手に入り、その時に偶然兄が写っていたのだ。

「俺の本名は竹宮隼人なんだよ。」

「まさか、お前は竹宮家当主だったのか!!」

「まあな。それで竹宮良鬼を知っているようだな。」

「ああ、知っているさ。あのクソツたれには一度会った事があるからな。」

「やっぱりな。それでこの写真を見て欲しいんだが。」

俺は先ほど皆さんに言った写真を天壤に見せた。

「これは、何の実験だったんだ?」

「ああ、これは吸血鬼を人間に戻す実験さ。」

「吸血鬼。」

「そうだ。だがあのクソツたれはこの実験を利用し、吸血鬼を俺達に襲わせやがったんだ。」

「な、なんだって……」

俺は驚くしかなかった。兄がそんな事をしてたなんて……

「そして、あのクソツたれの目的は超能力者の吸血鬼を作ることが目的だったらしく、『スキル』四分の一が吸血鬼にされてしまったんだ。」

「……………」

「俺達はすぐ逃げたさ。そして、その実験場は今でも吸血鬼に占領されている。」

「それでその実験場はどこにあるんだ？」

俺は実験場を聴こうとしたが、一番あつて欲しくない場所だった。

「岐阜県にある村の地下さ。」

「な、何でそんな場所に作つたんだ!!」

俺は天壤に切れ、天壤の胸倉を掴んだ。

「そんなこと言われてもな。実験場の作る場所は幹部に任せていたからな。俺が知つたのもその時だったし。」

「そうなんですか。」

「さて、俺が知っているのはこれくらいさ。それで俺をどうするつもりなんだい？」

天壤は兄のことを聞きだした後、どうするのか聞いて来た。

「さっきまで、聞きだした後には殺そうと思ったが、さっきのを聞いてたらお前を使う可能性が出てきたから生かす事にするよ。」

「何故だ？俺はお前達の敵で、さらにはお前を人体実験に使おうとしたのだぞ。裏切るかもしれないぞ。」

「お前には監視を付けるし、それにもう『スキル』は壊滅状態だろ。それなのにどうやって俺達を裏切れるんだ？それに、お前は兄を相当恨んでいるはずだ。」

「それもそうだな。なら、一緒に戦おう。」

「そうか。さて、じゃあ俺は瑞希の方を見てくる。」

「そう。多分洗脳は解けているはずだ。洗脳も未完成でね。洗脳された人が気絶すると元に戻ってしまっただ。」

「ほとんど未完成か失敗なんだな。」

「それを言うな。でも、吸血鬼を人間に戻すのは成功している。」

「そうか。」

と言うと、俺は瑞希の方を見に行った。

瑞希の方を見に行くくと瑞希はまだ気絶しており、座って寝ているよ
うな感じだった。

「うーん、」

どうやら起きたようだ。

「あれ？私どうしたんだっけ？確か天壤に連れて行かれて……あ、
隼人助けてくれたの？」

「そうだ。たく、大変だったんだぞ。左腕は洗脳されたお前によっ
てこんなになっちゃったし、お前を助けるのにどれだけ掛かってい
たのか。」

「ごめん。私が捕まったせいで。それで、天壤はどうなったの？」

瑞希は天壤のことを聞いて来た。

「天壤はそこで倒れているさ。生きてるけど。」

「なんで殺さないの？」

「それは、兄のためだ。」

「兄って良鬼のこと？」

「そうだ。その為に天壤が必要なんだ。」

「そうなの。」

「俺は……」

俺が瑞希に言おうとした時、俺に異変が起こった。

「ッ!？」

「隼人!？いきなりどうしたの!？」

「な、何故今になって魔刀の代償が出てくるッ、」

俺はここで意識を失った。

第三十七話（後書き）

二章の内容が決まりました。

なので、その意見についてはもう大丈夫です。
それと小説の意見、感想をお待ちしています。

最終話(前書き)

いじやよじやいじや。

最終話

隼人 side

俺は目が覚めると病室の個室のベッドに居た。

俺が起き周りを見渡すと、まだ誰も居なかった。

また、左腕はギプスで固定されていた。

近くにあったデジタル時計を見ると、『スキル』と戦った日から三日経ったらしい。

さて、暇だから岐阜で起きた実験の事でも話そう。

岐阜の村で行われた人体実験、あれは天壤がやった中で一番酷かった。

俺はあの時、実験のことを知りすぐに一人で岐阜の村に向かった。

そして、俺が着いたとき、もう遅かった。

村の人たちが実験の失敗でおかしくなり、暴れだした。まるでバイオハザードみたいだ。

そして、その中に祖母も居た。

俺はそれを見て、村の人が可哀想だと思った。

勝手に実験の被験者にされ、しかも失敗してあんな風になるとは思わなかっただろう。

俺はそんな村の人達を見ていると自分を殺して欲しいと言っているような感じだった。

だから、俺は村の人を殺す事にした。

俺はまず近くの町で自分が誰か分からないような服装をした。

そして、俺はこのときはまだ七刀はまだ持っていなかったのでナイフを使い、俺の能力で全員触れないで殺した。

そのあと俺はすぐに誰かが駆けつけると思い、すぐに森の中に逃げた。

そして何も無かったように家に帰った。

また、その後自力で実験の事を調べ、『能力都市』がやった事が分かり、さらにまだいろんな人体実験をしている事が分かった。

そして俺は被験者を一人残らず殺すことにしたのだ。

これが殺人鬼、駿河大輔としての俺の過去だ。

さて、そんな事を語っていたら、誰かが入ってきた。

入ってきたのは瑞希、浅野だった。

「は、隼人！！目が覚めたのね。」

「ああ、ってか何だこのコンビは！！！」

何で瑞希と浅野が一緒に入ってくるの！？二人ともいつの間に関わり合いになったの！？

「何って私は隼人の病室に行ったときに美羽に会ってなんか話し相手になったのよ。」

「しかも、浅野の事を美羽って言ってるし！！！」

「まあ、それは良いとして、体は大丈夫なの？」

「スルーされた！！！」

やっぱり瑞希といると疲れる。

「で、体は大丈夫なのですか？」

今度は浅野が聞いて来た。

「ああ、左腕以外は大丈夫だ。」

「そうですね。それとその左腕、一ヶ月くらいで治るそうですねよ。」

「そうなのか。でも、一ヶ月はこのままか。」

俺はちよつとがっかりした。

「そういえば、雨宮は？龍哉から聞いたことには何かあったらしいけど。」

俺がそういうと浅野の笑顔が消えた。

代わりに瑞希が答えた。

「優子は隣の病室で元気だよ。」

「そうか。それで何があったんだ？」

俺は雨宮も名前を呼んでいるのには気になったが、今はそれより雨宮に何があったのか気になったのでそつちを優先した。

「それは……」

瑞希は何かをためらっていた。

「良いよ。私が言うから。」

「でも、美羽は大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ。それに、優子に何があった原因は私なんですから。」

なんか空気が重くなった。

そして、浅野は雨宮に何があったのか話し始めた。

「私は優子を銃で撃ってしまったんです。」

「えっ……」

俺は驚いた。浅野が雨宮を銃で撃った？

「私達『ユニオン』の中に『スキル』のスパイがいたんです。」

「……………」

俺は黙って聞く事にした。

「そのスパイが三十人くらいの『ユニオン』のメンバーを殺したんです。」

「そして、私はそのスパイを見つけると、姿が分からないくらいに残酷に殺したんです。」

「その後、優子が私の所に来たんです。」

「優子はその時、スパイの事をかばうような言葉を言って、実際は言っていないんだけど、私は気が狂って優子に銃を向けたの。」

「すると優子は怯えもせず、私に近づいてきたの。」

「そして逆に私が優子に怯えて優子に撃っちゃったの。」

「……………」

俺が知らないところでそんな事があったんだ。

「私は大事な友達を失うところだった。」

「……そんなに自分を責めなくても良いんじゃないかな。」

「え？どうして？」

「多分浅野はそのスパイが殺した他に何か言われたから残酷に殺したんじゃないのかい？」

「え、何で分かったんですか？」

「普通、そのスパイが三十人の人を殺しても残酷に殺さないだろう。たとえ浅野が許せない事でも。」

「そうですが。」

「だからそのスパイも自業自得だと思うよ。だから浅野は自分をあんまり責めなくても良いんだよ。」

「……………くす。」

浅野が微笑み始めた。

「もしかして俺、何か笑える事でも言ったか？」

「いえそうではなくて、やっぱり竹宮副リーダーと言う事が似ているんですね。」

「え！？龍哉おじさんもそんな事を言ったの！？」

龍哉おじさんもそんな事を言ったんだ：

「とりあえず元気になったかい？」

「はい、落ち着きました。」

「そうか。じゃあ俺は雨宮の所に行くから。お前達も付いて行くよな？」

「「勿論ついていくに決まってるでしょ。」」

「じゃあ行くか。」

というと俺達は雨宮の所に行った。

「雨宮、お前は大丈夫か？」

「あら、隼人君やっと起きっ、」

雨宮はベットから起き上がろうとした時、突然わき腹を押さえた。

「優子、まだ動いちゃ駄目ですよ！動いたら傷口が開いちゃっじやないですか。」

「そうだったわね。」

雨宮はそういって横になった。

にしても、雨宮が修道服以外の着ているなんて初めて見たな。患者服だけだ。

「お前は無茶すぎなんだよ。」

「隼人君、それはお互い様でしょ。」

「そうだな。」

俺がそういうと、俺と雨宮は笑い出した。

だが、浅野と瑞希は俺達が笑ったことが不満だったらしい。

「ねえ、二人の間に何があったのか聞いていいですか？」

「隼人、優子と何があったのか言いなさい!!」

「別に、何でもねえーよ。俺はただ…」

「隼人君と私は二人には言えない事をしたの。」

「何誤解な事を言ってるの!? ちょっと浅野、瑞希落ち着け!! 俺と優子はそんなことしてないから!!」

「今、さにげなく優子って言った!!」

やべ、余計に状況が悪くなった。

「さーて、話を聞こうじゃない」

「不幸だー!!」

俺は最後にボケながら、浅野と瑞希に制裁を喰らった。

ちなみに何故か雨宮が赤くなっていたんだが…何でだ？

「はあ、酷い目にあつた…」

俺はあの後、三人で話があるって言うから浅野に天壤の病室を聞いてから出て行った。

「さて、天壤の病室は、ここだな。」

俺は天壤の病室の前に着くと、病室の中に入った。

「お、隼人君。やっと目が覚めたんだね。」

中に入ると、龍哉おじさんと天壤が居た。

「二人で何を話していたんですか？」

「いや、何ってそれは隼人君が分かっているんじゃないかな？」

「兄の事ですか。」

「そういうことだ。」

天壤がそう答えた。

「そう。それで何か分かったんですか？」

「いや、あまり進展が無いさ。だが、本拠地はやっぱり岐阜の村の地下らしい事ぐらいかな。」

「やっぱりあそこですか…」

「別に隼人君が落ち込むのも分かるよ。あそこは隼人君が一番行きたくない場所だからな。」

「でも、俺は行かなければなりません。兄が何でそんな事をしていいのかを知るために。」

「それにしても、お前とあのクソツたれとは全然似てないよな。双子なのに。」

「俺達は一卵性ではなく二卵性なんです。だから、俺と兄が双子って分からなかったのですよ。」

普通、二卵性でも少しは似ているはずなんだが、俺と兄は周りから見ると、双子に見えないのだ。

「そうか。」

「さて、俺は清水統括理事長に報告しに行くから帰るぞ。」

「じゃあ、俺も自分の病室に戻るよ。」

俺は龍哉おじさんが天壤の病室を出るといっているので、俺も病室に戻る

事にした。

瑞希 side

「ねえ、もしかして二人も隼人のこと好きなの？」

「「なっ、」」

私は隼人が出た後、二人に聞いてみた。

さっきの優子の反応と、美羽が私と隼人を一緒に制裁した事を見て、二人は隼人のことが好きなのかと思ったからだ。

案の定、二人の反応は私の言葉に驚いていた。

まず、優子が私の質問に答えた。

「べ、別に私は隼人君なんて好きじゃないもん！」

（うわあ、こいつツンデレだ。）

多分美羽も私と同じ事を思っただろう。

私と美羽は面白そうだったので、優子で遊ぶことにした。

「じゃあさ、私が手をつないでいたらどう思うの？」

「別に何も思わないわよ！」

(やばい。今、一瞬笑いそうになっちゃいそうだった。落ち着け、落ち着け、)

私は優子の反応を見て笑いそうになってしまった。

だが、私の落ち着いた意味が無かった。

なぜなら隣の美羽が腹を抱えて笑っているから。

「ぷ、ぷはははははははははは。超うけるんですけど。」

「な、何がおかしいのよ!?!」

「だって、ぷ、優子の反応を見てたら、ぷ、超笑えるんだもん。ぷはははは。」

「だから笑うな!?!」

「そうだよ。そこまで笑わなくても良いじゃないの? まあ、私も笑いそうになっただけ。」

「え!?! 瑞希もなの!?!」

だって二次元にしか居ないと思っていたツンデレが目の前に居ること自体が笑えるもん。

「そうよ。まあ、これ以上優子で遊ぶのも可哀想だし、美羽はどうなの?」

「え？何のことですか？」

「何とぼけようとしているのよ。私だって酷い目にあっただから美羽も言いなさい！！！」

「だから何のことですか？」

「マジで忘れてる！？」

私と優子は本当に忘れているとは思わ…

「嘘ですよ。」

「結局嘘かい！！」

何か美羽に遊ばれている気がするんだが…

「で、隼人さんが好きかって言う事ですよ？私は優子と違って素直に言います。私は隼人さんのことが好きですよ。」

「って私が素直じゃないって言うの！？」

「どう見てもそうでしょう！！」

私は優子に言った。

「とりあえず、二人とも私と同じで隼人が好きなのね。」

「だから私は隼人君のことなんか…」

「じゃあ私達は恋敵ですね。」

「そういう事。だからこの中で隼人と恋人になってもお互いに悔いが無いように誓いましょ。」

「確かに、この中なら私も悔いが無いですね。」

「だから私は…」

「いつまで優子は認めないつもりなの？」

「うっ、」

優子はまだそんな事を言っていた。

「それにさっきのもうバレバレなんだからもう認めたちやえば？
それに、優子が何もしないで私と美羽のどちらかが隼人の恋人にな
ったらどうするの？」

「それは嫌！！あっ、」

「でしょう。それに今、隼人が好きだって認めたもんじゃない。」

「そ、そうよ。私も隼人君のことが好よ！」

「そう。やっと認めたね。」

優子はやっと隼人が好きだと認めた。

「じゃあもう一度言うけど、この三人が隼人と恋人になっても恨ま

ない事、そして隼人を諦める事分かった？」

「分かった。」

「私も分かったですよ。」

「じゃあこれからも戦いの為、恋敵として頑張りましょ。」

「あれ？瑞希ってこっちに残るんですか？」

「だってしょうがないじゃない。私も超能力者なんだから残るしかないでしょ。」

まあどの道、隼人がこっちに居るからいつかは来るつもりだったからな。

「それもそうか。あ、」

美羽がいきなり何かを思い出したようだ。

「急にどうしたの？大きな声を出して。」

「ごめん、今日管理人が帰ってくるって電話が来るんですけど！」

「って何で美羽が管理人の電話を知っているの!?!」

「いやー、何回も家の鍵を無くすからって電話をくれたんだ。」

「それって、美羽が六回も鍵を無くすからでしょ。」

六回も無くすつてある意味天才ね…

「じゃあ美羽が帰るなら私も帰るわ。」

「そういえば瑞希はどこに住んでるの？」

「まだホテルだよ。」

「そう。じゃあ二人とも明日ね。」

そういつと私たちは優子の病室から出た。

o u t s i d e

「それで、報告は？」

「大体分かっているんじゃないかな？」

龍哉は信之と話していた。

「それもそうだが、一応聞いておきたいのでね。」

「『スキル』のリーダー、天壤はまだ生きているが、ちょっと使い道があるのでね。」

「それは吸血鬼の事か？」

「やっぱり分かっているじゃないか…」

信之は自分の能力、未来予知で分かっていたのだ。

「お前も大変だな。次は隼人君の兄、良鬼君か。」

「今回はお前の方だったろ。」

「それもそうだな。」

「さて、良鬼のことだが、俺は何か嫌な予感がするんだ。」

龍哉は良鬼のことで嫌な予感がしていた。

「そうか。確かに吸血鬼を人間に戻す実験に居たのも気になる。」

「それも確かに気になっていた。何で良鬼君は吸血鬼と一緒に居るのか。」

「これは未来予知で見えてないから推測なんだが、」

「なんだ？」

「もしかすると、良鬼君は吸血鬼なんじゃないのか？」

「…そうかもしれない。だけど、俺はそれを信じたくない。」

「そうだろうな。お前の甥なんだからな。」

「そうだ。だから信じたくない。そういえば、その吸血鬼が起こるのはいつだ？」

「約一カ月後だ。それまでゆっくり休んどけ。」

「そうか。ところで、瑞希君はどうするんだ？」

龍哉はシリアスな話を変えたかったので信之に瑞希をどうするのか聞いてみた。

「明日、『能力都市』で俺が買った家に住ませるさ。隼人君や雨宮君が居るマンションにな。」

「そうか。瑞希も住ませるのか。」

「そりゃ、隼人君をここに住ませるのに瑞希を住ませないのはお前が怒るだろ。」

「確かにそうだな。じゃあ、俺は家に帰る。」

「一つだけ聞きたい。」

龍哉が帰ろうとしたとき、信之が龍哉を止めた。

「なんだ？」

「隼人君は目が覚めたのかい？」

「ああ、今日、目が覚めたよ。それだけか？」

「それだけだ。」

信之がそついうと龍哉は家に帰った。

「さて、一ヶ月後どうなるか楽しみだな。」

信之は今回の事件の時と同じように微笑んだ。

最終話（後書き）

これで、やっと一章が終わりました。

次は多分登場人物紹介をまた書いてから、第二章を書くと思います。それと、意見、感想をお待ちしています。

プロローグ

竹宮良鬼、俺の兄でいつも俺の前にいた。

双子なのに何もかも俺より才能があり、竹宮家当主になる予定だった。

だが、兄は当主になる二年前にいきなり行方をくらました。

竹宮家全員で探したが見つからなかった。

そして、その二年後、俺は兄の代わりに竹宮家当主になった。

だが、その二年間、俺は竹宮家当主として大変だった。

作法や礼儀などを教えられ、間違えや失敗などをしたら怒られ、何度もやり直されたりして俺は急に忙しくなった。

俺はその時、兄がそんな事をやっていたから逃げ出したんだろうと思っていた。

だが、兄は逃げ出したのはそんな事ではなかった。

『吸血鬼』、人を食い物として生きていく人たちのことだ。

吸血鬼に関してはいろいろな諸説がある。

太陽に当たると火傷のようなに焼けるや十字架に触れても焼けてしまう、大蒜が嫌いなどたくさんのお手がある。

また、吸血鬼に吸われた人間は吸血鬼になってしまふというのもある。

だが、これらは人間が言っているだけで、本当なのは分からないのだ。

そして、その吸血鬼に兄が関わっているのだ。

そして、俺は兄がどうしてそうなったのかを調べる為動き出す。

日常から非日常に変わるとき、物語は始まる。

プロローグ（後書き）

新たな登場人物が少なかったのでこっちで書くことにしました。

竹宮 良鬼（たけみや りょうき）

隼人の双子の兄だが、隼人とは全然似てないらしい。

二年前、竹宮家から家出をし、行方不明になっていた。

また一年前、良鬼は一度『能力都市』に来た。

目的は『スキル』に手伝わってもらい、吸血鬼を人間に戻す実験をする事だったが、本当の目的は超能力者を吸血鬼にする事だった。

そして、何故か未だに吸血鬼と共に行っている。

第一話

隼人 side

『スキル』との戦いから一ヶ月後の朝の六時半、俺はいつもと同じく自分の家のベットから起きた。

また、『スキル』を倒してからちょうど一週間、俺は病院からやっとなと退院した。

さらには、一昨日、やっとギプスで固定されていた左腕が自由になったのだ。

また雨宮は俺よりさらに一週間、病院から退院した。

そして今、ベットから目が覚めたんだが…

「…またかよ。」

俺は起きて早々溜め息がついた。

何故、朝から溜め息がつくかというところ…

「また浅野が俺のベットで寝ているよ…しかも俺の上に乗っかってるし。」

そう。浅野が俺のベットに寝ていたのだ。

ちなみに、浅野にどうして俺のベッドで寝ているか聞いてみると、
『隼人さんのベッドで寝るのが良いんですもん。』って言ってきた。
さらに、俺が入院している時も俺のベッドで寝ていたらしい。

また、俺が自分の家で寝ろって言うても意味が無く、毎日俺のベッドで寝ているのだ。

まったくこれが雨宮や瑞希にばれたら多分俺は生きていないな…

そう。まだ二人には浅野が俺の家で寝ている事はばれていないのだ。
また、瑞希は結局『能力都市』に住む事になり、隣のマンションの
雨宮の隣に住んでいる。

「浅野、起きろ。もう朝だぞ。」

俺は、浅野を起こさないと動けないので服が乱れている浅野を起す事にした。

ちなみに、何度も浅野が寝ているので浅野に対して耐久性が上がっていたりもしていて、理性が保っていられたりする。

「うーん…あと一時間。」

うん。確かにまだ六時半だからそういうことを言うのは分かるんだが、俺の家で寝ているんだから俺のルールには従って欲しい。それが出来ないなら俺の家で寝るんじゃないよ。

「あのな、ここは俺の家なんだから俺のルールに従ってもらわない

と困るんだが。」

「うー、隼人の意地悪。」

浅野はそう言いながら起きた。

そういえば最近、浅野が俺を呼ぶとき、『さん』を付けなくなったよな…

そんな事を言えば雨宮もそうだな。雨宮も『君』を付けなくなったしな…何なんだろう？逆に気になるな…

ってそんな事考えている場合ではなかったな。

「とりあえず、俺の家なんだから俺のルールに従ってもらうなら、寝ても良いことにするからさ。」

「ほんとですか!?!」

何故、そこで元気になるんだ…

「だって、今まで寝る事も家に帰れって言ってましたので。」

「地の文を読むな!?!」

まあ、とりあえず朝食を作るか。

「じゃあ、俺は朝食を作るからいつも通り待っててくれ。」

「はい。」

俺は朝食を作り、台所に向かった。

その時、インターホンが鳴った。

俺は台所からいったん離れ、玄関の前に移動した。

誰かを確認すると、瑞希だった。

まずい！浅野が家の中に居たら何をされるか…

俺が戸惑っている間に、瑞希は鍵を開けた。何故、俺の家の鍵を持っているんだ？

そして、瑞希は家の中に入ってきた。

「あら、起きてるじゃない。なら早く出なさいよね。」

「う、うん。」

普通この時点で終わっただろうと思うだろう。だが、まだ終わっていない！浅野が瑞希に見つかってもここに居る理由を浅野に話させなければ…

「こんな朝早く誰が来たのって瑞希！？こんな朝早くから何で隼人の家に来たの？」

「美羽！？何で隼人の家に居るの！？」

「だって毎日ここで、瑞希、浅野がここに居るのはちょっと手伝っ

て欲しい事があって……」

「隼人、私は美羽に聞いてるの。隼人には聞いていないの。」

「別に俺が言っても良いじゃないか。」

「隼人はどうせ言い訳をするに決まってるじゃない。」

くっ、読まれていたか。だが、浅野に頼んで俺が手伝って欲しいって言わせれば……

「言っとくけど、美羽に話しかけたら左腕をまた骨折させるわよ。さらにジェスチャーをしても同じ事だからね。」

先読みされた!! さらに最後の策まで止められた!!

「で、何で美羽が居るわけ？」

「それは毎日ここで隼人の家で寝ているからだよ。」

「……………」

「って誰にメールをしているの!？」

いきなり瑞希がメールを打ち始めた。

「誰って優子だけど？」

「何故!？」

「別に良いでしょ。お、返ってきたわね。なになに、今すぐこっちに来るって。」

「……………」

完全に終わった…俺の人生…

そしてその後、雨宮も来て、瑞希と雨宮に制裁を喰らった。

第一話（後書き）

すみません。前よりちょっとペースが落ちるかも知れませんが、最低でも一日一回は書くつもりです。

第二話

「うーん…」

俺は目が覚めた。

「って何じゃこりゃ!?!?」

目が覚めると驚いた。

「何故、俺は鎖でベッドに縛られてるの!?!?」

俺はベッドの上で両手、両足が縛られていた。

「「「やっと目覚めたわね…」」」

すると、二人の声が聴こえた。

「雨宮と瑞希!これは一体…」

「あら、もしかして忘れちゃったの?」

えっと、何があっただっけ?

確か、朝起きて浅野がベッドに寝ていて、その後瑞希が俺の家に来て浅野が俺の家で寝ていた事がばれ、そして瑞希が雨宮にメールしてその後雨宮が来て、雨宮と瑞希に制裁され気絶したんだっけ?

「思い出した?」

「…思い出したくもありませんでした。」

「でしょうね。ところで隼人、何かに気づかない？」

「何かって何にだ？」

俺は瑞希が言ったことが分からなかった。

「だから、隼人が着ている服装よ。」

「確かに、股の所がスースして…って何じゃこりゃ!？」

俺は俺が着ている服装に驚いた。

「な、何で俺がメイド服を着ているんですか!？」

そう。俺はメイド服を着ていたのだ。

しかも、何故か胸パットまで付けられてあって、少し膨らみがあった。

「ちなみにカツラも着いてるわよ。」

「そんな事はどうでも良いから何で俺が女装をしなきゃいけないんだ!?!」

「美羽と一緒に寝た罰よ。」

「それだけで俺は女装をしているのかよ!?!それと浅野はどこにい

るんだ!!」

「美羽なら、そこで朝食を食ってるけど？」

優子が指を刺した方向を見て見ると、確かに浅野は朝食を食っていた。

そして食べ終わるとこっちに来た。

「ごめんね。私一人じゃ隼人を救えなかった。」

「別に良いよ。救えなかったのなら。」

「あー、美羽！抜け駆けはずるいわよ!!」

「そつよ！一人で抜け駆けはせこいよ!!」

雨宮と瑞希は浅野と揉め始めた。

「あのー、これを外して欲しいんだけど…」

俺は体を揺さぶりながらそう言った。

だが、俺の行動は逆効果だった。

「……か、かわいい!!」「……」

三人はいきなり俺に飛びついてきやがった。

「きゃっ!?!」「……」

そんな俺は俺らしくない声を出していた。

誰か助けてくれー！！

「もう、お持ち帰りたい！」すりすり

「私も持ち帰りたい！」すりすり

「私もお持ち帰りたいですね。」すりすり

三人は自分の顔を俺の体で擦りし始めやがった。

「癒される〜」すりすり

「はあ、気持ち良いな。」すりすり

「もう、ずっとこのままでいたいですね。」すりすり

もう、勘弁してー！！俺のライフは0だから！！

俺はもう死にたかった。

「あ、そうだ。」

瑞希がそういうと三人は俺を擦るのをやめた。

「今日、一日中そのカッ」だからね」

「え、まじで？」

「もちろん それともう一つ、今日一日中、女らしい声を出してね」

「そ、そんなー」

「それと隼人…いや、早美ちゃんには拒否権は無いから。」

「うう、分かったよお。」

俺は諦め瑞希の言っとおりにする事にした。

「じゃあ、今すぐ言ってみて。」

「え！？今すぐなの？」

「早く、自己紹介で良いから。」

「うう、わ、私の名前は竹宮早美です。」

今、俺の中で何かが壊れた気がする…

「「「はう」」」

三人はなんか癒されている感じに見えた。

そして、三人はまたもや顔で俺の体を擦り始めた。

ちなみに、この拷問は午前九時まで続いた。

第二話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第三話（前書き）

本当にペースが落ちてしまった…

第三話

「ねえ、ねえ、これなんか早美ちゃんに合わない？」

「確かに合いそうですね。じゃあこれも試着室に持って行ってください。」

「分かった。じゃあ持って行くから。」

…試着室の外からそんな声が聴こえた。

俺は午前九時まで拘束されていたが、お腹が鳴ったことにより開放された。

その後俺は朝食を食い、その後メイド服のまま三人と一緒に俺こと早美ちゃんの服を買いにショッピングしに来たのだ。

ちなみに、俺はショッピングに着くまでメイド服を着ていたため、周りから注目の的だった。恥ずかしいたらありゃしない。

そして今、俺はショッピングの試着室に居て、服を試着しているのだ。

「早美ちゃん、次はこれを着てみて。」

雨宮は試着室のカーテンを開けて、服を俺に渡してきた。

「わかったよ優子。」

俺は雨宮から服を貰うと、着てみることにした。

ちなみに、俺が女装している間、雨宮と浅野のことを下の名前で呼ぶようにと言われたので下の名前で呼んでいる。

そして、着替え終わると三人が待っていた。

「どう、かな？」

俺はいつもの声とは違う女声で言った。

「結構似合ってるよ。」

「そう？」

「じゃあそれは買うとして次はこれを着てみて。」

「分かった。じゃあ着てみるよ。」

俺はカーテンを閉め、服を着換えた。

「はあ、疲れるわね。」

俺は服を着換えながらそう言った。

「まったく、私の大きさの服を買ってその服をいつ着るんだか……」

俺は何故服を買うのか気になっていた。

そして、嫌な予感がした。

「まさか、私にまた女装させるつもりかしら…」

俺は自分でそういうと、寒気がした。

「とりあえず着替えよう。」

俺は話を逸らすために着換える事にした。

「結構買ったわね。」

あれから、数時間経ち正午になった。

ちなみに今の服装はまたもメイド服を着るのはさすがに嫌だったの
で、今は普通の服を着ている。

「ねえ瑞希、聞きたいことがあるんだけど…」

「何？」

俺は一応さつき思っただことを話すことにした。

「ひょっとしてその服って私のだよね？」

俺は瑞希が持っている袋を指して言った。

「そりゃそうでしょ。何当たり前の事言ってるの？」

「それってまた私が女装するって事？」

「そうだけど。だって早美ちゃんかわいいんだもん。」

俺は寒気がした。俺の人権はどうなってるんだよ…

「とりあえず時間も時間だし、お昼にしましょ。」

雨宮がそういっているので俺達は昼食を取るために移動した。

「ねえ、いつまで私はこの格好をしていれば良いの？」

俺は昼食を取りながら、聞いてみた。

「いつって、今日一日中って言ったじゃない。」

「やっぱりそうなの…」

俺は雨宮からそれを聞くと、落ち込んだ。

「だって、早美ちゃんが美羽と寝るからいけないんですよ。」

「そうよ。美羽と寝なければこんな事しなくて済んだんだよ。」

「そうだけどね…」

そうだけど、これ以上俺が女装していたら俺の中で何か壊れそうだったのだ。

「じゃあさ、女装が嫌ならばこうしない？」

「何？」

俺は首をかしげながら瑞希の方を向いた。

「今日、私と優子と美羽で隼人の家で泊めるといっのは？」

「何故そうなるの！？」

「別に良いでしょ。それに女装よりマシなんじゃないの？」

「確かにそうだけど…まあいつかそれで良いなら。」

俺は今日、雨宮、浅野、瑞希を泊めることにした。

「でも、家に帰るまでそのままね。」

「どうしてなの？」

「だって今、女性用の服が無いじゃないの。」

「あ…」

そうだった！…って言う事は結局、俺の家に帰るまでずっとこのままなの！？

「うーん、何かこのまま終わらせるのはやっぱりつまらないですね。やっぱり寝るまでじゃ駄目ですか？」

今まで黙っていた浅野が俺にそう言ってきた。

「それじゃあ、三人泊める意味は何なのよ？」

「確かにそうですね、何かこのまま終わらせるのが嫌なんですもん。だから、おねがい。」

う、上目づかいで言ってきたやがった。

「私達からも、おねがい。」

さらに雨宮と瑞希まで上目づかいで言ってきた。

「あーもう分かったわよ。今日、私達が寝る時まで女装したままにいるから！」

「「「ほんと!?!」」」

「もう、どつども良いよ……」

俺は三人の上目づかい攻撃で折れた。

第三話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第四話

あの後、昼食を食べ終わると移動しゲームセンターに向かっていた。

「何故ゲームセンターなの？」

「別に良いでしょ。楽しんだし。」

いや、あんまり女の子達でゲームセンターに行かないでしょ。

俺はそう思いながらとりあえず三人ついて行く事にした。

「で、後どのくらいで着くの？」

「もうすぐよ。ほら、もう見えてきた。」

雨宮が指を指した方を見ると、確かにゲームセンターがあった。

「じゃあ早く入りましょ。」

ゲームセンターに着くと瑞希がそういうのでゲームセンターに入った。

絶対に何かありそうだな…

ゲームセンターに入ると、中は結構広かった。

「結構広いんだね。」

「じゃあ、まず最初は予定通りあれから行きますよ。」

俺は三人に引っ張られながら着いていった。

「ひょっとして…これが目的なの？」

三人に着いていくと、俺達はプリクラの前にいた。

「だって、ひょっとしたら早美ちゃんが外に出るのが今日で最後かもしれないから。」

「やっぱり…」

俺は今日もうどうでも良いやと思った。

「早くみんな撮りましょうよ。」

浅野がそういうので俺達はプリクラの中に入った。

「じゃあ、早美ちゃんが真ん中ね。」

中に入ろうとしたとき、雨宮がそう言ってきた。

「何で私が真ん中なの？」

「だって、そうしないと私達が撮めちゃうからですよ。」

「…まあ、良いけど…」

俺は何故揉めるのか分からなかったがとりあえず俺が真ん中に立つことになった。

「じゃあ、私は早美ちゃんの右ね。」

「じゃあ私は左で。」

「ちょっと待ってよー！！早美ちゃんの前だと早美ちゃんの腕とかを掴めないじゃないですかー！！」

「美羽は良いじゃない！！いつも隼人君と一緒に寝ているんだから！！！」

「そうよ！！美羽ばかり抜け駆けしているから良いでしょ！！！」

三人は揉め始めた。

…結局揉めてるじゃねーかよ！！でも、何で俺が出てくるんだ？わけ分からん。

数分後、三人が揉めた結果、どうなったかを聞くと、俺の右が雨宮、左が瑞希、前が浅野ということになり、結果的にどこも変わってないままだった。

「結局、美羽が折れたのね。って美羽は？」

俺は浅野を探しに行き、見つけると、浅野はしゃがんで小さな声でぶつぶつ言っていた。

「美羽、何言っているんだ？」

「私が隼人と一緒に寝れるからってブツブツ。」

「おい美羽、聞こえてる？」

「あ、すみません。自分の世界に入っていました。」

「そう。とりあえずみんなが居る所に戻るよ。」

俺が浅野にそういうと、浅野は俺の後ろについて来て雨宮と瑞希が居る所まで戻ることにした。

だが俺が瑞希達が居る方に振り向いた時、一瞬兄らしき人物を見た。

すぐに確認をする為に兄らしき人物が居た方を振り向いたが、その場所にはそれらしき人物は居なかった。

「どうしたの？」

浅野が俺の行動が不審に思えたらしい。

「いや、なんでもないよ。じゃあ行くぞ。」

俺はとりあえず誤魔化すことにした。

でも、あれは本当に兄だったのだろうか…

俺はそんな疑問を抱えながらとりあえず雨宮と瑞希のところに戻った。

第四話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第五話

美羽 side

あれから、早美…隼人が私を探した後からおかしかった。

あの後、みんなで写真を撮ったんですが、その写真も隼人はぎこちなかった。

隼人さんが私を見つけ戻ろうとした時、何かを見たような感じだった。

あの時、隼人は一体何を見たのでしょうか？

私はそんな事を考えてたら隼人が「ちょっと、そこで休んでるから三人で回ってて。」と言った。

「早美ちゃん、いきなりどうしたの？」

優子が隼人に近寄り、そういった。

「別になんでも無いよ。ただ、ちょっと気分が悪いだけだから。」

隼人はさらに続け「だから、三人で回ってきてくれて良いから。」
ところどころときでも女声で言ってきた。

私達は隼人がそういうので、仕方なく三人で回ることにした。

でも私は、多分隼人は何かを誤魔化していると思った。

絶対にあの時に何かを見たんだ！！

私はそうたどり着いた時に隼人の所に戻る為ため、優子と瑞希から離れようとした。

「ごめん、私お手洗いに行くから二人で回ってて。」

「美羽も？まあ、良いけど。」

「じゃあ後でね。」

という私は二人から離れ、隼人の所に向かった。

「隼人、ちょっと話があるんですけど。」

「美羽か。って私の名前に戻ってるよ。」

あ、急いでたもんで普通に言ってしまった。

「それで、話って何？」

「早美ちゃんが私を見つけたて私と連れて戻ろうとした時、何かを見てましたよね？」

「べ、別に誰も見てにゃいわよ。」

「明らかに動揺してますね。しかも、私は何かを見ていたって言ったのに、誰って言いましたね。」

「っ!？」

隼人は自分が墓穴を掘ったことに気づいたようだ。

「って言う事は、誰か知り合いが居たという事ですね。誰を見つけたんですか？」

「…兄を見たんだ。」

「へ？今、兄を見たって言っただんですか？」

「そうだ。正確には兄らしき人物を見たって言ったほうが良いな。」
隼人はいつもの声に戻して私に言った。

「そうなんですか。でも、本当に隼人のお兄さんと決まったわけじゃないんですね。」

「でも、何もかも似ていたんだ。二年前、行方が分からなくなる前日の良鬼の姿と。」

「え…それっておかしくありませんか？」

それは確かにおかしい。普通、二年も経てば結構変わるはずなのに…

「ああ、だから俺は嫌な予感がしたんだ。あれが本当に良鬼なら、」

「もしかして、隼人のお兄さんは…」

「…吸血鬼になってしまったのかもしれない。」

やはり、そういう結論にでると思った。吸血鬼になったら年をとらなくなるんだから…

「でも、吸血鬼って太陽が当たっている場合は動けないはずではないですか？」

「それは俺も思っていた。だから今日の夜、俺はこの辺を回ってみる事にした。」

「でも、そんな簡単に向こうが誘いに引かかりますか？」

「あいつは確かに俺を見ていた。だから、あいつは俺の誘いに引かかるとは思う。」

「じゃあ、私も一緒に行つて良いですか？」

「そのつもりでいたさ。もしかするとあいつは、俺を見ていたのではなく、美羽を見ていたかもしれないからな。」

「そうだったのですか…って今、美羽って言いましたか？」

今、さげなく言ったから一瞬、下の名前で言われたのに気づかないところだった。

「ん？確かにそうだったかも。美羽と優子は下の名前で言うように言われてたからかもな。」

「そうですか。」

私は嬉しかった。隼人が下の名前で言ってくれるなんて…

「ん？美羽、どうしたの？」

「は、何でもない、何でもないから!!」

危ない危ない。今私、ボーっとしていた。

「そう。じゃあ今日、優子と瑞希を寝たら家を出てこの辺を搜索してみるか。」

「そうね。だったら私は今日、自分の家に居るよ。」

「急にどうして？いつも俺の家で寝ているのに…」

隼人は首をかしげた。

「確かにそうですが、家で準備したいので。」

「そうか。さて、時間も時間だし、話はそのくらいにして、そろそろ優子と瑞希の所に戻りましょっか？」

隼人は女声に戻り、時計を見ると、もう午後の四時を過ぎていた。

「そうですね。じゃあ戻りましょ。」

私と隼人は優子と瑞希と合流するために移動した。

第五話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第六話（前書き）

微工口っぽいかも

第六話

隼人 side

俺と美羽は話をした後、優子と瑞希に合流した。

それからみんなで二時間くらいゲームセンターで遊んでいた。

その後、スーパーに寄ってからみんなで俺の家に帰った。

だが、みんなが俺の家に帰った瞬間、俺は後ろから床に倒された。

「きゃっ!?!」

「やっぱりかわいい」

優子が俺を抱きしめてきたのだ。ってかキャラ変わってね!?

「あー!! 優子だけ早美ちゃんに抱きしめてずるい!! 早く離れなさい!!」

瑞希は俺を抱きしめてる優子を放そうとするが、全然離れなかった。っていうか離れられないのだ。

なぜなら...

「優子、能力使ってるわよね?何か背中が冷たいんだけど...」

「あ、分かった？だって早美ちゃんはずっとくっつきたいんだもん。」
「すりすり」

優子は朝同様、顔で俺の体を擦りはじめた。

「二人とも、助けてくれ。私、変になりそう。」

俺はさっきから優子が擦りつけてると、優子の胸が背中で動いて理性が危なかったし、自分が壊れそうだったのだ。

だから俺は瑞希と美羽に助けを求めた。

「っと言われても…私の能力はサイコキネシスだけど、優子を離そうとしても氷でくっついていてから早美ちゃんまで一緒に動いちゃうし…」

「私の能力だって速さを変えるだけですから…」

「ムリ。」

「そんな」

二人ではもりやがった…

「じゃあ、次は首を舐めちゃえ」

優子は俺の背中で擦るのをやめ、俺の首を舐め始めた。

「ひゃっ、た、たすけて」

俺は涙目で瑞希と美羽に助けを求めた。

「ってか、いつもの優子じゃないよね…」

「そうですね。今の優子は前に酒で酔った状態ですし…」

瑞希と美羽は俺が助けを求めているのに、何故優子がこうなったのか考えていた。

「ちよつと待って、優子って酒に弱い…!？」

瑞希が突然、反応が変わった。

「すつごく弱いですよ。一口飲んだだけで酔っちゃいますので。」

「じゃあ、スーパーであれを飲んだのが原因かもしれない…」

「え!?!優子に酒を飲んだんですか!?!」

「うん。スーパーでワインの試食があっただけど、その時優子も一緒に居たから一緒に試食しちゃったのよ。」

なるほど、だから優子はこんな状態なのか…

「って何で瑞希はワインを飲んだのですか!?!まだ高校生なのに…」

俺がそんなこと思っていたら、美羽が瑞希にそんな事を聞いていた。

「私、親のせいでワインに目が無くてね。つい試食しちゃったのよ。」

「

そういえば、瑞希は高校生なのにワインが好きだったな。しかも家でたくさんワインがあるし。ってか店員さん、高校生にワインを飲ませるなよ…

「それにしても、良く家に帰るまで酔わなかったですね。」

「そういえばそうだね。って、とりあえず優子を何とかしてくれよー！ー！」

「「あ、そうだった。」」

忘れてたのかよ…

「でも、どうやって優子動かすの？優子は能力で早美ちゃんの背中に氷でくっついてるし…」

「早くして！！私、本当に危ない状態なん、ひゃあ！？」

優子は今度、俺の耳を舐めはじめた。俺、耳は弱いんだよ…

「そ、そんな声今出さないでよ！！私まで早美ちゃんを襲っちゃうからー！！」

「そうだよ！！私たちまでそうになったら誰が助けるのよ！！」

瑞希と美羽は顔を赤くしながら言っていた。

「そんなこと言われても…あッ！」

またもや変な声が出てしまった。

「もう、抑えられないイ!!」

今度は瑞希までもが俺に抱きついてきてしまった。

瑞希が俺を抱きしめた時、優子は俺と優子がくっついていたら氷を溶かし、俺の体をあおむけにしてまた耳を舐めはじめた。

また、瑞希は優子が舐めている反対の耳を舐めはじめた。

「美羽く助けて」

俺は最後のかなめ、美羽に助けを求めた。

「早美ちゃん、ごめんなさい!!私ずっとここに居たら私もおかしくなっちゃうので帰ります!!」

「美羽待って」

美羽は俺を置いて、家に帰ってしまった。

「誰か助けて」

俺は誰も助けが来ないのでそんな事を言っていた。

また、この拷問は優子が寝るまで続いた。

第六話（後書き）

意見、感想を待ちしています。

第七話

あれから、優子が酔って寝たことにより（っ）っていうか、少量なのに寝ちゃうのかよ…（）、瑞希も俺を襲うのをやめた。

「ねえ、ごめんてっば。だから怒らないでよ!!」

二人が襲うのをやめると、すぐに俺の寝室にこもり鍵を閉めたのだ。

「私が耳が弱いつて知ってたくせに…」

「だからごめんって言ってるじゃん。それに、早美ちゃんだってレポートで逃げれたと思うけど。」

「出来たらやつてるわよ。あんな精神不安定な状態で出来ると思うの?」

「あ、それもそうか…」

「そうかじゃないわよ。もう。とりあえず一人にしてくれるかな?」

「…分かったよ。じゃあ、夕食は私が作るから。」

という瑞希の声が聞こえなくなった。

「さて、今日の夜の準備をしますか。」

実はというと、俺はあまり怒ってなかったりする。だから女声で言ってる余裕あったのだ。

また、本当の理由は今日の夜の準備をする為に一人になりたかったのだ。

だから、一人になる口実にちょうど良かったのだ。

「七刀とナイフは持っていくとして、後は…」

俺は一応、昔、瑞希に貰った十字架のネックレスを持っていくことにした。

「にしても瑞希のやつなんでこんなものをくれたんだろう？」

あの時は確か清水家で行った海外旅行の帰りにお土産で貰ったんだけど…

「何で十字架にしたんだろうか？まあ、別に宗教的なことでもないだろうと思うけど…」

俺はそんな疑問を思いながらとりあえず他に必要なものを探した。

「とりあえずこんなもんか。」

俺は荷物の準備し終わるともう一つ問題があった。

「さて、この荷物が二人にはれない様にするにはどうするか？」

そう。この荷物をどこに隠すか考えていたのだ。

「うん…どこが良いかな…」

俺が考えてると、ドアをノックする音がした。

（まずい！！って鍵閉まつてるんだった。）

だが、『カチャ』と鍵が開く音がした。

（げ、そういえば瑞希はサイキネシスは鍵も開けられるのだった！荷物を何とかしないと…。とりあえずここに入れちゃえ！）

俺は急いでクローゼットの中に入った。

そして、瑞希が寝室に入ってきた。

「もう、落ち着いた？」

「お、落ち着いたわよ。それで、何のようなの？」

「夕食が出来たから呼んだのよ。優子も目が覚めたし。」

「ってもうそんな時間なのね。じゃあ食べましょうか。」

「その前に、美羽呼んできてくれない？あれから戻ってこないから。」

「分かった。じゃあ呼んでくるよ。」

俺は夕食が出来たということで美羽を呼びに行った。

美羽の家の前に着くと、すぐにインターホンを押した。

「はい、って早美ちゃんですか。何のようですか？」

「夕食が出来たから呼びに来たんだ。それと、準備は出来たのか？」

「もう出来てますよ。ほら。」

そういうと美羽は服から拳銃が二つと弾五十個くらいを俺に見せた。

「って相手は一人なんだぞ。そんなに弾いるのか？」

「ひょっとすると敵は一人じゃないかもしれないので一応。」

そこまで考えたのかよ…

「とりあえず、それは一回着替えてくれる？一応、拳銃を持っていったら優子と瑞希が何かあると思うから。」

「それは分かっていますよ。だからちょっと待っていてください。」

というと、美羽は一回家に戻り、着替えて戻ってきた。

そして、俺達は俺の家に戻った。

第七話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第八話

隼人 side

あれから、みんなで夕食を食べた。

「じゃあ、私は夕食を食べたから家に戻ります。」

「え！？美羽、家で寝るの？いつもはここで寝ているのに…」

優子は何故美羽が俺の家で寝ないのかと思っていた。そりゃそうだろう。だって美羽はいつも俺の家で寝ているのだから。

「ちょっと、家でしたいことがあるもんですから。」

「そうなの。じゃあまた明日ね。」

美羽は瑞希からそう言われた後、家に帰った。

「さて、じゃあ二人とも、先に風呂入ってて。」

「えー、一緒じゃないの？」

「ちょっとまって、一緒に入るのははまずいでしょ！ー！」

「何そんなに怒鳴ってるの？嘘に決まってるでしょ。そんなのも分からなかったの？」

「うっ、と、とりあえず先に風呂に入れ。」

俺がそういうと優子と瑞希はバスルームに向かった。

「さてと、荷物を他のところに隠さないとな。クローゼットじゃ、見つかるかもしれないからな。」

俺は寝室に行き、先ほどクローゼットに入れた荷物を隠すところを探すことにした。

「あ、美羽の家に置いて貰うてがあった。」

俺はその案がでると二人に家から出たことがばれないように静かに玄関のドアを開けた。

そして、美羽の家の前に来て、インターホンを押した。

「はい、ってまた早美ちゃんですか。今度は何ですか？」

「いや、荷物をここに置きに来たんだ。二人に見つかる困るからな。」

「そうですか。別に置いて良いですけど…」

「ん？どうした？」

美羽は何かを気にしていた。

「何で私と二人だけの場合の時だけ普通の声に戻るのですか？」

あ、その事か。

「いや、普通の方が話しやすいと思ったからさ。」

「駄目ですよ。今日は女装している間は女声でないと。」

「やっぱり、駄目かな？」

「そんな女声で上目使いをしても駄目ですよ!!」

「チツ、」

「今、舌打ちしましたよね？」

「分かったわよ。後少しだけだから。じゃあ、私は戻るね。二人にばれないようにこっちに來たから早く戻らないといけないし。」

「いろいろツツコミたいんですがしょうがないですね。じゃあ、また後で。」

俺は美羽に荷物を預けると俺の家に戻った。

家に戻って数分後、優子と瑞希が風呂からあがり、俺が交代で風呂に入った。

「はあ、今日は疲れたな。いきなり女装されるし、何故か俺の服とか言って女性の服を買っちゃったし……」

風呂に入ると俺はすぐに愚痴を言った。

「それと、あれは本当に良鬼だったのかな…」

ゲームセンターで見た人物のことを考え始めた。

「いや、あれは絶対に良鬼だ。あの髪の毛や顔など何もかも二年前の良鬼に似ていた。あんなに似た人物なんているわけが無い。」

俺はやはりそういう結論に着いた。なぜなら、あれはどう見ても二年前の良鬼に似すぎているからだ。

「そうだとしたら、どうするか。もしかしたら戦うかもしれない。そんな事になったら、俺は戦えるのか？」

俺は考えていると、誰かがこちらに近づいて来る足音がした。

「隼人、服忘れてたって瑞希が言ったから持ってきたわよ。」

近づいてきていたのは優子だった。

「あ、ごめん。じゃあそこに置いておいてくれない？」

「じゃあ、女性用の寝巻きを置いておくわよ。」

「ちょっと待て、風呂上がったら俺女装するのは終わりだからな。」

「分かってるわよ。嘘に決まってるじゃない。じゃあ置いておくね。」

優子は俺の寝巻きを置いたらリビングに戻ったようだ。

「さて、俺も少ししたらあがりますか。」

俺は優子が寝巻きを置いてから数分後、風呂から出た。

優子 side

「優子、隼人に寝巻き持って行ってくれない？私、まだ髪乾かしてるから。」

「別に良いけど、寝巻きはどこにあるの？」

「さっき、選択したもののの中にあつたから多分その中にあると思う。」

「分かった。」

私は洗濯物の中から隼人の寝巻きと下着を取り出し、バスルームに向かった。

バスルームに向かうと隼人が何か独り言を言っていた。

「……………もしかしたら戦うかもしれない。そんな事になったら、俺は戦えるのか？」

(隼人は何を言ってるの？しかも戦うって何のこと？)

私は隼人が何を言っているのか分からなかったが、とりあえず寝巻きを持ってきたことを言うことにした。

「隼人、服忘れてたって瑞希が言ったから持ってきたわよ。」

「あ、ごめん。じゃあそこに置いていてくれない？」

隼人は何も言っていなかったように普通に話してきた。

「じゃあ、女性用の寝巻きを置いておくわよ。」

「ちょっと待て、風呂上がったら俺女装するのは終わりだからな。」

「分かってるわよ。嘘に決まってるじゃない。じゃあ置いておくね。」

私は寝巻きと下着を置き、優子が居るリビングに戻ることにした。

（にしても、隼人のさっきの独り言、あれは何だったのでしょうか？）

私はやはり気になっていた。しかも、真剣に悩んでいた感じだったし。

（もしかして隼人、私達に何か隠してる？）

私はすぐにそう思った。隼人は何かを隠していると。

（明日、瑞希にも隼人が言った独り言を話そう。多分、瑞希も知らないはずだから。）

私はそう決断した。明日、瑞希に言おうよ。

だが、明日ではもう遅かった…

隼人 side

俺が風呂からあがり、寝巻きに着換えたらリビングに向かった。

「お、やっとあがって来たか。じゃあ、少し経ったら寝よっか。」

リビングに着くと、すぐに瑞希が俺にそう言ってきた。

「そうだな。じゃあ、さっさと寝るか。（二人が早く寝てくれると早く動けるしな。）」

俺は内心そう思いながら。三人で寝る事にした。

だが、さっき話していた優子は普通だったのに何か悩んでる感じだった。もしかして気づかれたか？

そして、俺達は俺の寝室に着いた。

「って、二人とも俺と一緒に寝るの!？」

「だって、隼人と寝たいんだもん。それに、いつも美羽と寝ているから別に良いでしょ。」

「でも、さすがに三人はベットに入らないぞ。」

「大丈夫だよ。隼人に抱きつくから。」

「それは…いろんな意味で困るんだが…」

特に二人にはれないように家を出るときに困るんだけど…。

「まあ、とりあえず何とかなるよ。じゃあ寝ましょつか。」

という事で、俺は一応三人で寝ることにした。

第八話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第九話

ベッドに横になってから数分後、優子と瑞希がやっと寝た。

(さて、二人が起きないように出たいんだが…)

優子と瑞希が起きないように動こうと思ったんだが、一つ問題が発生した。

(これは、どうやって出れば良いんだ?)

実はというと、俺は優子と瑞希の間で寝ているんだが、その二人が俺を抱きしめているのだ。

(って、テレポートで出れるじゃないか!)

俺はその発想が出ると、すぐにテレポートした。

(起きてないよな?)

俺は一応、二人が起きてないか確認した。

(起きてないな。じゃあ美羽の家に行くか。)

そして、起きてないと確認すると、俺は七刀を全て持って美羽の家に向かった。

「隼人、やっと来ましたね。予定よりちょっと遅いですけど。」

今日三度目の美羽の家のインターホンを押すと、美羽が出てきた。

「ああ、ちょっと二人俺を抱きしめていたもんでな。ちょっと手間が掛かっていた。」

「そうですか。とりあえず家の中に入ってください。」

美羽がそういうので俺は家の中に入った。

「それで、服は着替えるのですか？隼人、今寝巻きですし。」

「ああ、着替えるさ。多分こうなるだろうとさっき美羽の家に置いてったバックの中に入れていたのさ。」

というと、俺はバックから洋服を取り出した。

「そこまで考えていたのですか。じゃあ、ちょっと待っててください。私、一度この部屋から出ますので。」

「ああ、悪いな。」

美羽は俺が着替えるのですぐに部屋を出た。

そして、着替え終わると美羽を呼んだ。

「おい、着換え終わったぞ。」

「じゃあ、入りますね。」

美羽は俺が着替え終わったのを知ると、部屋に入ってきた。

「そういえばさっき着ていた寝巻きはどうしたのですか？」

「ああ、バックの中に入れてぞ。それと、バックは置いていいか？」

「別に良いですけど、その中に何を入れてたのですか？」

美羽はバックに指を指しながら言ってきた。

「ああ、この洋服とナイフしか入れてないぞ。そんなに必要なものも無かったし。」

「そうなのですか。とりあえず、私も準備も出来ましたし行きましようか？」

「そうだな。じゃあ行きますか。」

俺はバックからナイフを取り出て洋服のポケットに仕舞い、美羽と一緒に美羽の家を後にした。

第十話

俺と美羽は美羽の家を後にすると、先ほど俺、優子、瑞希、美羽で来ていたゲームセンターに向かっていた。

「にしても、どうしてまたゲームセンターに向かっているのですか？」

美羽はゲームセンターに向かっているのか疑問に思ったようだ。

「多分、あそこで良鬼らしき人物を見つけたのだからそこに居るんじゃないのかって。」

「それだけじゃ信用できませんね。」

「仕方ないだろ。あいつの居場所が分からないのだから。」

「それもそうですね。なら見た場所に行った方が良くと言っ訳ですか。」

「とりあえず行くぞ。」

俺達はそんな話をしながらゲームセンターに向かっていた。

「さて、やっぱり閉まっているか…」

「そりゃそうですね。時間も午後11時なんですから。」

俺達はゲームセンターの前に着くと、やはり閉まっていた。

「で、どうやって探すんですか？」

「とりあえず裏も回ってみるか。」

俺がそういうと俺達は裏も確認する事にした。

「やはり、何も無いか。」

俺達はゲームセンターの裏側を探しても見つからなかった。

「同じところにまた出てくるという時点で間違っているんじゃないですか？」

「かも知れないな。裏口も閉まってるし。」

「仕方ありませんね。とりあえず今日はこのあたりを探して居なかつたら明日にしますか。」

「そうだな。今日はそれくらいにしますか。」

俺達はゲームセンターからその周辺を探すことにした。

「そういえば、隼人の兄はやはり似ているんですか？」

俺達を探していると、美羽が突然聞いてきた。

「双子だけど、全然似てないんだよ。一卵性ではなく二卵性だからな。」

「そうなのですか。でも二卵性だとしても、普通は少し似ている部分は無いんですか？」

「確かにそうなんだが、俺達の場合は周りから見れば双子だと気づかないし、性格も全然違う。さらに兄弟だと思わない人だって居るくらいだから。」

現に家族や龍哉おじさんだって一度も俺達の事を間違えた事も無かったしな。

「そこまで違うって、ある意味凄いですね。って言う事は能力も違うのですか？」

「良鬼の能力は知らないんだ。俺は良鬼が行方不明になってから半月ぐらいに自分に能力があるって知ったからな。多分良鬼も俺と同じぐらいに能力があるって知ったと思うよ。」

「そうですね。」

俺達はそう話すと静かになった。

「なんか、夜って本当に静かですね。」

さっき話してから少し経つと、美羽がまた話しかけてきた。

「確かに静かだな。車も全然見ないし。」

「そもそも、『能力都市』には大人で車を持っている人が少ないですからね。車を持っている人はほとんど仕事で使うだけですからね。」

「へ〜。じゃあ他の人は仕事に行く時、地下鉄とかを使っているのか？」

「そうなりますね。だから地下鉄やバスの本数が多いですからね。駐車場も少ないことですし。」

「そうなのか？」

意外だな。普通、科学が進んでいるところこそ車が多い気がするけどな。

「だから逆に言えば夜は今みたいに都会と違って静かですよ。音がない分、逆に涼しく感じませんか？」

「確かに、涼しいな。もうちょっと外に居たいぐらいだ。」

「じゃあ、そろそろ回りも調べた事だし、家の近くの公園でも行きましょうか。」

俺達はゲームセンターの周辺を調べた後、公園へと向かった。

「結構公園も気持ち良いな。都会でもありえないぞ。こんな静かなの。」

「私も初めて『能力都市』の夜を歩いた時は驚きましたからね。」

俺達は公園に着くとすぐにベンチに座った。

「じゃあ俺、その自販機で飲み物買って来るから何か飲みたい物はあるか？」

「隼人が買ってきたもので良いですよ。」

「分かった。じゃあ買って来る。」

俺は公園に自販機があったので飲み物を買いに行った。

「さて、何にしようかな？」

俺は自販機にお金を入れ、何にするか決めていた。

「じゃあ、これにしようかな。」

俺はどの飲み物を飲むか決めるとボタンを押そうとした。

そのとき、俺は何かがかつちに向かって来るような感じがした。

「っ!?!?」

俺は何がなんだか分からないままとりあえず避ける事にした。

「痛っ!?!?」

俺は避けたが何か俺の右腕を切られたようだった。

「誰だ!!」

俺は何かに向かってきた感じがあった方を見た。

そこには中学生くらいの男が居た。

そして、その男はゲームセンターで見た男だった。

「お前は誰なんだ？」

「誰なんだは酷くないか？久しぶりに会ったのにな、隼人。俺の顔まで忘れたのか？」

「やはり、良鬼なのか？」

「そつだよ。俺は竹宮良鬼だ。竹宮家の一族でもあり吸血鬼でもある男だ。」

やはり目の前に現れた人物は俺の兄、竹宮良鬼だった。

第十話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十一話

「それで、誰に用なんだ？」

「隼人、お前に用があるんだ。俺はお前に用があつて『能力都市』に来たんだから。」

やっぱり俺に用があつたのか。

「で、用件はなんだ？」

「それはな……」

良鬼は一呼吸して言った。

「お前を俺の仲間にし、吸血鬼にする事だ。」

「俺を吸血鬼にだと？何のためにだ？」

「俺はこの世界の誰よりも負けない組織を作るためだ！！」

「な、なんだつて。」

俺は驚いた。良鬼の目的がまさかそんな事だったなんて……

「だから、お前が必要なんだ。竹宮家当主が手に入れられる力が。」

「それは今、神に一番近い八つの一族を命令できる俺が必要だと？」

「そういつことだ。だから単刀直入に聞く。俺の仲間にならないか？」

良鬼は自分の右手を前に出し、そう言った。

「悪いがお断りだ。そんな為に俺は当主になったんじゃないんだからな。」

「やはり、そういつか。ならば力づくで吸血鬼にしてやる！！」

良鬼がそういつと、俺はものすごい風強で吹っ飛ばされた。

多分、良鬼の能力で吹っ飛ばしたのだろう。

そして、俺は公園にある木にぶつかった。

「がはっ、」

「まだまだ！！」

良鬼は俺に攻撃する余裕をさせずにまた俺を風で吹っ飛ばし、今度は俺が飲み物を買おうとした自販機にぶつけられた。

しかも今度は頭からぶつかった。

「余裕なんかやらねえぞ！！」

今度は俺をビルの二十階くらいの高さまで上げられた。

そして、二十回くらいまで上空に上げられると、今度は下に向かっ

てものすごい強風を受け、地上にもものすごい速さで戻された。

「まずい！…このまま地面に直撃したらさすがに死ぬ！」

俺はマジで死を覚悟した。

「……さ……そ……き……に……」

その時、何か声が聞こえた。

その声を聞いた瞬間、俺が地面に落ちる速さがかなり遅くなった。

そして、ゆっくり地面に落ちた。

「！？一体何が……」

俺は何が起きたのか分からなかったが、すぐに分かった。

「隼人、大丈夫ですか！？」

美羽が俺に近づいてきたのだ。

「もしかして、落ちる速さを変えたの美羽？」

「そうですね。いきなり隼人が上空に居ましたからビックリしましたですよ。」

「そうか。とりあえず助かった。」

俺は本当に死にそうだったので美羽に感謝した。

「それは終わってから言ってくださいよ。まだ、終わったわけじゃないんですから。」

「それもそうだな。そろそろ、良鬼もこっちに来るだろうからな。」

俺がそう言っていると、良鬼が近づいてきた。

「おや？仲間が居たのか。まあ良いや、お前ら二人ともぶっ倒してやるからよ！！」

良鬼は多分風で俺達を飛ばそうとした。

「速さをマイナスに！！」

「な、何！？」

だが、美羽によって風を反対方向に向けた。

そして、良鬼は自分の能力の風で吹っ飛ばされ、木にぶつかった。

「なるほど、おいそこの女、なかなか面白い能力を持ってるじゃないか。」

しかし、良鬼はすぐに立ち上がった。

「私には浅野美羽っていう名前があるんですけど。」

「じゃあ浅野、これならどうだ！！」

良鬼がそついうと風は……吹かなかった。

だが、

「？何もおきませんでっ！？」

突然、美羽に異変が起こったのだ。

「き、きやあああああああ！！？」

美羽の両足首の少し上から血が出ていて、美羽はそのまま足から倒れたのだ。

第十一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十二話（前書き）

短いです。

第十二話

「美羽、どうしたっ！？な、何だこれ…」

俺は隣に居た美羽を見てみたら両足首より少し上辺りのところから何かの刃物で切られた傷口があった。

「おや？ちよつとやりすぎたかな？倒れないくらいのつもりだったんだが。」

「美羽に何をした！！」

「なーに、簡単な事だよ。俺の能力の風で浅野の両足首の少し上に向かって切ったのさ。まあ、骨まで切るつもりは無かったんだが、その状態を見ると骨まで切っちゃったかな。」

「何だつて。」

「まあ、俺も少しやりすぎた。だから浅野の手当てでもしてやれ。俺はお前しか用が無いんだから。逃げたらすぐ分かるからな。」

「…分かった。」

俺は良鬼に美羽の手当てをしても良いと言ったので、美羽を持ち上げ、近くのベンチに美羽を座らせた。

「じゅめん。私が足手まといで。」

俺が自分の服の袖を破り、美羽の両足を結んでいたら、美羽が話し

てきた。

「別に良いさ。美羽のおかげでさっき助かったんだから。」

「でも…」

「それに、これは元々俺の問題だからさ。」

そういうと、美羽の両足を俺の服の袖で結び終えた。

「よし、じゃあ行って来るからな。」

「無事に帰ってきてね。」

「戻って来るよ。っとその前に、」

俺は七刀を全て取り出し美羽に渡した。

「これを持っててくれ。」

「え！？でも、これって隼人の武器なんじゃ…」

「そうなんだが、もし俺が負けて吸血鬼になったら七刀が大変な凶器になる。だから、持っていてくれ。」

「でも、隼人はどう戦うつもりなのですか？」

「まだナイフが一本あるからそれで戦うさ。それに、一応これもあるしな。」

俺はポケットから十字架のペンダントを出した。

「でも、それって効くのですか？」

「分からない。でもやってみる価値はあるからな。」

「そうですか…。」

「それじゃあ行ってくる。」

俺は十字架のペンダントを付け、良鬼のところに戻った。

「さて、準備は出来たぜ。」

「ほう、そうか。ん？七刀はどうした？」

「七刀は全て美羽に渡したんだよ。お前に負けても良いようにな。」

「チッ、やはりそうきたか。でも、さすがは竹宮家当主というべきだな。先のことを考えてる。」

「まあな。さて、そろそろ戦おうぜ。」

「それもそうだな。じゃあ、始めるぞ！！」

俺と良鬼はそういってお互いに構えた。

第十二話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十三話

「まずはこちらから行くぞ!!」

良鬼は先ほどと同様、風で吹き飛ばそうとした。

「同じ攻撃が喰らうと思うか!!」

だが俺は良鬼が能力と使った後すぐに良鬼の後ろにテレポートした。

「死ねええええええ!!」

俺はナイフを取り出し、良鬼に切りつけた。

そして、良鬼は俺の空間切断で真っ二つに切断した。

だが、

「そんなもので俺が殺せると思っているのか。」

「なっ!?!」

俺は驚いた。真っ二つに切断したのに良鬼は片方が蒸発して、そしてもう半分から肉体が再生したのだ。

そこで、俺は思い出した。吸血鬼の再生能力があることを。

「…本当に吸血鬼なんだな。」

「そうさ。しかも、俺の場合は吸血鬼の中でも特別な吸血鬼なんだな。」

「くっ、」

「にしても、さすがに俺も油断してたぜ。俺が吸血鬼じゃなかったら隼人の能力で死んでたな。だが、今の俺には通用しないぜ。」

良鬼は微笑みながらそういった。

「…一つだけ聞いて良いか？」

「あん？別に良いが内容による。」

「どうして、良鬼は吸血鬼になったんだ？せめて、それだけでも知りたい。」

これだけは知りたかった。どうして、良鬼が吸血鬼になったのか。

「ああ、その事か。確かに、お前は知ってても良いかもしれないな。それが俺の行方を暗ました理由だからな。良いだろう、教えてやる。」

良鬼は、一度深呼吸をしてから言い始めた。

「俺が二年前に行方を暗ました前日のときに俺の人生が変わった。」

「行方不明になる前日から？」

「そうだ。俺が行方を暗ます前日までの一ヶ月間、俺達の親は俺達にどちらを竹宮家当主にするか考えていて、俺と早とはほとんど瑞希と一緒に遊んでいたな。」

ああ、確かにその時は俺と良鬼と瑞希で遊んでいたな…

「その昼までは俺は吸血鬼じゃなかった。そう、昼までは。」

「確か、お前が行方不明になる前日…まさか、」

俺はあの時の夜、何があったのか思い出した。

「そう。その日、俺達三人は親に気づかれないよう近くの山に行った。」

「そして、その夕方、俺達は帰ろうとしたとき、大雨が降ってきたんだっけ？」

「そうだ。そして俺達は急いで帰ろうとしたら、俺は足を滑らせてしまい、崖を滑っていった。」

そう。あの時、良鬼は崖側にいて、雨が降っていたせいで足を滑らしたのだ。

「あの時はすぐにお前を呼んだ。だが、お前から返事がなかった。」

「ああ、でも俺は隼人の声が聞こえてた。」

「え、でも良鬼は気絶していたじゃないか？」

そうなのだ。俺が良鬼を見つけると気絶していたのだ。

「俺が気絶していたのは、がけ崩れで滑って気絶したんじゃない。俺はある一人の女性によって気絶させられたんだ。」

「その女性が吸血鬼だったというのか？」

「そうだ。それに、俺はその女性に救われたのだ。」

「え、どういうこと？」

俺は訳が分からなかった。なぜなら良鬼を見つけたときは無傷だったのだから

「俺はあの時、右足、左腕は木の破片が刺さっていて、わき腹からも血が出ていた。俺は普通なら死んでいたのさ。」

「その時、その女性にあつたのか？」

「ああ、最初は俺を通り過ぎようとした。だから俺はその女性に小さな声で『助けて、俺はまだ死にたくないんだ。』と言ったんだ。そして、その女性は俺の首を噛み付いた。そこで俺は意識を失った。」

（う、嘘だろ。じゃあ、その女性に会っていなかったら良鬼は死んでいたのか？）

俺は驚いた。まさか、あの時良鬼がそんな死にそうだったなんて…

「そして、俺が目覚めるとそこは俺の部屋だった。また、俺に異変

があつたのにすぐ気づいた。」

「まさか、カーテンを開けたとか？」

「その通りだ。俺は起きてすぐカーテンを開けたら体が焼ける感じがした。そして、すぐにカーテンを閉めた。」

「じゃあ、その時にはもう……」

「吸血鬼になっていた。八重歯やえはも長かつたしな。そしてその夜、家を飛び出した。これが、俺が吸血鬼になるまでの話だ。」

「そんな事があつたんなんて……」

俺は再度驚いていた。いや、多分信じたくなかったのだ。

「さて、少し長くなってしまったな。」

良鬼がそうだったので時計を見ると午前三時だった。

「早く帰るつもりだったんだが仕方ない、一撃で終わらせてやる。」

良鬼はそういうと俺の周りに強風を吹かせ俺を囲み始めた。

さらに、小枝や葉っぱなどが俺の周りの風に巻き込まれていくのが分かり、小枝や葉っぱで何も見え無くなった。

「しまった！！これじゃあどこにレポートすれば良いのか分からない！……」

俺のテレポートは飛ぶ位置が見えていなければテレポートする事が出来ないのだ。

「さて、これで終わりだ。」

良鬼の言葉を聞いた瞬間、ものすごい強風が全て俺に向って飛んできたのだ。

「な、何が…ドスッ!？」

俺が言おうとした時、何か音がした。

「う、嘘だろ…」

俺は俺の体を見てみたら、小枝が俺の腹を刺していたのだ。

グサッ、ドシユッ、ドピユッ、ドスッ

「ぐ、ぐあああああああ!?!?」

さらにそれ一本だけじゃなくどんどん俺に小枝が刺さっていて、いろんなところから出血していた。

そして、俺の体のいろんな所に小枝が突き刺さったところで、風は止んだ。

「はあ、はあ、」

「ほづ。そんなに刺さっているのに意識が残っているとはな。」

確かに、良鬼の言うとおりだ。俺は大量に出血しているので意識が
やっとあるぐらいだった。

「はぁ、はぁ、」

俺はナイフを動かそうとした。

「おいおい、止めとけて。お前にもうそんな力は無いはずだ。右
手は小枝が貫通しているし、足も思いつきり刺さっているじゃない
か。」

「う、うるさい、はぁ、はぁ、俺は、諦めるわけに……」ドサッ

俺はそこで意識を失った。

「は、隼人……!……!……!」

途中、美羽の声が聞こえたが、何を言っているのか分からなかった

…

第十三話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十四話

美羽 side

「隼人……………」

私は隼人が倒れるまで全て見ていた。

そして、私は隼人が倒れるところまで見ていた。

私はすぐ隼人の所に向かいたかった。だが、足で行けなかった。

すると、隼人の兄が隼人さんを肩に担ぎ、私の所までやって来た。

私は隼人の兄を睨み付けた。

「ふ、ふはははははは。そんなに睨みつけて何だというのだ？」

「隼人を放して!!」

「それは無理な話だな。隼人は俺達にとって必要なんだからな。」

「だったら力ずくでも取り返す!!」

「何言ってるんだ？その足で何ができるんだって言うんだ？」

「別に、足が動けなくてもこれは使えるですもの。」

私は持つて来ていた拳銃を取り出し、隼人の兄に向けた。

そして私は拳銃を撃った。

隼人さんの兄は避けようとせず、銃の弾が当たった。

「だから、俺に銃とかは効かないんだよ。」

だが、弾は当たったが当たった場所から血が出ていなく、傷口も無かった。

「!?!?な、何で当たったのに傷が無いんですの!?!?」

「だから、俺は吸血鬼なんだよ。傷なんかすぐ回復するんだから。」

「っ!?!?」

私は隼人の兄からその言葉を聞くと、手が震えていて、拳銃を落としていた。

「おや?まさか俺にビビっているのか?」

「わ、私はビビってなんか、」

「まあ、どちらでも良いや。さて、今からお前に面白いものを見せてやる。」

隼人の兄は隼人の首筋に噛み付こうとした。

「やめて——————!?!?」

私は隼人の兄が隼人の首筋を噛もうとしたと分かったのとき、とっさに叫んでいた。

だが、隼人の兄は私の言葉を無視して、首筋を噛み付いた。

そして数分したら、隼人の兄は隼人さんを噛み付くのをやめた。

私は目の前で隼人さんが吸血鬼になるところを見てしまった。

「これで目的は完了したな。さて、俺は行くとするか。っとその前に、」

隼人の兄は私の方を向いた。

「その七刀、お前に預けておく。浅野が俺達の本拠地に来るまでな。」

隼人の兄はそういうと私に背を向けた。

「ちょっと待って、まだ話したいことがあるんですが、」

私はその時、あることに気づいた。

「話による。」

「確か隼人は十字架のネックレスを付けていたはずです。」

そう。隼人は十字架のネックレスを付けているのだから吸血鬼は近づけないはず。

「ああ、これの事か。」

隼人の兄は自分のポケットから十字架のペンダントを取り出した。

「な、何で効かないのですか？吸血鬼は十字架に弱いじゃないんですか？」

「ああ、確かに俺達吸血鬼は十字架に弱いさ。だが、俺は特別でな。俺はある女性から血を吸われて吸血鬼になったから効かないんだ。まあ、大蒜だったら困っていたが。」

「それが一体何の関係が、」

「まあ、話を最後まで聞け。その吸血鬼は髪が金髪で爪が赤かった。」

「まさか、その吸血鬼ってベアトシツチリーター＝マリアドじゃないのですか？」

「何故、マリアド様を知っている！！」

私には心当たりがあった。だってその人は私が唯一知っている吸血鬼と一致していたから。

「別に良いでしょ。それより、どうしてマリアドが十字架と関係しているの？」

「それは、マリアドによって吸血鬼にされた人物は特別でな。十字架は平気なんだよ。」

「そ、そんな…」

「話はそれだけか？じゃあ俺は帰るぞ。」

「あ、待って。まだ私には話が…」

私は隼人の兄を止めようとしたが、今度は私の言葉を聞かず、隼人を連れて行ってしまった。

「やっぱり、朝になるまで時間を稼ぐのは無理でしたか…」

私は隼人の兄が隼人を連れて行かないように時間稼ぎをする為に話していたんだが、やはりうまくいかなかった。

「隼人、ごめんなさい。私、隼人を救えませんでした…」

私は自分の無力さに自分を恨んだ。

「ってそんな事で諦めちゃ駄目だ。諦めたらあいつらの思う壺だ。」

そう。こんなことで私は諦めるわけにはいかない。これから吸血鬼の本拠地に向って隼人を救わなければ。

「って言っても、この足が治るまでは何も出来ませんすわね…」

私は自分の足を見て、そう言った。

「とりあえず朝まで待って、朝になったら優子に電話してここに来てもらおう。そして、事情を説明して私の足が治ったら、絶対に隼

人の兄の計画を止める。」

私はそう決心した。世界を守るため。そして、神に近い八つの一族、
涼鬼原家^{りょうきげんけ}当主として。

第十四話（後書き）

意見、感想をお待ちしています。

第十五話 行間一

Outside

午前5時、竹宮龍哉は電話で起こされた。

「うーん、一体こんな時間に誰から……」

龍哉は自分の携帯電話を取り出し、電話に出た。

「もしもし、一体こんな時間に誰ですか……」

「清水信之だ。こんな時間ですまんな。」

「清水統括理事長ですか。一体こんな時間に何の用なんですか……」

電話を掛けて来たのは信之だった。

「緊急事態だ。隼人君が誘拐された。」

「な、何だつて……!」

龍哉は信之からその言葉を聞くと眠気が覚めた。

「一体誰が隼人君を誘拐したんだ。」

「お前が知っている人物だ。」

「俺が知っている人物？」

龍哉はそこまで言っただけで分らなかった。

「そこまで言っただけで分からぬか。隼人君を誘拐したのは良鬼君なんだよ。」

「ど、どういふことだ!!」

「俺も分からぬ。だが一ヶ月前、俺は良鬼君が吸血鬼と共にしているって言った。多分それに関係しているだろう。」

「それで、良鬼君が今居るは分かるのか？」

「それが分からないんだ。だが二時間前、公園で隼人君は良鬼君と戦っていた事が分かっている。」

「それで、隼人君が負けたと。」

「まあ、そうだろう。詳しくは浅野君が知っているだろう。」

「何故浅野が知っているんだ？」

龍哉はどうして浅野が知っているのか気になった。

「浅野もそこに居たんだよ。まあ、その浅野は今公園のベンチで寝ているが。」

「とりあえず浅野君が居る公園を教えてください。」

「隼人君達が住んでいる近くの公園さ。それだけ言えば分かるだろ。」

「ああ、分かった。じゃあ切るぞ。」

「ちょっと待て、もう一つ話しておきたいことがある。」

龍哉は電話を切ろうとしたが、信之がまだ話があるって言ったので切らなかった。

「なんだ？」

「浅野君は今隼人君の七刀を持っている。」

「何故浅野君が隼人君の七刀を持っているんだ？」

龍哉は何故浅野が隼人の七刀を持っているのか分からなかった。

「多分、隼人君が持っているとも言ったのだろう。でも、それは良い判断だ。」

「確かに、そうだな。あのまま隼人君が七刀を持っていながら負けたらもつと大変な事になっていたな。」

「そういうことだ。とりあえず浅野君のところに行ってくれ。浅野君は足を怪我して動けない様だから。」

「分かった。じゃあ、今度こそ切るぞ。」

という龍哉は電話を切った。

「クソオオオオオオオ！」

龍哉は電話を切ると、持っていた携帯を投げた。

「良鬼君どうしてなんだ。どうして、吸血鬼と共に動いているんだ。君に一体何があったのだ！！」

龍哉は独り言を言っていた。

「ってそんな事している場合じゃなかった。とりあえず、浅野君の所に行かなければ。」

龍哉はさっき投げた携帯を取り、家を出た。

第十五話 行間一（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十六話（前書き）

書き終わりました。前回と所々変わってます。

第十六話

瑞希 side

「うん…あれ、隼人は？」

午前6時半、私が目が覚めると私の隣で寝ていたはずの隼人が居なかった。

私はとりあえず家の中を探したが、やはり隼人は居なかった。

「優子起きて！！」

「うん…瑞希、どうかしたの？」

「隼人が家に居ないのよ！！」

「え！？隼人が居ないって瑞希どういうこと！！」

優子は隼人が居なくなっって聞くと、すぐに目が覚めた。

「私も分からないわよ！！隼人の携帯に電話しても出ないのよ！！」

「とりあえず、美羽にも教えましょ。」

ということで、私達は美羽の家に向った。

「はあ……」

「優子、どうしたの？」

優子がインターホンを押して数十秒、優子はため息をついた。

「駄目、インターホンを押しても美羽が出ない。」

「もう、こついつときに寝ているんだから……って開いてる。」

私が玄関のドアを引いたら、ドアは開いた。

「美羽のやつ、鍵を閉めてなかったな。まったく、相変わらずこついつところは気が抜けているんだから。」

「まあまあ。優子、とりあえず入りましょ。」

私は優子にそついつと、美羽の家に入った。

「美羽も居ないわね……」

数分後、美羽の家をそこら中探したが美羽は居なかった。

「とりあえず、電話してみるね。」

私は美羽の携帯に電話した。

数回コールしたら、美羽はでた。

「うっん…朝から一体誰ですか…」

「美羽！！あんた今どこに居るのよ！！」

「ん？公園のベンチに居るけど？ってちょっと待って。」

美羽は突然私にちょっと待ってと言った。

「良かった。七刀が無くなってなくて。」

「ちょっと待って、何で美羽が隼人の七刀を持っているのよ！！」

「ちょっと理由がありました…竹宮副リーダー？」

美羽と話していると、美羽いきなり竹宮副リーダーっと言った。

すると、電話の向こうから龍哉さんの声が聞こえた。

『おい、隼人君が誘拐されたって本当か！！』

（隼人が誘拐されたってどういうこと！？）

私は龍哉さんが言った言葉に驚いた。

『え！？なんで知っているんですか！？』

『良いから答えてくれ！！』

龍哉さんは何か急いでいる感じだった。

『…そうですね。隼人は隼人の兄に誘拐されました。』

『何で良鬼君が隼人を誘拐したんだ?!』

『確か、世界の誰にも負けない組織を作るためだと。』

『それじゃあ、隼人君は良鬼君に負けたから誘拐されたのか?』

『そうですね。そして、私の目の前で吸血鬼にされました。』

(吸血鬼にされたってどういうこと?)

私は訳が分からなかった。それは龍哉さんも同じだったらしい。

『吸血鬼にされただと、じゃあ良鬼君以外にも誰か居たのか?』

『いえ、隼人の兄だけですよ。』

『じゃあ、良鬼君が…』

『そうですね。隼人の兄が隼人の首を噛んだのです。』

(そんな、隼人が吸血鬼に。)

私は崩れ落ちそうになった。

『そう。って今気づいたけど、その足はどうしたんだ!?!』

(え！？美羽、怪我しているの！？)

私が崩れ落ちそうになった時、美羽が怪我していることを知り、そのおかげで何とか保てた。

『普通、来たらすぐに気づきませんか？この足は隼人の兄と戦っている時に出来た傷です。』

『まあ、隼人君が誘拐されたって聞かれたから急いでいたもんでな。足の傷に気づかなかつたんだ。とりあえず病院に連れて行くからな。』

『ありがとうございます。』

『ところで、誰と電話していたんだ？』

『あ、そうでした。今、瑞希と電話していたんですけど。ちょっと待ってください。』

というと、美羽はまた電話にでた。

「すみません。今竹宮副リーダーが来たもんですので。」

「それは大丈夫よ。そんなことより隼人が誘拐されたってどういうこと？」

「やっぱり聞こえてました？そうですよ。隼人は誘拐されました。」

美羽、は平然と話していた。

「…ねえ、一つ聞いていい？」

「ん？何ですか？」

「なんで、何で美羽は隼人が誘拐されたのに平然としているのよ！
！美羽は隼人が好きなんでしょ！！」

「…そんなことですか。」

「そんなことですかってあなたは、」

「確かに、私は隼人のことが好きですよ。でも、私はそれより、も
っとムカついていることがあるんですよ。」

「隼人よりムカついていることがあるものって何なのよ！！」

私は美羽が隼人が誘拐されたのに平然としているのに許せなかった。

「ベアトシツチリーター＝マリアド。瑞希はこの名前を聞けば分
かるよね。」

「ベアトシツチリーター＝マリアドですって。何であんたがその
名前を知っているのよ！！」

私は何故、美羽その名前を知っているのか気になった。何しろ、涼
鬼原家を壊滅寸前までに陥りさせた人物だから。

「それは後に分かるから今は言わない。でも、あの女だけは絶対に
ぶち殺す！！」

「分かった。今は聞かないわ。ところで、この後病院に行くんですよ。」

私は美羽からものすごく殺気が立っていた感じだったので、話を変えた。

「そうですね?」

「じゃあ、この後病院で会わない?まだ話したいことがあるしさ。優子も連れて行くから。」

「分かりました。じゃあ隼人と優子が入院した病院で。」

というと、私は電話を切った。

「ねえ、隼人が誘拐されたの?」

「そうらしい。けど詳しくは病院で話すから、とりあえず病院に向いませよ。」

私がそういうと、私と優子は隼人と優子が入院した病院に向った。

第十七話

瑞希 side

数分後、私と優子は病院で龍哉さんと合流した。

「で、竹宮副リーダー、美羽はどのくらいの怪我をしていたのですか？」

美羽が診察室に居るとき、優子が龍哉さんに聞いていた。

「足は多分隼人君が自分の服を破って怪我をした所を結んであったんだけど、それでもその破った服が血で完全に染まっていたからとても酷かった。」

「それほど酷いかったの？」

「ああ、よくそんな状態で寝ていられたと思ったくらいだから。」

私達がそんな話をしていたら美羽が戻ってきた。車椅子に乗って。

「美羽、どうだったの？」

「早くても一週間すれば直るらしいですよ。さっきも龍哉さんに運んでもらって来たもんですから。」

よく見ると、美羽の足から膝まで包帯でぐるぐる巻きになっていた。

「一週間か、さすがにまずいかもしれないな。」

「どういうことですか？」

私達は龍哉さんの方を向き、聞いた。

「浅野君の話だと、隼人君は吸血鬼にされたんだよな。」

「はい、そうですが…」

「吸血鬼は太陽や十字架や大蒜に弱いと言われているのは知っているよな。」

「まあ、それくらいは知ってますけど…」

私達は龍哉さんが何を言おうとしたのか分からなかった。

「じゃあ、吸血鬼達はどうやって生きるか分かるな。」

「人間の血を食事として生き続けます。」

「そうだ、そして、血を吸われた人間は吸血鬼になる。そこまでは良いんだが…」

「何がいけない事があるんですか？」

「一部の本の内容なんだが、吸血鬼のほとんどは従僕を作らないというのがある。」

「でも、吸血鬼って血を吸わなきゃ生きていけないんじゃない？」

確かに優子の言う通りだ。ならどうやって生きるの？

「そう。だから吸血鬼達は血を吸った後、その吸った人間を殺すという事だ。」

「え…じゃあ隼人も…」

「ああ、そうなるかも知れない。だから、大変なことになるんだ。浅野君なら分かるんじゃないかな？」

「もしかして、本当の殺人鬼になってしまつかも知れないから。」

「え、美羽どういうこと？」

優子が美羽に聞いた。

「要するに、自分が生きるために血を吸い、吸った人間を殺したら本当の意味で隼人は殺人鬼になってしまうんですよ。」

「でも、隼人は前にも殺しているじゃない!!」

「確かに殺してます。でも、隼人は無関係な人間を殺した事がありましたか？」

「言われてみたらそうだ。隼人は今まで無関係な人間を殺した事がない!!」

「瑞希は分かったようですね。」

「え！？瑞希も分かったの！？」

どうやら優子はまだ話かっっていなかった。

「要するに、隼人が人間を吸ってその人を殺したら、隼人に罪悪感がなくなり、次々と関係無い人を殺していつてしまうことを龍哉さんは言いたいですよね？」

「その通りだ。そうなってしまうたら隼人君は人間に戻ったとしても、誰かと戦っている時に関係無い人も関係なく殺してしまうかもしれない。」

「そういうことか…」

「だから浅野君を待っているわけにはいかない。明日、俺、天壤、瑞希君、雨宮君で『能力都市』を出る。」

「私もいきます！！」

美羽は必死に龍哉さんに言っていた。

「駄目だ。そんな足でなにが出来るんだ。」

「今回だけは行かせてください！！今回逃したらあの女にいつ会えるか…」

「そこまでベアトシツチリーター＝マリアドに恨みがあるのか？」

「ええ、それに私はさっき言いましたですよね？」

「ああ、そうだった。まさか浅野君がねえ。」

私は二人の話に気になった。何の話をしたんだろう…

「分かった。じゃあ、あれはちゃんと家にあるのか？」

「ちゃんとありますよ。」

「そう。なら三人とも、明日6時に空港に来い。分かったな。」

「「「分かりました。」」」

というと、龍哉さんはどこか行ってしまった。

「じゃあこの後暇だし、明日の準備をしたらどこか行きましょうか？」

「良いね。じゃあそうしましょ。」

私は優子に賛成したが、

「私は遠慮しとくよ。車椅子だし。それに考えたい事があるので。」

美羽は優子の誘いを断った。

「そう。分かった。とりあえず家まで送るから。」

「ありがとう。」

という事で私は美羽が乗っている車椅子を押しながら優子と一緒に

に美羽の家に向った。

第十七話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十八話

隼人 side

「うーん…、ここはどこだ？」

俺が目覚めると、何故か牢屋にいた。

「？何で俺こんな所に居る、痛っ、」

八重歯^{やえは}が舌にあたったのだ。

「俺ってこんなに八重歯大きかったけ？」

俺はそんな事を思っていた。

「で、俺は何でこんな所に…」

俺が何故こんな所に居るのか考えてたら、誰かが俺の牢屋に近づいてくる音がした。

近づいてきたのは良鬼だった。

「お、やっと起きたか。」

「良鬼！！何でお前がこっつー！！」

俺はそこで全て思い出した。

そうだ。俺はあの時、良鬼に負けたんだ。

「思い出したようだな。」

「俺をどうするつもりだ!!」

「なーに、今のところは何もしないさ。もう、一つの目的は終わっているからな。」

「何の事だ?」

「隼人も分かっているんじゃないのか?自分が吸血鬼だと言う事を。」

「な、何だって…」

でも、良鬼の言うことは辻褃があっていた。俺は良鬼と戦った傷も全て無くなっているし、八重歯も伸びていたのだから。

俺は悔しかった。俺は吸血鬼になってしまったのだから。

「そういえばここはどこなんだ?」

「ああ、とある岐阜の村って言えば分かるよな。」

「やっぱりそこなんだ…」

俺は何となく分かっていたんだが、一応聞いておきたかったのだ。

「さて、後で隼人に会わせたい人物がいるのでな。呼びに行くから一度行くぞ。」

「あっそ。どうせここから出れないんだろ。」

「そりゃそうだ。じゃあまた後で。」

そういうと、良鬼はどこか行ってしまった。

「俺はこれから、どうすれば良いんだろう…。」

俺は良鬼が行くと、俺はどうすれば良いのか考えていた。

「お腹すいてきたな…。」

俺は手を腹に当てて言った。

数分後、俺の牢屋に良鬼が戻ってきた。

「おや？どうやらお腹がすいてるようだな。食事を持って来ようか？」

「止めとく。吸血鬼の食事は知ってるからな。」

「そう。でも、いつまでそんなことが出来ているかな？」

「ぶっ。で、何のようだ？」

俺は良鬼に何しに来たのか聞いた。

「さっき言っただろ。会わせたい人がいるって。」

「ああ。で、誰なんだ。」

「マリアド様こちらに来てください。」

良鬼がそういうと、良鬼が来たほうから大人の女性が来た。

だが、俺はその女性に心当たりがあった。

「ま、まさかあんたは…」

「ベアトシツチリーター」マリアドって言えば分かるわよね。竹宮家当主、竹宮隼人さん。」

「な、何でおまえがここに居るんだ!!」

俺は驚いた。何故、涼鬼原家を壊滅寸前までにした女性がここに居るんだ!!

「何故って私も吸血鬼だからよ。」

「ど、どういことだ。」

「私の名前は別名があるのよ長ったらしいからね。その名前を聞けばあなたも分かるんじゃないかしら?」

「別名?」

「ベシリード。それが私の別名よ。」

「ベシリードだって、そんなバカな!!」

俺はまた驚いた。ありえない人物なのだ。

ベシリード。吸血鬼の中でも史上最強の吸血鬼と言われている女性。まさか、実在しているとは思わなかった。

「あら、結構驚いているわね。って、何故良鬼まで驚いてるの?」

俺も良鬼の方を見ると、良鬼も驚いていた。

「マリアド様、それ、本当のことですか?」

「あら、言っただけ?」

「初耳ですよ!!どうして言ってくれなかったのですか!?!」

「言ってるつもりだったのよ。っていう事だから。」

「そんな簡単に答えないでください!!」

「まあ、そんなことはどうでも良いとして。」

「流された!!」

…なんか、俺と良鬼の似ているところを今初めて見つけた気がする…

って、話を戻すか。

「で、俺に何のようなんだ？」

「ああ、そうだったね。あなたは私達の目的が分かっているの
よ。」

「世界の誰よりも強い組織を作る事か？」

「ああ、そうよ。それで、私達に従う気はない？」

「絶対に却下だ。」

「そう。ならこれを見なさい。」

という俺はマリアドが持っていたビデオカメラを見せられた。

「な、何だこれは……」

そこには約二百人の人間が映っていた。

「そこに居るのは私達が誘拐してきた人達だ。」

「な、なんだって。」

「あなたが私達に従わなければ今から五分おきに一人ずつこいつら
を殺していくわよ。それでも私達に従わないのか？」

「貴様あ、汚いぞ……！」

「何とでも言つと良いた。さて、どうするのかな？」

俺は他に策がないのか考えた。

だが、何も出てこなかった。

「…俺が仲間になれば良いんだろ？」

だから俺はマリアードに従う方法しかなかった。

「ほづ。やっとその気になったか。なら、出る。」

俺はマリアードによって牢屋から出された。

「それとこれ、あなたの武器でしょ。返すわ。」

俺は自分のナイフを受け取った。

（美羽、優子、瑞希、後は頼んだ。）

俺は心でそう思いながらマリアードについて行った。

第十九話

美羽 side

「じゃあ、また明日ね。」

私は瑞希と優子にそう言って、手を振った。

そして二人が私の家のドアを開けて家を出たら、私はリビングに向った。

「さて、まずは明日の準備をしますか。」

私はリビングに行くとともに部屋に向った。

「とりあえず、七刀はここに置いて、まずは久々にあれを取り出さないか…」

私は部屋に入っただけで本棚に向った。

ちなみに、さつきから目に見えない無刀がどこにあるかが分かるかという点、見えなくても触れるので感覚であるか分かるのだ。

「えっと、確かこの辺に…あった。」

私は本棚の本をどかし、本棚の奥にあるスイッチを押した。

スイッチを押すと、本棚の隣の壁が倒れ、倒れた壁があった所に五

つの拳銃、五神銃を飾ってあった。

私はすぐに五神銃を全てを取り出した。

「久しぶりですね。にしてもまたこれを使う時が来るなんて…」

五神銃は炎神銃、地神銃、雷神銃、水神銃、風神銃と言われているんだが、五神銃はそれぞれ威力が強すぎるのだ。

「まあ、仕方ないですよ。あの女をぶち殺すためには。」

そう。私は五神銃を使ってでもマリアドを絶対にぶち殺してやる。

「それと、後は…」

私は倒れた壁を元に戻し、今度は弾を入れている引き出しを開けた。

「弾、全部持ってきましたよっか。」

私は引き出しに入っていた弾、計300発を全て持っていくことにした。

「ふう、やっと終わりましたですね。ってもうお昼ですか。」

やっと準備が終わって時間を見てみたら午後1時だった。

「うーん…何か食べ物ありましたっけ？」

私は冷蔵庫に向かい、何かがあるのか調べた。

「やっぱり何もありませんよ…。いつも隼人さんと一緒に食べていたもんですから。」

私は冷蔵庫の中に食べ物があるのか確認すると、何も入ってなく、どうしようか考えてた。

「外で食うのも良いんですが、車椅子だから時間がかかるし、ファミレスに行っても車椅子用の席があるかどうか…」

私は車椅子に乗っているのが不自由に思えた。

「あ、隼人の家に行けば多分何かあるかもしれません!!」

それに気づいた私は、すぐに隼人の家に向った。

「ふう、助かりました。危うく何も食べないで昼を過ごすところでした。」

私は隼人から貰った鍵で隼人の家の鍵を開け、すぐに冷蔵庫に向かい、勝手に食料を取って料理を作った。

そして、作り終わると、私は作った料理を食べた。

第十九話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十話

午前3時、私は昼食を食べ終わって家に居た。

「はあ、にしてもこんな早くあの女に会えるなんて…」

私は家に戻ったら車椅子を降り、ベットの上で横になった。

そして私は、あの女、ベアトシツチリーター「マリアードのことを考えていた。

「どうして、どうしてよりもよって私の家だったの？」

私は七年前のことを思い出していたら泣き出しそうになった。

私は七年前まで親達やメイド、執事達と平和に暮らしていた。

その一年前、金髪で爪が赤い外人、ベアトシツチリーター「マリアードがメイドとしてやってきたのだ。

私は最初、外人なのに日本語が上手なのに気になった。

また私は最初、マリアードを嫌っていた。

だが、入ってきてから約一カ月後、私は母親とちょっとした理由で

9歳のときに家出をした。

私は家出をしたことまでは良かったが、幼いので遠くまで行けず、ちよつと離れた公園に居たのだ。

数時間そこに居たら、雨が降ってきた。

この公園に雨宿りするような所が無かったので私は公園にある木の
下で雨宿りする事にした。

それからいつこつに雨が止む心配が無く私はそこで佇んでいるし
なかつた。

だがその時、誰かがこちらに近づいてきた。

それは……………ベアトシッチリーター＝マリ
ードだった。

私は最初、「何？私を連れて帰りに来たの？」と言い、マリ
ードを拒絶した。

するとマリードは「はい、咲^{さき}様の命令で美羽様を連れて帰りに
来ました。」と肯定した。

私は「なら帰つて。」とマリードに言い返したのだ。

マリードは私がそう言つても帰らず、「確かに、あれは咲様が悪
かつたかもしれませんが。ですが、咲様は間違えて捨ててしまつた
んですから。」と言つた。

でも私は「確かにお母さんが間違えて捨ててしまったかも知れませんが、あれは私の大事なものだの！！例え間違えて捨てられたとしても許せないの。だからもう帰って！！」って言った。

マリアードは私がそれを言った瞬間、マリアードは私の頬を叩いた。

私は生まれて初めて頬を叩かれた。そして、私はマリアードを睨み付けた。

そして、マリアードはこう言った。

「美羽様は皆様に迷惑をかけていることに気づかないのですか！！」と私に怒って言った。

それを聞いた私は「何よ、メイドのくせして。」と言い、また頬を叩かれた。

「美羽様が家を出て行くとき、咲様は間違えて捨ててしまったことを謝っていたじゃないですか！！それなのに美羽様は振り向かずに出て行った。あの時の咲様の表情を見ていたのですか！！そして美羽様が家を出て行った後、咲様は美羽様に『美羽、ごめんね。』って泣きながら言っていましたのよ！！」と言った。

私はマリアードの言葉を聞いて驚いた。お母さんが私のことをそこまで思っていたんだと。

私はいつの間にか泣き出していて、「ごめんなさい。」と言っていた。

そして、マリアードは私を抱きしめて「もっと、泣いてていいから

ね。」と言った。

マリアードにそう言われると私は完全に泣き出していた。

そして数分が経ち、私は泣くのを止めると、マリアードは抱き締めるのを止めこう言った。

「今度から美羽様に悩みがあったら、私に言いなさい。何か助けになるから。」

私は「うん。」と頷き、二人で家に帰り、親や心配したメイドと執事達に謝った。

そして、あの一件から私はマリアードと仲良くなり、マリアードは毎日私の話し相手になってくれた。あの事件が起こるまで。

それは、事件が起こる一週間前からだった。

一人の執事が行方不明になる事件が起こった。

親やメイド、執事達はすぐに戻ってくるだろうと思っていたが、翌日になってもその執事は帰ってこなかった。

さらに翌日、今度はメイドが一人行方不明になった。

さすがに親やメイド、執事達もおかしいと思い、警察に電話した。

そして、家の門の前で警察が二十四時間付く事になった。

だが最初の執事が行方不明になってから四日、今度は3人の執事と

2人のメイドが行方不明になった。

そのうち一人がマリアードだった。

私達は不安になり、夜はメイドと執事達は全員一箇所に集まって寝かせる事にした。

それから二日は何も起こらなかった。

だがその翌日、外は雨が降っており全員集められた。

全員集まって数分後、いきなり停電が起こった。

そして扉が開く音がした。

すると、メイドの一人が『きゃああああ!!』と叫んだ。

その悲鳴からどんどん、他のメイド、執事達の悲鳴が聞こえ、私は怯えていた。

そして数分後、電気が点いた。

電気が点いて私がすぐ見たもの、それは数名のメイド、執事が倒れており、その真ん中に一人立っている女性が居た。

その女性は見覚えがあった。

三日前に行方不明になり、私が一番仲が良かったマリアードだった。

だが、私が知っているマリアードでは無かった。

口には血が付いており、さらには八重歯が長かった。

私はその時幼かったから分からなかったが、親やメイド、執事達はすぐに分かった。マリアードは吸血鬼だと。

お母さんが一応吸血鬼なのか確認する為、「マリアード、あなたは吸血鬼なの？」って聞いた。

マリアードはお母さんの言葉に「ええそうよ。私はここに来る前から吸血鬼よ。私は涼鬼原家の家族、メイド、執事達を全員吸血鬼にする為にメイドとして働いていたの。」って言い返した。

私は吸血鬼がどういふのかまだ知らなかったが、マリアードに裏切られたことは分かったので崩れ落ちた。

お母さんはマリアードからそれを聞くと、「そう。なら死になさい。」と言い、五神銃の一つ風神銃を取り出し、マリアードに向かって放った。

マリアードは避ける暇もなく思いっきり吹っ飛ばされ壁にぶつかった。

お母さんはマリアードが戻って来ない内に「早く家から逃げて！」と言い、私と親、メイド、執事経ちはマリアードが吹っ飛ばされた扉と違う扉から逃げた。

そして、玄関の扉から全員逃げ出そうとした。

だが、いつの間にか門の前にマリアードと、行方不明になったメイ

ド、執事達、先ほど倒れていたメイド、執事達が居た。

マリアードは「全員、取り囲みなさい！！」と言い、取り囲まれた。お母さんは隙があれば五神銃を撃とうとする構をとっていた。

だが、マリアードは「咲様、私が隙を与えるといいですか？」と言
い、お母さんは完全に読まれていたことに気づき、構えるのを止め
た。

そして、マリアードは自分でメイド、執事達に一人ずつ首に噛み付
こうとした。

だが、その時奇跡が起こった。

マリアードに先が尖っているチェーンが刺さっていたのだ。

そして、そのチェーンは次々に吸血鬼されたメイド、執事達を刺し
ていった。

私は何が起こったのか分からなかった。

そして誰かがこちらに近づいて来るのに気づき、お母さんはそれが
誰だか分かったようだ。

「何であなたがここに居るのかしら？清水信之」

そう。今、『能力都市』の統括理事長をやっている、七年前は清水
家当主をやっていた清水リーダーだったのだ。

「俺がここに居ておかしいのか？俺はただ単にニュースを聞きつけてすぐにやって来ただけなんだが、まさかここまで酷い事になっているとは思わなかったな。これなら、竹宮風哉たけみやふうやも連れて来るべきだったか。」

そう言いながら、清水リーダーは背中から出ている八つのチェーンを使って吸血鬼全員をビーズを通しているみたいに刺していた。

「今のうちに逃げろ！！俺が時間稼ぎしているから！！俺が乗ってきたバスがあるからそれで逃げろ！！」

「でも清水はどうするの！！」

「俺は何とかなるさ。さあ、早く行け！！」

「…分かった。じゃあみんな行くわよ！！」

お母さんは清水で全員で逃げ、清水リーダーが一人残った。

また、清水リーダーがどうなったかは今を見れば分かるだろう。

バスに着くと私は今まで我慢していた涙が流れていた。一番の仲が良かったマリアードに裏切れたのだ。

私はお母さんに慰められていたが、もう誰も信用しなくなかった。親もメイドも執事も友達も。

私はその時決めた。感情を捨てようと。そうすれば悲しむ事も無いのだから。

だが、一つだけ感情があった。マリアドだ。

私は絶対にあの女を殺すと誓った。

それが、七年前に起こった事件だ。

それから、親を殺し、関係ない人も殺したりもしたが、優子のおかげで今の私がいる。

優子のおかげで今の私がいるが、それでも過去はやり返せない。過去の罪を償う為に私はあの女を殺す。これは私のけじめなんだ。

「うーん…あれ？私、寝てた？」

どうやら私は泣きつかれて寝ていたようだ。

時間を見ると、午後8時になっていた。どうやら5時間も寝ていたようだ。

「とりあえず夕食を食って、風呂はこの足だから入れないからまた寝よう。準備は終わってるし。」

私はベットから車椅子に乗り移り、また隼人の家に向かい夕食を食べ家に戻り、またベットの上で横になった。

「明日は必ず隼人を助け、あの女を殺す。」

私はそう誓い、すぐに寝た。

第二十話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十一話

美羽 side

午前5時、私はアラームで起こされた。

「ふああ〜…眠い…」

私は眠そうながらも起きた。

「さすがに一時間半も違うと眠いですね…」

私はそんな事を言いながら、車椅子に乗った。

そして、顔を洗いに行った。

「ふう、じゃあそろそろ準備しますか。」

私は洋服に着換え、五神銃を車椅子の端っこにあった収納にしまい、隼人の七刀を車椅子の後ろに刀を納めるところがあったのでそこにしまった。

「…っていつかこの車椅子、足の不自由な人が戦場で戦うように作られた車椅子ですよ？どう見たって銃と刀をしまう様な感じですし、何故病院にあるんですか。それに、そういうのは電動車椅子じゃないのでしょうか…」

私はこの車椅子にそんな事を思った。

「さて、準備も出来たしそろそろ行きますか。」

ということで私は家を出て、空港に向った。

午前5時43分、私は空港に着いた。

「お、浅野君は早いね。まだ俺と天壤しか来てないよ。」

私が着くと、竹宮副リーダーと天壤がもう居た。

「車椅子だからちょっと早めに出ただけです。動かすの疲れますので。」

「あ、車椅子で思い出した。はいこれ。」

そう言われて竹宮副リーダーから貰ったものはリモコンだった。

「リモコン？何のリモコンですか？」

「ああ、これは車椅子のリモコンさ。ほらその先端に差し込める所があるから、そこにこのリモコンを差し込むんだ。」

「それがあるなら車椅子を借りたときにくださいですよ!!！」

と言いながらも私はリモコンを差込口に差し込んだ。

「ごめん。すっかり付けて置くのを忘れてた。」

「まあ良いですけど、どうして竹宮副リーダーがこの車椅子の事に詳しいのですか？」

「だって、これ作らせたの俺だもん。」

「やっぱりそうですか。どうりで病院にあつた訳ですか。」

「俺が急いで頼んだからな。お、優子と瑞希も来たな。」

竹宮副リーダーと話をしていると、竹宮副リーダーが優子と瑞希が来たのに気づいたようだ。

「あら、美羽早いじゃない。一緒に行こうと思ったのに、先に行っちゃったから瑞希と二人で来ちゃったじゃない。」

「ごめん。車椅子だったから先に来ちゃった。」

「そうなの。って美羽、七刀持って来たんだ。」

「隼人の兄に持って来いと言われたので。それに、隼人を助けた時に使えるかと。」

「そう。」

瑞希は気づいてないようだ。私の車椅子の横に五神銃があることに。

「さて、全員揃ったな。じゃあ飛行機に乗るぞ。」

「その前に、何で天壤まで居るの？昨日、聞こうと思ったんだけど、

聞くの忘れちゃったから。」

「俺が居る理由は吸血鬼を人間に戻す実験の操作のしかたを知っているからだ。今の俺に拒否権は無いからな。」

「「なるほど」「」」

「そろそろ行くぞ。もうそろそろ時間だから急ぐぞ。」

という事で私達は私達が乗る飛行機の搭乗口に向った。

第二十一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十二話

美羽 side

飛行機に乗って数分後、飛行機は空港を出発した。

「で、村の場所は分かっているのですか？」

「分かっているさ。なにせ、俺の母親が居た場所なんだから。」

「そうですか。それにしてもこの飛行機、結構心地よいですね。」

「本当よね。しかも、この飛行機に乗っているのは私達だけだからね。」

そう。普通の飛行機と同じ大きさなのに、何故か乗っているのは私達だけなのだ。

ちなみに、今私の車椅子は飛行機の席の後ろにあって、固定されている。

っていうか、何故刀と銃が堂々と車椅子に付いてあるのに乗務員の人たちは何も言わないんで普通に飛行機に乗っているのが疑問に思えるのですが…

「それは、俺が清水統括理事長に武器を乗せても良いように頼んだだけだが？」

「地の文を読まないでくださいですよ!!」

「いや、俺は浅野君が何を考えているのか推測しただけだけど？」

「嘘だ!!」

「ひぐ しネタはもう古いと思うよ。」

っていうか、竹宮副リーダーにひらしネタが通じるとは思ってたかったんですが…

「ところで瑞希君は余り荷物が無かったけど大丈夫なのか？」

竹宮副リーダーは私との話をやめ、瑞希と話し始めた。

「それは龍哉さんが分かっていると思いますよ。私は清水家当主なんだから。」

「あ、そうだったね。って言う事は、あれを使うの？」

「ああ、多分使うと思います。前にあれでお父さんが何とか対処したらしいので。」

私はあれってなんのことだろうと思っていた。

「それで、飛行機に降りたらどうするの？」

すると突然、今まで黙っていた優子が話しかけてきた。

「空港に降りて多分二時間以上かかると思う。村の立ち入りは禁止

だからな。」

「じゃあ、そこから歩くのですか？」

「ああ、多分そうなるだろう。だから昼には村に着くんじゃないかな。」

「そうですか…。」

「それしても、ふあゝ…眠い。」

「ってというか、何故こんな早い時間にしたんですか？」

「これを逃すと、午後3時以降の飛行機しかなかったからだ。ちょっと寝る。」

というと、竹宮副リーダーは寝てしまった。

ちなみに、天壤はとっくに寝ていた。

「じゃあ、私も寝よう。」

「私も寝るわ。」

瑞希と優子も寝てしまった。

「って起きてるの私だけですか…。」

私は昨日、泣きつかれて寝ているし、一度起きても夕食を食って風呂に入ったらまた寝てしまったので眠くも無かった。

「隼人さん、大丈夫なんでしょうか……」

私は久しぶりに『隼人さん』と言い、隼人が無事なのか気になった。

第二十二話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十三話

隼人 side

俺は今、マリアードに連れられ、マリアードの部屋に居た。

「今日か明日、多分あなたの仲間があなたを助けに来るだろうね。」

「それがどうしたんだ？」

「あなたが殺しなさい。」

「な、俺が美羽達を殺せと……」

「ええそうよ。従わなかった場合は分かっているわよね。」

「…分かった。」

「やはり物分りが良いわね。じゃあ……」

マリアードが何かを言おうとした時、良鬼が走ってマリアードの部屋に来た。

「はあはあ、」

「どうしたの？そんなに急いで。」

「マリアード様、大変です！！俺達が捕らわれた人間が一人、逃げ

出しました!!」

マリアードは慌てていた。

「なんだって!!それでどこに居るのか分かっているのか!!」

「それが…入り口を出た形跡は無いようなのでまだ建物の中に居ると…」

「とりあえず探せ!!そして、捕らえる!!」

「分かりました。」

良鬼はそういつと出ようとしたが、

「ちょっと待て、もう一つ聞きたい。」

マリアードが良鬼を止めたのだ。

「なんですか?」

「その逃げ出した名前は何だ?」

「確か、松本鈴奈まつもとすずなという名前ですか?」

ま、松本鈴奈ですって!!

俺は驚いた。何故あの女が居るんだ!!

松本鈴奈、親父から聞いた事があるが、確か松本麗華まつもとれいかの娘で二年前

から一年間、俺は鈴奈に何度も会っている。

親父が言うには、松本鈴奈の母親、松本麗華は自分の為ならどんな事でもする女だったらしい。

そして、家柄戦争のとき、松本麗華は自分が八神近長になるために、竹宮家の傘下、水本家を滅ぼした。

親父はそれが許せなくって松本麗華を殺したって言うが、どうやって殺したんだろう。だって松本家当主は不死身の力を手に入れるて、刺しても死なないのだ。

そしてその娘、松本鈴奈が何でこんな所に居るんだ？

また、良鬼は気づいてないような感じだし…

ってそんなこと言うてる間に良鬼が居なくなってるし。

「で、お前も行け。そして見つけたら捕らえる。」

「え、俺もですか？」

「そつだ。さつさと行け。」

「分かりました…」

俺はマリアードに拒否権が無いので従うことにした。

しかし、これは俺にとってはちょうど良かった。うまくいけば捕らわれている場所が分かるかもしれないからだ。

(じゃあ、手当たりしだいに探しますか。)

俺は鈴奈を探すのと一緒に、捕らわれている居る人たちの場所も探すことにした。

o u t s i d e

「ふう、やっと出られましたね。」

吸血鬼にばれないように動いている彼女、松本鈴奈は以前、吸血鬼を人間に戻す実験をした場所に居た。

「にしても、簡単にあの場所から逃げられると思いませんでしたわね。」

鈴奈はここまで来るのに簡単に来れたのだ。

「それで、ここはどこなんですかね？何かの実験をしたような場所みたいな感じですよね？」

鈴奈は自分がいる場所に気になっていた。

そのとき、誰かがこの部屋を開けた。

鈴奈はすぐに隠れた。

(まさか、もう居場所が分かったの！？)

鈴奈は吸血鬼にばれたのかかと思った。

そして、入ってきた男が独り言を言った。

「ここでも無いか。でも、ここってまさか…」

（あれ？どこかで見た気が…）

鈴奈は入ってきた男に見覚えがあった。

「…ここがあの実験をした場所なのか？」

（あの実験って何のこと？）

鈴奈は男が何のことを言っているのか分からなかった。

「ってそんな事している場合じゃなかった。早くあのとあの場所を探さなくちゃな。」

「誰が変態女じゃい！！」

鈴奈は突然大きな声を出した。

「って、ここに居たのか鈴奈。」

「その前に変態女について聞こうか隼人。」

どうやら鈴奈は変態女と聞いて誰か思い出したようだ。

鈴奈は隼人が言っている意味が分からなかった。

だが、それは鈴奈にとって信じられない言葉だった。

「俺は今、吸血鬼なんだ。」

「え……」

「だから、鈴奈とは一緒に行動できない。」

「じゃあ、なんで捕らわれている人たちの所に行くのかな？」

「俺は捕らわれている人たちを救おうと思っているからだ。」

「…分かった。じゃあ、気をつけて。」

隼人はそういうと、部屋を出ようとした。

だが扉が開くと、そこには良鬼が居た。

「ほ〜う。まさか裏切るのか？」

「な、何故俺がここに居ると分かった。」

「それは隼人がマリアード様の部屋を出た後、マリアード様が隼人を監視しろと言われたから気づかれないように付けていたんだが、まさかマリアード様の言うとおりだとはな。」

「てめえ、」

「おっと、ここで俺と戦ったらどうなるか分かっているよな。」

「ちっ、分かった。」

「それともう一つ、次こんな事したら分かっているな。」

「それも分かっているよ。」

「そう。じゃあ隼人は俺と来い。松本鈴奈はみんなとは違う牢屋に入れとけ。」

「『『『分かりました。』』』」

良鬼と一緒に居た吸血鬼が松本鈴奈を連れて行った。

そして俺は良鬼について行った。

第二十三話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十四話 行間二（前書き）

行間というのもあるので超短いです

第二十四話 行間二

O u t s i d e

とある異空間、そこに誰も居ないはずなのに誰かの声が聞こえていた。

うふふふ。久々に俺の出番がきそうだな。

聞こえていた声は男の声だった。

何を笑っているんだ？

そしてもう一人、声が聞こえていた。

だって、俺の覚醒がまたもや来たんだ。

要するにあの男のコントロールが起きそうだということか。

そういうことだ。だが、もう少し待ってよう。あいつがもっと自分をコントロールが出来なくなると思うからな。

あんまり乗っ取りすぎるなよ。一応お前はあいつらの長にお前の力を与えるのが目的なんだからな。

分かっているさ。ちゃんとそこまで考えているよ。それが俺の宿命なんだからさ。

分かっているなら良い。俺は帰るぞ右神近^{うしんきん}、フェスター。
というともう一人の方は消えた。

竹宮隼人、貴様の行動をもう少し見せてもらっぞ。

フェスターと呼ばれている男は微笑んでいた。

第二十四話 行間二（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十五話

美羽 side

私達は飛行機が空港に着いた後、二台のタクシーに乗り白川村に向かい、立ち入り禁止の前で降りて今は歩いていた。

白川村といえば、世界遺産の白川郷で有名なところだったが、五年前の無差別殺人事件が起ってから白川村に住んでいる人は居なく、未だに立ち入り禁止なのだ。

「で、あとどのくらいで着くの？」

歩いて約一時間、優子は竹宮副リーダーに後どのくらい掛かるのか聞いていた。

「まだ一時間は掛かるだろう。」

「まだそんなに掛かるの……」

瑞希は『疲れた』という感じで近くの石に座った。

「じゃあ、もう昼だし昼食も兼ねて休むか。」

瑞希が石の上に座った事により休むことにした。

「それにしても、どうして簡単に立ち入り禁止のところに入れたのですか？普通に警備員が居ましたのに……」

私はさっき白川村に入るのに何故こんなに簡単に入れたのか気になった。

「ああ、そのことが。それは清水統括理事長が入れるように何とかしてくれたんだ。」

「そうなんですか。」

私はとりあえず納得した。

「そういえば天壤、今のうちに建物の構造を知りたいんだが…」

竹宮副リーダーは休憩しているついでに、どのような建物の構造なのか聞いてみた。

「ああ、それは…」

天壤は白川村の地下にある建物の構造の地図をだし、話した。

「建物の地下は四階あって、広さは縦横一キロか。結構広いな。」

「まあな。そのうち、地下三階のここに牢屋があって、地下二階のここに監視室があるな。」

「それで、実験をした場所は？」

「地下三階のここだ。」

「分かった。じゃあ三人とも、聞いてくれ。」

竹宮副リーダーは昼食を食べていた私、瑞希、美羽を呼んだ。

「どうかしたんですか？」

「これから、作戦を言う。浅野君は隼人君の搜索。天壤は実験の準備をするから瑞希君はその護衛を。俺と雨宮君は地下三階の牢屋と地下四階のこの広い部屋の搜索を頼む。

「ちょっと待ってください。」

竹宮副リーダーの作戦に優子は何か気になったようだ。

「どうしたんだ雨宮君。」

「地下三階の牢屋に行くのは隼人が居るかも知れないからという理由で分かるんだけど、どうして地下四階のこの広い空間も調べるの？」

「ああ、そのことか。今、約二百人くらいの人間が行方不明になっていることは知っているな。」

「ええ、日本中のいろんなところの人間が行方不明になっていることよね？」

「そう。それがもしかすると、吸血鬼が誘拐したんじゃないかって俺は思ったんだ。吸血鬼が誘拐したならその人たちを牢屋じゃ収まらないだろ。」

「なるほど。だからこの広い空間を調べるといふの？」

「そういつこと。まあ、確信がある訳ではないが一応ついてね。」

「とりあえず分かったわ。」

優子はとりあえず納得した。

「さて、じゃあ昼食も食べ終わった事だから行くぞ。」

竹宮副リーダーは作戦を話し終わると、いつの間にかみんなが昼食を食べ終わっていたので目的地に向う事にした。

第二十五話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十六話

美羽 side

「さて、やっと入り口に着いたな。」

昼食を食べてから約一時間、私達は元人体実験の基地に着いた。

「多分、向こうは俺達がここに居ることがばれているだろう。ほら。」

竹宮副リーダーが指した方向に監視カメラがあった。

「本当ですね。で、どうするのですか？」

「どうするってばれているなら突進あるのみだろ。じゃあ俺について来い！！」

私達は竹宮副リーダーについて行った。

「誰も攻めて来ないね。」

私達が入り口から階段で降りているとき、瑞希がそういった。

「確かにそうですね。もう進入したことは分かっているはずなのに。誰も攻めて来ないっておかしいですよ。」

私は瑞希と事を思った。

「何か向こうも策があるんじゃないか？そうじゃなきゃ誰も攻めて来ないはおかしいだろうから。」

「そうだろうな。」

そんな事を話していたら、目の前に扉が見えてきた。

「おい、鍵が壊されてるぞ。」

「それは吸血鬼が自由に入れるように壊したんじゃないか？ほら扉も開くし。」

天壤はそう言いながら扉を開けた。

「ッ！！天壤さがれ！！」

しかし、扉を開けるとそこには約100人くらいの吸血鬼がいた。

そして、私、瑞希、優子はすぐに能力を使い、吸血鬼を倒していくとした。

「やっぱり駄目だ！！すぐに治ってしまう！！」

「じゃあどうするの！！」

瑞希は竹宮副リーダーに駆け寄った。

「…浅野君、アレを使ってくれるか？」

「え！？もう使っちゃうのですか？」

「今はそれしか突破する方法が無い。分かったか。」

「分かりました！！」

私は竹宮副リーダーが言ったようにアレ、五神銃の一つ雷神銃を取り出した。

「美羽、その銃って…」

瑞希は私が持っている銃が五神銃って気づいたようだ。

「そつだよ。これは涼鬼原家当主が代々受け継いでいる銃、五神銃ですよ。」

「じゃあ美羽は涼鬼原家当主なの？」

「その通りですよ！！」

私は瑞希の話を聞きながら、雷神銃の引き金を引いた。

すると、巨大な電撃のビームが吸血鬼の方に向かって放たれた。まるで禁書の『超電磁砲』見たいに。

吸血鬼は吹っ飛ばされ、電撃を浴びたので痺れていた。

「今だ！！」

竹宮副リーダーは私が吸血鬼を吹っ飛ばし、吸血鬼が痺れている今のうちに走って進んだ。

また、優子がさにげなく吸血鬼を凍らせていたりしていた。

そして、約100人の吸血鬼から何とか逃れた。

「…何とか逃げれたな。」

「そうね。それにしても優子、さにげなく吸血鬼を凍らせたよね？」

「だって、すぐに動かせない方が私達の邪魔をしてこないでしょ。」

「まあそうですけど…」

「それに、凍らせてると良い像になるんだモン」

私と瑞希は優子の最後の言葉にドン引きだった。

「それで天壤、エレベーターはどこにあるんだ？」

「ああ、そっちにあるって誰かがこちらに近づいてくるぞ。」

天壤はエレベーターがある方から誰かがこちらに近づいてくるのを感じた。

私、瑞希、優子はすぐに戦う体勢に入った。

だが、向こうは一人だった。

「一人？一人で私達と戦う気なのかしら？」

優子はそんな事を思っていた。

だが、一人でこっちに来た理由はすぐに分かった。

だって、私達に近づいていたのは私達がよく知っている人物だったから。

そして私達は、その人物が見えると戦う気が無くなったからだ。

そう。近づいていた人物は私達が助けようとした竹宮隼人だったからだ。

第二十六話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十七話

美羽 side

「隼人、無事だったの？」

優子が隼人だと分かったところでそう言った。

「……………」

だが、隼人は何も言わなかった。

「隼人？」

瑞希は返事が返ってこなかったことにおかしいと思った感じだった。

そして、隼人はナイフを取り出した。

「みんな伏せろ！！」

竹宮副リーダーがそうだったのでみんなしゃがんだ。

隼人はナイフを横に振っていた。

「チツ、」

隼人は舌打ちをしていた。

「どうして、どうして攻撃したの!!」

瑞希は驚いていた。いきなり隼人が私達に攻撃したからだ。

「……………」

またしても隼人は何も答えなかった。

さらに、またナイフを振った。

しかも、振った方向に瑞希が居た。

「ッ!？」

瑞希は何とかかわした。

「とりあえず一人隼人君の相手をして他は階段で逃げる。それで良いな。」

竹宮副リーダーはとりあえず一人が隼人を足止めし、他は別のことをしたほうが良いと思ったのだろう。

そして私は…

「じゃあ私がやる。」

私は

「でも、その足じゃ…」

「そんなの、もう治ってるから行かせて。」

私は車椅子から立った。

「どうやって？一週間しないと治らないのに…」

「能力でだけど。私は涼鬼原家当主なんだから。八神近家の当主ははっしんきんか全員、それぞれの能力の種類を全て持っているのだから。まあ、ほとんどの人が元々持っていた能力しか使わないけどね。」

「じゃあ、一人で大丈夫だな。」

「ええ、大丈夫って言うてるでしょ。さっさと行ってくれる。邪魔だから。」

瑞希は私の変貌に驚いていた。まあ、そりゃそうだろうね。初めて私の変貌ぶりを見たらそうなるだろうね。

「…分かった。じゃあ行くぞ。」

竹宮副リーダーは私以外全員を連れて別の道から下に向った。

「……何だ。美羽が残ったのか。」

隼人はみんなが行った後、突然そんな事を言った。

「あれ？喋った。」

私は驚いた。急に隼人が喋ったからだ。

「俺が喋っちゃいけないのかよ。」

「いや、私は操られていると思いましたが。」

「俺はそもそも操られていないが、」

「じゃあ、何で私達を攻撃するの？」

私は隼人の行動がまったくもって分からなかった。

「それは言えない。俺はお前達を殺さないといけないのだから。」

「そう。なら私はあなたを止めるわ。」

私は車椅子に付けていた五神銃を全て取り出し、車椅子を後ろに蹴飛ばした。七刀ごと。

「じゃあいくぞ。」

「ええ、いつでもかかって来いよ!!」

私と隼人は戦い始めた。

第二十七話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十八話（前書き）

ちよつとスランプ気味なので投稿するのが少し遅くなるかもしれませんが。

第二十八話

Outside

美羽を置いて先に行った瑞希、優子、龍哉、天壤は地下三階に居た。

「じゃあ予定通り天壤と瑞希は実験場所に、俺と優子は牢屋に向う。」

「分かった。」

四人は二人ずつに別れ、天壤と瑞希は実験場所に、龍哉と優子は牢屋に向った。

「あれから敵が襲撃してきませんね。」

牢屋に向っている優子は地下一階にいた吸血鬼しか見ていないのに気になったのだ。

「確かにどうだな。マリアドがまだ姿を現さないのは分かるんだが、どうして誰も見ないんだろう…。」

「何かありそうね。」

「そう思っていたほうが良さそうだな。じゃあ、進むぞ。」

優子と龍哉は何故向こうが攻撃してこないのか気になりながら牢屋に向った。

そして数分後、優子と龍哉は牢屋に着いた。

「「な、何これ……」」

二人は驚いた。なぜなら、牢屋が全てぶち壊されていたのだ。

さらに、壁までへこんでたりしていたのだ。

「ねえ、向こうから何か音が聞こえてきませんか？」

優子は先の方から何か音が聞こえてきているのに気づいた。

「これは、誰かが吸血鬼と戦っているな。とりあえず行ってみるぞ。」

優子と龍哉は、とりあえず音がする方に向った。

優子達が向うと、そこには一人の女性が立っており、吸血鬼に囲まれていた。

「あれ、今すぐ助けないと！」

「そうだな。じゃあ……」

龍哉は突然足を止めた。

「どうしたんですか？竹宮副リーダー？」

「…なあ優子、俺達が行く必要もなさそうだぞ？」

「え？それはどういう…」

優子がそういった次の瞬間、突然吸血鬼達が吹っ飛ばされたのだ。

「な、何が起こったの？」

優子は何が起こったのか分からなかった。

「はあ、まったく何度殺つても生き返るんじゃ霧がないよ。」

すると女性は突然、そんな事を言い始めた。

「さて、ってあれ？龍哉さんではないですか？」

「やっぱり貴様が鈴奈君。」

「え！？竹宮副リーダーの知り合いなの！？」

優子は戦っていた女性が龍哉の知り合いと知って驚いた。

「ああ、鈴奈君は一年間竹宮家で暮らしててな。」

「松本鈴奈です。よろしくねえつと…」

「雨宮優子よ。」

「じゃあ雨宮さん。よろしく。」

「…よろしく。」

優子は鈴奈の名字を聞いた瞬間、機嫌が悪くなった。

なぜなら、優子にとって松本という名字は嫌な思い出しか出てこないのだ。

そう。優子の本当の両親は十年前の家柄戦争の時にそのときの松本家当主、松本麗華まつもとれいかによって殺されているのだから。

だから優子は松本と名字を聞いて、しかも竹宮家と関係していることから松本家の現当主だと思ったのだ。まあ当たっているけど。

「あ、雨宮君に鈴奈君は会わせるべきじゃなかったんだった。」

龍哉はそこで優子が水本家だと言う事を思い出した。

だが龍哉がそう言ってしまったので、優子は鈴奈が松本家だと言うことが分かってしまった。

「龍哉さんどういうこと？雨宮さんを私に会わせないほうが良いって。」

「ああ、それは…」

「竹宮副リーダー、それは私が話すわ。」

「…大丈夫なのか？」

「大丈夫よ。別にね!!」

優子は鈴奈に向っていきなり能力を使った。

「っ!？」

鈴奈は突然優子が能力を私に向って使ったことに驚き、すぐには動けなかった。

「雨宮君!! どうしていきなり攻撃するんだ!!」

「別に鈴奈さんに攻撃してないわよ。ほら。」

良く見ると、優子は鈴奈に向って能力を放ってなかった。

後ろの動こうとしていた吸血鬼に向って能力を使って吸血鬼を凍らせたのだ。

「…良く気づいたな。」

「別に邪魔くさかったただけだから。」

「はっビックリした。いきなり攻撃してきたと思っただけで、話して何なの？水本優子さん。」

「気づいてたの？」

「さっきの能力を見るまで気づいてなかったよ。水本家は冷凍系能力だっけ知ってたから分かったただけだもん。」

「それで、私の正体を知ったらどうするつもりなの？」

「別に何もしないよ。あのクソババアと一緒にしないで。」

「クソババアって誰の事？」

「私の母親の事よ。」

優子は自分の母親をクソババアということに驚いていた。

「…未だに許してないんだ。母がやった事に。」

「そりゃそうでしょ。あのクソババアは自分の為なら何でもした女なんだから。私は人のことを考えないで自分の為にも何でもしたあいつを許せなかったんだから。風哉ふうさいさんに殺されて良かったんだよ。」

「そうなんだ…」

優子は鈴奈がそこまで言うほど母親を恨んでいるのかと思った。

「ところで、何で龍哉さんが居るの？隼人を救いに来たとか。」

「そうだけど、隼人に会ったのか？」

「まあ、一回抜け出した時に隼人に会ってね。その後私はここに捕まったけど。っていうか、私を捕まえても意味無いのよね。能力で檻なんか折れ曲げちゃうから。」

そういうと、鈴奈は体系は普通の女の子と一緒になのに近くの檻の一本を引っ張り、簡単に取った。

「ほらね。松本家は全員肉体系能力だからこんなのも簡単に壊せるのよ。」

鈴奈はそう言いながら、棒をクルクル回し始めた。

「にしてもこれ、使えるかも。」

鈴奈は棒を回すのを止めた。

「それで、二人は何しにここに来たの？」

「ああ、誰かここに捕らわれている人がいるかと思ってね。一応来てみたんだけど。鈴奈以外は居ないようだな。」

「他の捕らわれている人はこの下の階の広いところに捕らわれているけど。」

「分かった。じゃあ行くぞ。」

という事で三人は地下四階の広い部屋に向った。

第二十八話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十九話（前書き）

すみません。ちょっと名前を考えていたら、時間が掛かってしまいました。

第二十九話

美羽 side

私は隼人と戦っていて苦戦していた。

「はあ、はあ、」

「美羽、もう終わりか？」

「別に。ただ、疲れただけよ。はあ、はあ、」

「そうか。だが俺は手加減をするつもりはない。」

「そう。でも私も疲れているからって力を抜くつもりはない!!」

私はそういうと、先ほどから持っていた雷神銃を隼人に撃った。

だが、撃った後を見ると隼人は居なかった。

「俺の能力を忘れたか？」

「がはっ、」

私は隼人の足で蹴飛ばされ、壁にぶつかった。

私はそのとき雷神銃を落としてしまった。

そして、隼人は私が落とした雷神銃を拾い、私に向けた。

「これでチェックメイトだな。」

「…どうして、私を殺そうとするの？どうして。」

「ごめん。本当に言えないんだ。」

隼人はそういつと引き金を引こうとした。

雷神銃は涼鬼原家しか使えないが、それ以外の人が使つと普通の銃と同じなのだ。

だから私は死を覚悟し、目を閉じた。

だが、銃は放たれなかった。

私は何故銃を撃つてこないのか気になり目を開けると、隼人の手が震えていた。

そして隼人は雷神銃を落とした。

「…撃てるわけがない。どうして、美羽を撃たなくちゃいけないんだ！！」

「隼人？」

隼人は泣いていた。

「俺はどうすれば良いんだ。俺は…」

「何やっているのかな隼人？」

「…良鬼、何しに来た。」

「いや、お前が裏切らないように監視していたんだが、やはりな。俺は殺せつと言ったはずだぜ。」

「俺に美羽を殺せと。そんなのできるわけがない!!」

「じゃあ、あの人たちがどうなっても良いんだね。」

隼人の兄はそういうと、ポケットからトランシーバーを出した。

「やめろ…」

「そんな事を言っても裏切ったのは隼人お前じゃないか。じゃあな約二百人の人たちの殺した罪として償うんだな。」

というトランシーバーを口の前に近づけた。

「やめろ—————!!」

隼人がそう叫ぶと、異変が起こった。

私と隼人の兄が突然吹っ飛ばされたのだ。

「何が起こったの？」

私は何が起こったのか分からなかった。

そして、隼人はずっとそのまま立っていた。

「隼人、何をしたんですか？」

私は立ち上がり、隼人に近づいて何をしたのか聞いた。

すると、隼人は私の質問には答えず、何故か笑った。

「ふ、ふあははははは。」

「隼人？」

「久々の外の感じは良いな。」

私は思った。これはもう、隼人の感じではないと。

「あなた誰。」

「おいおい、お前は俺の名前を忘れたのか。涼鬼原家当主、涼鬼原美羽。」

「だから、あなたは誰なの!!」

「未だに分かってないのかよ…。俺は右近神、フェスターだが。」

「フェ、フェスターですつて!!」

何故神の右腕で八神近家はっしんきんかの上位存在であるフェスターがこんな時に隼人に取りついて現れたんだ!!

「それはこいつの精神が危うかったからだ。」

「地の文を読むな!!」

私は『何故いきなり私が思った事を読むんだ!!』と思った。

また、フェスターは八神近家の上位存在である為、私たち八神近家当主でも逆らえないのだ。

「ところで、今はどういう状況なのか聞きたい。」

「えっと…って八重歯の長さが縮んでない？」

良く見ると、隼人の八重歯が縮んでいた。

「そりゃ俺がこいつに取り付けば吸血鬼を簡単に人間に戻せるからな。」

「じゃあ隼人はもう…」

「吸血鬼ではない。人間だ。」

「良かった〜」

ホツとした。隼人が吸血鬼から人間に戻ったのだ。

「あゝあ、良い雰囲気だが俺がそんなことで諦めると思つか。」

隼人の兄がいつの間にか近づいて来ていた。

「ほう。お前が良鬼か。」

「…貴様、隼人じゃないな。」

「ああ、俺は隼人じゃない。俺は右近神、フェスターだ。」

「そう。誰だか知らないが、俺達の邪魔をするやつは全員殺す!!」

そういうと隼人の兄は隼人、いやフェスターに向って能力を使った。

「くだらない。」

フェスターは避けようともせず、そのまま突っ立っていた。

そして、隼人の兄の攻撃をまともに受け、真つ二つになった。

だが、真つ二つになった体はすぐにくつついた。

「な、何だよその能力は!!隼人にそんな能力はないはずだ!!」

「確かにこれは隼人の能力ではないさ。この能力は俺の能力、いや俺の力さ。」

「能力ではなく力?」

「俺は八神近家の特殊な力、竹ノ宮家の七刀、清水家の八鎖針、涼鬼原家の五神銃、西松寺家の不神身、西條家の魔術神書、辻井川家の光神機、杉山醍家の溶岩神銃と氷結神銃、菅野家の悪魔神と天使神を全て使いこなせるのさ。」

「な、何だつて。」

「だからお前は俺が不神身を持っている限り絶対に勝てない。」

「ふざけるなあ!!」

隼人の兄はまた能力を使った。

「だから効かないって言ってるだろ。」

フェスターはまたも避けず、隼人の兄の攻撃が当たり真つ二つになった。

だが、またもや真つ二つになった体はくつついた。

「涼鬼原美羽、お前は七刀を置いて別のところに行け。ここに居ても邪魔だ。」

「大丈夫なんですか？」

「大丈夫だ。それにお前はもう一つやる事があるんじゃないのか？」

「ど、どうしてそれを!!」

「一応、俺はこいつの中にいるのでな。こいつの脳と共有しているのさ。」

「そうですね。とりあえず分かりました。」

私はフェスターの言う事を聞き、七刀をフェスターに渡した。

そして、私はフェスターの言ったもう一つのやる事、あの女、マリ
アードを殺すことだ。

「待っているよ。マリアード!!」

私はフェスターを分かれると独り言を言った。

第二十九話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十話

Outside

その頃、吸血鬼の女王、ベアトシッチリーター。マリアードは地下二階の自分の部屋の椅子に座っていた。

「な、何でこんなことになっているのだ!!!」

マリアードはこの地下のカメラを確認してたらずくに疑った。

「何故右近神、フェスターが今になって隼人の体に乗っ取ったんだ!!!」

マリアードは今まで予想通りに進んでいたが、フェスターが隼人の体に乗っ取ったことが予想外の自体になったのだ。

そう。マリアードは昔にフェスターと戦った事があって、そのときはマリアードが死にかけたのだ。

今から150年前、そのときの八神近家長はつしんきんかちやうと戦い、最初はマリアードが優勢だったが突然その男の意識がなくなり、別の人格が出てきたのだ。

それがフェスターだ。フェスターは百年に一度行なわれる家柄戦争の勝者の八神近家の当主に毎回体の中に入り、それから百年間その勝者の一族の当主に取り次いでいくのだ。

マリアードは最初、戦っていたそのときの八神近家長がフェスターになったとは知らずそのまま攻撃したが、フェスターに返り討ちにされたのだ。

マリアードは初めて負けた戦いなのだ。

「まずい、このままでは良鬼が!!」

だからマリアードはすぐさまトランシーバーを取り出した。

『マリアード様、今戦っているんですが。』

「良鬼!!今すぐそいつから逃げろ!!殺されるぞ!!」

マリアードは良鬼と話が出来ると、すぐに怒鳴りながら言った。

『は？殺される？吸血鬼なのに？』

「私はあいつに取り付いたフェスターと戦った事がある。そのとき私はそのフェスターと戦って死にかけそうになった。」

『な、何だって。マリアード様が死にかけたのですかあのフェスターと言っやつに。』

「ああ、そうだ。だから今すぐ逃げろ!!」

マリアードは良鬼に逃げるように言ったが、

『いえ、俺は逃げません。』

「貴様は死ぬ気なのか！！だから早く……」

『ここで、こいつを逃すと俺達は多分マリード様が企てた計画が失敗すると思います。だから俺が戦います。』

「そんなことでお前が犠牲になる必要はない！！だから逃げる！！」

マリードは椅子から立ち上がり、良鬼にそう言った。

『……マリード様、それは出来ません。だから、マリード様に最後に伝えたい事があります。』

「な、何言っているんだよ。最後に伝えたい事って、まさかお前は死ぬ気なのか。」

『マリード様が言うとおりならあいつは多分それほど強いのでしよ。』

「ああそつだ。だから……」

『だから、俺はマリード様の作戦を実行出来るようにこいつの間稼ぎします。』

「……分かった。」

マリードは良鬼に何を言っても良鬼はまげないだろうと思ったので諦め、良鬼の言葉を聞くことにした。

『それで、最後に一つだけ言っときます。』

「何だ。」

『俺はマリアード様が好きです。』

「良鬼、今のは…」

『ええ、俺の本心ですよ。だから、俺はマリアード様について行つた。マリアード様が好きでたまんなかった。だからこそマリアード様には生きて欲しいんです。』

「……一つだけ約束してくれ。」

『何ですか？』

「絶対に死ぬな。死なない程度で戦ってくれ。私はお前を失いたくないんだ。」

『分かりました。では、』

というとトランシーバーから良鬼の声が聞こえなくなった。

「りょうきイイイイイイイ！！！！！！」

マリアードはその場で膝から崩れ落ち、泣いていた。

「どうして、どうして私の言う事を聞いてくれないの？どうして。」

マリアードは良鬼を止めることが出来なかった事に悔しかった。

「良鬼だけずるいよ。私だって……」

マリアードはその後小さな声で何かを言っていた。

「…そうよ。良鬼の為にも絶対に成功させなければならぬ。絶対に。」

マリアードは立ち上がり、そう言った。

「さて、私も行きますか。」

マリアードはそういつと部屋から出て行くとした。

そのとき、突然部屋のドアが開いた。

「誰だ!?!」

マリアードはドアが突然開いたのでドアの方を向いた。

「誰かって、それはあなたが一番知っている人物よ。ベアトシツチリーター。マリアード。」

マリアードの前に現れたのは、髪がツインテールでマリアードが一年間メイドとして使っていた女性、浅野美羽だった。

第三十一話（前書き）

美羽sideでも良かったんですが、あえてのoutsideにしました。

第三十一話

Outside

「久しぶりね。ちょうど7年ぶりかしら。涼鬼原美羽様」

マリアードは美羽にむかってそう言った。

「そうね。それと今の私は涼鬼原美羽じゃなくて浅野美羽なの。」

「そうなんですか。」

「それより、メイドの言葉使いでなくても良いんじゃないかしら。もうメイドでも何でも無いのだから。」

「確かにそうかもね。なら元の言葉使いに戻すか。」

マリアードは美羽が言ったことにより、普通の言葉使いに戻した。

「それで、私に何のよう?」

「そんなの分かっているんじゃないの。」

「それもそうだな。私はお前の一族を粉々にさせたんだもんな。あいにく、私を殺しに来たこととかかな。」

「ええ、その通りよ。」

「やはりな。でも、これで抵抗できるのかしら。」

マリアードは指をパチインと鳴らすと、数十人の人たちが出てきた。

「まさか、この人たちって!!」

「そうさ。こいつらはお前の家で働いていた元メイドと執事達だ。お前はこいつらと戦えるのか？」

「チツ、」

「さあお前達よ。美羽様を囲みなさい。」

マリアードはまた指を鳴らすと、今度は元メイドと執事達が美羽を囲もうとした。

「そう簡単に、」

美羽は何かを言おうとした瞬間、足に異変が起こった。

「っ!?!?」

美羽は急に足に痛みを感じたのだ。

「チツ、やはり能力の調整が必要か。」

そう。今まで良鬼によって切られた足首より少し上の部分は能力によつてくつつけていたが、美羽もこんな能力の使い方をしたことが無かったので痛みを感じたのだ。

「それは良鬼がやった傷か？」

「そうよ。だから何なの？」

「いや別に。でも、そんな事していたら囲まれてしまったわよ。」

「しまったー!!」

美羽は足に痛みを感じたせいで、囲まれてしまった。

「チツ、囲まれたか。」

「さて、どうしようかな。」

マリアードは美羽を囲んだのでもう逃げる方法はないだろうと思っていた。

(なんてね。まだ私にはこれがあるのだから。)

そう。まだ美羽には五神銃があったので、美羽はそのうちの地神銃を取り出した。

「マリアード、あんたバカになっただんじやないの？」

「は？何を言っているんだ？この状況でどうやって…」

「じじするのね。」

美羽はそういって地神銃を床に向けて発砲した。

そして、パンッと鳴った。

すると、美羽が持っていた地神銃が吹っ飛んだ。

「な!？」

美羽は何が起こったのか分からなかった。

「私とその銃のことを考えてないと思ったのか。」

「まさか、その銃で地神銃を撃つたと言うのか？」

「その通りだ。さすが、美羽様だな。」

そう。美羽が地神銃で床を撃とうとした時、とっさにマリアドが銃を持ち、美羽の地神銃だけを撃つたのだ。

「分かっただろ。美羽様は私に勝てない。」

「くっ、」

「さてお前達、美羽様を捕らえろ!！」

マリアドがそういうと、美羽は元メイドと執事達に縄と能力を無効にする手錠で捕らえられた。

美羽は他の五神銃で逃げようとしても、多分またさっきの銃で地神銃を吹っ飛ばされたように止められると思ったので諦めた。っていつか無理だった。五神銃は縄と手錠を付けられた時に全部没収されたのだから。

そして、マリアードは美羽に近づいた。

「どう？信頼していた元メイドに裏切られ、捕まるのは？」

「ほんと最悪だわ。こんな屈辱。私はあんたがいなければ普通に今の私は居なかったはずだから。」

美羽は睨み付けながらそう言った。

「怖い怖い。だが、そんなに私を睨み付けてどうするのさ。」

「……………」

「無言かよ。まあ、良いわ。どうせ美羽様は私に美羽様の血を吸われて吸血鬼になるのだから。」

「…今何て言った？」

美羽はマリアードの言葉に疑った。

「だから、美羽様の血を私が吸い、美羽様を吸血鬼にするって言ったの。だから美羽様、おとなしくしてください。」

マリアードは途中からメイド時の言葉使いに戻り、美羽に言った。

「私は吸血鬼になりたくない！！」

美羽は縛られていながら暴れだした。

「暴れないでください。そのせいでなかなかうまくいかないではないですか。」

「その言葉遣いをやめろ!!!」

「いやです。そのほうが美羽様にふさわしいので、それとこの二人、暴れている美羽様を抑えてください。」

「「分かりました。」」

マリアードに頼まれた二人のメイドは美羽を暴れないように抑えた。

「は、放せ!!! 私は吸血鬼になんかになりたくないんだ!!!」

「さて美羽様、おとなしくして下さい。すぐに終わりますから。」

そういうと、マリアードは美羽の首筋に近づいてきた。

「誰か、助けて……」

美羽は涙が少し流れてながらそう言った。

その時!!!

バン!!!

突然、マリアードの部屋のドアから開く音がしたのだ。

「誰だ!!!」

マリアードは普通の言葉使いに戻し、ドアの開いた方を向いた。

「分かっていたんだが、やっぱりこういう状況になってたか。」

ドアの所には隼人と隼人の肩に抱えられていた良鬼が居た。

第三十一話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十二話

Outside

「で、あそこに捕らわれている人達が居るんだろっな？」

「ええそっよ。私も最初はおそこに捕らわれていたから。」

「でも竹宮副リーダー、どうやってあの部屋に向ったの？」

「うーん…どうしよっかな？」

地下四階の上の通気口に龍哉、優子、鈴奈が居た。

二人は地下四階にある一つだけ広い部屋に向っていた。

「雨宮君、まだ能力は使えるのかな？」

「ちょっと無理がありますね。地下一階、地下三階の吸血鬼を全員凍らせたんですから相当能力を使ってしまったから。せいぜい二人くらい凍らせられるぐらいしか…」

「やはりそうか。じゃあ、どうするか…」

龍哉はどうやって約二十人位の吸血鬼をどうするか考えていた。

「龍哉さん、私が何とかしましょうか？」

すると、ここで鈴奈が龍哉にそう言った。

「でも、大丈夫なのかい？吸血鬼は肉体能力が強くなっているからいくら鈴奈君でも大勢でかかって来たら…」

「確かにそうかも知れませんが、でも、一応私は松本家当主なんだから大丈夫だと。」

「その自信はどこから来るのか分からないが、とりあえず分かったやってみる。」

「了解。」

そういうと鈴奈は一人だけ通気口から出て、吸血鬼にわざと見つかった。

そして吸血鬼はすぐに鈴奈の方を向き、鈴奈に襲い掛かってきた。

「まったく、自分からやるって言ったけど、めんどくさいったらありやしないわね。」

そんな事を言いながらも、鈴奈は先ほど地下三階にあった牢屋の檻の棒をしっかりと握り、能力で力を強くして振りました。

そして数分後、あっという間に吸血鬼は遠くに吹っ飛ばされていた。

「…どんだけの力で吹っ飛ばしたのよ。」

「うーん、吸血鬼だって言うからいつもより少し強めの力で棒をまわしたんだけど、ちょっとやりすぎちゃったかも」テヘッ

「…まあ良いけど。とりあえず中に入ってみんなを助けましょ。」
とりあえず、三人は扉を開けた。

開けるとそこには鈴奈の言うとおり、約二百人の人質が居た。

扉を開けると中から『おい、扉が開いたぞ!!』、『誰かが助けに来たのか!?』、『本当だ。やっとここから出られる!!』などとみんなが騒ぎ始めた。

「みんな静かにしろ!!」

龍哉は大きな声で言い、人質の人たちは静かになった。

「今外に出るのは危ない。まだ吸血鬼が近くに居るのでね。だからもう少し待ってくれ。」

龍哉がそう言ったら、人質の人たちはまた騒ぎ出し、『なんだよ。じゃあ助けに来た意味が無いじゃないかよ!!』、『結局逃げられないんだ…』、『じゃあ何しに来たんだよ!!』っと言っていた。

「だから、静かにしろ!!まだ話は終わっていない!!」

龍哉はまた大きな声で言い、また静かになった。

「別に助からない訳ではない。まだ、俺達は仲間が居るからせいっらが吸血鬼のリーダーを倒している。だからそれまで待ってくれ。」

人質の人たちはとりあえず龍哉を信用する事にした。

「じゃあ、雨宮君は少し休憩したら能力は戻るか？」

「ええ、少しくらいなら。」

「なら鈴奈君、すこし扉の外で吸血鬼が来ないように見張りをしていてくれるかな。」

「分かりました。」

という鈴奈は扉の外に出て行った。

(さて、こちらは何かあったが、向こうはどうなっているか…)

龍哉は美羽と隼人がどうなっているのかを思っていた。

第三十二話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十三話

美羽 side

私はドアの方を見て驚いた。まさか本当に誰かが来るとは思ってたな
かったから。

「き、貴様、良鬼に何をした!!」

私の首筋を噛もうとしたマリードは私から離れ、はや…フェスタ
ーの方を向いた。

「別に、ただ気絶させたただけだ。」

「本当にそれだけか？違うだろ。」

「ああ、それだけではないさ。良鬼を吸…血…鬼…から元…の人間に戻した
さ。」

「やはりそうか。あの時だって私以外の吸血鬼を人間に戻したんだ
からな。」

え!?!? どういうこと? フェスタは吸血鬼を人間に戻せるの?

「くっ、」

「それにしても涼鬼原、お前は何かやっているんだ? こんなことで捕
まるなんてな。」

「そ、それは…」

「まあ、だいたい分かるから良いけどな。どうせ、そこにいる涼鬼原の元メイドと執事達に囲まれてそいつらに攻撃したくなかったって感じだろ？」

「うっ、」

思いっきり当てられた…。

「どうやら凶星のようだな。なら、俺がやる事は簡単だな。」

「まさか貴様、アレを使うつもりか!!」

「ああ、その通りさ。」

そついうとフェスターは何かを唱え始めた。

「元人間だったものたちよ。世界を安定する為に元の姿に戻れ!!」

「お前達逃げろ!!」

「シャイニングワールド光神世界!!」

フェスターがそう唱えると、部屋の中が光に包まれた。

そして数分後光は消え、部屋が見渡せるようになった。

「な、何が起こったの？」

私はフェスターが何をしたのか分からなかったが一つだけ変わっている事があった。

元メイドと執事達が倒れていたのだ。

そしてフェスターは私の方に近づいて来て、私の縄と手錠を外し始めた。

「まったく、お前は余計なことを増やしやがって。」

「すみません。」

「まあ良いさ。とりあえず外したぞ。」

フェスターは手錠と縄をナイフで切って私を助けた。

「ありがとう。ところでフェスター、さっきは何をしたんですか？」

「ああ、それは吸血鬼だった元メイドと執事達を人間に戻したのさ。」

「そんな事が出来るのですか？」

「まあな。でも、まだ終わった訳じゃないぜ。」

「どっぴいっぴいっ。」

「周りをよく見てみな。」

私はフェスターにそういわれ、周りを見渡した。

うーん、特に変わった事が…って

「マリアードが居ない。」

「そういうことだ。多分ここに隠し部屋でもあつてそこから逃げたんだろ。」

「そう。」

「だから、俺はこれからあいつを倒しに行く。それでお前はみんなと合流でもしてる。」

フェスターはそういつたが私は…

「すみません。そのことなんですが、あの女を倒すのを私にやらしてくれませんか？私が一人でけりをつけたいんです。」

「しかし…」

「さつき見たいにはなりませんからお願いします！！」

私は本気だった。あの女を倒すのは私自身で終わらせたかったのだ。

「…ちゃんと対策はあるんだろうな？」

「ええ、あります。」

「分かった。じゃあ俺もついて行くが何もしないからな。」

「分かりました。」

「とりあえず、隠し部屋を探しますか。」

という事で、私とフェスターは隠し部屋を探した。

「おい、見つけたぞ!!」

数分後、フェスターが隠し部屋を見つけた。

「結構簡単なところにあつたわね。」

「そうだな。ところで、五神銃は持ってるか？」

「さっき奪われたけど、今は持っているわ。」

「そうか。じゃあ開けるぞ。」

という事で私とフェスターは隠し部屋のドアを開けた。

するとそこにはマリアドが居た。

「チッ、やっぱり気づかれたか。」

「そりゃそうでしょ。まあ、少し時間が掛かりましたが。」

「で、私をどうするつもりなの？」

「俺は何もするつもりはない。」

「どういうことだ？」

「私が相手をするって事よ。」

「…なぜ、フェスターは戦わない。お前なら簡単に私を倒せるのに。」

「まあ、普通そう思うよね。でも、これじゃないと私が戦う意味が無い。」

「私が頼んだの。私はこの戦いを自分で終わらせたいから。」

「そう。これは涼鬼原家としての戦いで、私の戦いなのだ。」

「なるほど。じゃあ、お前は何故ここに居るんだ？」

「俺はただの傍観者さ。たとえ涼鬼原が負けたとしても何もしないわ。」

「そう。まあ、どうでも良いけど。」

「じゃあ、そろそろ始めない？私は早くテメエを倒したいんだけど。」

「急に言葉使いが変わったな。」

「よく言われる。じゃあいくぞ！…！」

そして、私とマリアードの最後の戦いが始まった。

第三十三話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十四話（前書き）

バトルシーンが短くなってしまった…

第三十四話

美羽 side

私はすぐに、五神銃の一つ風神銃を取り出し、マリアードに撃った。

「七年前に咲様があった同じ攻撃が当たるか!!」

マリアードは七年前に当たってしまった風神銃の弾を避けた。

「やはり、七年前にお母さんがやった攻撃は効かないか。」

「そういえば咲様で思い出したけど美羽様、咲様を死にかけるところまで追いやったようじゃないか。」

「どっつしてそれを!!」

何故、お前は私がお母さんを殺したことを知っているんだ!!

「私はいつでも涼鬼原家の情報を手に入れてたのでね。いつでも涼鬼原家のみんなを吸血鬼にする為にね。」

「貴様はどこまで、ってちょっと待て。さっき、なんて言った？」

「ん？涼鬼原家の情報を手に入れていたことか？」

「違う!!その前の話だ!!」

「美羽様が咲様を死にかけるところまで追いやったって言ったけど？」

「え、お母さん生きてるの？」

「あら、知らなかったのかしら咲様は生きている。」

「嘘、でしょ？じゃあ今、お母さんは生きてるの？」

「ええ、隠れて生きてるはず。」

「そうなんだ…。じゃあどこに居るか分かる？」

「そこまで分からない。」

「そう。ならば後は聞かない。じゃあ、戦いを再開しましょうか。」

「そうだな。無駄話になってしまったな。じゃあ今度はこちらからいくぞ！―！」

そういうとマリアードは姿が消えた。

「じつちだよ。」

「うぐっ、」

私はマリアードの足でわき腹を蹴られて吹っ飛ばされ、風神銃を落としてしまった。

「私のペースに合わせられるかな？」

マリアードはまたもや姿を消し、姿が見えたときには私はまた蹴られて吹っ飛ばされた。

「逃げる隙なんて与えないよ!!」

マリアードは姿を消し、私が宙に浮いている所にマリアードの足で私の腹を思いつきり地面に叩きつけた。

「がはっ、」

「おいおい、まさかこんなことで終わりじゃないよ?」

私の腹の上に足を乗せながら言った。

「そうね。私がそんなことで終わるわけないでしょ。」

私は右手でポケットに付けていた五神銃の一つ水神銃をマリアードに気づかれないように撃とうとした。

「っ!?!?」

マリアード私が水神銃を撃つ寸前で避けた。

「チッ、外したか。」

私は弾を外したことに舌打ちした。

そして弾は天井にぶつかり、弾が落ちてきた。

それをマリアードは拾った。

「ほう。吸血鬼ということでも銀の弾か。確かに、私に当たったら私は死ぬだろうな。だがそんなの避けられればどうでも無いんだよ！」

マリアードが私をまた蹴ろうとしたため、私は動こうとした。

（か、体が動かない！？）

私は体が動かず、マリアードの蹴りをまた喰らった。

「ぐはっ、」

こんどは風神銃を落としたところに吹っ飛ばされた。

「どうやら私に蹴られまくって、体がうまく動かなかったようだね。」

「……………」

「おや？今度は言葉も出せないようになったのかしら？」

マリアードは微笑んでいた。

そしてマリアードは私の耳の近くで言った。

「ねえ、美羽様を助けてあげる。私がああなたの血を吸って吸血鬼になるって言うなら。」

「……………」

「良い案だと思わない。そうすれば美羽様は助かるのだから。」

マリアードは私に救いの言葉をかけてきた。でも私はといつと…

「あははははははは。」

私は可笑し過ぎて笑っていた。

「何がおかしい。」

「突然、変な話をするから笑っただけよ。」

「どづいづことだ!！」

「何が、私を助けるだ。どうせ、私を奴隷のように扱っただけだろ。」

「…ふ、分かっているのか。」

「だいたい、そんなの分かるわ。」

「そう。なら死ね。」

そういつとマリアードはまた蹴ろうとした。

「速さを0に。」

私は、マリアードの足の速さを0にした。

「っ！？あ、足が動かない。」

「ええ、動くはずがないわ。私が能力で速さを0にしたのだから。能力を解除するまで動けないわよ。」

「な、なんだって。」

私はやっと蹴りの痛みが治まったので、マリアードから少し離れ風神銃を向けた。

「これで終わりね。」

私は、マリアードに放とうとした。

だがそのとき、私の前に誰かが立ちふさがった。

「マリアード様を殺さないでください。」

私の前に立ちふさがったのは隼人の兄だった。

第三十四話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十五話

美羽 side

「何？私の邪魔をするの？あなたはもう人間でしょ。なのに何故？」

「マリアド様は死にかけた俺を救ってくれた。だから、マリアド様を殺すって言うのなら俺を殺してからにしろ。」

「良鬼、どうして私なんかの為にこんなことが出来るの？私はあなたを救ったて吸血鬼にしたのに。」

「確かに、俺が吸血鬼にされたことによって俺の人生が変わった。けど、俺はマリアド様について行った。その理由は分かりますか？」

「まさか、それってトランシーバーの時に言った。」

「そうです。俺はマリアド様が好きなんです。だから、マリアド様を殺されたくない。」

「良鬼……」

隼人の兄は途中から涙を流しながら言った。

そして、隼人の兄は私の方に向いた。

「さあ、マリアド様を殺すって言うなら俺を殺してからにしてく

ださい。俺は死ぬ覚悟はできています。」

「……………」

私は風神銃を向けたままだったが、撃つ事はしなかった。

そのとき、パチパチと音がした。

私は音が鳴っている方を見ると、フェスターが鳴らしていた。

「いや、面白いものを見せてもらったね。」

「何がおかしいんだフェスター。」

マリアードがフェスターを睨みつけた。

「別におかしいとは思ってないよ。それで、一つ提案したいんだけど。」

「提案？」

「マリアード、お前も元人間なのは知っている。だから、人間にならないか？」

「人間にならないって言ったら？」

「涼鬼原がお前を殺すだろう。どちらを選ぶかはお前に任せる。さあ、どちらを選ぶ。」

マリアードは悩み始めた。

「マリアード様、もうやめましょ。俺はマリアード様に死んで欲しくないんです。」

「でも、私には…」

マリアードが何かを言おうとした時、隼人の兄がマリアードを抱きしめた。

「そんなのどうでも良いじゃないですか。」

「良鬼…」

「それに、俺はマリアード様からまだ俺の告白の返事を聞いてません。それでどうなのですか?」

「私は…」

マリアードは両手を隼人の兄の背中にまわした。

「私は、良鬼のことが好きだ。そして、生きたい。」

マリアードは泣きながらそう言った。

「じゃあ決まりだな。ところで涼鬼原、別に生かしても良いよな?」

「もう良いですよ。こんなのを目の前で抱きしめられたら私も殺す気になれませんですから。」

私は風神銃をポケットにしまった。

「そう。じゃあ始めるぞ。」

フェスターはそういうと先ほど唱えた言葉をまた唱え始めた。

「元人間だったものたちよ。世界を安定する為に元の姿に戻れ！」

「シャイニングワールド光神世界！！」

フェスターがそういうと、部屋が光で包まれた。

数分後、部屋に包まれた光は消えた。

「ってあんた達…光に包まれて居る間に何やってるのですか!？」

私は周りの視界が見えるようになると、驚いた。

隼人の兄とマリアドがキスをしていた。しかもディープキスという。

そして、私がそう言ったら二人はキスをやめた。

「何って美羽様、キスだけど？」

「そんなの分かってますよ!!でも、少しは場所を考えてくださいですよ!!」

「ええ」

「ええ、じゃないんですよ!!」

もうちょっと羞恥心を持って欲しいんですけど!!

「なんでそんなにむきになっているんだ?もしかして美羽様はうらやましいと思ってるのか?」

「な、私はそういう訳じゃなくて…」

「じゃあ、好きな人が居るのか?」

「な、何を言っているのか…」

「ああ、涼鬼原には好きな人がいるぞ。」

「な、何故フェスターが知っているのですか!?!」

「っていうか、何で言っちゃうの!?!」

「だから言っただろ。俺は隼人の脳内を共通しているって。まあ、隼人は共通しているとは知らないが。」

あ、そういえばそうだった。

「美羽様、一体誰なんですか?」

「そ、それは言える訳が…」

「涼鬼原が好きなのはこいつだぞ。」

フェスターは指で自分を指した。

って、言わないでくださいよ!!

「ひょっとして浅野さんが好きなのって隼人なのか？」

「そうだ。まあ、あいつは気づいてないがな。」

「ちょっと待って、これって隼人に伝わってないよね？」

「大丈夫だ。俺と入れ替わった時から隼人は意識がないから、今俺が言っている事もあいつには伝わってないから。」

「よかった〜」

私はホッとした。こんなことで隼人に知られてたら困るから。

「さて、そろそろ俺は消えるとするか。」

「消えるってどういうこと？」

「隼人に体を返すのさ。じゃあな。」

というと、隼人の体は倒れた。

第三十五話（後書き）

多分、次回で第二章が終了する予定です。

第二章を書き終わったら、第三章に入る前に、雨宮、天壤、良鬼、マリアード、以外の登場人物を書き直します。

また、前に書いた能力の紹介は書きませんので。

最終話

隼人 side

「うん…、あれ？ここはどこだ？」

俺は目が覚めると訳の分らないところに居た。

「あ、やっと目覚めたですね。」

目が覚めてすぐに美羽が目に入った。

「美羽、ここはどこなんだ？確か俺は美羽と戦っていて、その後良鬼が出てきてその途中から記憶がないんだが…。しかも、八重歯も元に戻ってるし。」

「えつとですね…」

私は隼人に何が起こったのか全て話した。

…最後の私が隼人が好きなことの話以外を。

「そういうことがあったのか。それで、マリアードは人間に戻ったは分かったが、他の吸血鬼はどうなったのだ？」

「そういえばそうですね。マリアード、今は他の吸血鬼がどうなったのか分かりますか？」

「ああ、私が人間に戻ったって言うことは師従関係は消えるから全員、人間になっっているはずだ。」

「そうですか。ってちょっと待て、人間に戻っていることは優子が凍らした人もですか!？」

「そうよ。早く溶かさないと死んでしまうと思いますが?」

「美羽!!早く優子に電話しろ!!」

「分かった!!」

というと、美羽は電話をし、俺は隣から聞くことにした。

『美羽、そっちはどうなっ…』

「今はそんな事は良いから、今は凍らせた吸血鬼達を溶かして!!早くしないと死んじゃうから!!」

『え!?!?どういうこと?』

「今、吸血鬼達は全員、人間に戻ったの。だから早く溶かして!!」

『分かった。ちょっと待てて、今溶かしたわよ。』

「ふう、良かった」

『で、そっちは終わったようね。』

「ええ、終わったわよ。そっちも人質は居たの?」

『居たわ。こっちも終わったわ。』

「そう。」

『じゃあ、私たちは先に人質だった人達と外に出ているから外で待ち合わせましょ。』

「分かった。じゃあ、瑞希には私から言っとくね。」

『OK。じゃあまた後で。』

というと、美羽は電話を切った。

「で、向こうも終わったのか？」

「終わったそうよ。じゃあ私は瑞希に電話するから。」

美羽は今度瑞希に電話し、またもや俺は隣から聞くことにした。

『美羽、いきなりどうしたの？』

「これ言つと瑞希は怒るかも知れないけど…」

『何？』

「もうそこに居てもみんな来ないから。吸血鬼が全員人間に戻ったもので。」

『はあ！？じゃあ私がこっちに来たのは何だったの！？』

「だってしょうがないじゃん。もう終わっちゃったことですし。隼人も人間に戻れたのだから良いじゃないですか。」

『分かったわよ！もう。』

という瑞希が電話を切ってしまった。

「電話切られた。」

「まあ瑞希は呼ばれたのに何もしなくて終わったらマジで怒るからな。それで俺が何回能力で関節を曲げられたことか…」

「…今までよく一緒に居られたですね。」

「まあな。ところで、あいつら何とかしないか？さっきからずっとイチャついているんだが…」

「確かに、一度マリアードに聞いてからずっとイチャついているからですね…」

俺と美羽は良鬼とマリアードのイチャつきぶりに呆れていた。

「良鬼、そろそろやめてくれないか？俺達まで恥ずかしいんだが…」

「あ、ごめん。」

良鬼はそういつとマリアードから離れた。

そのとき、マリアードは何か足りなそうな感じをしていたが…、だ

「だったら誰も居ない所でやってくれ。」

「私も頑張らないと。」

「…美羽、お前も何言っているんだ？」

「な、何でも無いから。独り言だから絶対に気にしないで!!」

何故そこまでムキになっているんだ？

「まあ良いや。とりあえずみんな外に出るぞ。」

ということ、俺達は外に向った。

そのとき美羽が『隼人が鈍感なのがいけないでしょうが。』と聞こえたんだが、鈍感って何のことだ？

数分後、俺達は外に出た。

外に出ると、優子、龍哉おじさん、鈴奈、天壤、そして仁王立ちをしている瑞希が居た。

また、瑞希以外のみんなは瑞希に怯えてた。

まあ、こんな姿を知っているのは俺と信之さんくらいだから龍哉おじさんもしらないのだ。

しかも、この瑞希を止められるのは瑞希の怒りが収まるまでこのま

まなのだ。

「あの〜瑞希さん？何で怒っているのでしょうか？」

「別に。私は怒ってないけど？」

「ね、ねえ隼人、瑞希ってマジで怒るところなるの？」

「…うん。って美羽、俺の腕を掴まないでくれる？今俺の腕を捕ま
れると…」

「ねえ美羽ちゃん、何で隼人の腕を掴んでるのかしら？」

「えっとそれは…」

「それと隼人、何で美羽ちゃんに腕を掴まれてにやけてるのかしら
？」

「にやけてないから！…ちよつと瑞希落ち着け…」

「二人とも問答無用じゃあ！…！」

「「ぎゃあああああああ！…！」」

俺と美羽は両腕を瑞希のサイコネシスで腕の関節を変な方向に曲
げられ、『ボキッ』と音が鳴った。

「じゃあ、次は足を。」

「「もう止めて！…！」」

俺と美羽は涙目になりながら言ったが、結局足の関節も変な方向に曲げられ、気絶してしまった。

o u t s i d e

「ふう、スツキリした。」

隼人と美羽を気絶させた後、瑞希は元に戻っていた。

また、そこに居た優子、鈴奈、龍哉、天壤、良鬼、マリアードは今後、瑞希を怒らせないほうが良いと思っていた。

ちなみに、人質だった人たち、吸血鬼だった人たちはみんな龍哉が連絡して呼んだ五十台のトラックで全員家に帰らせた。

「ところで、二人はこの後どうするんだ？」

龍哉は今の空気を変える為に、良鬼とマリアードに聞いた。

「俺とマリアードは二人でのんびり暮らすよ。まだ俺は婚姻届を出せる年齢じゃないけど同棲は出来るからな。」

「そう。じゃあ、俺の別荘を貸そうか？」

「良いのですか？」

「別にかまわないよ。もう二年以上も行っていないから。」

「じゃあ龍哉おじさん、別荘を使わせてもらいますね。」

「ああ、その車で送ってもらえるから。」

「分かった。じゃあ隼人にまた今度会おうなつと伝えといてくれ。」

「分かった。伝えておく。」

というとき良鬼とマリアードは車で龍哉の別荘に向った。

「ところでさ、あんた誰？」

瑞希は良鬼とマリアードが行った後、鈴奈に向かって言った。

「私？そっぴいばあなたにはまだ名前を言ってなかつたね。私の名前は松本鈴奈。松本家当主でもあるわ。でそっちは…」

「（まさか、こいつが二年前に隼人と同居していた女！？）私は清水瑞希、清水家当主よ。」

「（こいつが隼人が言っていた幼馴染！？絶対に隼人は渡さないんだから！！）そう。よろしく。」

「ええ、こちらこそよろしく。」

瑞希と鈴奈は目が笑ってなかつた。

だが、鈴奈はこのとき知らなかつた。瑞希以外にも隼人を狙っていることを。

「で、この二人はどうするの？」

「とりあえず、みんなで車に運んでくれ。乗せたら空港に向うから。」

「でも、気絶している二人を飛行機に乗せてくれるの？」

「それは大丈夫だ。じゃあ、二人を乗せるぞ。」

という事で五人で隼人と美羽を車に運び、自分達も車に乗って空港に向った。

隼人 side

あれから三日後、俺は能力都市の病院で入院していた。

「美羽、何で俺達こうなっているんだろうな……」

俺は同じ病室で隣のベットに居る美羽に話しかけた。

「そうですね。怪我もなく終わるかと思っていたのに入院しているですもんね……」

「にしても、久々に瑞希の怒りを見た気がする……」

「ところで隼人、前にも瑞希はあんな風になったのですか？」

「うん。もうこれで何回目かも分からないくらい……」

「…よく今まで生きていたわですね。」

「俺もそう思う。」

「「はあ……」」

俺と美羽は同時にため息をついた。

また俺達が目が覚めたのは一昨日で、目が覚めてすぐ目に入ったのは瑞希、優子、そして鈴奈だった。

そして、瑞希はすぐに俺と美羽に謝った。さすがに自分でも反省していたらしい。

まあ、毎度俺は瑞希に関節を能力で曲げられるたんびに瑞希に謝れているんだけど。

だったらそんな事をするなよつと言いたいが、そんな事を言っても意味が無いので言わないのだ。

それともう一つ、何故鈴奈が居るかというのは、どうやら鈴奈も能力都市に住む事になったらしい。しかも俺の隣だと言う。

まあ、他にもいろんなことがあったが、他はどうでもいい話なので言わないでおく。

「で、私達はいつ退院できるのですか？」

「最低でも一ヶ月はかかるから。俺は何度も受けているから分かるけど。」

「そんなにですか!？」

「ああ、一番長くて三ヶ月だったからな。」

「ほんと、よく生きていましたですね…」

「まあ、今回は良かったよ。いつでも話相手がいたから。」

「そうですね。一人だったらつまらなかったですからね。でも、早く退院したいですね。」

「そうだな。今回は早ければ良いけど…」

俺達はその後、雑談を話し始めた。

Outside

元『ユニオン』の本拠地のビルで信之が誰かと電話していた。

「珍しいな。お前から電話がくるなんて。」

『確かにそうね。』

「で、何のようだ?」

『マリアードを人間にしたっていう情報を知ったから本当かどうか確認したかったの。あなたなら知っているでしょ。』

「まあな。確かにその事は本当だ。」

『そう。もう私は怯えながら過ごさなくて良いという訳ね。』

「そうなるだろうな。」

『ところで、私の子は元気になっているかしら？』

「ああ、しているさ。まだ会わないのか？」

『ええ、まだ会わないわ。』

「そうか。」

『ところで最近、菅野家かんのの様子がおかしいことを知っているかしら。』

「いや知らないが、菅野家がどうしたんだ？」

『何をしようとしているのか知らないが、何か嫌な予感がするんだ。』

「分かった。俺も警戒しておく。」

『私も情報を知ったらお前に教える。』

「分かった。お前も警戒しておけよ。涼鬼原咲」

『今は浅野咲だ。じゃあ切るぞ。』

というと、電話を切った。

「菅野家か。また、大変なことが起きそうだな。」

信之はそういってどこかに行ってしまった。

最終話（後書き）

以上で第二章は終了です。

次は第三章の登場人物と用語集を載せます。

もう出来ていますので最終確認したら載せます。

第三部 登場人物&用語集(前書き)

西條の紹介を少し付け足しました。

第三部 登場人物&用語集

竹宮家 (たけみや) 「旧名字 竹ノ宮 (ちくのみや)」

竹宮家当主は代々、七刀しちとうを受け継いでいる。

竹宮家の全員の能力は空間系、風系能力を持っている。

また、竹宮家当主は現在八神近家はっしんきんかの長、八神近家長はっしんきんかちようで八つの一族のリーダーである。

竹宮 隼人 (たけみや はやと)

竹宮家当主。

よく使う能力は空間切断、テレポルト、旋風制御である。

旋風制御はあらゆる風の向きを自由自在に操り、竜巻や海を使って渦潮などをつかうことが出来る。

竹宮家当主としてしっかり頑張っているのだが、風哉から見ると、まだ当主としての実感がないと思われる。

竹宮「竹ノ宮」 風哉 (たけみや「ちくのみや」 ふうや)

前竹宮家当主で、隼人の父親である。

また、十年前に起きた家柄戦争の勝者である。

能力は不明で、隼人も見た事がないらしく、当主の時もあまり能力を使っていなかったらしい。

竹宮 龍哉 (たけみや りゅうや)

能力都市統括理事の一人で、風哉の弟で隼人の伯父にあたる。能力は風力爆発で能力を使うと半径二〇〇m全域まで全てを吹っ飛ばしてしまう能力。だが、自分で能力の範囲を決められなく、絶対に半径二〇〇mまで吹っ飛ばしてしまうのだ。

清水家 (しみず) 「旧名字 清水 (きよみず)」

清水家当主は代々、八鎖針はっさしんを体内に受け継いでいる。清水家の全員の能力はサイコ系、心理系能力を持っている。

清水 瑞希 (しみず みずき)

清水家当主。

良く使う能力はサイコキネシスと思考操作である。思考操作は相手の思考を読むことができ、操ることも出来る。隼人とは幼馴染で隼人のことが好きでもある。

清水 信之 (しみず「きよみず」のぶゆき)

前清水家当主で、今は能力都市統括理事長である。能力は未来予知で、先の未来が見える。

涼鬼原家（りょうきばら）

涼鬼原家当主は代々、五神銃ごしんじゅうを受け継いでいる。

涼鬼原家の全員の能力は物質干涉系、物質作成系能力を持っている。名字が浅野なのは七年前に涼鬼原で起こった吸血鬼の事件の後、涼鬼原は吸血鬼に見つからないように浅野と名字を変えたのだ。

浅野「涼鬼原」 美羽（あさの「りょうきばら」 みつ）

涼鬼原家当主。

良く使う能力は空間速度である。

髪は茶髪で、いつもツインテールの髪型をしている。
戦うと何故か表情が変わり、冷酷で残酷な女になる。
また、隼人のことが好きでもある。

浅野「涼鬼原」 咲（あさの「りょうきばら」 さき）

前涼鬼原家当主。

能力は不明。

四年前、実の子供の美羽によって刺されたが、まだ生きていてどこに住んでいるのか知らない。

松本家（まつもと） 「旧名字 西松寺」
さいしよ（じ）

松本家当主は代々、不神身ふしんみを体内に受け継いでいる。

松本家の全員能力は肉体系能力を持っている。
また、松本家は前回の家柄戦争まで八神近家長だった。

松本 鈴奈 (まつもと すずな)

松本家当主。

能力は良く肉体強化を使う。

肉体強化は自分の肉体を強化でき、ドアなども簡単に壊せたりできる。

鈴奈は十年前、前松本家当主で母親の松本麗華がやった水本家を滅ぼしたことが許せないでいる。

実はというと、隼人に何度か会っていて、隼人に一目惚れしたらしい。ちなみに現在も続いている。

松本「西松寺」 麗華 (まつもと「さいししょうじ」 れいか)

前松本家当主。

能力は不明。

麗華は十年前、竹宮家の傘下、水本家を滅ぼしたことにより、当時の竹宮家当主、竹宮風哉によって殺された。

西條家 (さいじょう)

西條家当主は代々、まじゅつしんしょ魔術神書を授かっている。

西條家は八神近家の中で唯一能力を持っていない。

その代わり、西條家の全員は絶対に一つ魔術書を持っている。

西條 翼 (さいじょう つばさ)

西條家当主。

能力は無いが、魔術神書以外に魔獣書を持っている。

魔獣書は名の通り魔獣を呼ぶ書であらゆる魔獣の唱え方が書かれている。

よく家の中に立てこもり、文字の解析をしていたりしている。

また、DSである。

辻川家 (つじかわ) 「旧名字 辻井川 (つ

じいかわ) 」

辻川家当主は代々、光神機こうしんきを受け継いでいる。

辻川家の全員の能力は電撃系、光系能力を持っている。

辻川 翔助 (つじかわ しょうすけ)

辻川家当主。

能力は良く、光速電撃を使う。

光速電撃は電撃を放つと、光速の速さで飛んでいく。

だが、電撃の速さを変えることは出来ない。

また、応用すれば砂鉄を電撃で操れば光速で砂鉄が飛んできたりするのだ。

コンピューターによく詳しく、能力にやるハッキングをよくしている。また、一度も警察に捕まった事がない位の実力だ。

杉山家 (すぎやま) 「旧名字 杉山醒 (すぎやまだい)」

杉山家当主は代々、溶岩神銃よつがんしんじゅう&氷結神銃こけつしんじゅうを受け継いでいる。
杉山家の全員の能力は温度系能力を持っている。

杉山 双太 (すぎやま そうた)

杉山家当主。

能力は良く、急激変化を使う。

急激変化は自分が触れている物質の温度を急激に温度を上げたり、下げたりすることが出来る。

だが、少しだけ温度を上げたり、下げたりすることは出来ない。
隼人が通っていた高校の友達でもある。

だが、隼人は杉山が超能力者で八神近家である杉山家当主であることは知らなかった。

菅野家 (かんの) 「旧名字 菅野 (すがの)」

菅野家当主は代々、悪魔神あくましん&天使神てんししんを受け継いでいる。

菅野家の全員の能力は物質作成系、物質変化系、物質消去系能力を持っている。

菅野 文弥 (かんの「すがの」 ふみや)

菅野家当主。

能力は良く、原子変化を使う。

原子変化はあらゆる原子を別の原子に変えたりすることが出来る。

また分子も分解して、別の物質に変えることも出来る。

よく自分の能力で原子を変えたりして、アート作品などを作ったりしている。

またお金が無くなってきたら、鉄などの別の原子を金に換えたりしてお金を手に入れてたりしている。

だが、金の価値が下がらないように本当にお金が必要な時しか使わない。

- - - - -用語集 - - - - -

八神近家 (はっしんきんか)

八神近家とは神に近い竹宮家、清水家、涼鬼原家、松本家、西條家、辻川家、杉山家、菅野家の八つ一族のことを指している。

八神近家の当主

八神近家の当主は代々、それぞれ武器や能力などを授かっている。

また、当主はそれぞれ、竹宮家なら空間系と風系、清水家ならサイコ系と心理系の能力などそれぞれの得意な能力をすべて使えるようになる。

だが、ほとんどの当主は元々持っていた能力しか使わない人が多い。

八神近家長（はっしんきんかちょう）

八神近家の長のことで、百年に一度の家柄戦争で勝った、八神近家の中から決められる。

また、家柄戦争は十年前に起きており、松本家から竹宮家に八進近家長が移っている。

家柄戦争（神の右腕戦争）

百年に一度に起き、八神近家で争う戦争。

そして、勝ち残ったものが八神近家長になれる。

また、家柄戦争以外で八神近家の当主が他の八神近家の当主を殺す事は許されておらず、殺した場合、その当主は当主の座を降ろされ死刑にされる。

だが、逆に言えば、殺さない程度なら何もしても良いのだ。

八神宝具

八神近家の武器はそれぞれ七刀、八鎖針、五神銃、不神身、魔術神書、光神機、溶岩神銃&氷結神銃、悪魔神&天使神をそれぞれ持っている。

また、それぞれ力は強いが、それぞれある言葉を唱えると、さらに強い力を使えるようになる。

七刀（しちとう）

竹宮家当主が代々受け継ぐ七つの刀での事である。

それぞれ特殊な刀があり、炎刀、雷刀、氷刀、水刀、風刀、魔刀、
無刀とそれぞれ言われている。

八鎖針（はっさしん）

清水家当主が代々受け継ぐ先が尖った八つの鎖の事である。
当主になったときに八鎖針の儀式を行い、八鎖針を体の中に入れ込
めば背中から八鎖針がいつでも出せる。

五神銃（ごしんじゅう）

涼鬼原家当主が代々受け継ぐ五つの銃の事である。
それぞれ特殊な銃であり、炎神銃、地神銃、雷神銃、水神銃、風神
銃の五大元素の名前がついている。
銃のサイズは普通の拳銃サイズだが、一度撃つと威力がもの凄く、
例えば地神銃は地面に撃ち、撃つと、そこから200mに先まで大
きなクレーターが出来てしまうほどの威力だ。
また弾は普通の弾で拳銃が特殊なのだ。

不神身（ふしんみ）

松本家当主が代々受け継ぐ物である。
当主になったときに不神身の儀式を行い、次の当主まで不死身の状
態になる。
だが、一つだけ例外があつてその例外を喰らうと十分くらい不死身
ではなくなってしまう。

魔術神書 (まじゅつしんしょ)

西條家当主が代々受け継ぐ書物の事である。

本の中は西條家しか読めない文で書かれていて、それを日本語で唱えると凄い技や召喚獣などが出てきたりする。

光神機 (こうしんき)

辻川家当主が代々受け継ぐ物である。

当主になったときに光神化の儀式を行い、次の当主まで光神化の能力を手に入れる。

溶岩神銃 & 氷結神銃 (ようがんしんじゅう & ひょうけつしんじゅう)

杉山家当主が代々受け継ぐ二つの銃の事である。

溶岩神銃は撃つと、銃弾が当たったところから突然溶け出し溶岩となり、氷結神銃は撃つと、当たったところから凍りだし一瞬で絶対零度の温度になる

また、杉山家の特殊な服装と体は溶岩と絶対零度の気温には平気で溶岩に入ってようが絶対零度の中に居ようが死なないのだ。

悪魔神 & 天使神 (あくましん & てんしん)

菅野家当主が代々受け継ぐ二つの力の事である。

悪魔神、天使神のそれぞれの言葉を唱えると、悪魔の力、天使の力

を手に入れることになる。

プロローグ

家柄戦争。またの名を神の右腕戦争。百年に一度八神近家で争う戦争の事だ。

最後に起こったのが十年前、俺の親父、竹ノ宮風哉ちくのみやふうやが竹宮家当主だった頃に起こった。

俺は幼かったので余り覚えてないが、今までの家柄戦争の中で一番酷かったらしい。

親父が言うには、関係のない人たちが相当死んだらしい。

確か約三百人の人間が死んだとか言ってた。

何故、こんなにも死んだのかというと、松本鈴奈の母親、西松寺麗華さいしょうじれいかのせいなのだ。

西松寺麗華は邪魔するもの、邪魔しないものを関わらず、無差別に人間を殺したのだ。

西松寺麗華以外の八神近家の当主たちはそんな西松寺麗華を許せなく、西松寺麗華を先に殺そうとした。

結果、西條家さいじょうけ、辻井川家つじいかわ、杉山醜家すぎやまだい、菅野家の当主が西松寺麗華によつて殺された。

そのあと、竹ノ宮家ちくのみや、清水家しみず、涼鬼原家の当主たち三人で力を合わせ、西松寺麗華を殺すことにした。

だが、そのことを西松寺麗華が知り、竹ノ宮家の傘下、水本家の一族を全員殺したのだ。

…まあ、本当は全員じゃなくて一人生き残ったのだけだ。

そして、水本家の一族を全員殺された事を知った俺の親父は完全にキレ、西松寺麗華に一人で向かったらしい。

でも西松寺麗華は八神近家の当主を四人も殺している。

さらに、西松寺家の武器は不神身。銃で撃たれても刀で切断されても死なない。要するに不死身なのだ。

だから、親父にとってはまったく勝ち目がなかったのだ。一つを除いて。

そう。不神身には弱点が一つだけある。

それが何か知らないが、親父が言うにはごく身近にあるものらしい。

親父はそれを使って、西松寺麗華を殺した。

その後、親父、当時清水家当主清水信之、当時涼鬼原家当主涼鬼原咲の三人で話し合い、これ以上死者をださない為に西松寺麗華を殺した親父が八神近家長になることになったのだ。

それから十年、俺達八神近家の当主は九十年後まで家柄戦争は無いので何事もなく終わるはずだった。

だが、それを打ち砕く人物が八神近家の当主に居た。

その人物と俺があつたとき、事件が起こる。

日常が非日常に変わるとき、物語は始まる。

第一話 朝起きたら大変な事になっていた！！（前書き）

今回からタイトルを書こうと思います。

第一話 朝起きたら大変な事になっていた！！

隼人 side

吸血鬼と戦ってから約三ヶ月、俺は家に居た。

また、瑞希に関節を曲げられた俺と美羽の両腕と両足は二ヶ月で治り、一ヶ月前に退院した。

まあ、瑞希に関節を曲げられた中で二ヶ月は短い方だったりするんだが…

そんなこんなで11月7日の朝、俺はいつも通り6時半に起きた。

「うん…ってまたかよ…」

俺は朝っぱらからため息がついた。

ちょっと俺の声がいつもより高いことに気になったが今は…

「う、動けない…」

そう。俺は動けないでいたのだ。

なぜなら、俺の右腕に瑞希、左腕に鈴奈、右足に優子、左足に美羽が抱きしめていたのだ。

まあ、こんなことになったのは俺が退院してから二日後のことだっ

た。

美羽がいつも俺の家で寝るのはおかしいと瑞希、鈴奈、優子が言い、そのあと美羽が『だったら三人も隼人と寝れば良いじゃない。』と俺の意見を無視してこうなってしまうた。

まあ、俺のベットはダブルベットのサイズなので落ちることは無いんだが…

俺はいつも通り、四人を動かさないようにベットから抜け出そうとした。

だが、

「ってあれ？いつもより力が入らない…」

そうなのだ。何故かいつもより力が入らなかったのだ。

声はいつもより高いし、力も入らない。これはおかしいと思った。

さらにおかしいところはあった。

「髪の毛も伸びてる…」

髪の毛も普通じゃありえないほど伸びていた。

そして、俺はもう一つ違和感があったのだ。

それは、胸だ。

「「「あなた（あんた）、誰？^{ですか}」「」」

うん。その反応は分かったた。

「俺だよ俺。竹宮隼人だよ。」

「「「嘘ね（ですね）。」「」」

「本当だってば！！」

四人は信用してくれなかった。まあ、そうだろうな。

「隼人は女じゃないもん。」

「だから、本当に俺は隼人なの！！」

「じゃあそれを証明してよ。」

「そ、それは…ひゃ！？」

俺は変な声を出した。

「って美羽！！何でそいつの耳を舐めてるの！！」

「だって、隼人って耳弱かったから確かめてたの。」ペロペロ

「はあ……はあ……み、美羽……、もう……やめて……ひゃ、」

…もはや声だけ聞いてるとエロい気がするが、けしてそんなことはしていない。ただ、美羽に耳を舐められているだけだからな。

「美羽！！とりあえず隼人って分かったから、止めなさい！！」

「そうよ。また私がおかしくなるからやめて！！」

「またって前にもこんな事あったの！？」

「二人とも、そんなこと言っていないで美羽を早美ちゃんから離させなさい！！」

「は〜い。」

瑞希と鈴奈は優子にそういわれると、俺と美羽を離した。

っていつか優子、今さにげなく早美ちゃんって言ったよね？

「で、何故こうなったのか聞きましょうか？」

優子は気分を変え、真面目に聞いた。

「私も分からないんだ。起きてたらこうなってたから。」

「そう。ってか一人称も『私』に変わってるわよ。」

「あ、気づかなかった。」

優子に言われるまで気づかなかった。

「どつやらだんだんと女性に近づいているようですな。」

「そうね。ひよっとすると早く隼人を元に戻さないといけないかね…。」

「それって、早くしないと早美ちゃんは隼人に戻れなくなるかもしれないから?。」

「そうかもしれないわね…。」

「「「そんなの嫌!!」「」」

瑞希、美羽、鈴奈は同時に言った。

「私だって嫌よ。でも、元に戻す方法が分からないのよ。」

「確かにそうね。でもこの後どうするか…。」

「とりあえず龍哉さんに伝えときますか。」

「そうね。じゃあ早美ちゃん、外に出るから着替えてくれる?。」

「分かったよ。」

という私は女装用に買った服を着た。

「それにしても、女装の為に買った服が役に立つなんて…。」

「そうですね。私も役に立つとは思いませんでした。」

「っていつか私たち、こんなに買ったのね…。」

「っていつか何で隼人の家に女物の服があるの！？しかも隼人の女装用って言ってますでした!？」

鈴奈は三人の言葉に驚いていた。そりゃそうだろう…

「そんなことは良いから、早美ちゃん着替え終わった？」

「着替え終わったよ。」

「そう。じゃあ…」ピーポーン

優子が何かを言おうとした時、インターホンが鳴った。

「私が出るよ。」

「良いよ早美ちゃんは。私が出るから。」

「良いけど…パジャマで出るの？」

「……あ、そういえばそうだった。」「……」

おいおい、自分たちもパジャマのままだということを忘れてたのによ…。よくそのまま家を出ようとしたな…

という訳で四人は持ってきた洋服に着替えることにして、私は玄関のドアを開けた。

「はい。どちら様？」

ドアを開けると帽子を被っていてサングラスを掛けた男性が居た。

「あれ？ここって竹宮隼人の家ではなかったのか？」

「ええ、ここは隼人の家ですが。隼人に何か用でしょうか？今隼人は家に居ませんが。」

私は自分が隼人だと言わないように言った。

「なんだ、隼人居ないのか。折角久々に会いに来たのに。」

「あの、どちら様でしょうか？」

私はこの男性に心当たりが無かった。こんな知り合い居たっけ？

すると、男性はサングラスと帽子を外した。

サングラスと帽子を外すと、私がよく知っている顔だった。

「俺は杉山双太だ。」
すぎみやま そうた

「す、杉山だったの!？」

全然気づかなかった。っていうか何で杉山が居るの？

「あれ？一度会ったことありましたっけ？」

「えっとそれは…」

「隼人、誰だったの？」

私が誤魔化そうと思ったとき、瑞希が着替え終わって私たちの所に歩いてきたのだ。

「あら、杉山じゃないの。何で杉山が『能力都市』に居るのよ。」

「清水か。ってちょっと待て。清水、今こっちに来る時なんて言った？」

「ん？隼人、誰だったって言ったのだけど…あ、」

瑞希は自分のミスに気づいたようだ。

そして、杉山に誤魔化してたのが水の泡となった。

「…お前、隼人なのか？」

「…そうですよ。私は竹宮隼人ですよ。」

「お前…そんな趣味があつたのか？」

「違うよ！！私だってこんな格好したくて着ているんじゃない！！」

「じゃあ、なんでそんな服着ているんだ？まさか女になったとかそういうことでは無いだろ？」

「…杉山ってよく冗談のつもりで言ってるのによく当たるよね。」

そうなんだよね。こいつ、冗談で言ったつもりで言った事が本当だったりするんだよね。

「え！？まさか本当なの！？」

「本当じゃなければ朝からこんな格好をしてないよ。ところで杉山、何で『能力都市』にいるんだ？」

「ああ、そのことか。元々、俺は『能力都市』にいなければいけないからな。」

「それって杉山も超能力者なの？」

「そうだよ。それで、お前の伯父に呼ばれてたんだけど、先にお前に会おうかと思っていたらお前が女になってたという。」

「そうなの。私たちもこの後龍哉さんのところに行くところだったの。」

「そうなのか？じゃあ一緒に行くか。」

「そうね。ってちょっと待って。みんな呼んでくるから。」

「みんなって何人家に居るんだ？」

「後三人よ。じゃあ呼んでくるね。」

というと、瑞希は一度家の中に戻った。

「ところで隼人、何で清水がお前の家の中に居たんだ。」

「まあ、こっちにもいろいろあるのよ。そこは気にしないでくれる？」

「そう。っていつか隼人、女らしくなっているよな？」

「そうなのよね。戻れると良いんだけど…」

「行く前に言いたい事があるんだけど…」

「何？」

「襲って良いか？」

「ブチコロス。」

私はポケットに入っていたナイフを取り出した。

「って何でポケットにナイフが入ってるの！！冗談だから！！」

「なんだ冗談か。」

という私はナイフをしまった。

「で、次言ったら今度こそブチコロスからね」

「…はい。そうします。」

…隼人さん。笑っていますが目が笑ってませんよ。by竹馬

そんな事をしていると、瑞希が三人を連れて戻ってきた。

「みんな連れてきたよ。」

「そう。えっと…いつは…」

「杉山双太だ。よろしくな。」

「よろしく。私は雨宮優子で、私の右に居るのが浅野美羽で、左に居るのが松本鈴奈よ。」

「「よろしくね。」」

「さて、全員そろった事だし、行きましようか。」

という事で私達は龍哉おじさんの所に向かった。

第一話 朝起きたら大変な事になっていた!! (後書き)

作「いえ〜い、やってしまったぜ!〜!」

隼「何で私、女になってるの!〜?」

作「まあ、面白そうだから。」

隼「面白いからって変えないでください!〜!」

作「そんなことはどうでも良いから、伝えるべき事を伝えてください。」

隼「どうでも良いなんて酷い!〜!」ぶつぶつ

作「:~:どうやら早美ちゃんが一人でぶつぶつ言い始めたのでとりあえず意見、感想をお待ちしています。」

隼「:~:いつ戻れるの」

作「さあ?」

第二話 竹宮早美の不思議な現象

早美 side

私たちが竜哉おじさんの所に向かっている途中、突然杉山がこう言った。

「なんか、はたから見たら俺ってハーレムに見えるんじゃない？」

杉山が変な事を言い出したので、私と瑞希が杉山をぶん殴った。

「い、いきなり何をするんだ!!」

「あなたが変な事を言うからでしょ!!」

「次言ったら殺すわよ。」

「ちょっと待て!!早美、さっきから普通に殺すって言うって怖いから!!お前マジで殺るって感じだから!!」

「わかった？」

「…はい。」

私がそこまで言うと、杉山は返事した。

ちなみに、杉山も私のことを早美と呼ぶことにし、他の四人も早美

ちゃんじゃなくて早美と呼ぶことにした。さすがにちゃん付けは嫌だったので私がちゃん付けをやめるように言ったのだ。

「で、後どのくらいで着くんだ？」

「あと十分くらいで着くわよ。ところで、何で杉山が呼ばれたの？普通の能力者なら、龍哉おじさんに呼ばれないはずだよ。」

「そうなのか？まあ、行けば分かるだろう。ねえ、松本さん。」

突然、杉山は鈴奈に向かって言った。

「…ええ、そうね。あんたが来たって事はあいつらも来るって事でしょ。」

「鈴奈、杉山と知り合いだったの？それとあいつらって…」

「だから、後で分かるわよ。それと、早美と瑞希はよくこいつと普通の友達として接してたわね。」

「」「どづいつこと？」「」

私と瑞希は鈴奈の言ってる事に訳が分からなかった。

っていつか、鈴奈と杉山って知り合いだったの？

「まあ、それも後で分かるわよ。そいつは、私たちと一緒にいつとじよ。」

「そづいつことだ。」

「「……………?」「」

未だに分からない俺と瑞希であった。

「ってそんなこと離してないで早く行くわよ。」

「あ、そうだったね。」

優子にそう言われたので私たちは先に進む事にした。

四十分後、私たちは予定より三十分ほど遅れて龍哉おじさんが居るいつものビルに着いた。

「やっと着いたわね…」

「っていつか、予定より何でこんなに遅く着いたわけ?」

「それは杉山が急に寄り道をしたりするからでしょ。」

「そんな事を言うけど早美、お前だって楽しそうじゃなかったか?もしかして俺のことが好きになったりしたりしたとか?」

「な、そんなわけある分けないだろ!!私はお前と遊んだ時のペースでこうなっただけだ!!」

そもそも、私は元々男だぞ!!

「でも、あの時より楽しそうだったごふあ!？」

「どうやら一度死んだようがよさそうだね」

「ちょっと待て、嘘だから。ナイフをこっちに向けないで!！」

「問答無用!！」

私は空間切断で杉山を切断ろうとした。

もちろん、杉山は避けた。

「痛てっ!？」

杉山は私の能力を避けたら、何も無いところで転んだ。

だが、私はそんなことは気にせず、別のことで驚いた。

「逃がすと…ってあれ?いつもとおかしい。」

私がナイフを振りかざした時、いつもと違うことに気づいた。

「空間までが切断されている…」

そうなのだ。私の空間切断は名前の通り空間を切断するわけではなく空間を利用して物を切断する能力である。さらに言うと、良鬼の能力と同じく目的の位置まで全て切断する能力でもある。

だが、今回は違った。空間を利用しているのにその空間を切断して空間を切った後があった。

さらに、普通なら通ったところも切断するはずなのに、その部分の空間が切断されてなかった。しかも、普通振った後少したってから切断されるが、時間が掛からず空間が切断された。

まるで、次元を使つて切断したようだった。

「早美、いつもと能力が違うですよ？本当に何があったのですか？」

「…分からない。私の体に何が起こっているの？」

私はさすがに性別が女になり、能力も変わっていることに絶対におかしいと思った。こんなこと普通ありえない。

「とりあえず、それも龍哉さんに聞きましょう。」

「そうね。何か分かるかもしれませんし。」

「じゃあ、行きますか。」

ということでした。私たちは龍哉おじさんが居る部屋に向かった。私の能力を避けた時に転んだ男を無視して。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ!!」

杉山も少し遅れて私たちについて行った。

第二話 竹宮早美の不思議な現象（後書き）

早「…ねえ、私の性格変わってない!？」

作「それは俺も書いていて思った。」

早「なんで、こんなことになったのかしら？」

作「書いてたらこうなっていた。まあ、隼人の時も杉山に対してはあんな感じだったと思ってください。」

早「それ、どう見たって後付けしたわよね？」

作「それを言わないでください…!」

早「ところで作者はもう一つ書いてたわよね？あつちは全然進んでなかった気がするんだけど？」

作「…それでは、皆さんの意見、感想をお待ちしています。」

早「現実逃避した!！」

作「じゃあまた次回会いましょう。」

早「……………」

第三話 杉山双太の秘密（前書き）

タイトルとあっていない気がします…

第三話 杉山双太の秘密

早美 side

私たちはビルのエレベーターに乗り、龍哉おじさんの部屋に向かっていた。

「にしても、全然違うよな。」

「何のこと？」

杉山がまたもや突然何かを言い出した。

「お前だよお前。隼人の姿の跡形も全然無いじゃん。背が同じことぐらいしか。最初見たら隼人だったって誰も気づかないと思うぞ。」

「ああ、そのことね。私もさっき家で鏡を見たけど、これが私なのって思ったくらい違ったから。」

「そうだよな。」

そんなこと言っていたらエレベーターが止まり、私たちはエレベーターから降りた。

「でも、本当に何で隼人が女になったんだろう？」

「そうですね。普通、起こらないことが目の前で起きてますからですね。」

「まあ、毎回普通に起きたら逆に怖いけどね。」

「本当に何ででしょうね？」

「それはこつちが聞きたいよ……」

まあそんなことを話していたら、龍哉おじさんの部屋の前に着いた。私たちはすぐに部屋の中に入った。

「お、ちょうど良かった。今みんなを呼ぼうとしていたからね。」

「そうだったの。私たちも用があつて来たので。」

「そうか。ところで、杉山君が居るのは何となく分かるんだが、そこにいる女の子は誰だ？」

龍哉おじさんは私の方を指して言った。やっぱり気づかないんだ……

「言っても信じないと思いますけどこの人、隼人なの。」

「瑞希君、それはさすがに冗談過ぎるだろ。」

「龍哉さん、本当なの。」

「……マジで？」

「本当よ。ねえ隼人。」

「なんでここで私に振るわけ？」

「別に良いじゃない。自分から」

「まあ、良いけど。」

ということでは何か瑞希にバトンタッチをされた。

「本当に隼人君なのか？」

「まあ、信じなる方がおかしいと思いますけど私は隼人よ。」

「何か証拠みたいなものは無いのか？」

「うーん…七刀は置いてきたし、これぐらいかな？」

という私はナイフを取り出した。

「そ、そのナイフは隼人が持っていたナイフだ。紋章も付いてるし。」

今までナイフの形を言ってなかったが、私が持っているナイフは竹宮家の紋章が描かれていて、しかもこのナイフは世界で一つしかないのだ。

「龍哉おじさん、これで分かったよね。私が竹宮隼人だと言うことが。」

「ああ、分かった。でもなんでこんなことになっているのだ？」

「私も分からないの。朝起きたらこんなことになってたから。それともう一つ変わったことがあるの。」

「なんだ？」

「私の能力の空間切断なんだけど、さっきナイフで振ったら空間ごと斬ったの。空間切断は空間を斬れない筈なのに……」

「そうなのか。とりあえず一度やってみてくれ。」

「分かりました。」

私はナイフを振った。

やはり先ほどと同じように空間に亀裂ができた。

「ね。おかしいのよ。」

「ああ、確かに変だ。隼人君の空間切断は空間を斬れないからな。」

「そうなのよ。だから龍哉おじさんのところに行けば何か分かるかなと思いますよ。」

「俺もよく分からないけど分かった。両方調べてみるよ。」

「お願いします。それと今は早美って呼んでくれたほうが良いので。」

「分かった。そう呼ぶよ。」

ということでのこの件はとりあえず終わった。

「で、竹宮副リーダーは私たちに何の用があったのですか？」

「ああ、雨宮君以外にな？」

「私以外に？」

「まあ、雨宮君も居ても良いんだが、今日八神近家の当主と前当主を招集したんだ。」

「でも龍哉さん、前当主で生き残っているのって少ないはずでは？」

「そうなのだが一応、風哉、清水統括理事長、咲の三人を呼んだんだ。」

「私のお母さんもですか？」

「ああ、でも多分来ないって言ってたからな。」

「そう。それで、全員を集めてどうするのですか？」

「それは後で話す。とりあえずみんなはそこら辺の椅子に座っておいてくれ。立っているのも疲れるだろ。」

私たちは龍哉おじさんにそう言われたので、座ることにした。

ってちよつと待て、優子以外って杉山も？

「まさか杉山、お前ひよつとして…」

龍哉おじさんはそんな事を言っただけで電話を切った。

「悪い、今下に風哉が来たらしいからちょっと下に行つて来る。」

「親父が来たの？」

「そうだ。もしかすると、俺が居ない間に清水統括理事長が来るかもしれないから。じゃあ行つて来るな。」

というと、龍哉おじさんは部屋から出て行つた。

「で、何で黙つてたの？私と早美が八神近家の一族つて分かつていたんでしょ。」

瑞希は龍哉おじさんが居なくなつた後、杉山に聞いた。

「確かに、知っていたさ。まあ、高校入学した時は驚いたが。」

「何故、言わなかったの？」

「別に言う事でもないだろ。どのみち、後に分かるだろうと思つたからさ。」

「そう。ところで杉山は何で鈴奈と知り合いなの？」

「ああそれが。それは……」

「一度、私と杉山は一緒に戦つた事があるの。クソババアの下にいた組織とね。」

松本麗華

「そうなんだ。でも鈴奈は分かるが何で杉山もなの？」

「一年前から松本が俺の家で居候として暮らしたからな。三ヶ月前から突如居なくなっただが。」

「え、じゃあ一年前私の家を出た後、杉山の家で居候していたの？」

「そうよ。ちなみに三ヶ月前に突如居なくなったのは吸血鬼に誘拐されたからよ。」

「そうなんだ。って瑞希、どうしてそんなに黒いオーラが出ているの!？」

「早美、鈴奈が一年前に家を出たって言う事は、鈴奈と一緒に暮らしていたの？」

あ、そういえば瑞希は鈴奈が一年間、竹宮家で暮らしてたことを言っただけだね。

「ちょっと待て、確かに鈴奈は一年間も暮らしていたが、今日は関節を曲げるのを止めてくれ!!」

「確かに、じゃあ今回は関節を曲げないわ。その代わりに、」

「わ、私を引っ張って何するつもりなの？」

「何って気持ちいい事よ」

うん、今の言葉で私の貞操が危ないことが分かったよ。

「瑞希、私を放して!!」

「嫌だ。」

「優子、美羽、鈴奈、助けて!!」

私は誰かに助けを求めた。

「ちょっと瑞希、何をしようとしているのよ!!」

「そうですよ!!一人で抜け駆けはするいですよ!!」

「瑞希だけやらせるわけにはいかないのよ!!」

余計に三人増えました。

って言うより、最近の優子って素直になったよね。

ってそんな事を言っている場合じゃなかった。

「ねえ、四人とも放してよ。」

「だーめ。早美が鈍感なのがいけないのよ。」

「だから、鈍感って何の事よ!!」

「自分で考えて見れば。」

「そうよ。まあ私は別に面白そうだからだけ。」

「っつていつことだから、覚悟してね」

「いーーーーーやあーーーーー!!!」

…ということで、早美は四人に隣の部屋に連れて行かれた。

そこで、何があったかはご想像にお任せます。

ちなみに杉山だが、隣で何が行なわれるのか想像して鼻血を出していた。by竹馬

第三話 杉山双太の秘密（後書き）

早「酷い目にあつた…」

作「まあ、ドンマイとしか言いようが無いよ…」

早「つていうより、あんたがいけないのでしょうが…!」

作「ん？何のこと？」

早「死にたいようですね。」

作「ちよつと待て、何でナイフを持っているのかな？」

早「それは自分で考えてください…!」

作「うぎゃあああああああ…!」

第四話 竹宮早美の脅威

早美 side

「うーん…あれ？私、何で寝ているんだっけ？」

私は目が覚めると、何故私が寝ているのかと思った。

「お、やっと目覚めたか。」

何故寝ているかと考えていると、杉山が近くに居て話しかけてきた。

「…ねえ、何で私寝ているの？」

「おや、覚えてないの？」

「うん。で、何で私は寝ているの？」

「ごめん、俺は知っているのだけど、あまり自分の口から言いたくない。」

「私何したの!？」

「何したって言うよりされた側だけどね。」

「された側ってあれ？瑞希たちは？」

「あそこで正座されている。」

杉山が指した方向を見ると、瑞希、美羽、優子、鈴奈が親父、龍哉おじさん、信之さんに怒られていた。

「何で怒られて正座しているの?」

「お前、本当に何も覚えてないのかよ!! あんなことされたのに!」

「だから私は何をされたの!? まさか、私の貞操が無くなったりとか!」

「…どうしてお前はこういう時って当てるんだ?」

「え、ひょっとしてほんとなの?」

「…づん。」

「……………」

私はどうして良いのか分からなかった。

すると、親父、龍哉おじさんがこっちに来た。

「隼人、大丈夫なのか?」

「うん。大丈夫だから。」

「そうか。それなら良かった。」

「ところで何で私が隼人だと分かったの？」

「ああ、それは俺が教えたからだ。」

「そうなの。」

私がそう思っていると、親父が龍哉おじさんの方を向いた。

「ところで龍哉、何で八神近家の当主と生き残っている前八神近家の当主たちを呼び出したんだ？」

「それは後で分かるよ。だが、前代未聞のことが起きるかもしれないのだ。」

「前代未聞のことだと？」

「そうだ。ヘタすると、十年前の家柄戦争よりも酷くなるかもしれない。」

「どういうことだ!!」

俺は驚いた。親父はよく俺や良鬼に怒鳴ったりしたが、これほど怒鳴ったことは無かった。

「とりあえず落ち着け。俺も半信半疑なんだ。だから確認をしたかったんだ。」

「そうか。とりあえず全員が来るまで待つとするか。」

親父はそういうと、近くの椅子に座った。

「ねえお父さん、いつまで正座していれば良いの？」

遠くから瑞希の声が聞こえた。

「瑞希、まだ反省が足りてないようだな。お前は一人の女性を四人で襲ったんだぞ!!」

元男ですけどね。

「だって早美がかわいいものだから……」

「だからと言って襲って良いものか？」

「うっ、」

「今後はや、早美を襲わないと誓えるか」

「……はい、反省しています。」

「謝るなら俺でなく早美君に言うべきだが。たく、」

と聞こえると、信之さんは親父が座っていた近くの椅子に座った。

また、信之さんに怒られていた四人は私のところに近づいてきた。

「……いきなり襲ってごめんなさい!!」「……」

そして四人は私に謝ってきた。

「…ねえ、一つだけ聞きたいんだけど。」

だが私は顔を普通に話している時の顔にした。

私が怒る時、普通に話しているときとあまり変わりがなく、怒られたことがある人しか気づかないのだ。

だから最初、私を見た人は普通に話していると思っているのだ。

「「な、何を？（この状態はまずい！！）」」

瑞希と鈴奈は私を見て震えていた。そりゃそうだ。二人は私がマジで怒った姿を見た事があるからね。

「私を襲ったのは良いとして、」

「「良かった」」

優子と美羽は私がマジで怒った姿を見た事が無かったのでホッとしていた。

だが私は二人からその言葉を聞いてさらにムカついた。

（（マズイ！！早美をさらに怒らせてしまった！！））

逆に瑞希と鈴奈は私を見てさらに震えていた。

そして私は四人に聞きたい事を話した。

「ねえ、私とキスはしてないよね？」

そう。私が聞いたかったのは四人が私とキスをしたのかだ。ファーストキスはこんなことで奪われたくないからね。

「な、何言っているのよ。さすがにキスはしてないよ!!」

「そうよ。私たちが襲ったとしてもそこまではしてないよ!!」

「だから、早美のファーストキスは守っているのですよ!!」

「そうよ。だから大丈夫…ってしまった!!」

四人は突然慌てていながら言った。

そして、瑞希は自分の失態に気づいたようだ。

そっだよ瑞希、私はポーカーフェイスも得意だし、嘘を見破るのも得意なんだよ。それを忘れていたようだね。

「って言う事は、みんなは私のファーストキスを奪ったって事ね。」

「な、何でそうなるの!？」

「だって、私は嘘を見破るの得意だもん。ね〜瑞希」

私は瑞希に方を向いて笑顔で言った。

「そっなの瑞希!!」

「…そうなのよ。もっと早く気づくべきだった。」

「そういうこと。じゃあ、覚悟はできてるよね。」

私は顔を急に怒っている顔にした。

「な、何をするつもりなの？」

瑞希は私に怯えながら言った。

「とりあえず当分の間、私の家で寝る事は禁止にする事にして。」

「……え〜。」「」「」

「何、私に文句を言える立場なの？」

「……うっ、何でもありません……」「」「」

「それと後で用事があるから。分かった？」

「……はい……」「」「」

四人は今は私に何も言える立場ではないので私の言う事を聞いた

「さて、とりあえず今は何でもしていいから。私を襲う事以外なら。」

「……はい……」「」「」

という事で四人はそれぞれ椅子に座った。

「なあ早見、お前怒るとそんなになるのか？」

私の隣に座っていた杉山が聞いてきた。

「まあ、私はそんなに怒った事が無いから聞くのは分かるけど、そうだね。いつも私が怒るとあんな感じかな？」

「そうだったんだ……」

杉山は少し私を引いていたのが気になったが気にしない事にした。

第四話 竹宮早美の脅威（後書き）

早「さて、今回は作者が諸事情により変わりにゲストを呼んでいます。」

美「って言うか、早美が何かをしたんじゃないですか？」

早「っといふことでゲストは浅野美羽さんです。」

美「無視した!!！」

早「ん？さっきから何を言っているの？」

美「…何でもないですよ。」

早「さて今回はどうでしたでしょうか？」

美「って言うより今回は私たちが怒られているだけでしたけどね。」

早「それは、四人がいけないんですよ。」

美「そうですね。ところで、作者さんはどうしているんですか？」

早「あんなのほつといて良いよ。」

美「それはさすがに酷いと思っんですけど…」

早「そっ?..とりあえず意見、感想お待ちしています。」

美「作者さん大丈夫かな...」

第五話 八神近家の当主のメンバー

早美 side

「で、後来ていないのは西條家当主、西條翼と辻川家当主、辻川翔助、そして菅野家当主、菅野文弥か。」

私が瑞希、美羽、優子、鈴奈にマジに怒って数分後、私より少しはなれた所に座っている龍哉おじさんと親父の方からそう聞こえた。

「だな。ところで龍哉、何故咲は居ないんだ？まだ来ていないのか？」

「あいつは来たくないそうだ。まだ、娘と会いたくないらしい。」

「そうなのですか？お母さんはそう言ったのですか？」

さっきまでテーブルを挟んで私の席の目の前に座っていた美羽がいつの間にか親父と龍哉おじさんの所に居た。

「ああ。確かにお前のお母さんはそう言った。」

「何故ですか？」

美羽はいつもと違って真剣に話していた。

「まだ何かあるんだろう。お前と会いたくない理由が。」

「そうですね…」

「まあ、そんなに落ち込む必要はないと思うぞ。別に咲はお前に会いたくないわけじゃないんだから。」

「そうですね。分かりました。では私は戻りますね。」

親父は美羽にそう言って美羽を落ち着かせた。

そして美羽は自分が座っていた椅子のところに座った。

「さて、じゃあ俺は一階で待っているか。」

龍哉おじさんもまだきていない人たちを待ったために一階に向かった。

「にしても早美、暇だな。」

「そうね。まあ何もする事も無いだろうし、元々私たちは呼ばれて来ているんだからしょうがないんじゃない？」

「だな。まあ、朝から驚かされたけど。」

「それを…まあ私もこんなことになって驚いたから何も言うつもりはないわ。」

私は杉山に『それを言わないで欲しい』と言おうとしたが、私も驚いたからそれに関して何も言わない事にした。

「それで、お前はこれからどうするんだ？」

「どうするって何を？」

「いやだから、お前は女のまま過ごすのかって言う事だよ。」

「ああそのことが。確かに男に戻りたいけど、どうやって戻れるのかも分からないしとりあえずそれまではしょうがないから女として過ごすわ。」

「お前も大変だな。」

「それはお互い様でしょ。」

「そうだな。今まで静かに暮らしてたからな。松本と一緒に戦った時以外はな。でもお前のが大変だろ。」

「そうだね。」

私と杉山はそういうと微笑みだした。

「…ねえ、何二人で盛り上がっているの？」

いつの間にか私の左側に座っていた。

「あれ？さっきそこに瑞希が座ってなかった？」

「確かに座っていたけど、何か早美のお父さんがここに座れって。」

「親父が？じゃあ瑞希はどこに座って居るんだ？」

「美羽の隣に座っているわよ。鈴奈も瑞希の反対側の美羽の隣に座

っているけど。」

「ほんとだ。さっきまでバラバラに座っていたのに…」

だったら、先に言っとけば良いのに…

「多分、私は水本家だから竹宮家の近くにしたんじゃないの？」

「そうだろうね。後はまあ、他は適当って所だろうね。」

「多分そうだろうな。」

「そうね。しかも、私と優子が近ければ後はどうでも良かったのでしょ。」

「かもな。」

私たちが話していると龍哉おじさんが私が知らない高校生ぐらいの二人を連れて戻ってきた。多分八神近家のどこかの当主だろう。

「とりあえず二人を連れてきたぞ。」

「そうか。で二人の名前は？」

親父と信之さんは二人に近づいて名前を聞いた。

「西條翼にしじょうつばさです。」

「辻川翔助つじかわしゅうすけだ。」

「わかった。俺は竹宮風哉だ。前竹宮家当主をやっていた。」

「俺は清水信之。前清水家当主で今は『能力都市』の統括理事長をやっている。さて、お前たちもこっちに来て自己紹介をしる。」

信之さんは私たちの方を向いてそう言った。

私たちは信之さんがそう言ったので、私たちも二人のところに向かった。

「俺は杉山双太だ。杉山家当主だ。よろしくな。」

「私は雨宮優子。八神近家ではないけど竹宮家の傘下の水本家の生き残りだからここに居るの。よろしく。」

「浅野美羽です。名字は違っけど涼鬼原家当主ですので。よろしくね。」

「私は松本鈴奈。松本家当主よ。よろしく。」

「清水瑞希。清水家当主。よろしく。」

「私は……竹宮早美。竹宮家当主。よろしくね。」

私はどっちの名前で言おうか悩んだが、ややこしくなるから早美にしておく事にした。

「さて、自己紹介も終わった事だし後来ていないのは……」

「菅野家当主、菅野文弥か。」

「ん？どうしたんだ龍哉？菅野家当主が来ないような言いぐさだな。」

「ああ、多分管野文弥は来ないだろ。」

「何故だ？俺もお前から何も聞いていないから分からないんだが。まさかさつき言ってた事と関係しているのか？」

「後で話すからとりあえずみんなを座らせよう。西條君は雨宮君の隣に、辻川君は松本君の隣に座ってくれ。」

「「分かりました。」」

私たちは座つてた所に座り、西條と辻川はそれぞれ優子、鈴奈の隣に座った。

親父達も椅子に座り、親父は杉山の隣、龍哉おじさんは清水の隣、信之さんは中央に座りこうなっていた。

そして、全員が座ると信之さんが話し始めた。

第五話 八神近家の当主のメンバー（後書き）

作「復活!！」

早「何だ。ずっと戻ってこなければ良かったのに…」

作「それ酷くない!?これを書いている作者なんだよ。」

早「その作者が私にあんな事をさせたのがいけないのでしょ。」

作「それはすみません。」

早「じゃあ次からは書かないって約束してくれる?」

作「約束します。（多分もう一度くらい書くかも知れないが。」

早「さて、今回は菅野家以外の八神近家の当主がそろいまして、
たが、何故菅野家だけ来なかったの?」

作「それは秘密。」

早「そのネタ二度目だよ。っていうか最近ネタを使わないわ
ね。」

作「使いたいとは思っているのだけど、あまり使うところが
見つからないのよね。」

早「そうなの。って話が逸れてるわね。で、教えてくれないの？」

作「それはお楽しみの方が良いでしょ。」

早「まあ、そうだけど……」

作「って言うより、二章の最終話で少し触れているんだが。」

早「そういえばそうだったね。」

作「まあ話はその位にしてとりあえず意見、感想をお待ちしています……」

早「って言う事で今回はこれくらいで、さよなら」

第六話 八神会議

早美 side

「まず、目の前の画面を見てくれ。」

テーブルには目の前にそれぞれ画面が付いていて私は画面を見始めた。

「さて、今回八神近家を集めてもらったのは、これを見て欲しかったからだ。」

信之さんがさういうと画面に何かが映っていた。

そこには、焼け野原になった建物たくさんあった。

「信之、これは一体何なんだ？」

親父が信之さんに聞いた。

「これは二ヶ月前、ロシアの起きた爆発事件を覚えているよな。」

「ああ、これはそのときの映像か？」

「そうだ。もう二ヶ月も経っているのに爆発した原因も何もかも分かっていない。ロシア政府は超能力者がやって来たのではないかとやって来たのだ。」

「でもお父さん、超能力者でも広範囲には出来ないんじゃない？」

ここで、二ヶ月前に起きた事件を言いましょう。

二ヶ月前、ロシアのとあるところで、突然半径30kmの爆発事件が起こった。

死者と行方不明者は約四十万人。突然の出来事だった。

ロシア政府は最初、他の国からの攻撃だと思ったが、それは違うことが判明した。

放射線も出ていないので核爆弾ではなく、そもそも爆心地が存在しないのだ。

世界中の国々が調べても結局分からず、何も分かっていないのだ。

そこでロシア政府が目をつけたのがここ『能力都市』だ。

『能力都市』は某ラノベと違って技術が進んでいるわけでもないし単に超能力者を集めているだけだが、超能力者がやったのではないかとロシア政府は言ってきたということなのだ。

「確かに、こんな広範囲に出来る超能力者なんてこの『能力都市』には居ない。『能力都市』にはな。」

「まさか、まだ『能力都市』が見つけていない超能力者がやったと言っの？」

「その可能性はあるって事だ。」

「でも、それと私たち八神近家が何の関係しているのかしら？今の所、何も関係しているところはない気がするんだけど。」

先ほどまで静かに聞いていた西條が突然言った。

「ああ、今のところはな。だが、『能力都市』に住んでいる人以外で超能力者を知っている人は少しはいる。」

「ならその人たちに聞けば良いんじゃないの？」

「そう。だからここに集めたのではないか。八神近家の当主たちを。」

「まさか、それで私たちを呼んだの？」

「そう。そして今、召集したのに来ていない人が二人もいる。まあ、一人は連絡で来れないって言ってきたが。」

連絡して来た人は美羽の母親の咲さんだが、もう一人って…

「まさか…」

「そう。菅野家当主、菅野文弥だ。」

「でも、犯人と決まった訳じゃ…」

確かにそうよね？別にここに来なかったからって犯人って決め付けるのはいくらなんでも…

「確かに決まってるないさ。でも、三ヶ月前から俺は菅野文弥を監視してきた。」

「何故？」

「三ヶ月前、菅野家の様子がおかしいという情報を聞いたんだ。それで、俺は浅野咲に頼んで監視をしてもらった。」

「じゃあ、お母さんが来ないのはそれですか？」

「いや、今回は監視を一度やめて来いと言ったのだが、来ないで監視するってきかなかつたもので仕方なくそうさせた。」

「そうですか。それで、監視してどうだったのですか？」

「菅野文弥は爆発事件が起こる一日前にロシアに向かっていた。しかも、爆発があった町に。そして、事件が起こった翌日、日本に戻ってきたようだ。そんな偶然ありえると思うか？」

私たちは黙ってしまった。まさか、神に選ばれし八神近家の中からこんなことをする人がいるなんて。

「…それで、目的は分かるの？」

「分からない。だが、またあんな爆発が起こったら世界が変わる。みんな協力してくれるな。」

みんなは頷き、私たち八神近家は菅野文弥を止める為に動き出した。

「さて、まずはロシアに向かってくれる人を決めたい。で、誰が行

「つてくれるか？」

信之さんはまず、ロシアの爆発の調査をする人を選ぶことにした。

「俺が一人で行くよ。少し、気になることがあるからな。」

「気になること？龍哉、それはなんだ？」

「まだ確信を持っていないから言いたくない。確信を持ったら言うよ。」

「分かった。でも一人で大丈夫か？もう一人ぐらい連れて行っても…」

「いや、一人で十分だ。明日にはロシアに飛ぶから。」

「分かった。じゃあ風哉以外は半分に分け、早美、雨宮、西條、辻川は菅野家の実家、瑞希、浅野、松本、杉山は別荘の監視を頼む。風哉は咲と合流し、二人で菅野文弥の行動を監視してくれ。」

「……了解。」「」「」「」

「じゃあこれにて解散。明日それぞれその場所に向かってくれ。」
という訳で、私たちは部屋を出た。

「親父、ちよつと良いかな？」

私は部屋を出ると、親父に話しかけた。

「何だ隼人？」

「今は早美にして。めんどくさい事になるから。」

「分かった。で、何だ？」

「龍哉おじさんなんだけど、何か変じゃなかった？」

「気のせいだろ。とりあえず、お前も早く帰って明日の準備をする。じゃあな。」

「という親父は私から離れていった。」

「…ねえ、」

「うわっ!？」

突然後ろから話しかけられたのでビックリした。

「何ビックリしているのよ。こっちまでビックリしたじゃない。」

「なんだ優子か。で、何だ。」

「瑞希と美羽と鈴奈を知らない？さっきから探しているんだけど？」

「私も知らないわ。」

「そう。一体どこに行ったのやら…」

と優子がそこまで言つとどこからか瑞希たちがさっきまでいた部屋

から出てきた。

「もう、お父さんたらケチなんだから。」

「そうですね。何で私たちが早美と一緒にじゃないんですか。」

「ほんと。そうだよ。何で優子だけ早美と一緒になのか意味わかんないんだけど。」

どうやら三人は私と一緒にじゃないのが不満に思っただけで信之さんに文句でも言っただけだろう。

「私先に帰るわ。何か嫌な予感しかしないから。」

「分かった。」

三人の殺気が優子に向かっていたので優子は三人に気づかれずに廊下を抜けるようにした。

そして私は、瑞希たちの所に向かった。

「ねえ、さっきまでどこに居たの？探しちゃったじゃん。」

「ごめん。ちょっとお父さんと話があったので。ところで優子は？」

「優子ならちょっと用事があるからって先に帰ったわよ。」

「「「チッ、」「」」

この三人、思いつきり舌打ちをしていますよ!!

私はマジで優子を逃がして正解だと思った。マジで怖わくて寒気がするもん。

「と、とりあえず帰ろう?」

私はこの場の空気を変えたかったので三人に問いかけた。

「そうね。でもその前に買い物に行かない?」

「買い物? (嫌な予感がする…)」

私は瑞希から買い物と聞いて、嫌な予感がしかなかった。

「そうよ。早美の服を買いに行く為に。」

予想通りの言葉が返ってきた。

「絶対に嫌。」

「くくえくなんて。」

なんでってあんな嫌な思いをしたのだから瑞希たちと行きたくないわよ!!

「だって、あの時楽しかったんだもん。」

「地の文を読むな!!とにかく、私は行かないからな。」

「くくえくくく」

「それに、瑞希たちは私に逆らえる立場だっけ？あんなことをしておいて。」

「」「」「」「」

「じゃあ、瑞希たちが買い物に行くのなら私は帰るわよ。あ、ちなみに用事は今回の事件が終わってからにするわ。一度家を離れるから。」

「という私は瑞希たちと分かれて自分の家に向かった。」

第六話 八神会議（後書き）

作「ふ、ふふふふふふ。」

早「ど、どうしたの？なんか怖いんだけど…」

作「おいおい、こんな喜ばしいことはないだろ。」

早「だから一体何なの！？」

作「おや？もしかしてまだ知らないの？」

早「だから何を！？」

作「なんと、pvのアクセス数が10万を超えたんだよ！！」

早「え！？それほんとなの！？」

作「そんな嘘について私に何の得があると思ってるの？」

早「それもそうか。」

作「って言うことで、これからは是非読み続けてください！

」！

第七話 早美と優子の何も無い平和な午後的一天（前書き）

いつもより短いです。

第七話 早美と優子の何も無い平和な午後的一天

早美 side

午後1時、私は瑞希たちと離れ、外で昼食を食べてから家に帰ると、何か足りない気がした。

「そつえば久々だな。みんなが居ないのは。」

まあ、朝起きてから寝るまでずっと一緒に居るからな……寝るときも私が先に寝てから四人は寝るからずっと一緒だしな。

「なんか、逆に慣れてしまったわね。逆に寂しくなっちゃったよ……」

私はみんなが居なくて寂しくなり、ベットに倒れこんだ。

「はあ、なんか暇だな……」

私は仰向けになり、何もすることが無かった。

「あ、そつだ……早く……明日の準備を……」

私はだんだんと意識が無くなってきて、眠ってしまった。

「うん……あれ？私、寝てた？」

私はすぐに時計を見ると、午後5時になっていた。

さらに、起きると少し部屋が綺麗になっていた。

「誰か、私の家に入ったのかな？」

私はとりあえず起き上がり、リビングに向かった。

リビングに着くとそこには優子が居た。

「あれ？何で居るの？私は家に入れるのを禁止にしたはずでしょ。」

「それなんだけどさ。服をここに置いてあったことに気づいたから勝手にあがらせて貰ったのよ。」

「そつえば置いてあったわね。」

「それと、鍵を掛けないで寝るなんてどういことよ。」

「あ、忘れてた。」

「今度から気をつけるようにしてね。私が出来なかったらどうなっていたか分からなかったんだから。」

優子は私のお母さんのように私を怒っていた。

っていうよりベッドに仰向けになっていたら眠くなってしまった鍵を掛けなかったんだよね。元々、寝るつもりは無かったし。

「そつえば、優子は何時から私の家に居るの？」

「私？確か、午後1時半からかな？」

「私が帰って来てから30分後！？何でその間に自分の荷物を持って帰らなかったの？本当は私の家に居てはいけないんだから。」

「べ、別に紙に書いて帰っても良かったのだけど、どう見ても準備もしてなさそうだったし、起きるまで掃除でもしてよっかかって…」

「……はあ、」

「な、何よ。いきなりため息を付いて。」

「いや、何でもないよ。それに、そろそろ帰ってくれる。本当なら私の家に居てはいけないんだから。瑞希たちにバレたら先ほどの殺気よりもまずくなるし。」

「そ、そうね。じゃあ私は帰るわね。」

「ああ。じゃあな。」

というと、優子は家から出て行った。

「さて、後で瑞希たちも一度家に来るからその前に準備でもしてましよう。」

私は瑞希たちが来たら二時間くらい家に居そうなので、その前に明日の準備をする事にした。

「はあく、折角二人きりだったのにもうちよつと一緒に居たかったな……」

私は家に帰るとすぐにベットに倒れこんだ。

「やっぱり、もっと私から進んでやらないといけないのかしら……」

私はどうやったら隼人（早美）に近づけるのか考えていた。

「でも、私って素直になれないのよね。どうしたら良いんだろうっ？」

私は胸がだんだん締められていた。

「よし、明日からもっと素直になろう。そして、三人より近くなつてやるわ。」

私はそれを誓うと、少し早いけど夕食の準備をした。

第七話 早美と優子の何も無い平和な午後（後書き）

作「今回は早美ではなくこの人を呼んでいます。」

優「雨宮優子です。」

作「さて、今回の内容は優子が隼人に対してどうい風に思っっていくかという話でしたが？」

優「今思うと、これ恥ずかしいわね……」

作「自分で言ったのでしょうが。」

優「そうだけど、だってあの時は一人だったから……」

作「まあ、今後の展開が楽しみですが、とりあえず意見、感想お待ちしています。」

優「それ、毎回言うのよね？あんまり来ていないのに……」

作「一応ね。それでは今回はこの辺で。」

作&優「さよなら〜」

第八話 出発前の事件

早美side

翌日、私はいつも通り午前6時半に起きた。

「うん…なんか、いつものアレに慣れちゃったから逆に寂しいな…」

けど今日はいつもと違く、私のベットで寝ている四人が居ないので逆に変な感じがした。

ちなみに、昨日優子が帰ってから約一時間後、瑞希、美羽、鈴奈の三人が荷物を取りに私の家に来て荷物をまとめたら帰そうとしたが、瑞希達は『もうちょっと居ても良いじゃない。』って言われ本当に二時間ぐらい私の家に居たのです。

「まあ私が言ったんだからしょうがないか。さて、朝食食べて洋服に着替えたら行きましようか」

ということでは朝食を食べ、洋服に着替えて集合場所の空港に向かった。

午前7時12分、私は空港に着いた。

「あれ？私が一番最後だったの？」

私が空港に着くとすでに私以外のみんなは全員居た。

「これで全員そろったのね」

瑞希は私が来ると、一応全員居るかを確認をした。

「で、行き先はどこなの？」

「えっと、菅野家の実家に行く人たちが仙台行きで菅野家の別荘に向かうのが那覇行きに乗ってってお父さんが言ってたわ」

「それから？」

「実家の方は仙台空港に着いたらまず仙台駅に向かって。後はここに書いてあるからその通りに行って」

「……分かった」「」

というと瑞希は菅野家の実家の地図を私に渡してきた。

「私たちのほうは私が別荘の場所の紙を持っているから私が向こうに着いたら言うから。」

「……分かった」「」

「じゃあ私たちの方はそろそろ時間だから行くね」

というと瑞希と杉山は荷物を持って搭乗口を出発しようとしていたが、

「はあく、早美と飛行機に乗っちゃうと当分の間会えなくなるのですね……」

「もうちょっと早美と一緒に居たいな……」

美羽と鈴奈がもうちょっと私と居たいと言ってきたよ。

「ずべこべ言わずにさっさと行く!!」

「え〜」

「関節折れ曲げるわよ」

「い、今行きますから!!」

二人は瑞希の言葉を聞いてすぐに瑞希と杉山の後を追った。

「瑞希って相変わらず怖いよね……」

「それは私も思うよ……」

私と優子は瑞希の怖さに少し震えてた。

「で、俺達は何分の飛行機なんだ？」

「確か午前7時40分だから私たちも行くべきかも知れないね」

「じゃあ、行きますか」

という訳で、私たちも搭乗口に向かった。

飛行機に乗り私は自分の場所に座った。

「はぐやみ」

私が座ると先に隣に座っていた優子が私の腕に抱きついてきましたよ。

「ねえ優子、場所を考えようよ」

「嫌だ。折角邪魔する人たちが居ないんだもん」

邪魔する人たちって瑞希たちの事を言っているのかしら…

ってか優子のキャラ変わってないかしら？

「でもこれじゃあ飛行機が出発する時にシートベルトを付けられないじゃない」

「じゃあそのときまでなら良いでしょ」

「でも…」

「駄目かなあ？」

優子が上目使いを使ってきたよ！！っていつかさげなくキャラの真似をしないでよ！！

「わ、分かったわよ」

「ほんと？やった」

「ってうわ！？」

優子が腕だけでなく抱きしめてきたのでバランスを崩し、そのまま椅子から落ちてしまった。

そして私が下に倒れてしまった。

そのとき、私の唇に何かが触れている感じだった。

それは優子の唇だった。

「！？」

多分優子も驚いて顔が赤くなっているわね。多分私もそうだろうと
思うけど…

「ど、どうしたん…」

私たちの前に座っていた辻川たちが後ろを向いてきて驚いているわ
ね。

優子は辻川の言葉を聞いてすぐに離れ座席に座った。

私も優子がどいたので自分の座席に座ったんだが…

「……………」

何だこの空気。早く抜け出したいんだけど…

しかも優子を見ることが出来ないし。

優子とは多分一度キスを奪われているけど（しかも昨日）あの時とは何かが違うわよね。

それに、胸が締め付けられるのは何でだろう？

優子 side

ど、どうしよう！！事故だけど私、早美にキスをしちゃった。

昨日は早美にキスをしたって言ったけど、実際は瑞希しか早美とキスをしてなかったし。

っていうことは私のファーストキスはこんな事故で奪われたって事！？

早美の方も見ることが出来ないしどうすれば良いのよ！！

っていうか、あんなの私のキャラじゃないでしょ！！今思えば凄く恥ずかしいじゃないのよ！！

あゝもう、空気は重いしさっきから胸がいつもより締め付けられるしもう訳分らない！！

私は、頭の中が「ちゃ「ちゃ」になっていた。

ちなみに、この空気は仙台空港に着くまでずっとこんな感じでした。

第八話 出発前の事件（後書き）

作「まずは良い事と悪い事をどっちが聞きたい？」

早「始まりからいきなり何なの？」

作「で、どっちから聞きたい？」

早「…じゃあ、良い事から」

作「分かった。前にPVが十万アクセスを越したと言っただじ
ゃん」

早「確かにそう言ったわね」

作「なんとユニーク数も一万を超えました」パチパチ

早「ほんと!？」

作「ほんとだよ。俺が何の為に嘘をつく理由があるんだ」

早「そう。それで、悪い事は？」

作「なんかもつと喜んで良かったと思うだが…」

早「で、何なの？」

作「夏休みになってからというものの事情があって不定期にな
っています」

早「そういえばそうね」

作「多分夏休みが終われば元に戻ると思いますが、一週間ペ
ースになると思います」

早「え、そうなの!？」

作「でも、書けたら早く書きますので」

早「なるべく早く書いてね」

作「分かっているよ。それでは今回はこれで」

第九話 移動中の出来事

早美 side

あの重い空気からやっと抜け出し私たちは仙台空港に居た。

「「あ、ある意味疲れた…」」

私と優子は飛行機から降りると少し落ち着いた。

「そんな事は良いから早く場所を教えてよ」

「「少しは私たちの事を考えてくれても良いでしょ!!」」

あんな事があつたのだから考えても良いと思うのに…

「分かったから。でも、この後どうするのか分からないと先に進めないから教えて」

「…分かったよ。まず仙台駅に向かうって瑞希が言ってたからそこに向かおうか」

まあ西條さんの言うとおりの訳で私たちは瑞希が言ってたように仙台駅に向かった。

「で、仙台駅に着いたらどうするの?」

電車の中で西條さんが私に聞いてきた。

「っていつか電車に乗ってから辻川さんはパソコンをいじっていて何かやっているんだけど何やっているのだろう？」

「えっと、駅からタクシーに乗ってこの二箇所場所に向かえと」

「そこって菅野家の近くの建物ね。要するにその二箇所監視しろってことね」

「じゃあ、どっという風に分けるの？」

「私と優子、西條さんと辻川さんと分ければ良いんじゃないかしら？優子とはなるべく一緒に居なければならぬしね」

「飛行機の続きでもするの？」

「違うわよ！！あれは事故だから！！」

「何でそういうなるの！！っていつか優子、顔を赤くしてないで否定しろよ！！」

「嘘に決まっているでしょ。要するにあなたと雨宮さんは竹宮家と水本家の関係があるからでしょ」

「分かっているならあんなことを言わないでよ……」

「だって竹宮さんがどっという反応をするのか見たかったんだもん」

この人ドSだ！！っていうか昨日初めて会ったばっかなのに何でこんな風に接しているんだ？

「それはあなたに興味が湧いたからよ」

「心の中を読むなよ！！って優子、何で私の腕を掴んでいるの？」

「いや、何となくよ」

なんかそういいながら西條さんを睨んでいる気がした。

「別に私は竹宮さんを奪うつもりはないわ」

「ほんとかしら？」

「そうよ。ただ竹宮さんと一緒に居ると楽しそうだから」

「なら良いわ」

「私は良くないんだけど！？」

「さて、そろそろ着く頃ね」

「無視！？」

もうすぐ仙台駅に着くということを理由に私の言葉は無視された。っていうか私は西條さんの何なのよ！！

「竹宮さんは私の『物』よ」

「さつきから読まないでよ！！ってか私はあなたの『物』じゃないわよ！！」

「やっぱりドSだ！！ってというか私、この先が心配なんだけど！！」

「そんなこんなで、仙台駅に着いたのだ。」

「で、私たちはこの後タクシーに乗れば良いのよね？」

「仙台駅を降りて私たちはタクシー乗り場の近くに居た。」

「そうよ。バスでも良かったんだけどなるべく早く着くように言われたからね」

「じゃあ、早く乗って向かいましょ」

「という訳で私たちタクシーに乗った。」

「行き先はどちらまで？」

「えっと、ここに向かって欲しいんですけど」

私は菅野家までの地図をタクシーの運転手に見せた。

ちなみに私が前で後ろに優子、西條さん、辻川さんと左からそう座っていた。

「ってというか西條さんってやめて翼にしてくれないかしら。私も早

美って呼ぶから」

「えっ、良いけど……」

突然、私にそう言うてきたので私はちょっと戸惑ったがとりあえずOKにした。

っていうかまた私の心の中を読んだわね……

「ええ、読んだわよ」

「だから読まないで……」

「だって私、相手の心を読むの得意だもん。言っておくけど私は能りよ、」

翼が多分『能力者じゃないからね』って言うつもりだったと思ったので優子が翼の口を塞いだのだ。

「むー……（何するのよ……）」

「場所を考えなさいよ場所を……今それを言ったら大変な事になるでしょ……」

「む、むるしい」

「優子、放してあげて。翼が苦しそうにしているから」

「あ、ごめん……」

そついつと優子は翼の口を塞いでいた手を急いで放した。

っていつか鼻まで塞ぐなよ。

「はあ、はあ、死ぬかと思ったわ」

「ごめんなさい」

「別に良いわよ。私もいけなかったんだし」

「そつ。ま、お互い様ね」

「そつね」

優子と翼はお互いに笑い出した。

「ところで、君たちはどこから来たんだい？このあたりで見ない顔だな」

突如タクシーの運転手が私達に話しかけてきた。

「ええ、私たちはちょっと知り合いに会いにきまして…」

本当は菅野文弥の監視なんだが、そんなことは言えないので誤魔化す事にした。

「ひょっとして菅野家の親戚なのかい？」

「ええ。ってあなたは菅野って言っているんですか？」

「ああ。昔から仙台に住んでいた人たちは菅野すがのって言っているよ。今の人たちは菅野かんのって言っているけど」

「そうなのですか」

「にしてもみんなは見たところ、まだ高校生ぐらいじゃないのか？」

「そうですが？」

「珍しいね。高校生だけで菅野すがの家に向かうなんて。パーティーでもあるのかい？」

「まあ、そんなことですね」

「そうですか。さて、そろそろ着きますよ」

「じゃあこの辺で降りしてくれますか？」

「え？家の近くまで行かなくて良いのですか？」

「ええ、目の前に止めるのもよくないと思いますので」

「分かりました」

いつの間にか菅野家の近くに居たので私たちは菅野家からちょっと離れたところで降りた。

第九話 移動中の出来事（後書き）

作「今回はゲストを呼んでいます」

早「誰なの？」

作「ではどうぞ」

翼「どうも、西條翼です」

早「サツ」

作「あれ？早美は？」

翼「私が来た瞬間に逃げたわよ」

作「そんなに翼さんと居たくないんだ…」

翼「万事に値するわ」

作「今私の中で斎藤千和さんボイスが聞こえた気がしたがそんなことはどうでも良いとして、早美がどっかに行ってしまうので今回は翼さんと私の二人でやっていきます」

翼「よろしくね」

作「キャラ違うだろ…」

翼「何となくやってみただけよ」

作「まあいいや。さて、翼さんはDSですが」

翼「そうね。特に早美はいじめがいがあるわ」

作「…余りいじめないでくださいね」

翼「え〜」

作「じゃあ今回はここまで」

翼「え、もう終わりなの!?!」

作「まあそう言わないでください。それじゃあこれで」

翼「さよなら〜。(さて、早美を追うことにしましょうか)」

作「…小声でなにか聞こえた気がしたけど聞かなかったこと

にしよう」

第十話 重すぎる空気（前書き）

すみません。夏休みになってから書く時間が取れない状態なので遅くなりました。

第十話 重すぎる空気

早美 side

……… 気まずい。

最初から何を言っているのか分からないと思うが私は今凄く気まずい状態になってる。

なんで気まずいかというと、今、親父が菅野家の門が見える近くの家を借りて、私と優子の二人でそこで監視しているのだ。

翼と辻川さんは親父がもう一つ家を借りたところで、同じく監視している。

要するに飛行機であんなアクシデントがあったので空気がとてつもなく重く、お互いに意識してしまうのよ。

しかもこれが何日続くかも分からないし。

「ね、ねえ、優子」

「な、何？」

「ちょ、ちょっと家の中がどうなっているのか確認してくるからゆ、優子は監視してて」

「わ、わかった」

私は少しでの気分を換えたかったのに家を周りを確認することに
した。

ちなみに、私たちが居る建物はマンションで5LDKもあるごく普
通の家なのだ。

ってというか親父、家を借りたって言ってたけど家を買ったのだ
と思うのだが。

「えっと、寝室はこっちか」

私は寝室の部屋のドアを開けた。

ドアを開けると、ベッドと部屋の角にタンスしかなかったが、私は
目の前のベッドを見て目を疑った。

「よりもよってダブルベッドかよ……」

私はベッドが一つしかなく、ダブルベッドだった。

私のベッドもダブルベッドでいつもあいづらが抱きついていてけど、
今回は優子とあんな事があったのでどうなるか分からないもんな…

とそこに噂をしたら優子がやって来た。

「早美、ちよつと監視を変わって、ってどうしたの？」

私は何も言わずベッドの方を指した。

「な、何でベッドがダブルベッドなのよ……」

「私に聞かれても困るわよ。多分親父の差し金だと思いますけど」

「「……はぁ」「」

私と優子は同時にため息をついた。

余計な事をしやがって。まあ、あんなアクシデントが起こるとは思わなかったからしょうがないけど……

ちなみに、ダブルベッドと私の家で優子たちが私のベッドで寝ている事と関係ないと知るのは、ちよっと先の話だったりする。

「……で、監視を変わってだっけ？」

「そうそう。ちよっと買い物に行って来るから頼むね」

「分かった」

私は優子が買い物に出かけると言ったので監視を変わり、ベランダにある監視用の椅子に座り、監視を始めた。

「……なんか、飛行機の中から胸が締め付けられる気がするのだけど、何でだろう？」

優子 side

「や、やっとあの場所から抜け出せたわね……」

私は早美と居ると凄く空気が重かったので買い物と言って出てきた。

「さて、この後どうしよっか？」

私は歩きながら考えていると前に怪しい二人が話しているのを見つけた。

何なんだろう？こんなところで黒い服にサングラスを掛けていると怪しんだけど？ま、関係ないでしょ。

私は怪しい二人を無視し、素通りする事にした。

「さて、とりあえず買い物はして置かないとわね。家を出た理由が買い物だからね」

私はとりあえず近くのスーパーに向かった。

第十話 重すぎる空気（後書き）

作「突然ですが今回を持って後書きの語りを終了させてもらいます」

早「え、いきなりどうしたの？」

作「いや、ちょっと時間が取れないものでなるべく小説を書く時間が欲しいので」

早「それはしょうがないわね。まあ、私はこれがめんどくさかったから良かったけど」

作「それを言わないでよ……」

早「それでは今までこの変な語りはこれで終了という訳で」

作「変な語りと言っな。自覚しているけど」

早「自覚はしていたんだ……」

作「うっさい。では今回で終了という訳で今まで」

作&早「ありがとうございました」

第十一話 買い物中の出来事（前書き）

前回言い忘れたのですが、前回から書き方を変えました。

第十一話 買い物中の出来事

優子 s i d e

歩いて数分後、私はスーパーに居た。

「うーん……とりあえずは最低限必要な物と買うとして……」

私はついでにスーパーに来たので必要なものだけでも買うことにした。

「えっと、まずは食べ物は一応冷蔵庫に入っているのを行く前に確認したけど、持っても二日ぐらいで無くなる感じだったから、少し食料を買わないとね」

私は肉や魚など余りすぐに腐らないものを買うことにした。

「あ、一応こっつて雑貨も多く置いてあるんだ」

どうやら寄ったスーパーは雑貨用品が多く置いてあったので雑貨用品も一応見る事にした。

そんなこんなで雑貨用品を見て、それから私はスーパーにあったベロンチに座った。

「はあ。この後寄るところもないし、帰るのだけど帰りたくないなあ……」

私はため息を吐きながらそう呟いた。

飛行機であんなことに無ければいつも通りに早見と接せられるのに……

と思っていたらスーパーの近くに先ほど歩いている途中で見かけた黒いサングラスを掛けている怪しい二人を見かけた。

なんか私を見ていない!?

そして、私はなんかその二人に見られている感じがして寒気がした。

まさか私をずっと尾行してきたの!?! あいつら何者なのかしら? ちよつと確認するか

すぐにスーパーから出てあいつらに私が尾行されているのに気づいていないように普通に家の方に歩いて行くことにした。

予想通りね。やはりあの二人は私を尾行しているのね。なら

私は近くの裏路地に方向を変えた。

二人は私が気づいたことに気づいたようで走って私を追って来た。

私は路地裏を通り、すぐの角を右に曲がった。

私は少し進んでから立ち止まり、後ろを向いた。

追いかけてきた二人も私が立ち止まったのを見ると、立ち止まった。

「ねえ、あなた達は私を追って来てたけど、私に何の用かしら？」

「何故あなた様が居るのかを聞きたいのです。水本優子様」

「別に、ただの観光よ。あなた達こそ何者よ？それと今の私の名前は雨宮優子だから」

「私たちは菅野家の下で働いているものです。それと観光というのは嘘ですね」

「本当よ。何で嘘って言うのかしら？」

「あなたが西條翼様、辻川翔助様、あと一人は分かりませんが、あなたがとりあえずその四人がタクシーで近くのマンションと一軒家に入るところを見ましたので。普通、観光ならホテルに泊まるはずなのにマンションと一軒家をわざわざ借りる事はしませんので」

気づかれてたか。

「それじゃあ、一つ聞いて良いかしら？」

「どうぞ」

「私達がここにやってきた事はあなた達しか知らないのかしら？」

「ええ、まだ私達二人しか知りません。元々、私たちは地域の調査をしていたのでまだ家には一度も戻っておりませんので」

「そう。なら好都合だわ。ここで氷なさい」

私はそういうと能力で二人を凍らせようとした。

「チツ、いったんここは引くぞ」

二人は後ろを向き、逃げようとしたが、

「な、後ろの道が氷で塞がれている！？何時の間に！？」

そう。私はこの路地裏に二人が角を曲がった時に後ろを凍らせて塞いでおいたのだ。

「おとなしく凍りなよ」

そして私は逃げ場をなくした二人を凍らせた。

二人は何かを言いたそうだった。

「大丈夫よ。一応、凍死ということは無いようにしてあるから。まあ、三日間は凍っているけど。」

私はそういうと後ろを塞いだ氷を砕いて路地裏から表に戻った。

「ただいま」

私はなんだかんだで三時間半くらいかかってやっと家に帰った。

「ずいぶん遅かったね。何かあったの？」

「ちょっとまずい事になったわ」

「……何があつたの？」

私は、家を出てから何があつたのか全て話した。

「確かにそれはまずいわね……」

「ええ。でも、まだ二人しか私達が来た事が気づいていないし、その二人は凍らせてあるから三日は大丈夫だと思うけど……」

「それは他の人に気づかれなければの話じゃないの？」

「そうね。しかも調査をしていた二人が菅野家に帰ってこないことが分かるから三日はもたないわね」

「だね。さて、じゃあ今から監視を頼むわ。深夜は私が監視をするから今から寝るわ」

「そういえばダブルベッドの件はどうするの？」

「そのことなんだけど、よく考えたらずっと監視をしなければいけないから二人が寝る事って無い事に気づいたから余り気にしなくても良いと思うよ」

「そういえばそうね」

「じゃあ、監視を頼むね。夜十時には起きるから」

そういって早美は寢室に向かった。

「さて、がんばりますか」

私はそういうと監視を始めた。

outside

その頃菅野家のエントランスで、二人の男が話していた。

「え？地域の調査をしていた二人が戻ってきてない？」

「ええ。逃げ出すことはしないと思いますので何かあったのではないかと」

「まずいな。これが文弥様にばれなければ良いのだが……」

「誰にばれなければ良いって？」

「それは文弥様に……って文弥様!？」

二人がこそこそ話していると菅野家当主、菅野文弥が二人の近くに居た。

「何かあった様だな。何かあったのだ？」

「いえ、別にたいしたことじゃ……」パリン

文弥は少し離れたところにあつた花瓶を文弥の能力、『原子変化』

で粉々に割った。

「俺の能力は人間だって殺せるんだよ。お前も何があったのか言わないのならあの花瓶のように粉々になりたいか？」

「わ、分かりました！！言います」

「それで良い。で、何があったんだ？」

「それが地域を調査しに行った二人が帰ってこないのです」

「まさか仕事が嫌になって逃げ出したのか？」

「多分それは違うと思います。あの二人は別にこの仕事が苦痛には見えなかったのです」

「じゃあ何で戻ってこないんだ？」

「もしかすると、何者かによって攻撃されたのかとではないかと」

「チツ、面倒な事をしやがって。とりあえず、お前ら二人でそいつらを探せ。見つけ次第俺に連絡しろ」

「「分かりました」」

文弥に頼まれた二人はすぐに菅野家を出て戻ってこない二人を探しに行った。

「さて、俺は例のやつの確認といきますか」

文弥は自室に戻り、何かをし始めるのだった。

第十一話 買い物中の出来事（後書き）

意見、感想お待ちしています。

第十二話 最悪な展開

早美 side

そして、特に菅野家の動きが何も無くただ単に時間が過ぎていった。しいて言うなら初日の日に菅野家の部下の二人が家から出てきたぐらいだ。

多分優子が凍らせた二人を探しに行ったのだろう。

でもそれも優子が翌日に出かけて二人を凍らせたから問題は無い。

一応その事は翼と辻川さんには伝えてあるが何時何が起こるか分からないので警戒はしている。

そして私達が来てから二日後の午後五時、私達は相変わらず監視をしていた。

ちなみに、一応言っておくがダブルベッドの件は、どちらかが監視をしていけないと理由で結局二人が一緒に寝る事は無かった。まあ、これが終わったら親父を殴るけど。

「で、何か動きはあったの？」

「相変わらず全然無いね。逆に暇ぐらい」

「そう。じゃあ私はちょっと出かけてくるわ」

「どこに行くの?」

「初日に会った二人を再度凍らせてくるのよ。明日には溶けちゃうから。今度は死ならい程度に」

「……お前って案外鬼畜だな」

「かもね。じゃあ行つて来るわ」

と言つて、優子が家を出ようとしたそのときだった。

カチャ、

玄関のドアの鍵が開く音がした。

そしてドアをぶち破る音がした。

「水本優子とその仲間、ちょっと来てもらおうか!」

「私の扱いひど!」?

ってそんな事を言っている場合ではなかった。

「優子、逃げるぞ!」

「逃げるって何処」

優子が何かを言う前に私は『空間移動』でマンションから少し離れた場所にテレポートした。

「今何したの?!?!?」

「あれ? 優子って私が『空間移動』を持っているって知らなかったっけ?」

「知らないわよ!!?!? って今はそんな事を言っている場合ではなかったわね」

「そうだったな」

「見つけたぞ!!?!?」

あっという間に居場所が見つかってしまった。

「どうする? また私が『空間移動』を使うしかないかしら?」

「いや、今度は私がやるわ。早美は私に掴まってて」

「何するのってうわ!?!?」

優子は突然私を背中から抱きしめてきたのだ。

「優子、いきなり何をするってその翼は何?」

私が顔を後ろに向けると優子の背中から氷の翼が六枚出ていた。

可愛いすぎなんだけど……

私は氷の翼をだした優子を見惚れてしまった。まるで天使みたいだ

った。

「いくよー!」

「へ?あ、うん」

優子は私の返事を聞くと私に抱きついたまま上空に飛び立った。

「とりあえずは逃げられたわね」

「……」

「これからどうしますか」

「……」

「って早美、聞いているの?」

「へ?何か言った?」

「駄目だこりゃ」

「しゅめん」

やぶ。優子に見惚れ過ぎて聞いてなかったわ。

「で、何の話?」

「だから、これからどうするのって聞いたの!」

「えっと、とりあえず落ち着いたら翼の家に向かうか」

「そうですね。それで行きましょ」

と思っていた矢先の事だった。

「な、氷が割れていく。このままじゃ！」

突如氷の翼が砕け始めてきた。

そして、そのまま下に落下した。

「早美、何とかならない!？」

「ちょっと待って、いまやってるから」

私はそういうと能力で下から上に相当な強風を吹かせて私達の落下スピードを落とした。

そして地面に着地するころには着地がうまく出来るようにした。

着地した場所は大きな庭がある家だった。

「初めてやってみただけどうまく出来たわね」

「初めて使ったの!？」

「うん。元々風を操った能力は持ってたけど、一度も使ったことも無かったんだよね」

「ある意味凄いわね……。ところで、ここは何処なのかしらっどつやらどこかの家の庭っばいけど」

「ここは……まさか、」

私は嫌な予感がした。

そしてその予感の中した。

「おやおや、俺の家の敷地に不法侵入をするやつは誰かな？」

それに、この辺で大きな庭を持っている家なんて一つぐらいしかない。

「やはり、お前の家だったか。菅野文弥」

そう。私達は思いっきり敵の敷地内に侵入してしまったのだ。

第十二話 最悪な展開（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十三話 私が元男って忘れてきてるわね……

早美 side

「さて、まずは何故俺の家を監視してたのか聞きたいのだけど、その前に」

「その前に？」

私が聞きなおした後、菅野文弥は私に近づいてきた。

ちなみに私達は菅野文弥に拘束されていたりする。

私は『空間移動』で優子を連れてテレポートしようとしたが、何故かテレポートが出来なかった。

多分管野家に何か能力を封じる装置でもあるのだろうか。

「な、何よ」

「お前誰だ？」

「……は？」

「だからお前は誰だって聞いているの」

私は菅野文弥が言ってる事が分からなかった。私が竹宮隼人って分かるはずなのに……

「それって私に言ってるの？」

「お前以外に誰がいるんだよ。水本優子は俺も知っているからお前
しかないだろ」

「誰って私は……」

私はそこであることに思い出した。

そういえば私、元男なんだっけ。この生活になれてたからすっ
かり忘れてたわね。ちよっと面白そうね。

「で、誰なんだ？」

「誰でしょうね。私は教えるつもりは無いわよ」

「そうか。まあそんなことはどうでも良いや。話を戻そう」

「あら、そこまで聞かないのね」

「別にそこまで気になる事ではないから。ただ、何で八神近家の件
に絡んでいるのか気になったものだからな」

ちえ、つまんないの。

「それで、何で俺達を監視していたんだ？」

「私達がそれを言うつもりも思っているの？」

「確かに言うわけがないか。でも、一応今の立場が分かっているよね？しかも君達は女なんだから襲われるかもしれないと思うけど？」

「そんなの分かっているわよ。でも、私達はそんな簡単に話すわけにはいかないのよ」

「そう。なら仕方ないな。お前達、そいつらを何でもして良いぞ。殺したり殴らなければ」

「な、何でもして良いって」

嫌な予感がした。それは間接的に襲っても良いって事を指してるよね？

「じゃあ、俺は他の二人を探しに行くから」

「……分かったわ言うわ」

私はもう言わなければ何をされるのか大体分かっていたので諦めて話すことにした。

「は、早美！！」

「仕方ないだろ。ここで言わなければ私達が危ないのだから。それに私だけなら良いけど、優子を傷つけたくないの」

「っ／／わ、分かったわよ／／／」

優子は顔を赤くしながら言った。

って何で顔が赤くなっているんだ？

お前は相変わらず鈍感だな！！ by 竹馬

なんか何処からか声が聞こえた気がするが気のせいだろう。

「やっと話す気になりましたね。で、何で俺を監視していたんだ？」

「ロシアで起こった爆発事件を知っているよね？」

「ああ、あの事件か。あの事件と俺が何の関係をしているんだ？」

「お前、本当に言っているのか？」

「どづいづことだ」

「お前はあの事件があったその前日に事件が起こったロシアに出かけているわ。そして、事件が起こった翌日には日本に帰ってきてるわ。ここまで言えば大体は分かるよね？」

「なるほど。それで俺が要注意人物として監視しているのか。あの事件はどう見たって能力者の仕業なのは分かるからな」

「そづいづこと」

「大体は分かった。確かに俺はロシアに向かったさ。でも、俺はあの事件の犯人ではない」

「その理由は？」

「あの時、俺がロシアに行ったのは爆発を阻止しようとした。けど、それは失敗に終わった」

「それを信じろというの？」

「出来ればそうしたいが俺だけでは無理だろう。だから一週間前に俺が犯人ではない事を証明してくれる人を呼んどいたんだ」

菅野文弥からその言葉を聞いた瞬間、私は何でここに来ることを知っているのかと思った。

「ちょっと待て、お前は俺達が監視に来ることを知ってた見たいな感じだね」

「ああ、とっくに知ってたさ。だって八神会議がある事も二週間前ぐらいに知ってたからな」

なんか、何でも知っているって感じだね。

「何でもは知らねーよ。知っていることだけだ」

「心読むんじゃないわよ。そしてどこかの名言で言い返さないで。で、その証人を早く呼んでよ」

「分かった。じゃあそろそろ出てきてくれる」

菅野文弥はドアの方を向いて言った。

すると、ドアが開いて女性が出てきた。

「「ど、どうしてあなた（あんだ）がここに居るの!？」」

私達はその女性を見て驚いた。

だってその女性は直接会うのは初めてだが私達がよく知っている人物だった。

「結構遅かったね。少し待ちくたびれちゃったわ」

「すみません咲さん。事情を聴くのに時間がかかってしまって」

そう。現れた人物は美羽の母親、浅野咲だったのだから。

第十三話 私が元男って忘れてきてるわね……（後書き）

意見、感想お待ちしています。

第十四話 爆発事件の真犯人

早美 side

「な、何で咲さんが居るのですか!？」

私達は未だに咲さんが菅野家に居るのに驚きながら聞いてみた。

「だから俺が言っただろ。一週間前に俺が犯人では無いという証人を連れてきてるって」

「証人って咲さんなのですか!？」

「そうよ」

「じゃあ、何で日本に居たのに八神会議に参加しなかったのですか?」

「だって、私はその前から菅野家に居たし、なるべく家を出ないほうが良いと思ったから参加することが出来なかったの」

「何でここ家から出ないほうが良いと思ったのですか?」

「それは今度説明するわ。今は何で私が菅野文弥の証人なのかでしょ」

「そうですね。で、何で咲さんが菅野文弥の承認なのですか?」

「あの時、私もロシアに居たからよ。文弥君と一緒にね」

「え、でも事件が起こる一週間前からの空港の映像を見ましたけど、咲さんを見かけていませんよ」

「それはそうよ。だってそのとき私は別の用件でイギリスに居たもの。日本の空港で私を見つけるわけが無いでしょ」

「言われてみればそうだ。空港の映像を確認してたのは信之さんがやってたのらしいが、それは日本の空港だけであって世界中の空港を調べたわけではない。」

「そして事件が起こる前日に私はロシアに向かい空港で偶然文弥君に会った訳」

「なるほど。でも、あなた達が一緒に爆発を落としたという可能性がありますけど」

「それは無いわ。だって、偶然会ってそんな事件でも起こせると思っ？」

「でも、それだけでは必然というのも考えられますよ」

「どづいつこと？」

咲さんは首を傾げて言った。

「元々二人が話し合っていたのなら、ロシアで爆発を起こせたのも可能だったと言う事です」

「確かにそうね。でも、そんな事を言ったら誰も人間を信用していないと言っているようなものよ」

「まあ、そうですね。だから二人の言う事は信用しますよ。優子もそれで良いよね？」

「ええ、咲さんなら信用できそうですし」

私達は二人の事を信用する事にした。

「さて、信用してくれたからもう一つ聞いて良いかな？」

「その前に、私達の拘束を外してくれるかしら？信用しているのだからもう良いでしょ？」

「それもそうだな。じゃあお前達、二人の拘束を外してくれ」

菅野文弥がそういうと、菅野家の部下が私達の拘束を外した。

「やっと開放されたわ。で、聞きたいことって何？」

「ああ、その事だなんだが……」

菅野文弥は何かを躊躇していた。

私はそれほど、言いにくいものだろうかと思った。

そして、次に菅野文弥から出てきた言葉は何でそんな事を聞く必要があるのかと思う言葉だった。

「竹宮龍哉は、今何処に居るんだ？」

そう。菅野文弥は何故か龍哉おじさんの事を聞いてきたのだ。

私達は何でそれを聞いてきたのかと思った。

「な、何故竹宮副リーダーの事を聞くの!？」

一応私が竹宮隼人と分らないようにしたかったので、優子は私の事を察してくれたので、優子が代わりに聞いてくれた。

また、私達以外にもう一人疑問に思っている人がいた。

「ちょっと待って、何で龍哉の話が出てくるの!？」

そう。咲さんも何故龍哉おじさんの事を私達に聞いたのか分からなかったのだ。

「それは後で言うよ。で、竹宮龍哉は何処に居るんだ？」

さっきよりより真面目に聞いてきた。

何故そこまで龍哉の居る場所を聞くのか全然分からなかった。

私は一応菅野文弥を信用しているので、とりあえず答えた。

「確か、事件が起こったロシアに行くって言ってたけど。何か気になる事があるらしくて」

「なん…だと…」

「ところで、何で竹宮副リーダーの事を聞いてきたの？まったくもって先が見えないのだけど……」

「ああ、それはだな……」

菅野文弥が次に言った言葉は私達を驚かせるような事だった。

「……竹宮龍哉がロシアで起こった事件の真犯人だからだ」

その言葉を聞いた瞬間、私達は驚いてすぐには何も言い返せなかった。

「な、何を言っているの？龍哉おじさんがそんな事をするわけが無いじゃない!!」

数分してやっと、私は菅野文弥に言い返した。

「そ、そうよ!!竹宮副リーダーがそんな事はしないわよ!!」

優子も、龍哉おじさんがあんな爆発を起こすわけないと否定した。

だがその後、咲さんからさらにとんでもない事を聞いた。

「……そういえば事件が起こる前日、ロシアで龍哉に似ている人物を見かけた気がした」

「う、嘘でしょ?」

「いや、あれは確かに龍哉だったわ。背も顔も龍哉に近かったから」

「でも、龍哉おじさんがロシアに向かったっていつ証拠は、」
「証拠ならあるぜ」

「「「「！？」」「」」

突如、私達の後ろのドアから最近聞いた声があった。

「辻川さんと翼、何でここにいるの！？」

私達の後ろにいたのは別の家で菅野家を監視していた辻川さんと翼だった。

第十四話 爆発事件の真犯人（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十五話 裏切り（前書き）

タイトルと合っていないかもしれません。

第十五話 裏切り

早美 side

「な、何で居るの?」

私はどうやって、翼と辻川さんが菅野家に侵入したのか気になった。

「それはあなた達が菅野家の敷地内に落ちるのを見て、私達も急いであなた達を救いに正面から堂々通ろうとしたの。そしたら、何故か門を守ってる菅野家の部下が私達を通してくれたの」

「そうなんですか。それで、事件があった日に、龍哉おじさんがロシアに居た証拠があるってどうということよ?」

「辻川が飛行機からこっちに来るまでずっとパソコンをいじってたでしょ。あれ、全ての日本にある空港の搭乗記録をひとつひとつハッキングしてたのらしいのよ」

確かに、辻川さんは飛行機からずっとパソコンをいじってたけど、まさか全ての空港の搭乗記録をハッキングしていたなんて思わなかったわ。っていうか、よく辻川さんはハッキングしていて警察に捕まらないな。

「それで、事件が起こる二日前から当日までの間にロシアに向かう飛行機に乗った能力者は二人居たの」

「それが、菅野文弥と龍哉おじさんだったわけ?」

「そうだ。そしてそのあと、俺は竹宮龍哉と菅野文弥のパソコンをハッキングした」

「俺のパソコンもハッキングしたのか？」

「ああ。ただお前のパソコンにはロシアの爆発事件の事は事件の情報しか無かった」

「そうか。それで竹宮龍哉のパソコンには何かあったのか？」

やめてくれ。これ以上は聞きたくない！！

私は嫌な予感がしてこれ以上は聞きたくなかった。

そして、辻川さんから出てきた言葉は最悪だった。

「パソコンの中には、『能力都市破壊計画』っていう資料があった」

それを聞くと、私は足から崩れ落ちた。

今まで、信頼していた龍哉おじさんに、裏切られたのだから。

しかも、龍哉おじさんは私の叔父でもある。

小さい頃から良く遊んでくれたりしていたので裏切られたのは、私にとって相当傷付いたのだ。

「早美、どうしたのよ？」

「……何でもない」

「嘘。どうせ竹宮副リーダーの事でも考えてたのでしょ」

「……………」

優子は私が何を考えているのか分かっていたようだった。

「まだ犯人と決まったわけでは無いのだから安心して……………」

「何、私に同情ってわけ？」

私は優子に対して冷たく言い放った。

「別にそう言う訳じゃあ……………」

「じゃあ何よ。どう見たってこんな物が龍哉おじさんのパソコンに入ってたのよ。何で龍哉おじさんが犯人じゃないって言えるのよ」

「それは……………」

「それとも何、私を慰めようとしたの？それなら私に関わらないで。逆に迷惑だから」

「っ、」

「早美！それは言いすぎでしょ！！」

私がそこまで言つと、優子は涙目になり、私は翼に怒られた。

「……ごめん。でも、今は一人にしてくれるかしら？菅野、一つ部屋を借りて良い？」

「……分かった。じゃあそいつに一つ、部屋を案内してくれ」

私は菅野文弥の部下について行って、部屋に向かった。

Wingside

「雨宮、大丈夫？」

早美がこの部屋から出て行くと、私は優子を慰めようとした。

「ええ、大丈夫だから。私も少しはいけないのだから」

「でも、何であんなになるのかしら？」

「それは俺も気になっていたな。何であいつがそこまで竹宮龍哉に親しみがあるんだ？そもそも、あいつの名前はなんだ？」

私がそう言つと、菅野が私と同じ事を思つたようだ。

「っていつか早美、信用していても自分の名前を言わないなんて結構用心深いわね。」

私はそんな事を思っていると、優子が答えた。

「あいつの名前は竹宮早美よ」

「竹宮早美？そんな名前は竹宮家に居たか？」

「いえ、そんな名前は竹宮家には居ないわよ。」

「じゃあ、あいつは何なんだ？」

「早美は元男で、本名は竹宮家当主の竹宮隼人よ」

「「「マジ（ほんと）！？」」「」」

私、菅野、辻川、咲さんは呆然としてしまった。

「ええ、ほんとよ。今は事情により女になっているけど」

「そうなの。それで、何で早美はあんな風になったのかしら？」

「それは知らない。けど、早美が竹宮副リーダーを親しんでいたのは事実よ」

「そう」

その後、私達は何も話す事も無く、早美が帰ってくるまで何も話さず、ただ単に時間が過ぎていった。

第十五話 裏切り（後書き）

次回、隼人と龍哉の過去に入ります。

第十六話 隼人と龍哉の過去

早美 side

「私はどうしたら良いのだろう……」

今、私は文弥さんに一つ借りた部屋に居る。

私は龍哉おじさんの事で悩んでいた。

何でそこまで私が龍哉おじさんを信用しているかというところそれは十年前に遡る。

今から十年前、家柄戦争が起こっていたときだ。

家柄戦争が起こっている間は、暗黙のルールで八神近家同士で会うことは普通許されていない。よって、幼なじみの瑞希にも会わせてくれないのだ。

さらに、親父が家柄戦争で何ヶ月か居ないし、良鬼もそのときは竹宮家次期当主になる予定だったので忙しく、私は毎日暇だった。

そんなある日、私の家に龍哉おじさんが来たのだ。

この時から龍哉おじさんのとは会っていたが、一年に一、二度ぐらいしか会っていなかったじまだ幼かったので、あまり話さなかった。

龍哉おじさんは家に来てすぐに母親と話して、私はいつも通り部屋に居て何もしてないでベッドの上でぐるぐるしていた。

それから一、二時間の事だった。

突然、龍哉おじさんが私の部屋に入って来たのだ。

私は俯せのまま、顔を龍哉おじさんの方を向けた。

一体何のようかと思うと聞こうとしたら、龍哉おじさんの方から話してきた。

「隼人君。今何をしているんだい？」

龍哉おじさんは私に向かってこう話してきたので、私はこう言った。

「べつに。ただ、ベッドの上であそんでいるだけだけど」

「じゃあ、今から俺と遊ばないか？」

私はいきなり何を言っているのだ？っと思っていたが、すぐに答えが返ってきた。

「なんか、暇そうな顔をしているから、一緒に遊ぼうかなって思ったから」

「なんで？僕は一人で遊んでいるから良いのだけど」

私はそのとき、迷惑をかけたくないからと気遣い、嘘をついた。

「嘘ついでるね」

けど、龍哉おじさんには私の嘘が分かっていたようだった。

「別に嘘をついていないもん。だから俺のことは気にしないでお母さん達と話していても良いから」

「その話はもう終わったさ。だから、隼人君と遊びにきたんだ」

「いいよ別に。俺は一人で遊んでいる方が楽しいから」

「また嘘をついた」

「嘘じゃないもん!!」

龍哉おじさんがしつこかったので、むきになって言うてしまった。

「じゃあ、何でそんなに寂しそうなんだい？」

「え、」

私はそれを聞いて近くの鏡を見た。

鏡を見ると、今にも泣きそうな私がいた。

「まあ、しょうがないよね。竹宮家当主が兄の良鬼君って決まっているから、竹宮家の親戚の人たちは良鬼君を気使っているからね。隼人君にはそんなことは一度も無いのに」

そう。このとき竹宮家当主は双子の兄、良鬼に決まっ
ていて、親戚たちはみんな良鬼に親切にしていたのだ。私には何も無く逆に良鬼がいけないことをやっても怒らず、私がいけないことをやったら怒るなど厳しかった

だから私は、このとき自暴自棄になっており、六歳でリストカットをした事もあり、こんな生活なら死んだ方がましだとも思ったこともあった。

「……………」

私は龍哉おじさんの言葉を返せなかった。

「でも、そんなの抑えてなくて良いんだよ。今なら思いっきり泣いても良いから」

けど、龍哉おじさんにそう言われると、私は抑えていた感情を全て出てきて泣き出してしまった。

「ど、どうしてヒクツ、俺だけヒクツ、こんな扱いなのヒクツ？もう、こんな生活は嫌だよ」

私は龍哉おじさんに今まで抑えていたものをいつの間にか吐き出していた。

そして、龍哉おじさんは私が全てを吐き出すと、こう言ってきた。

「大丈夫。俺だけは隼人君の仲間にいるから」

「うん」

私はこのとき嬉しかった。私の中で二人目の信頼してくれる人が出てきたからだ。

ちなみに一人目は、天壤の人体実験の被験者で私の母親の方の祖母おかもとれいこの岡本麗子さんのことである。

そして、それからかというと、龍哉おじさんを信頼して家に来てくれたら私と遊んでくれたりしてくれた。

六年前、私が白川村の人々を無差別に殺した時や、その後に私が天壤の人体実験の失敗でおかしくなってしまった人たちを殺した事を、龍哉と瑞希にだけ言って黙ってくれたのだ。

だから私は龍哉おじさんがロシアの爆発事件をやったとは思えなかったのだ。

そして、最初の私の一言に戻る。

「私はどうしたら良いのだろう……」

私はもう自分で訳が分からなくなっていたのだ。

「誰か、私を助けてよ。もう何もかも分からないよ。」

私が諦めかけていたそのときだった。

>じゃあ、俺が助けよっか？<

私の頭から直接誰かの声が聞こえてきたのだ。

第十六話 隼人と龍哉の過去（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十七話 決意

早美 side

「あなたは誰？」

私は頭の中から聞こえてきた声に対して聞いた。

> 俺か？そういえば話したことは無かったな。一度お前の体に乗ったことはあったけど<

「私に乗った？まさか、」

> 俺は右神近フェスター毎回、八神近家長の体に取り付く神の右腕の一人さ<

「フェ、フェスターですって」

私は少し驚いていた。何でいきなり出てきたんだって思った。

> 今、何で俺がいきなり出てきたのかって思っていたら<

「な、何で分かったの!？」

> そりゃ、お前と俺の脳は共有しているからな。分かって当然だ<

じゃあ、わたしが思っていた事はこいつに対してはバレバレという事なのかしら？

> そういつことだ<

「さにげなく思っていた事を返さないでよ。ビックリするから」

> すまん。どうしてもお前の考えている事が分かってしまうからな。それと、言葉に発しなくても心で話すことも出来るぞ。<

「そうなの？ちょっとやってみよ」

私はフェスターがそう言うので試してみた。

> うーん……こんな感じかな？<

> そう。そんな感じだ。<

> 分かった。それで、私に何のようなの？<

私は何で今になってフェスターが私の中に出てきたのか気になった。

> 本当は一つお詫びしたかったんだけど、今はそんなことでは無いようだったな<

> もしかして、私がさっきまで思っていた事が筒抜けだった！？<

> 当たり前だ。俺とお前は脳を共有しているのだから全て分かってしまうさ。まあ、起きたのはちょっと前だったのだが<

だったらもうちょっと出てくる時期を考えて欲しかったのだけ
ど……

>だからお前が考えている事は全て筒抜けだから<

>そうだった……<

>さて、本題に入るか<

フェスターが話を切り終わらせ、本題に入る事にした。

>その前にあなたは何処まで知っているの？<

>一応全部だ。だから説明しなくても良いぞ。<

>じゃあ、話は早いね。それで、私はどうすれば良いの？<

>そんなの知らん<

>はあ！？手助けしてくれるんじゃないかなかったの！？<

>そうは言ったが俺はアドバイスを言うぐらいだぞ。そんなことは自分で考える<

>けち<

>まあそう言うな。で、お前は何がしたいんだ？<

>何がしたいってどういふこと？<

私はフェスターが言っている事が分からなかった。

>お前は龍哉をどうしたいのか聞いてるんだよ<

>私は……分からない。自分で何がしたいのか分からないのよ<

>じゃあ、良いからを変えよう。お前は今の龍哉をどう思っているのだ？<

>今の龍哉おじさんをどう思っているのか？そんなの、許せない思っているわよ。何で、あんな事をしたのかって思っているぐらいよ<

>ならもう決まっているじゃないか<

>え、<

>今の龍哉を許せないと思っっているのだろ。ならお前がすべき事は何だ？<

>すべき事？あ、<

私はそこで思った。今の龍哉おじさんに何をすれば良いのか。

>私は、龍哉おじさんを倒す。そして、何でそんな事をしたのか聞いてみる。それが私のすべき事<

>そういう事だ。もう大丈夫そうだな<

>ありがとう。あなたのお陰よ。私のすべき事が見つかった<

>俺は何もしてないぞ。俺はただ、ちょっと助言をしたただけだ<

>それでもありがとう<

>そう。それじゃあ、俺はもう一度寝るとするか<

そういつてフェスターが寝ようとしたそのときだった。

>ってすっかり忘れるところだった<

突然、フェスターがそう言ってきたのだ。

>どづしたの？<

>いや、俺がお前に言うべき事があつた事を思い出した<

>で、それは何なの？<

>って言ってもそろそろ話す時間が短そうだからこれだけは言っておく。お前が女になった原因は俺だから<

>はあ！？ちよつとどづいうこと！？<

>ごめん。もう時間が無いから詳しくはまた今度<

>ちよつと待つ<

そこで、フェスターとの会話が途切れた。

「はあ、結局最後の事は何だったのかしら？」

私はフェスターと途切れると、フェスターが最後に言った事について

て考えようとした。

「って今はそんな事をしている暇では無かったわね。とりあえずみんなが居るところに戻りますか」

私は考えていた事をやめて、みんなのところに戻った。

第十七話 決意（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十八話 行動開始（前書き）

短いです。

第十八話 行動開始

早美 side

「ただいま戻りました」

私はみんなが居る部屋に着くと、みんなは私の方を見た。そりゃそうだ。だってあれからたったの二十分しか経っていないのだから。普通、落ち込んでいたのにそんな短時間で元通りに戻っていたら驚くだろう。

「早美、大丈夫なの？」

みんなを代表をして優子が言ってきた。

「ええ、もう大丈夫よ。あの人のおかげでね」

「「「「???」」」」

みんなは何のことを言っているのだろうと思っている感じだった。

まあ、そんなことよりまずほ……

「じゃあ、私は親父に電話しておくわ。真犯人は龍哉おじさんだつて」

私はそう言つと携帯を取り出し、親父に電話した。

数回コールして親父は電話が掛かった。

「もしもし、親父ちょっと話があるんだけど」

『その声は早美か。なら、ちょうど良かった。俺もお前達に話があったんだ』

「話って何？」

『今すぐ能力都市に戻って来い。菅野文弥を連れてな』

「え、いきなりどうしたの？」

『ロシアの爆発事件の真犯人が分かった。ちょっと複雑だがな』

「え！？親父、龍哉おじさんが犯人って分かっていたの!？」

『なんだ。お前達も分かっていたのか。じゃあ話が早い。俺は今からロシアに向かう。お前達は能力都市で瑞希達と合流して、その後すぐにロシアに向かってくれ』

「でも一人で大丈夫なの？龍哉おじさんの能力は結構大変だよ？」

『そこは大丈夫だ。兄弟なんだから龍哉の弱点は知っている。あんまり気にしなくても良い』

「分かった。でも、一つだけ約束して。絶対に帰ってきて。一応私はあなたの親父なんだから」

『なんだ。俺はお前に嫌われていると思っていたのにな。十四年も

良鬼とお前を差別していたのに』

「でも、そんな終わった事でしょ。もう終わった事だから」

『そう言ってくれると助かるよ。じゃあ、俺は今からロシアに向かうから向こうで会おうな』

「分かった。」

そう言っただけで私は電話を切った。

「風哉さん、何だった?」

電話を切ると、すぐに優子が聞いてきた。

「どうやら親父も龍哉おじさんが犯人だと知ってたらしい」

「じゃあ、電話する必要も無かったようね」

「いや、そうでもないわよ。今から能力都市に戻ってロシアに向かってるさ。菅野も連れて」

「俺も?なんでだ?」

菅野は何で俺も来なければいけないのかと知っているようだった。

「多分、八神近家の当主を全員集めるんだろ」

「そんなことか。まあ、俺はどの道お前達と一緒に行くつもりだったけどさ」

「そう。じゃあ、咲さんはどうするの?」

「私も能力都市まで一緒に行くよ。信之さんに話しておきたいことがあるから」

「分かった。じゃあ、行きますか」

私達が菅野家を出ようとしたとき、菅野が私達を止めてきた。

「ちょっと待て、家の車を使え」

「良いの?」

「ああ。別に使ってもかまわないさ。タクシーを読んだら時間が掛かるだろ」

「じゃあ、それで行きましょ」

という訳で私達は菅野家の車を使って、空港に向かうことにした。

第十八話 行動開始（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十九話 集結

早美 side

菅野家から出て六時間後の深夜0時、私達はやっと能力都市の空港に着いた。

何故、そんなに掛かったかというと、あの後私達はすぐに菅野家を出ようとしたとき、優子が菅野家の監視に借りた家に荷物を置いてあったことに気づき、二時間掛かってしまったのだ。

「やっと能力都市に着きましたね」

「ほんとね。菅野家を出てから何時間掛かっているのかしら」

私と優子は着いてそう言った。

「じゃあ、私は行くね」

「あれ？まだ美羽には会わなくて良いのですか？」

「ええ。まだ全て終わってないから」

まだ終わってない？ひょっとして……

「それってベアトシッチリーター＝マリアードの事ですか？」

「それとは違うわ。それにそれはあなた達が終わらせただしょ」

「なんだ。知っていたのですか」

「一応そういう情報は私に入ってくるのよ」

「じゃあ、何で美羽に会わないのですか？」

「それはあなた達でも言えないわ。でも、名前だけなら良いかしらね」

咲さんは少し間を空けてから名前を言った。

「名前はフィリアム。今はそれだけしか言えないわ。じゃあ私は行くね」

そう言うと、咲さんは私達から離れていった。

「さて、私達も瑞希達を探しましょうか」

という訳で、私達は咲さんが私達から離れた後、瑞希達を探しに行った。

数分後、私達は瑞希達を見つけた。

「お、いたいた。おい」

私が手を振ると、瑞希達は私達の方を向いた。

「あ、早美だ！」

「ほんとですね」

「会いたかったよ！」

瑞希、美羽、鈴奈はすぐに私達の方に走って来て、私に飛びついてきた。

私はそのまま後ろに倒れこんだ。

「ちょ、ちょっと！！こんなところで私に抱きつかないでよ！！！」

「だって、早美に会いたかったんだもん」

「そっだよ。三日も寂しかったんだから！！！」

「ゆ、ゆうこ。助けってあれ？」

私は優子に助けを呼ぼうとしたら、優子が小さな声で何かを言っていた。

「折角、早美と一緒に居られたと思ったのに」ブツブツ

「？」

私は耳を澄まして優子が何を言っているのか聞いてみたが、意味分からなかった。

「ねえ、そんな事をしていたら話が出来ないから。早美から離れな

「さい!!」

翼がそう言うと三人は素直に言う事を聞いた。何故？

また、少し遅れて杉山がこちらに近づいて来ていた。

「大丈夫か早美？」

杉山は私に近づいて大丈夫か聞いてきた。

「ええ、大丈夫よ。それより、これからどうするの？」

私はすぐに立ち上がってそう言った。

「次のロシアの飛行機に向かう時間は三時間後だから、それまでどうしようか？」

先ほどまで小さく何かを言っていた優子が復活してそう言った。

「自由で良いんじゃない？私、飛行機の中で寝れなかったし」

そうなのだ。私は仙台に向かうときに飛行機で起こった出来事がまた起こるのではないかと思って眠れなかったのだ。しかも、また優子の隣の席だったのではなおさら眠れなかったのだ。

「じゃあ、私も寝ようかな……」

「駄目よ。優子はこの三日間、早美と何があったのか話してもらったのだから」

「そうですね。三日間何も無かったわけがないですからね」

「え、ちょっと!!私、今眠いんだけど!!」

「そんなの駄目よ。ちゃんと聞くまで寝かせないから。」

「早美、助けてよ!!」

優子は私に助けを求めてきた。けど、

「ごめん。今私がそこに割り込んだら私まで寝れなくなるから」

「裏切り者!!」

最後に優子は私にそう言っつて瑞希達に連れて行かれた。

さて、私は寝るとしましょうか。

私はそういつと、意識を手放した。

そして約二時間半後、私は目を覚ました。

「うーん……あれ、今何時？」

私は少し寝ぼけながらそう言った。

「早美が寝てから約二時間半後よ。それにしてもいい寝顔だったわよ。思わず写真に撮っちゃったぐらい」

「へ？」

私が訳が分からなくなっていると、翼が携帯を私に見せた。

そこに写っていたのは私の寝顔だった。

「け、消して！！今すぐ消して！！」

私は恥ずかしくなって翼の携帯を奪おうとした。

「嫌よ。こんな可愛い寝顔を消すの。それに、良い脅しにもなるしね」

やっぱりこの女はDSだ！！

私はそんな事を思いながら翼の携帯を奪おうとしたが、結局携帯は奪えず、諦めた。

「そついえば他のみんなは？さつきから見かけないのだけど？」

「他のみんなは先に行ってるわ」

「そつ。じゃあ私達も行きますか」

という訳で、私達は登場口に向かった。

そして、私達は飛行機に乗ると一人、屍みたいな状態になっていた。

「……優子、大丈夫？」

「……大丈夫よ。少し、元気が無いだけだから。」

いや、どう見たって少しじゃないだろ。

「まあ、とりあえず寝ろよ。まだ寝てないのだから」

「分かった。そうさせてもらうわ」

というと優子は眠ってしまった。

龍哉おじさん、あなたを絶対に止めにいきますからね。

私も自分の席に座り、もう一度意思を固めてもう一度寝ることにした。

だがこのとき、私は知るよしも無かった。この戦いが大変なことになるとは。

第十九話 集結（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十話 行間（前書き）

行間なのでタイトル無しで。

第二十話 行間

Outside

時間は少し戻り日本時間の午後十時、ロシアの爆発が起こった場所にその中心に一人立っていた。

「それで、もうちょっと爆発の威力を抑えたいんだが」

彼は一人のはずなのに、誰かと話しているような感じだった。

>それなら大丈夫よ。その結晶には威力も調整できるから<

そして誰も居ないはずなのに女の声が聞こえた。

「そうなのか？じゃあ、それはどうすれば良いんだ？」

>簡単なことよ。自分でしたい威力を想像すれば出来るはずよ<

「そうか。にしても、よく俺と協力することにしたよな。俺は一応フェスター側の人間なのに」

そう。元々この二人は敵対しているはずなのだ。逆に何でその二人が組んだのか分からないくらいだ

>確かにそうね。普通なら協力なんてあり得ないわ。でも、私とあなたには目的があって、その目的が私達と協力した方が効率が良かったから協力しているのよ<

「俺はまだお前の目的には反対だ。一応、俺はフェスター側なんだから」

>分かっている。けどあいつらはあなたを止めに行くでしょ。私はそれが効率が良いのよ<

「そうか。取り合えずこの使い方は分かった。それにしても、お前は三日間何処に居たんだ？三日間お前を待って居たんだぞ。ここではなく俺とお前は」

>それは謝るわ。ちょっと呼ばれてたものでね<

「ああ、そう言う事か。お前らも大変だな」

>それについては同感するわ。何で毎日今日の状況報告をしなければいけないのかしら。大体あの野郎は私達の事を考えてないで報告しろとか意味分からないのよ！そもそも何であいつが……<

彼女が愚痴を漏らし始めたので彼が止める事にした。

「おい。そろそろ俺を呼んだ理由を話してくれないか？突然俺の夢を干渉して俺を呼び寄せたんだから」

>ああ、そうだったわね<

彼女は少し間を空けて言った。

>その結晶なんだが、いろいろな使い方があるのよ<

「いろいろな使い方？」

> ええ、能力の威力を上げる他に、別の能力を使えるように出来るとかいろいろなく

「そうか。そういうえは思ったけど、この結晶ってなんか副作用とか無いのか？レベル　ツパーみたいに昏睡状態に陥るとか……」

> 創作と同じにするんじゃないわよ。一応それを作ったのは私だぞ。そもそも私はアレなんだぞ。副作用とかは無いようにしているわ

「なら良いんだが」

> なんか信用していないようだな。あなたも一度はここで使っているのだから副作用なんて無いのは証明済みだろ？<

「だな。さて、本当は試したかったが無理のようだな」

> そうね。じゃあ私は戻るぞ。せいぜいがんばるんだなく

「ああ」

そついうと彼女の声は聞こえなくなった。

その代わりに誰かが彼の方に向かって来ていた。

「さて、やっとおでましか。風哉」

「龍哉、お前は何が目的なんだ！！」

「それは風哉が俺を倒したら言うよ。では始めようか」

そして今、風哉vs龍哉の兄弟対決が始まった。

第二十話 行間（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十一話 到着後

早美 side

「やっと着いた〜」

日本時間の午前五時、私達はロシアの空港に着いた。

ちなみに飛行機内では優子も私も寝てしまったので、何があったのかは知らない。

あと、私の隣の席に座っていたのは翼だったので少し怖かったが、特に何もしてこなかった。

そんなこんなで特に何も無く、ロシアに来たのだ。

「で、ここからどっちに向かえば良いのよ?」

私達が空港に着くと、すぐに優子が何処に向かえば良いのか聞いてきた。

「確か、事件があつた場所はここから東の方に車で一時間の距離だからタクシーを呼べば良いんじゃない?」

「でも、この九人の中でロシア語を話せる人はいるの?」

「俺は話せるけど他には?」

「……………」

菅野以外、ロシア語を話せる人が居なかった。

「じゃあ、どうする？タクシーは大体四人ぐらいしか乗れないし……」

「仕方ないね。事件が起こったからあの辺を通っている電車は無いと思うけど近くまで行ける電車で行きましょう。それから歩くしかなさそうね」

「そうね。早美の言うとおりそれしかなさそうだからそれで行きましょう。辻川さん、今事件が起こった場所に一番近い駅を調べて」

瑞希は私の意見に賛成して、辻川にパソコンで事件の場所に一番近い駅を調べるように言った。

「言われなくてももう調べた」

辻川さんは瑞希に言われる前からとっくに調べていた。

「はや！？もう調べてあったの？」

「いや、単純にタクシー以外で早く行けるものって言ったら電車ぐらいしか無かったから先に調べていたのさ」

「……よく私達がそこにたどり着くってよく分かったわね」

「俺は時間を無駄にしない主義なんだ。なるべく早くできるのなら時間を短めにする癖がついていてな。こういうときも癖で早くやっ

てしまうんだ」

「そう。じゃあ、向かう駅も決まったことだし行きましょ」

という事で私達は向かう駅も決まったので出発ことにした。

「えっと……どうなっているのこれ？」

私は今の力オスな状態を見てどうすれば良いか分からなかった。

一体どうなっているのかと言つと……

「優子、さっきはあなたが屍みたいになってしまったから聞けなかったけど、今度こそ何があったのか洗いざらい聞かせてもらうから」

「そうですよ。逃げられると思つたら大間違いですよ」

「しかもここは個室だから優子が吐かなかつたとしたら優子が感じちゃうところを触っちゃうからね 後、この個室何故か防音になっているからこの扉を閉めれば助けもこれないと思うから」

「だ、誰か助けてよ」

隣の個室で瑞希、美羽、鈴奈が優子に先ほど空港で聞けなかったらしい事を聞こうとしていたのだ。

ちなみに何で個室がある電車に乗っているのかというと、今こつち

の時間では深夜0時なので寝台列車しかなかったのだ。個室に防音が付いてるのはさすがに驚いたけど……。

「は、早美助けてよ」

最後に優子が私に助けを呼んだがその後、隣の個室の扉が閉められてこれ以上は何があったのか分からなかった。

ごめん優子。優子を助けに行きたいけどこっちも大変な事になっているから……

そう。こっちも大変なことになっていたのだ。

何かというと……

「早美、本当に優子と何も無かったの？」

「そうだけ早美。何も無かったなんて俺には思えないぜ。何かあったんだ？」

翼と杉山のSの二人にが私に問い詰めていたのだ。

そう。杉山も私に対してSなのだ。

だから私は二人に責められているのだ。正直言って二人が怖い。

ちなみに辻川と菅野は私達が居る個室の隣に居て、二人は寝ている。

「だから、何も無かったから!!」

「嘘つかないですよ。行く時に優子とキスしてたじゃない」

「だからあれは事故で……」

私が話していると隣の個室から瑞希、美羽、鈴奈がこっちに来たのだ。

「「早美、優子とキスをしたってどういこと」()ですの()!？」

「あれ？何でそっちに声が聞こえるの？」

「それは私が清水と話し合ってお互いの個室も少し開けてたのよ。」

「そういうこと。っていうか西條さん、キスしてたの知ってたのに何で私に言わなかったの？」

「そっちの方が面白そうだから それじゃあ、早美はそっちに渡すから」

鬼だ!! やっぱり翼は私にとって天敵だ!! って今はそんな事を言っている場合では……

「じゃあ、早美を借りてくね」

「嫌あああああ!!!!」

私は三人に連行され、優子が居る部屋に連れて行かれた。

私は諦めて、おとなしく瑞希達に連れて行かれることにした。

ちなみに私が連れて行かれたとき、後ろから『あゝあ、遊ぶ物が無くなっちゃった』って翼と杉山の声が聞こえた。

もうあの二人とは一緒に居たくない！！

後、この後何があったかは絶対に言わないから！！

第二十一話 到着後（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十二話 移動中（前書き）

すみません。考えた末に何も出ず、このサブタイになってしまった
……

第二十二話 移動中

早美 side

「「……」」

私と優子は屍みたいになっていた。優子もう二度目だ。

今、電車を降りて駅を出たところにいる。

「ほら、早く行くよ」

瑞希が私達の方を向いて言ってきた。

「「……足が重くて動きたくない」」

だが、私達は揃えてそう言った。っていつか、あんなことされたら動きたくないのも当たり前だが……

「間接、折ろいましょうか」

「「今すぐ動きます!!」」

私達はその言葉を瑞希から聞くとすぐに言う事を聞いた。折られるのだけは絶対に死ぬから嫌だもん!!

そして私達は全員で目的地に動き出した。

「まだ、着かないのですか？」

駅から歩いて約五十分、美羽が歩き疲れてそう言ってきた。

「しょうがないでしょ。一番近い駅からでも一時間半はかかると思っていたから」

「え、ちょっと休もうよ。疲れてきましたですよ」

「しょうがないね。じゃあ、少し休みましょうか」

瑞希は美羽が動きそうに無かったのしょうがなく休むことにした。

「優子は大丈夫？」

私は優子の近くにより、話し始めた。

「私は大丈夫よ。まだ体力はあるから」

「そう。でも無理はしないでよ。特に優子は私と同じで龍哉おじさんに結構救われているのだから」

そう。優子は私と同じくらい龍哉おじさんに救われているはずなのだ。

前にも言ったが優子の元々の名字は水本である。水本家は松本麗華に滅ぼされた家柄で唯一生き残ったのが優子だ。

そしてその優子が今ここに居る理由は龍哉おじさんのおかげであるのだ。

詳しくは分からないが優子は龍哉おじさんに救われているのだ。

だからこそ、優子は私と同じくらい苦しんでいるはずなのだ。

しかし優子は龍哉おじさんが犯人だと聞いたとき、みんなと同じで落ち着いていたのだ。

絶対に優子は我慢をしている。また、逆に私を慰めようとしているのかもしれない。自分より私を優先して。

けどそんなの私でもすぐに分かる。だからこそ私は優子にそう言ったのだ。

「分かってる。でも、大丈夫だから」

「そうか。分かった。でも本当に無理はしないでよ」

私は無理に聞く必要も無かったのでそれ以上は聞かなかった。

「じゃあ、そろそろ行きましょうか」

「そうね。早く着かないといけないから。美羽ももう良いよね？」

「えゝもうちよつと休みたいですよ」

「行かないと関節曲げるわよ」

「すぐに行きます!!」

美羽はすぐに立ち上がった。よほど曲げられなかったのだろう。分かるけど。

そして私も優子も立ち上がり、休憩を終えてまた目的地に向かった。

「やっと着いたわね」

休憩してから四十分後、私達は爆発の跡の端っこに着いた。

「でも爆心地まで結構遠いわね。まだ30kmもあるなんて」

「もう疲れましたですよ」

「そんなこと言ってないでさっさと行きますよ。っていうか美羽、さっきから疲れたって言うてるけど絶対に疲れてないでしょ」

「ば、ばれてましたですか……」

「とりあえず瑞希も美羽と話し合っていないで先行くよ」

「う、分かった」

鈴奈にそういわれて瑞希も美羽にそれ以上は言わないで取り合えず先に進む事にした。

「それにしても静かね。親父が先に行っているはずなのに……」

「確かにそうね。竹宮副リーダーと戦っているのならもつと何かがあってもいい気がするのに……」

私と優子は周りの静けさに気になった。

静か過ぎるのだ。龍哉おじさんの能力は爆風を発生させる能力だからもつと音が出ていてもおかしくないはずなのだ。

さらに言うと、龍哉おじさんが能力を使った跡もまったくなかったのだ。

「なんか胸騒ぎがするわね……」

「確かにそうね。何かあるのかは進んでみるしかないけど」

私達はそう考えながら先に進んだ。

そしてさらに時間が進み、途中私のテレポートを使いながら二時間で爆心地の近くに着いた。

「ねえ、あそこに人影があるね」

翼が人影を見つけみんながそちらを向いた。

そこには立っている人影と倒れている人影が見えた。

「う、うそでしょ？」

私はその人影がはつきりと誰かが分かると、崩れ落ちそうになった。

私が見たものは立っている龍哉おじさんと、血が大量に出ていて倒れている親父の姿だった。

第二十二話 移動中（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十三話 もう一人の私

早美 side

「お、親父イイイイ!!」

私はいつの間にか叫んでいた。

「おや、やっと来たようだね」

龍哉おじさんは待っていたように言ってきた。

「親父は、生きてるよね？ねえ？」

「いや、死んでいるよ。俺が殺したからな」

「う、うあああああ!!」

私はナイフを取り出し、龍哉おじさんに向かって能力を使っていた。

「むきになっていたら当たる訳無いだろ」

龍哉おじさんは、簡単に避けられた。

だが刹那

「な、」

龍哉おじさんは突然吹っ飛ばされたのだ。

私も何をしたのか分からなかった。

だが、私はあることを思い出した。

私が女になって能力がひとつ変わったものがあつた。

次元切断。空間切断が使えなくなったかわりに使えるようになった能力。

どんな能力かまだ分からないが、多分龍哉おじさんは次元切断の影響で吹っ飛ばされたのだらうと思つた。

そして、次元切断で切断された空間はだんだん縮まり、やがて元に戻つた。

また吹っ飛ばされた龍哉おじさんはすぐに立ち上がった。

「一体何が起こつたのだ？」

龍哉おじさんは肩から血を少し染み出しながら言つてた。

「まあいいや。とりあえずここに居るみんなを殺せば良いだけの話なんだから」

「本当に龍哉おじさんなの？」

私は少し落ち着き、そう思つた。疑うほど今までの龍哉おじさんと違つていたのだ。

「ああ、俺は真正銘の竹宮龍哉だよ。今までは隠していたけど、これが本当の俺だ」

「どうして、能力都市を壊滅させるような事をするの？」

「それは、あそこが後に危険な都市になりかねないからだ」

「どづいう事？」

「あそこは当初、能力者を集めるために信之が作った都市だ。俺は最初、信之について行こうとしたさ」

「ならどうしてそんな事をしようとしたの！！」

「後に気づいたのさ。例えば、能力者がいつの間にか巨大な組織を作っていて、それで内部戦争になった。それによって信之が死んでしまったらどうするんだ？」

「そ、そういうことね」

翼は龍哉おじさんに納得していた。

「翼、どづいうことよ」

「信之さんが死んでしまって私達が負けた場合、能力都市はどうなると思うの？」

「それはその組織が統括するんじゃないの？」

きてしまう!!

「これ以上はやめて!!このままでは早美が……」

瑞希も龍哉おじさんが何を言おうとしたのか分かったようだ。

だが、龍哉おじさんはそのまま話を続けた。

「人を殺して楽しんでいたよな？」

「ッ、」

刹那、私の中にあつた奴が侵食してきた。

> 久しぶりだな。今度こそお前の身体を頂くぞく

「や、やめて。お、お前は私の中から消えろ!!」

「早美?いきなり何を言ってるのよ?」

優子は私が突然変な事を言い出したので聞いてきた。

また、瑞希以外にも私がどうしたのかと思っっている感じだった。

そして私は奴の侵食を抑えようとした。

> 俺を抑えようとしているだろ。俺はもう一人のお前だと言つのにく

「お前はもう一人の私じゃない!!お前は駿河大輔でしょうが!!」

>確かにそうだ。でも俺を生み出したのはおまえ自身じゃないか<

「黙れ！―もう二度と私の中から出てくるな！―！」

>ならば無理やり奪つまで<

「やめ………」

刹那、私の意識は突如無くなった。

第二十三話 もう一人の私（後書き）

意見、感想お待ちしております。

「何ですって!?!」

「まあ、それで俺の復活は相当かかっちゃったがな。さて、」

駿河大輔は顔の向きを変えた。

そして、久しぶりに会うように話し始めた。

「久しぶりだな。竹宮龍哉」

「お前、本当に駿河大輔なんだな?」

「ああ、そんな嘘を付くつもりは無いだろ。それに、お前には感謝しているんだぜ。おかげで俺は蘇る機会をもらえたんだからさ」

「それで、お前は蘇って何がしたいんだ?」

「俺は一応竹宮隼人の第二の人格。竹宮隼人の目的を優先するのが俺さ。俺は竹宮隼人が嫌な事をやらなければならぬ事をするのが俺の定め」

「定め?どういう事だ?そんな事俺でも知らないぞ」

「だって、そんなの俺しか知らないもの。あの時だって俺は竹宮隼人は殺人をするのが嫌だったけど殺さなければいけないかった。だから俺が何度も竹宮隼人を乗っ取って代わりに殺していたのさ」

私はそれを初めて聞いた。まさか、隼人の代わりにする為に生まれ
たのが駿河大輔なんて……

良く見ると、龍哉さんも動揺しているのが見えた。どうやら本当に知らなかった事らしい。

「さて、今回は竹宮龍哉を殺したくないから俺が出てきたような訳なので、さつさと死んでもらうぞ」

刹那、駿河大輔が手に持っていたナイフが目に見えないスピードで振られていた。

「ッ!？」

龍哉さんは反射神経が効いたのか何とか避けられた。

だが、今の駿河大輔の姿は竹宮早美の姿で女になってから能力が一つ変わってる。

よって直後に突風が発生した。

「同じ攻撃は通用しない!!」

だが龍哉さんは『風力爆発』で爆風を起こした。

突風と爆風がお互いにぶつかり、その場所以外吹っ飛ばされる威力だった。

当然、私たちも吹っ飛ばされそうになっていた。

「みんな、私の後ろに居てください!」

美羽が突然そう言い、みんなは急いで美羽の後ろに逃げた。

「速度をゼロに!!!」

刹那、こちらに飛んできた突風と爆風が一瞬で消えた。

そして、二人は睨み合っていた。

「さすが、竹宮隼人のもう一人の人格だな。自分の能力を分かっているやがる」

「確かにそうだ。まあ、この『次元切断』は初めて使うがな」

「それでも使いこなすとは相変わらず凄いな」

「そりゃどうも」

その後は何も交わさず、お互いに動かないでいた。

そして先に動いたのは駿河大輔だった。

テレポートして龍哉さんの後ろにまわったのだ。

龍哉もすぐに反応し、爆風を発生させた。

だが駿河大輔には爆風が当たらなかった。

そしてナイフを振りかざそうとした。

しかし、駿河大輔のナイフは何か当たって能力が発動しなかった。

それは龍哉さんが一瞬で取り出したナイフだった。

お互いにナイフがぶつかり、そして駿河大輔が一度龍哉さんから離れた。

「危なかった。竹宮家でなければ俺は殺されてたな」

龍哉さんはホツとしながらそう言った。

前に早美に聞いたのだけど、竹宮家は誰もがナイフを持っており、そのナイフの刃は金属も切れる代物であるらしい。

そして何故私達が龍哉さんと戦いに参加しないのかは、この二人の戦いは桁が違いすぎるのだ。能力だけでこんな戦いは見たことが無かった。

私達にもそれぞれ八神近家の武器があるが、それでも勝てない気がしたのだ。

そして、二人の戦いはまだまだ続いた。

第二十四話 駿河大輔（後書き）

一つ報告があります。

多分明日になると思いますが、『少年の非日常』のスピンオフを書こうと思います。

主人公は竹宮風哉です。ひよっとすると清水信之も主人公になるかもしれません。

内容は十年前の家柄戦争の事を書くつもりです。

ちなみにこちらでは風哉の能力を明かすつもりです。こちらではもう風哉は死んでしまったので紹介する事も無いのですよ。

へタすると書かない場合もあるかもしれませんが一応報告をしておきます。

それではまた。

第二十五話 桁違いの戦い

Outside

>へえ、あの駿河大輔っていう奴結構やるじゃないのく

優子たち以外で龍哉と駿河大輔の戦いを見ている者がいた。

彼女は先ほど風哉が来る前に龍哉と話していた奴だ。

彼女は龍哉と話し終わった後、ずっとここに居て風哉と龍哉の戦いも見ていたのだ。

そして今、彼女は龍哉と駿河大輔の戦いを見て楽しんでいた。

>やっぱり人間界は退屈しないわ。天界なんて退屈しかないものく

彼女は微笑みながらそう言った。

彼女にとって人間界は退屈しない世界なのだ。天界には特に面白い事も何かする事も無いのだ。だから彼女達にとって人間界は羨ましい世界でもあるのだ。

>にしてもフェスターは面白い人間に取り付いたわね。多重人格の人間に取り付くなんて思わなかっただろうね。それはそれで面白いけどく

彼女はフェスターが取り付いた人間を見て少し笑っていた。

>さうて、私も取り付く人間を見つけないならならぬのだけど、これが終わってからにしましょうか<

そう言つて、彼女は戦いを見届ける事にした。

「まだまだこれからだ!!」

そして、その二人の戦いは激戦だった。

今度は龍哉から攻撃を開始し始めた。

龍哉は能力を発動した。けど、何も起こらなかつた。

「おいおい、そう言いながら何もしてこないかよ」

「いや、これで良いんだよ。すぐに分かるさ」

「どづいづい……」

刹那、駿河大輔のすぐ近くで爆風が起こつた。

「な、」

駿河大輔は突如近くで爆風が起こつて驚いた。

そして、レポートもする暇も無く、駿河大輔は爆風に吹っ飛ばされた。

「俺の能力は一応爆風なのでな。時間設定とか出来るのだよ」

「……」

龍哉は駿河大輔が吹っ飛ばされた方を向いて言った。

「気絶したか。まあ、間近で爆風を受けたらそうなるか」

「……な、なるほどな。結構その能力は応用が効くって訳か」

「な、」

龍哉は驚いた。直撃に喰らったのに駿河大輔が起き上がったのだ。

「ど、どうして立ち上がれるんだ!!」

「簡単な事だよ。さすがに次元切断を使う暇は無かったが、あの時俺は爆風が起きた一瞬に風を逆から吹かせたのだよ。それでも結構吹っ飛ばされたけど」

「……」

「さて、今度はこちらから行くぜ。」

駿河大輔はそう言いつつ、姿を消した。

「っ!?!?」

龍哉はテレポトを使ったと思い、すぐに後ろを向いたがそこには誰も居なかった。

「俺がテレポトを使った訳ではないぜ」

刹那、龍哉は何も居ない所からいきなり腹を殴られた。

「がはっ、」

しかもそれは普通に殴られた威力ではなく、もの凄い威力で殴られたのだ。

だから、龍哉は相当吹っ飛ばされた。

そして殴られた後、龍哉から少し離れた所に駿河大輔が現れた。

「結構疲れたな。人が見えない程度の速さで風を吹かせて俺の姿を消してみたが結構能力を使うからな」

駿河大輔は独り言を言いながら、龍哉に近づいていた。

「さて、後はこいつを殺すだけだな」

駿河大輔はナイフを取り出した。

「さようなら。龍哉おじさん」

そして、ナイフを振りかざそうとした。

その時、異変が起こった。

「じつはっ!？」

いきなり、駿河大輔が倒れたのだ。

優子達は一体何が起こったのか分からなかった。

だがその後、龍哉が立ち上がった。

「さっきのお返した。まったく危なかった所だったな。今度こそ、
気絶はしただろう」

龍哉はすぐに駿河大輔の様子を見て、気絶しているか確認した。

そして、駿河大輔が気絶しているのを確認すると、駿河大輔の近く
にあったナイフを取った。

「隼人君を殺すのは嫌だけでしょうがない。俺の目的の為に死んで
くれ」

龍哉はそう言ってナイフを早美の心臓に刺そうとした。

「早美を殺すなあああ!!」

しかし、龍哉が早美を刺そうとしたその時、瑞希が叫び、サイコキネ
シスでナイフを持っている腕の方を折り曲げたのだ。

第二十五話 桁違いの戦い（後書き）

お知らせがあります。

『少年の非日常』の外伝『少年の非日常 第零章 家柄戦争』を予定通り書き始めました。是非そちらも読んでください。
アドレスはこちら。

<http://ncode.syosetu.com/n20180/>

第二十六話 当主達の力

Outside

「くっ、邪魔をしゃがって」

龍哉はすぐさま瑞希達が居る所に能力を発動し、爆風を起こした。

「速度を0に!!!」

だが、すぐさま美羽が爆風を0にしたのだ。

「余り私達を舐めないでくださいですよ。それでも私達は八神近家の当主なんですから」

美羽はそう言いながら今まで信用していた龍哉を睨みつけた。

「そうよ。私達は八神近家の当主。私達が負ける人間は同じ八神近家の当主ぐらいよ」

鈴奈も美羽同様、龍哉を睨みつけた。

「そついう事よ。私達に勝てる訳がない」

「そつだな。隼人のおじさんだろうと、勝てないぜ」

「八神近家の当主を舐めるんじゃない」

「そうだ。しかも、七対一だぜ。雨宮を入れても八対一だ。それで勝てるのか？」

さらに翼、杉山、辻川、菅野も続けて言った。

だが、菅野の言い方に意味ありげな言い方だったのにみんなは気づいてなかった。

しかし、

「ふ、ふはははははははは」

龍哉はそれを聞いて笑っていた。

「な、何がおかしいのよ」

「何がってそれは俺が、そんな事を想像してないで行動していると思っただけか？」

「ど、どっという事よ」

みんなはどうしてそんなに勝てる自身があるのか気になった。

「そもそも、俺の風力爆発は元々半径二〇〇mしか吹っ飛ばせない。しかも、手加減などは出来ない。けどこの爆発は半径三〇kmも吹っ飛ばしてるんだぜ」

「まさかお前、アイツと契約でもしたのか？」

菅野は嫌な予感がしていた。だから、菅野は龍哉に聞いたのだ。

「菅野、どういう事？」

「能力が上昇する事は現状無理なのは知ってるよな。なのに龍哉は能力が上昇した。そんなの出来るのはあいつらしか居ない。そうだと龍哉？」

「ふっ、お前は分かっているのだな」

「ああ。そして今、それに協力的な奴はアイツしか居ない。そこに居るのだから右近神フィリアム！！」

菅野は空に向かって叫んでいた。

そして、一箇所に光が集中し初めて人間っぽい形をした赤髪の女性が現れた。

『気づいていたの？』

「俺が気づかないとでも。最近、いや特に俺の一族を邪魔しているのは誰だよ」

『確かに私だけど、どうして私が関係していると分かったのかしら？私はまだ菅野家しか狙っていないのに……』

「そんなの簡単さ。お前が菅野家だけが目的ではない事ぐらい分かるだろ。お前は今一番力を持っているフェスターを狙わないわけが無い。そしてその力を扱っているのは八神近家だ」

『何もかも分かっていると云うわけね。ならこれ以上は聞きなくて

良いわ。龍哉、さつさとあいつらを殺しなさい』

「言われなくてもそのつもりさ!!」

龍哉は能力を発動し、爆風を起こした。

「何度同じ事をやっても同じですよ!!速度を0に!!」

だがまたしても美羽に止められた。

『五大元素の一つの土。私に力を。敵に壁を』

翼も魔術を唱えると、龍哉の周辺の地面から異変が起こり土が龍哉を逃げられないように囲んだ。

「さらに追加だ!!」

菅野はそう言うと翼が作った土を金属のタングステンに変えた。

「そんなの簡単にぶち壊せるんだよ!!」

龍哉は翼が作った自分を囲んでいる土を能力で壊そうとした。

だが能力を使っても壊せなかった。

「なに!？」

「言っておくけど、そんな事は考え済みよ。私の魔術は五大元素の土は強度も変えられるのよ。ちなみに今、その土は強度を強くしてあるし、それをタングステンに変えたとしても強度は変わらないの

よ。さらに、タングステンは金属だから熱も通しやすいわよ」

「まさか、」

「そのまさかだよ。次は俺の能力でその凍え死ね！！」

今度は杉山は翼が魔術で作った土に触れて、能力を発動した。

そして一瞬でタングステンは凍った。

「さらに追い討ちだ！！」

さらに辻川も能力を発動した。

だが外から見れば何をしたのか分からなかった。

なぜなら辻川は電撃を地面からタングステンに囲まれている中まで繋げ電撃の磁力で砂鉄を操り、見えないので中で適当に砂鉄の剣を振り回した。

「瑞希、龍哉さんの思考読み取れる？」

「鈴奈なんで？」

「龍哉さんの思考が読み取れば生きている事になるからよ」

「そついう事。じゃあ頼むね」

鈴奈が瑞希に頼むと能力を使用して、龍哉の思考が読み取れるか確認した。

「あの中からは読み取れないわ」

「そう。なら殺したのかしら？」

「そうじゃない？ま、これが八神近家の……」

「力とでも言いたいのか？」

「……！？」

突如瑞希達の後ろから声が聞こえてきた。

「さすがに七対一は危なかったな。でも、八神宝具を使わないと俺には勝てないぜ」

「そ、そんな。どうやって逃げ出したの？」

「それは地面に向かって能力で爆風を起こしたのさ。地面はタンクステンで覆われてなかったからな」

「な、なら今度こそ！」

「そんな時間を与えらると思うのか」

刹那、いろんな所から爆風が発生した。

「な！？」

瑞希達は突然の出来事に対応できなく一人を除いて全員吹っ飛ばさ

れた。

「がはっ、」

瑞希は吹っ飛ばされた衝撃で鉄骨にぶつかり気絶した。

他の鈴奈達も吹っ飛ばされ何かにつかって気絶した。

「さて、今度こそ邪魔者は居なくなったな」

龍哉は今度こそ早美を殺そうと早美に近づいた。

だが、向かっている途中で気づいた。いつの間にか一人居なかった事に。

「どこに居るんだ雨宮君？早くしないと早美を殺してしまうぞ」

龍哉は早美の戦いから優子が居ない事に気づいたのだ。

そして優子は龍哉の前に姿を現した。

第二十六話 当主達の力（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十七話 優子と龍哉（前書き）

すみません。今さら気づいたのですがフェスターの十戒だいはちじゅう第捌条に違反してもなかったのに書いてしまったので消しました。特に支障はありませんので。

第二十七話 優子と龍哉

Outside

「やっと二人つきりになれた」

優子はまるで二人つきりになれるかのように言った。

「やはり兩宮君はこうなる事を分かっていたのか？」

「まあね。それとその言い方はもう良いんじゃないの？二人つきりなんだから昔の言い方で」

「そうだな。それで優子、話って何なんだ？」

「分かっているんじゃないの龍哉さん？私が何を話そうとしているのか」

二人の会話はいつもと呼び方が違い、まるで良く近くに居たような言いぐさだった。

実際にそうだ。この二人は昔、一緒に住んでいたことがあった。

「ああ、大体分かっているさ。どうしてこんな事をしたのかだろ？」

「何となく分かっているけどね。一応聞いたかったのよ。それで何でこんな事をしたの？」

優子は龍哉がこんな事をしたに対して怒りや悔しさをまったく無く、普通に話していた。

そして龍哉は別に優子なら言っても良いだろうと思いつ事にした。

「俺が能力都市を壊滅させようとしたのは今後起こるだろうと分かっていたからだ」

「今後起こること？」

「前にもあっただろ。『ユニオン』と『スキル』に別れて能力都市内で戦いが起こっただろ」

「まさか、またそんな事が起こるっていうの!？」

優子は驚いた。『ユニオン』と『スキル』の戦いも何年かかって終わったのか分かっているからだ。

「そうだ。多分、それ以上の戦いが起こるだろう。もっと多くの派閥に分かれてな」

「でもそんなので能力都市を壊滅させる理由には……」

「確かにそんなのでは壊滅理由ではないさ。その後の事を思ったのだよ」

「その後のこと?どついう事?」

「今の統括理事長、信之が殺された場合だよ」

「!？」

優子はどういう事だと思った。信之は元清水家当主はずだ。そんな人間が簡単に負けるはずが無いと思ったからだ

「信之は最近、能力がだんだん弱くなっている」

「それって未来予知が弱まっているって事？」

「それもそうだが、信之にはもう一つ能力がある。頭脳操作と言っ
な」

「頭脳操作？」

「ああ、俺と瑞希君しか知らないと思うけどな。だが、それが最近使えなくなっている。だから今誰かに暗殺されてもおかしくないんだよ」

「それでその人が次の統括理事長になったら……」

「そういう事だ。信之みたいだったらいいがそうでなければ能力都市は戦争を起こしてもおかしくない。だからこそ俺は今の内に能力都市を潰す事にしたのさ」

「……」

優子は黙ってしまった。龍哉が今後の事を考えているなんて思ってもいなかったのだ。

事実、龍哉が言った事はいつか絶対に起こり得ることだ。優子達が

死んだ後でも起こっておかしくない事だ。

能力都市は超能力者を集めているので戦争を起こしても勝てるだろう。でもそれは能力都市が世界征服する事になりえるのだ。

だから龍哉は手遅れにならないように今の内に能力都市を壊滅させようとしたのだ。

「分かったか。俺がこんな事をしたのか。分かったのなら一緒に能力都市を壊滅しないか？」

「一緒に？」

「そつだ。一緒にだ。まさか命の恩人に抗うつもりか？」

そつ。龍哉は優子にとって命の恩人だったのだ。

それは十年前、家柄戦争が起こっているときでまだ優子の名字が水本だったときの話だ。

水本家は竹宮家の傘下なので竹宮家の事は聞いていた。

そんなある時、竹宮家に命令されて『松本家が水本家を狙っている。だから今すぐその家から離れて遠くに行け！』と言われたのだ。

水本家は竹宮家の事を聞いて一族全員で海外に逃げようとした。

だが空港まで移動している途中、当時の松本家当主松本麗華に見つ

かっってしまったのだ。

そのときみんなバラバラに分かれて、優子は自分の母親に手を引っ張られながら逃げていた。

最初は何とか逃げられたと思った二人だったが、まだ安心は出来なかったので電車に乗る為に駅に向かって近道をする為に路地裏を通ると前から松本麗華が現れたのだ。

優子の母親はせめて優子を逃がそうと、優子を戻させたのだ。

優子は母親の言う事を聞いて後ろに走った。

だが刹那、ドガツと音が鳴ったのだ。

優子は何があったのか後ろを向いたが、そこには残酷だった。

優子の母親の頭が松本麗華に殴られてグチャグチャだったのだ。

松本麗華はその時能力を発動して腕に筋力強化して優子の母親の頭を殴ったのだ。

優子はそれを見て泣いていたが、五歳でも今の状況が危険だと分かったのだ。

優子は泣きながら走って松本麗華から逃げようとした。

だが、五歳の足で逃げれるわけがなかった。

松本麗華はすぐに優子に追いつき、優子を殺そうとした。

だがその時、爆風が起こったのだ。

松本麗華は吹っ飛ばされ壁にぶつかって気絶したのだ。

そして優子に誰かが近づいたのだ。

それが竹宮龍哉だったのだ。

龍哉は兄の風哉に頼まれて水本家が危なくなるかも知れなかったから後ろから追跡していたのだ。

確かに追跡していて正解だったが、松本麗華が現れて水本家が全員バラバラになってしまったのがあだとなってしまったのだ。

だから龍哉が一番幼かった優子と優子の母親を追跡する事にして最低でも優子を守ろうとしたのだ。

そして龍哉は優子が殺されそうになった時に能力を発動したのだ。

龍哉はその後優子に近づき、優子をおぶって松本麗華が気絶している今の内に逃げたのだ。

それから何とか逃げ出し、家柄戦争も終わるまで優子をかきまっただのだ。

そして優子は今も生きている。龍哉のおかげで。

だから龍哉は優子にとって命の恩人だったのだ。

「……………」

だから優子はまたもや黙ってしまったのだ。

そして数分後、やっと口が開いた。

「……………確かに能力都市は後に危険因子をもたらすかもしれない」

「そつだ。だから一緒に……………」

「でもね、龍哉のやっている事は許せない」

「ど、どついう事だよ。命の恩人の邪魔をするつて言つのか!!」

龍哉は優子に怒鳴っていた。

だが優子は冷静に言った。

「確かに龍哉さんの言っている事は分かる。けどそれはまったく関係ない四十万人もの人間を殺す必要はあつたの？」

「!?!」

「だから私は協力なんかしない。それに能力都市が脅威になるかも知れないのはただの推測しかない。そんなのに協力する必要はない」

「……………そうか。ならここですさよならだ」

龍哉は優子と戦う体勢に入った。

「そうね。でもそれは私の台詞よ。貴方は私に勝てない」

「は？どついう事だよ。八神近家でもないお前が勝てるんでも？」

「ええ、勝てますとも。だって八神近家の当主でも勝てる人間がこの世の中には一人だけ居るではないですか？」

刹那、優子の両腕からソードみたいな剣が現れた。

ソードの色は黄金色。それはある事を象徴していたのだ。

「う、嘘だろ。何でお前が」

「八神十戒はっしんじっかい雨宮優子。それが私の別の名前」

「そ、そんなバカな！！なんでよりによってお前なんだ！！」

龍哉は驚いていた。当たり前だった。八神十戒は八神近家長より強い。勝ち目がなかったのだ。その目的はフェスターの十戒に反した八神近家又はその傘下の人間を処罰し死刑とするのが役目。

そして優子はそんなのを気にせず、刑を言うように言った。

「フェスターの十戒、だいななじょう第漆条『八神近家の一族とその傘下の一族は家柄戦争以外で殺し合いを禁ずる。』に違反したものととして竹宮龍哉を処罰する！！」

刹那、優子は龍哉に向かって走り出した。

第二十七話 優子と龍哉（後書き）

新たな用語が出ましたがそれは第三章が終了したら書きたいと思いません。

第二十八話 八神十戒（前書き）

訂正しましたので報告しておきます。

『そして唯一勝てるのが右近神と八神近家長だけである。』の後に書いてあった『だが八神近家長の場合は互角である。』を『でも両方とも互角の力である為、八神十戒が勝つ事もある。』に変更します。

第二十八話 八神十戒

Outside

「チツ、何でこうなるんだよ!」

龍哉は隠れる所もない場所だったので逃げていた。

最悪な展開だったのだ。よりもよって優子が八神十戒だった事に。

八神十戒。右近神フェスターから力を授かり、行き過ぎた八神近家や敵である別の右近神を処罰する為に作られた力。

八神近家の当主が八神宝具を使用しても勝てないという右近神フェスターの最大の力。

そして唯一勝てるのが右近神と八神近家長だけである。でも両方も互角の力である為、八神十戒が勝つ事もある。

だからこそ、龍哉は右近神フィリアムから力を少し貰ったとしても勝ち目がなかったのだ。

「あら、先ほどまでの勢いはどこいったの?こんなはまだ序の口ですよ。』スノウウィング『白銀の翼』」

刹那、優子の背中から雪みたいに純白な翼が出現し一瞬で姿が消えた。

そして一秒もせず龍哉の目の前に現れたのだ。

「は、早すぎるー!!」

龍哉は突然優子が目の前に現れたことに驚たが、すぐさまナイフを取り出し龍哉に向かってきた方の剣を何とか抑えようとした。

「そんなの無駄よ。分かっているでしょ。八神十戒の一つ、黄金エクスの剣カリバーには砕け散る事はない」

「そんなのは分かっているさ。でも、竹宮家のナイフをなめては困る」

直後、優子の黄金エクスカリバーの剣と龍哉が持っていたナイフがぶつかった。

お互いにぶつかり合っていたが、両方とも砕ける事は無かった。

「なるほど、竹宮家のナイフはとても強度が凄いいわれてたがこれまでとはね。でもこちらにはもう一つ剣があるのよ」

優子はいている左手に持っている黄金エクスカリバーの剣で龍哉を斬りつけようとした。

だが龍哉はそんな想定内であった。分かっているこの行動に出ていたのだ。

そして龍哉はある行動に出た。

「な!?!」

それは優子が驚くほどだった。

なぜなら龍哉は左手に持っているナイフで未だに黄金の剣を抑えながら突っ込んできたのだ。

想定外だった。逃げるわけでもなく突っ込んで来たのだから。

そして龍哉は右手を握り締めて優子の腹に殴る体制になった。

「吹っ飛びやがれ」

優子の腹に当たる刹那、優子は相当吹っ飛ばされた。

龍哉は何をしたのかと言うと、腹に当たる一瞬で拳に能力の爆風を発動したのだ。

でもなんとか吹っ飛ばされた優子は何とか翼でスピードを落としていた。

「がはっ、がはっ、」

だが腹に思いつきり殴られたようなものなので優子は口から血を吐き出した。

「おや、まだそれでも立てるのか。さすがに八神十戒でも0距離は無理だろうと思っていたのにな」

「あ、危ないじゃない。私が八神十戒でなければ確実に死んでいたわよ……！」

「そりゃそうさ。八神十戒を持っているのなら手加減は出来るわけないだろ」

「そ、そうね。ならば」

優子は目を瞑り、小さく剣刀変化^{オートレイション}ver? 『蛇腹操作』^{ウィップコントロール}と呟いた。

その後、両腕にあった黄金の剣が消え長剣が優子の右腕に現れた。

「ほう、その剣は変形も可能なのか」

「そうよ。でもそんな無駄話をするつもりは無い!!」

優子は黄金の剣を横に振ると、剣が伸びて龍哉に襲っていった。

「蛇腹剣か。だがそんなの避ければなんぼなんだよ!」

龍哉は自分に向かって来た黄金の剣を軽々と避けた。

「でも、それはただの普通の蛇腹剣ならね」

直後、龍哉が避けた方に黄金の剣が蛇腹剣ではありえない曲がり方をしたのだ。

龍哉は突然自分が避けた方に曲がったのに驚いた。

それでも何とか避けようとしたが、間に合うわけもなかったのだから腹に少し刺さった。

そう。少しだけだった。普通なら切断されてもおかしくな切れ味な

のにそれだけで済んだのだ。

なぜならまだ右手に持っていたナイフで抑えていたのだ。

優子はそれを見ると舌打ちをした。

「うざったいわねそのナイフ。邪魔ったらありやしない」

剣を元に戻してそう呟いた。

龍哉もわき腹から血が出てきているのを抑えていた。

そしてお互いに構え、先に動いたのは優子だった。

先ほどと同様、^{エクスカリバー}黄金の剣を横に振って龍哉に攻撃しようとしたのだ。

だがさすがに二度同じ攻撃は通じるわけがない。龍哉は能力を発動して^{エクスカリバー}黄金の剣の気道を相当ずらすとした。

優子も大体は推測していたが一つだけ忘れていた事があった。

龍哉の風力爆発は爆風ほどの速さを作り出す事が出来る。

たとえ剣だとしてもそんな爆風みたいな風を受ければ飛ばされるのは当たり前だったのだ。

自分は^{スノウウイング}白銀の翼で何とか吹っ飛ばされないように出来ていたが、^エ黄金の剣の方がなんとも出来なかったので吹っ飛ばされないようにしようとはがなばっていた。

だがそんな風に手だけで押さえられるわけもなく。黄金の剣は吹っ飛ばされてしまった。

龍哉もその隙は見逃すわけがない。すぐさま自分の後ろに爆風を起こし、爆風の速さで優子に近づいた。

そして左腕を握り締め。その速さで優子を殴ろうとしたのだった。

だが、

「『閃光の壁』」

刹那、優子の前に光の壁が出現した。

龍哉は爆風の速さなので避けられるわけもなく、左手を閃光の壁に殴るようにつつかった。

そして龍哉の左腕からゴキツ、バキツと音が鳴っていた。

何の音かと言うと、左腕の骨が折れる音だった。

そう。閃光の壁は相当硬い壁であり、あらゆる物を通す事はしないほどの壁だ。

そんな壁に龍哉の腕が当たっただけで骨折するのは当前だし、しかも爆風の速さでつつかったらなおさら酷くなるはずだ。

これにより龍哉の左腕は使えなくなった。

そして優子が閃光の壁を消して、いつの間にか持っていた一本の黄

クスカリバー

ライトウォール

工

金の剣で止めを刺そうとした。

龍哉はすぐに避けられるわけもなく、優子に腹を刺された。

決着が付いた。

第二十八話 八神十戒（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二十九話 本当の理由

Outside

勝負が決した後、龍哉はその場に倒れた。

でも龍哉の意識はまだあった。

「私の勝ちだわ。まあ、勝てるのは龍哉さんが裏切っていた頃から分かっていただけ」

「そ、そりゃそうだろ。お前が八神近家長と同等の力を持っている八神十戒なんだからな」

「だったら何で諦めなかったの？勝てないのは分かっていたはずでしょ？逃げる事も出来たはず」

確かに優子の言うとおりであった。逃げる事も出来たはずなのだ。

でも逃げなかった。逃げたとしてもどの道しかも早美達も今度は本気で来るはずなので今より状況が悪くなるり、自分の目的が達成できる筈がなかったからだ。

それに逃げようとしても優子の白銀の翼スノウウィングで追いつかれてしまうからだ。

だから龍哉は戦ったのだ。たとえ負ける戦いでも。

「分からないな。ただの気の迷いだよ」

だが龍哉は誤魔化した。最後に意地を張ったのだ。

嘘だと優子はすぐに察したがわざわざ言うほどでもないので聞き流した。

そして優子は聞いておきたい事があったのでそっちの話題に入ろうとした。

「ねえ龍哉さん、どうしてこんな事をしたの？」

「だからそれは能力都市を壊滅させる為に」

「それは嘘。反乱が起こるかも知れないならってそれは無いはずだわ。なんせ今の能力都市には八神近家が守っているようなものじゃないの」

「やはり優子には分かっていたか」

優子は分かっていたのだ。龍哉が反乱が起こるかも知れないからってこんな事には辿り着かない事に。

戦う前に龍哉に聞いた『何故龍哉がこんな事をしたか』の件で優子が何となく分かっていたという答えはこっちだったのだ。

あの時、優子はただ龍哉の嘘に合わせていて、龍哉も優子が本当の理由を大体分かっていたというのはこっちの事だと分かっていたいながら嘘を言ってお互い分かっていたのだ。あの時龍哉が言った嘘は何の意味を持たないと。

だがそれを知っていながら優子はそれ以上は言わなかったのだ。道の道、戦いが終わってから聞くつもりだったから。

そう。優子はとどめを刺さなかったのは本人から一応理由を聞くためだったのだ。

「ええ。それで理由は？」

「……能力都市にはある噂が立っている」

「噂？」

「そうだ。しかもそれは俺と信之しか知らない情報だ。これが事実なら大変な事になる」

「大変な事？天壤がやったより酷いって事？」

「ああ、これはひょっとしたら地球、いやこの世界が滅んでしまうぐらいだ」

「な!？」

優子は龍哉に聞いて驚いた。

当然だ。優子が何となく想像していたのは、またもや人体実験くらいだろうと思っていたぐらいだったのにそれをはるかに超える以上の大問題だった。

龍哉が言ったこの世界とは平行世界パラレルワールドの事を指している。

要するにこの世界が滅ぶというのは優子達が今居るこの世界が消えてしまうという事だ。

そんな事をしてしまうものが能力都市の中で作られているのなら止めなくてはならない。

けど、それがどこなのか全然分からない。一つ一つ探していたら何年掛かるか分からない。

「だから俺はこれを成し遂げなければいけなかった」

「じゃあ、何で四十万人の人間を殺したの？それとこれは関係ないじゃない」

「確かにそうだな。だがこれを行ったのは俺ではない。俺はある奴を庇ったんだよ」

「庇ったって誰を！！」

優子が殴ろうとした刹那、龍哉に異変が起こった。

「アガッ、」

龍哉の口から血を吐き出し、体からはバチバチと音を鳴らしていたのだ。

皮膚がだんだん剥けていき、体中から血が噴出したのだ。

優子は訳が分からなかった。いきなりこんな事が起こったのだから。

でもすぐに察して龍哉の手を掴んだ。

そして龍哉は手を握られたのを感じると、力を振り絞りながら優子に言った。

「ゆ……う……いま……から……いつ……ことは……みんな……にい……つておい……てくれ」

「今は話さないで！死ぬわよ……！」

「ど……のみち、おれ……は……たす……から……ないさ。おま……えだ……つて……おれ……をころ……すつも……り……だったの……だろ」

「そうだけど今は、」

「いい……から……きけ」

「……分かった」

優子は諦めて龍哉の言葉を聞くことにした。

そして龍哉は少し間をおけて言った。

「う……きん……しん……フィリ……アムには……きを……つけ……ろ。あ……い……つ……は……ひとを……どう……ぐ……としか……みて……い……ない。だ……か……ら……」

「もう分かったから。それ以上は言わなくて良いから……」

「そう…か。なら…さい…じ…に…ひと…つだ…け…いわ…
せ…て…く…れ」

「何？」

「にん…げんは…しんだ…とき…に…その…にん…げん…の
…かち…を…しる…も…ん…だ…ぜ」

そう言うと龍哉の右手から力が抜けていった。

優子は泣くことは無かった。龍哉は四十万人の人間を殺してなかつたとしても風哉を殺したの事実だったからだ。

けど実際は泣くのを堪えていたのだ。ここで泣く訳にはいかなかったからだ。

取り合えず龍哉に刺していた^{エクスカリバー}黄金の件と^{スノウウィング}白銀の翼をしまった。

そう自分に言い聞かせていたら優子に近づいてきているのが居た。

「優子……」

「は、早美か。脅かさないでよ」

優子に近づいてきていたのは早美だった。

早美が目覚めたのは龍哉と優子が戦っている途中だった。

目が覚めたときは何故気絶しているのか分かっていなかったが取り合えず龍哉と優子が戦っているのは分かった。

「今、なんて言った？」

その声の持ち主は早美だった。

『ん？まったく役立たずすぎですねって言ったけど？』

その言葉を聞いた直後、早美は堪忍袋が切れた。

「ふざけるなよ。お前は龍哉を利用していただけなのかよ！！」

『そうですよ。私は利用できる人間は利用する。使えなくなればすぐに殺す。それだけだよ』

「ふざけるな！！お前はそれで何人の人間を利用したんだよ！！」

『さあ？そんなの数えるわけ無いじゃない。人間は私にとってただの道具だもの』

「ッ、」

早美はその言葉を聞いてフィリアムに攻撃しようとしたが我慢した。フィリアムと戦ったとしても勝てるわけが無かったので抑えたのだ。逆に優子は龍哉からフィリアムの事を少し聞いたので切れる事はなかった。

『さて、私は帰るとするか。それに今回は聞き捨てならない情報を聞いたからな。こちらでも対策を練らなければ』

「ま、まで！！まだ話は終わってない！！」

『そう。でも私は行くぞ。後当分、お前達は後回しだ。あいつが言ったことが事実ならばそつちを何とかしなければならぬからな。一ヶ月ぐらいしたら能力都市に私の仲間を紛れ込ませるけど。じゃあな』

フィリアムが言っているのは龍哉が優子に話していたこの世界が消えてしまうという事だ。

この世界が消えるという事は右近神も神も消えてしまうという事だ。だからフィリアムはフェスター達と戦っているわけにもいかなかった。なので対策を練る事にしたのだ。

そしてフィリアムは姿を消してどこかに行ってしまった。

第二十九話 本当の理由（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十話 今後の方針

早美 side

「この後どうするの？」

右近神フィリアムが消えてから時間が経ってロシア時間の午前七時、優子が私に聞いてきた。

今まで何していたかというところ、まず親父と龍哉おじさんの死体を運んで二人を並べた。

その後、まだ意識を失っているみんなを探して全員を集めておいたのだ。

「そうだな、とりあえずみんなが起きるのを待つか。」

「それしかないよね。仕方ない、みんなが目覚めるまで待つしかないね」

私達はみんなが目覚めるのを待つ事にした。

そして話す事も無かったので私は優子に聞きたかった本題へと入る事にした。

「そういえば優子、最後に龍哉おじさんなんて言ってたんだ？声が小さかったから分からなかったのだけだ」

そう。私が聞きたかったのは龍哉おじさんが最後に小さく言ったのは何なのかだった。

私は何とかフィリアムの事には聞き取れたのだが、その後に言っていた言葉は聞こえなかったのだ。

優子は多分聞いていたとさっき私が言ったので、案の定『え?』という感じだった。

「確かにフィリアムの事は何とか聞き取れたのだけど、その後と言った言葉は聞こえなかったから」

「そうなの。でも大した事でないわよ。『人間は死んだ時にその人間の価値を知るもんだぜ』だってさ」

「なんだそんなことだったのか……」

「ほんとよ。まったく意味分らないっいたらありやしない」

私達は死んだ龍哉おじさんを再度見て、少し微笑んでしまった。

龍哉おじさんは死ぬ前にもそんな事を言うのかと思ひ、いつまで経つても龍哉おじさん何だなど改めてそう思ったのだ。

『あのく微笑んでいるのは良いのだが、そろそろフィリアムの事を考えてくれないか?』

「「おわっ!?!」」

私達が微笑んでいたら突然声が聞こえたのだ。

私はその声に心当たりがあった。

「はあ、何ですか……いきなり現れて……」

私はその声が聞こえた方を向いて、ため息を吐きながら言った。

その声の人物、右近神フェスターは私を見て、

『何だよその言い方は。仮にも俺はお前らの統括している身だぞ』

「はいはい、分かっていますよ」

『だからなんでそんな言い方なんだよ。俺が何かしたか？』

フェスターは私が機嫌悪いような事が分かったようだ。

だって、あんたのせいで女になったんだもん。さっさと戻せよ。

> 言うておくが、俺にはお前が思っていることが全て分かるからな。

一応八神近家長に取り付いている身だから

「なん……だと……」

「？」

私はフェスターに全てお見通しだという事を知ってすこし戸惑った。

優子は突然私が声を出して言った言葉が意味分からないって感じだった。当たり前だが。

『それでどうするんだ？フィリアムの事は？』

「その事なんだけど、向こうもまだ私達を攻撃するつもりは無いらしいから様子を見ることにしない？」

「優子の言うとおりかもね。私もそう思うよ。無理に戦う必要は無いと思う」

『二人がそう言うんならそれでいいか。一応お前らは八神近家長と八神十戒何だからな？』

フェスターは私達の意見に賛成し、フィリアムについては様子を見る事にした。

それに、フィリアムの事より能力都市で作られている実験の方が大変なんだからなおさらフィリアムと戦っている暇なんて無いのだ。

だがフェスターはそれでも何か考え事をしていた。

> だとしても、今まで通りで良いのか？今後、敵はだんだん強くなっていくし……<

> 一応言っておくけど、フェスターの思考も私に聞こえてるからなくそう。私の思考がフェスターに分かるのなら、フェスターの思考だって私に分かってしまうのだ。

> そんなのは分かっている。けど、やはり気になるんだ。このままの力で良いのかって<

>まさか、あれを解禁するの!？<

私は少し驚いた。

フェスターと私が言っているあれとは八神宝具の一つ、真紅宝具しんくほうぐと言いつ十年前の家柄戦争の時、そのせいで被害が余計に酷くなったもう一つの八神宝具の事だ。

私は親父にそれを聞いた。真紅宝具のせいでたくさんの人間が死んだって。

だからフェスターが躊躇しているのは分かるのだ。あれは今もっている八神宝具よりはるかに強いから。

>今それを考えている。本当に解禁して良いのだった<

>確かにね。十年前の家柄戦争の時、真紅宝具のせいでたくさんの人間が死んだからね。まあ、全て松本麗華のせいなんだが<

>でも分かっているだろ。今のままじゃ今後に大変な事になる。その時に解禁すれば良いというものもあるが、それは全然力に慣れていないと言う状況だ<

>なるほど。確かにフェスターの言うとおりだよな。なら、こういうのはどう?<

私は真紅宝具が強すぎるのでフェスターに案をだしてみた。

>フェスターの十戒、第肆条だいよんじょうに『右近神に従っている人間以外に攻

撃する事を禁ずる。』と言つのを追加するのはどう？<

>なるほど。八神十戒の改定か。それは思いつかなかった。じゃあそれで行くか<

フェスターは私の意見を聞いてそれで行こうとする事にした。

っていつか今さっきまで話していた話、二人で話す内容だったのかしら？

>……特に無かつた<

独り言だったのになんか返事が返ってきた。

「どの道、みんなが意識を取り戻すまで待つしかないか」

『それもそうだな』

「?」

優子がまたしても『さっきから何言ってるの?』って言う感じだった。

『でもその前に兩宮優子。みんなが目覚ます前に一つして欲しい事がある』

「はい。なんですか?」

『フェスターの十戒、第肆条だいよんじょう』八神宝具は右近神フェスターの命令で定められたものしか使えず。』に追記したい。』

「追記ですか？それも第肆条だいよんじょうつてまさか……」

『多分お前の想像通りだ。真紅宝具を解禁する。そのかわり、第肆だいよん条に『右近神に従っている人間以外に攻撃する事を禁ずる。』を追加するんだ。』

「なるほど。それでバランスを取るんですね分かりました。追記しておきます」

優子はそう言うと、手を前に出すと突然辞書ぐらいの本が現れた。

私はそれが何なのかすぐ分かった。

八神新書はっしんしんしょ。八神近家と八神十戒そして右近神フェスターの事に関する事が全て書かれている本だ。

フェスターの十戒の改定はこの本に書き込むだけで改定が出来る。無くなればとても大変な事になる代物だ。

けどそれは一応対応されてある。見たことは無いが八神十戒とフェスター以外の物や動物が触れると、物の場合は物を蒸発させ、動物の場合は体に異変が起こり死ぬらしい。

それほど大切な本なのだ。

そして優子は八神新書を開き、あるページで止まり書き始めた。

先ほどフェスターが言った内容を追記しているのだ。

数分後、優子は書き終わると八神新書を閉じ八神新書がどこかに消えてしまった。

「書き終わりました」

『分かった。後で俺も再確認しておく』

優子はフェスターに書き終わった事を伝えた。

それから何も話す内容も無く、フェスターも一度八神新書の内容を確認しにどこか行ってしまった。

第三十話 今後の方針（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三十一話 優子の脅威

早美 side

数十分後、優子は疲れてたのか何故か近くにあった布らしき所で寝てしまった。

多分その疲れは絶対に瑞希たちのせいだと思うのだが。あまり気にしない事にしよう。

私は寝ている優子の隣に移動した。私も優子の隣で寝ようと思ったのだ。

だがその時、偶然にも優子の寝顔を見てしまった。

やべー優子ってこんなに可愛かったっけ？

私は優子の寝顔を見て見惚れてしまったのだ。

服は相変わらず修道服なので、それによって可愛く見えてしまっているのかもしれないが。

いつも一緒に寝ていたが余り寝顔は見てなかったわね……

そんな事をを考えていたら、優子の腕が突然動き私を抱きしめたのだ。

すっかり私は見惚れていたので逃げる事は出来ず、さらに顔は優子

の胸にあった。

おいしいおいしい！！これはまずいですけど！！

優子は私がまずい状況なのに気づかないまま寝息を立てていた。

マジでヤヴァイ。私の理性がああ。

私は本能との戦いが始まっていた。

何とか理性が戻ってきたかと思っただら更なる追い討ちが襲ってきたのだ。

「うーん……」ギョウウ

優子がさらに抱きしめ私の顔が優子の胸がさらに当たってしまったのだ。

もう、ダメエ

私は本能に負け優子を襲おうとした。

優子、ごめん

私は最後にそう言い、優子を襲おうとした。

だがその時、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あ、あなた達、何やっているのよ……！」

いつの間にか、目を覚ました瑞希の声が聞こえてきたのだ。

「み、瑞希？」

私はその声を聞いて何とか理性を取り戻していた。

「早美、覚悟は出来てる？」

「ちょ、誤解だ！！優子が寝ていて私も寝ようかと思ったら優子が抱きついてきたんだよ！！」

「言い訳するな！！どうせ早美から……」

「あれ？どうしたの瑞希？」

突如瑞希が言葉を止め、ある所を見ていた。

それは私の方を見ているように見えるが、私と目が合っておらず私の上を見ている感じだった。

私の上に何かあるかというと優子の寝顔ぐらいだった。

まさか……

私は嫌な予感がした。

そしてその嫌な予感は的中した。

「か、かわいい！！」

瑞希は私達の近くに近寄り優子の寝顔を見ていた。

「うん……」

優子は瑞希の声がうるさかったのか少しうなり、寝返りを打った。

それにより私は優子から抱きしめられたのは解放された。

「た、助かった……」

私はとりあえず自分のことは何とかなったのでホッとした。

「ねえねえ、何あの可愛い生物！！天使ですか！？マジで可愛いんだけど！！」

予想通りだった。だって今の優子が超可愛いもん。

「瑞希はしゃぎ過ぎ。今の優子が天使なのは分かるが少し自重しろよ。」

「とか言う早美もずっと見惚れてたくせに」

「いつから見てたの!?!」

「早美が横になってから」

それって最初からじゃない!!

ってそう思ってから優子から「むにゃ、」とか聞こえてきた。

マジで可愛いー！

「ねえ、早美。襲っていい？」

「いやいや、それはさすがに。私が言えた事ではないけど、寝ている邪魔をするのはどうかと思う」

「そうだよな。携帯の写真で断念するわ……」

そう言うと瑞希は携帯のカメラ機能を起動してレンズを優子に向けて写真を撮った。

私も瑞希に釣られていつの間にか携帯を取り出して優子に写真を撮っていた。

だが写真の音が聞こえたのか、優子が起きてしまった。

「あ、おはよう優子」

「あれ？瑞希、目が覚めたの？」

「まあね」

「それで二人とも、その手に持っている携帯は何なの？」

「「あ、これは……」」

まずい、優子の寝顔を撮っていたとばれたら絶対に凍らせられる。

瑞希もそれを察していて私に向かってアイコンタクトをしてきた。

「（どうする？優子の寝顔を撮っていたってばれたら大変な事になるよー!!）」

「（私も思った。でもどうやって誤魔化するの？）」

「（私に考えがあるわ）」

考え？一体なんだろうと思った私だった。

そして瑞希は一度深呼吸をして（「ここするのは逆におかしいと思うんだが」優子に話した。

「えっと、ちょっと私が早美に良いサイトがあったから教えてたのよ」

「そ、そうなの」

「ふ〜ん。で、本当は？」

「優子の寝顔を……ってしまった!!」

あっけなく終わった……

「私の寝顔？まさか、私の寝顔の写真を撮っていたとか言っの？」

「「えっとそれは……」」

「分かったわ。どうやら二人は凍りたいようね」

まずい、あの時の瑞希と同じ顔だ！！（第二章、最終話参照）

「ね、ねえ優子、ちょっと落ち着かないか」

「そ、そうよ。話せば分かるから！！」

「問答無用！！」

「ぎゃあああああ！！！！」

刹那、瑞希の悲鳴が聞こえた。って私は？

「早美にはちよつとついて来て貰うわ。来なければ凍らす」

「是非、そうさせて頂きます！！」

私は凍らされるよりましな気がしたので優子に従った。

だが、これが最悪の運命になるなんて知る由も無かった。あの時の私をぶん殴りたいくらいに……

私は優子に連れて行かれてみんなから少し離れる所に移動された。

「この辺で良いわね」

「な、何するつもりなの？」

「簡単な事よ。まず、早美横になって」

「う、うん。良いけど……」

私は優子に慕うがままに横になった。

「次に腕と股を広げて大の字になって」

「分かった」

私は相変わらず優子に従って大の字になった。

「そこから膝を曲げて」

「え、この体制って」

「いいから早くしなさい!!」

「は、はい!!」

私は優子の威圧によって従ってしまった。

もう何されるのかわかった。

私はすぐに立ち上がるうとしたがその時にはもう遅かった。

両手、両足を凍らせられたのだ。

それによって私は逃げられなくなった。

「さて、覚悟は良いわよね」

「ひいー!!」

「それでは始めたいと思います!!」

「いやあああああああああああああ!!」

私は悲鳴を上げながらも何もする事が出来ず、優子の思うがままだった。

女って怖いって再度思った私だった。

この後のことはご想像にお任せします。絶対に言いたくない!!

第三十一話 優子の脅威（後書き）

一応、優子の容姿はe fの兩宮優子と同じなのでその寝顔を想像したら自分でも可愛いと思ったのでついやってしまいました。

第三十二話 新たなる力、真紅宝具

早美 side

「酷い目にあつた……」

優子に犯されてやっと開放された。

今回はいつもより酷かった。何故か優子が持っていた媚薬を飲まされたりされるなどされたのだ。

しかもまだ体が熱い。開放されたのは良いが自分でしかねない。

まあそれは置いて、私と優子はみんなの所に戻った。

戻るといつの間にか全員目を覚ましており、瑞希も私達が戻って優子が氷を溶かした。

そして、フェスターも戻ってきてやっと今後の事を話せるようになった。

『さて、やっと話せる場になったな。』

「そうね」

「それで何なんですか？さっきから気になっっているんですけどいつの間にか竹宮副リーダーは死んでいるし、まず何が起こったのですか？」

『そうだな。確かに雨宮優子と竹宮隼人以外は竹宮龍哉が死んでいるのか知らないのか。じゃあまずそれから話そう』

「それなら私から話します」

フェスターがそれを話そうとしたら優子が割り込んできた。

『そうだな。確かに竹宮龍哉を倒した人物の方が手っ取り早いな』

「龍哉さんを倒したって八神近家の当主でもない優子が？」

翼は驚いた。あれほどの力を持っていた龍哉おじさんをたった一人で、しかも八神近家でもない優子だけで倒せたのか疑問に思ったようだ。

「そうよ。みんなには言っていなかったけど。私は八神近家長と同等の力を持っている八神十戒であるの」

「……………八神十戒ですって（だと）！？……………」

みんなは驚いていた。八神十戒の選び方はフェスターが八神近家の傘下の中から勝手に選ぶので八神近家でも知らないのだ。

私も目が覚めたときに優子を見た時は驚いたからね。黄金の剣を持つエクスカリバーっており白銀の翼を背中から生やしていたときはね。

優子はみんなが驚いているのを気にせず、話を続けた。

「だから龍哉を倒す事が出来たの。フェスターの十戒に反していた

部分があるから」

「しょ、証拠は八神十戒なら八神新書を持っているはず」

どうやら鈴奈は優子が八神十戒だとまだ信じてないらしい。多分他のみんなもだ。

でも優子は少し微笑み、右手を前に出して八神新書を出した。

「ね。これで分かったでしょ。私が八神十戒だと言う事を」

優子はそう言うと八神新書をしまった。

「……………」

みんなは何も言えなくなってしまった。だって今まで近くに居た優子が八神十戒だとは思わなかったのだらう。

少し経って鈴奈から話してきた。

「でも、龍哉さんをあんな風に殺すことは無かったのでは？皮膚がめくれるやり方で」

「ああ、それは私がやっていないわ。私がやったのは黄金エクスカリパーの剣で龍哉のわき腹を切りつけて、最後に腹を刺しただけだから」

「え？じゃあ、皮膚をめくらさせたのは？」

『右近神フィリアムだ。アイツは使えなくなった人間はすぐに殺すからな』

させたく無かった。あんないい場所を壊滅させるなんて間違っている」

『ま、大体そんなことだ。それで、お前らに新たなる力を与える事にした』

「新たなる力？」

『十年前、家柄戦争が終わってから使用禁止にした真紅宝具を解禁する』

「し、真紅宝具って家柄戦争の時に被害を拡大させた八神宝具じゃないですか！！そんなのを解禁して良いのですか！！」

『ああ、でもその代わりにフェスターの十戒だいやんじょうの第肆条に追記したのさ。』
『フェスターによって新たに追加された真紅宝具は右近神に従っている人間と世界を滅ぼしかねない力を作ろうとしている人間以外に攻撃する事を禁ずる。』
『をな』

「ちょっと待って。『世界を滅ぼしかねない力を作ろうとしている人間』って言う部分は追記してないのだけど！！」

『ああ、それなら俺のほうがおいた。一応俺も追記できるのでな。一応確認しておいてくれ』

優子はすぐに八神新書を出し、すぐに確認した。

確認したらどうやら加えられてたらしく、『だったら何故私に頼んだのよ……』と小さく言っていた。

『それともう一つ、八神十戒の事も少し改定したからそれも確認しておいてくれ』

フェスターは優子にそう伝えると私達の方に向いた。

『さて、ただいまより。真紅宝具、『スケルトンナイフ』、『エンドオブアロー』、『闇光神銃』、『宝剣スペリオキシム』、『人間召喚の書』、『雷拳甲装』、『時間操作』、『物質複製』の開放を命ずる!!』

直後、フェスターの周りが光だし、八つの武器が現れた。

八つの武器はそれぞれ動き出し、私には透明ナイフ、瑞希には最後の矢、美羽には闇光神銃、鈴奈には宝剣スペリオキシム、翼には人間召喚の書、辻川には雷拳甲装、杉山には時間操作、菅野には物質複製が自分達の所にやってきた。

そして、杉山以外は手で止まり、杉山は体内の中に入ってしまった。

『それぞれ威力は計り知れないから気をつけるよ。使い方は使うときに分かるからな。それじゃ俺はこれで帰るからな』

そう言うとフェスターは姿を消してどこかに行ってしまった。

みんなはとりあえず真紅宝具をしまうことにした。

「さて、この後どうします?」

「とりあえず、お父さんに報告してそれから能力都市に帰りましょ」

「そうですね。それじゃ、そうしますか」

という事で、瑞希が信之さんに連絡して報告をした。

その後、親父と信之おじさんを火葬して、私達は帰る事にした。

第三十二話 新たなる力、真紅宝具（後書き）

次回で第三章終了です。

今、他の小説を無視してこちらを書いていますので第三章が書き終わり、第四章のプロローグと用語集を書いてからペーすを落とします。

最終話 あの子の言葉の意味

早美 side

「うん……もう朝か」

私は自分の部屋で目が覚めた。

龍哉おじさんを倒してからもう一週間も経つ。あの事件がまだ昨日のように感じている。

ちなみに今はいつものように他の四人と一緒に寝ていない。八神会議の時にあんな事をしたから今は一緒に居ないのだ。

まあ私と瑞希は優子のあんな寝顔を見てしまっているから一緒に寝る事も出来ないだろうし。ちょうど良かったのだ。

でも少し寂しく感じるけどそれは何とかなるだろう。

ちなみに携帯に撮った優子の写真だが、一度は優子によって削除されたが辻川に頼んで復元させてもらった。もちろんそのことは優子に知られていない。

後、翼、辻川、杉山、菅野も能力都市に住むことになったらしい。

さて、今日は私、優子、瑞希、美羽、鈴奈で龍哉おじさんの遺品整理をする。

親父の遺品整理は一日終わらせてある。だから次は龍哉おじさんというにとらしい。

「さて、行きますか」

私は朝食を食べ終わり、洋服に着替えて龍哉おじさんが住んでいた場所に向かうことにした。

そしてドアを開けると、美羽と鈴奈が待っていた。

「あれ？何で居るの？」

「早美と一緒にいこうかと思って待っていたんです」

「そういう事。本当は私一人が良かったけど」

「それを言うなら私もですよ！！」

「まあまあ、とりあえず行こう」

とりあえず二人を落ち着かせて三人で一緒に行く事にした。

っと思っていたら、エレベーターに乗って一階で降りたら、今度は優子と瑞希が待っていた。

けど、何故か瑞希が落ち込んでいて、優子が微笑んでいた。

「な、何があっただ？」

「私が寝てたら勝手に瑞希が私の家に入ってきたのよ。私の寝顔を

撮ろうとしたのでしようけど。それで私が制裁しておいたのよ。あの時早美にした事と同じ事をね。」

ああ、なるほど。だから瑞希が落ち込んでいるんだ。っていうか私と同じ事をしたのかよ!!

「後、何故かあの時の写真が復元されたからそれも削除しておいたわ。辻川が復元したようですね。早美は辻川に復元させてもらってないよね？」

「してないから大丈夫だよ!!」

「そう。なら良いのだけど」

あつぶね。何とか動揺してないで言えた。後で瑞希には私が撮った写真を送っておこう。

そう思つて瑞希の方を見ると、落ち込んでいるのだが何か変だった。

「ねえ優子、瑞希変じゃない？」

「ああ、それはね……」

優子が私と目を逸らした。何をしたんだ？

そして次の瞬間、瑞希が何かを言ってきた。

「優子様、私我慢が出来ません」

「……は？」

瑞希が突然訳分らない事を言い出し私達はポカンとしていた。

優子は『あはははは』と空笑いをした。

「ちよつとやりすぎちゃって瑞希が壊れちゃったのよ。早美と同じ事をしただけなのに……」

「壊れたって言うてる場合でないでしょ！……どうするのよ！……」

「どうするって私に聞かれて瑞希！？」

優子が何かを言おうとしたとき、瑞希が優子を襲ってきたのだ。

「優子様〜」

「ちよ、ちよつと止めて服を脱がさないでよ！……」

瑞希は優子の言う事を聞かずに修道服を脱がそうとした。

私達は瑞希の変貌ぶりに驚いて動けないでいた。

「ちよ、ちよつとみんなも瑞希を止めてよ」

「……分かったよ」

私は優子が助けを求めてきたので何とか動けるようになった。

「瑞希、ちよつと良いか？」

「何よ早美、私の邪魔をするの?」

「そうじゃなくて場所を考えようよ。ここは外なんだからさ。優子の家でやってくれない?」

「うん……それもそうね。じゃあ優子様へ行きますよ」

「ってちよつと私を助けてくれるんじゃないの!??って瑞希能力を使わないでよ!」

瑞希は能力で優子を宙に浮かせたのだ。

「じゃあレッツゴー」

「いやああああああ」

優子は瑞希に連れて行かれて優子の家に向かっていった。

にしても瑞希の壊れっぷりは異常だろ。元に戻るのかよ。

私はそう思いながらとりあえず美羽と鈴奈と私で龍哉おじさんの家に向かうことにした。

十分後、私達は龍哉おじさんの家であり元『ユニオン』の本拠地のビルに入った。

そしてエレベーターで龍哉おじさんが住んでいた階に上がり、龍哉おじさんの家の前に着いた。

ドアを開けるとそこには全て綺麗に整っていた。

「結構綺麗なんだね。」

「そうね。とりあえず始めましょうか」

という訳で私達は龍哉おじさんの遺品を整理し始めた。

「一昨日も思ってたけど結構大変よね……」

作業を解してからもう二時間、私は整理しているとそう呟いていた。

「そっちはどう？」

「まだまだたくさんあるよ。まだかかりそう」

「そっ……」

と私と鈴奈が話していると突如ドアが開いた。

「や、やっと着いた……」

ドアから入ってきたのは先ほど、瑞希に連れて行かれた優子だった。

「あれ、瑞希は？」

「私の家で寝ているわ。いつになったらいつもの瑞希に戻ってくれ

るかしら」

「……ま、ご愁傷様」

私は自業自得だとしてもさすがに二時間もされていたら辛いだろうからそう言っといた。

「それで私は何をやれば良いの？」

「じゃあ、私の方を手伝ってくれる。こっちは小物が多いから」

「分かった」

優子は私の方に来て私と一緒に整理を始めた。

それからさらに三十分後、私はあるものを見つけた。

「何だこれ？」

「どうしたのって写真？」

私が見つけたものは写真だった。

写真を見つけたところにはそれぞれ国の名前で書かれてあった缶で分かれてあり、その中に写真があったのだ。

その中に写っていたのはさまざまな国の人たちだった。

みんな笑っておりその中に龍哉おじさんも居た。

良く見ると国の名前はイラクやアフガニスタンなど戦争や紛争があった国だった。

多分、龍哉おじさんはそこに出向いてたくさんの人達を救っていたのだろう。

たった一人で出来る事って言えば少ない事だがそれでも龍哉おじさんはやらないよりはましだと思って動いたのだろう。

私は龍哉おじさんが凄い人だと思った。私や優子以外もこんなに救っていたんだから。

そして、写真を見ていたらその中から手紙が落ちてきた。

私はそれを取り出し、手紙を広げた。

そこに書かれてあったのは私と優子宛の内容だった。

私達はそれを読むことにした。

『俺が手紙を書くのはあんまり無いのだが、隼人君と優子に話したい事があったから書くことにした。』

多分これを隼人君と優子が読んでいるって事は俺は死んでいるだろう。

ここにある写真は俺が救ってきた戦争や紛争の中に居た人達だ。

俺は人を救う為ならどこだって駆けつけて行った。戦争や紛争の中に居る人達を救いたかったのだ。

隼人君や優子のときもそうさ。あの時だつて君達を救いたかったから救った。まあ、隼人君の場合は警察に捕まらないようにね。

でも俺一人で救えるのはたった一握りしかないのは知っていた。

俺はそれでももつと救いたかった。関係の無い人が死ぬなんて理不尽すぎるから。

それで俺は考えた。風哉とかにも相談したりしてな。

そして信之と話したときだった。信之が『この世界には八神近家やその傘下以外にも超能力者が居る。能力者達と一緒に世界を救えばきつと龍哉が思っている事が実現するかもしれない』って言ったのだ。

俺にとってそれはとても喜んだ。これでたくさん人間が救えるのだからと思つたからだ。

それからたった数年で能力都市が完成した。

最初は俺もこれでたくさん人間が救えると思つた。

けど実際は違つた。天壤が人体実験をしたり、小さな派閥が能力都市に出来たり逆に悪化するばかりだった。

俺が望んでいたのはこんなじゃなかった。超能力者を集めてもまとまる事は無かつたのだ。

だから俺は世界を滅ぼすかも知れないものを止めるしか無かった。でももう何年も探しているが見つからなかった。だからこの手しかなかったのだ。

どの道、俺にはもう能力都市なんてどうでも良いと思っていた。だから、こんな事をやってしまったのかも知れない。

今思えばこんな事は自分でも分からない。でも気づいたときにはもう戻れなかった。

それに、こんな事をして自分が倒されるのも大体分かっていた。隼人君は八神近家長だからな。勝てるわけも無い。

それでも俺は元には戻れない。だからこれを書くことにした。

だから二人とも、能力都市をあるべき姿に戻してくれ。そして俺の思いを実現してくれ。もう俺にはこれしか出来ないのだから。

こんな事を言う為に長くなってしまったが、言いたい事はこれだけだ。

そして、今までありがとうな。

私は涙が出来てきて泣き出ししていた。こんなことを龍哉おじさんが抱えていなんて……

優子も涙が抑えられず、膝から崩れ落ちていた。

私達は今さら気づいたのだ。龍哉おじさんがこんなにも私達を支えてくれていた事に。

私達は龍哉おじさんに謝りたかった。こんなにも私達を思ってくれたのに、自分は無力で龍哉おじさんの何も支えになつてあげられなかった。だから、謝りたかった。

『人間は死んだ時にその人間の価値を知るもんだぜ』

龍哉おじさんが最後に言った言葉。今思えば私達の事を思つてそう言ってくれたのだ。

これほど泣きたくなつたのは初めてだ。悔しくて仕方が無かった。

「早美……」

優子は泣きながらも私を見ていた。

「グスツ、何？」

大体何が言いたいのか分かっていながらもそう言った。私もそうしたかったからだ。

「抱きしめても、良い？」

「良いよ。私もそうしたかったから」

私は優子を抱きしめた。

そして、抱きしめるとさらに涙が出てきてた。優子も多分そうだろう。

優子を抱きしめもまだ辛かった。

私はそんな中でも勇気を振り絞って優子に話しかけた。

「優子、二人で背負おう。龍哉おじさんの分を」

「うん」

「そして龍哉おじさんが出来なかった事を実現しよう。世界を平和にしよう」

「うん。私も背負うよ。龍哉さんが成し遂げなかった事を成し遂げよう」

私達はそう決意をした。龍哉おじさんの出来なかった事を実現しよう。

「でも、今はまだこのままで居よう。まだ泣きたいから」

「私もまだこのままが良い」

それから私達は二十分も抱きついて泣きじゃくった。

私は早美達の様子を見に行こうとしたら、二人が泣いていた。

一体何を見つけたのだろうと思ったが早美が手紙を持っていた。

多分竹宮副リーダーが死ぬ前に書いたものだろう。あの二人には竹宮副リーダーに縁があったのは私も知ってたから。

「……そのままにして置きますか」

私は二人を泣かせてあげようと早美達が居る部屋の扉を閉めておく事にした。

「様子はどうだったの？」

私は自分が整理していた所に戻ると鈴奈が聞いてきた。

「ちょっと二人だけにしておいて。今、竹宮副リーダーの事で泣いてるから」

「どついう事？」

「竹宮副リーダーが手紙を二人に残してたのですよ。多分そのことで泣いてるから」

「分かった。じゃあ、そつちをやってくれる？」

私と鈴奈は作業を再開した。

二人とも、今は思いつきり泣いてくださいな。

私はそう思いながら作業を続ける事にした。

Outside

一週間前。

「どつやら向こうは終わったようだね」

早美達から報告を受けた後、信之はそう呟いた。

「そうね。でもまさか水本優子が八神十戒なんてね」

信之と一緒に居る浅野咲も優子が八神十戒ということに少し驚いたのだ。

「今は雨宮だ。それで、お前の報告は本当なんだな」

「そうよ。まさかあの女が生きているなんてね……」

「瑞希からの報告は知ってたけど、どの道面倒な事になるのは変わらないな」

「でも、あの子達が両方解決してくれるんじゃない？」

「だな」

信之と咲は微笑んだ。

そう。二人はもう戦う事はしないのだ。一緒に戦ったとしても足手まといになるし、能力も衰えてる。だから子供達に任せるしかないのだ。

「それじゃあ、私はまた調査しておくわ。またしても余計な犠牲が出るかも知れないからね」

「分かった。でもお前も気をつけるよ。お前まで死んだら俺が困るからな」

「そんなの分かってるわ。それに、私はあの時から美羽に会っていないもの。美羽に会うまでは死ぬわけにはいかないしね」

そう言うと、咲は扉の方を向いた。

「後、私が能力都市に来たのは美羽には秘密にしておいて。全て終わるまで会いたくないから」

「分かった」

そう言って咲は部屋から出て行った。

「またしても大変な事になるな」

咲が出て行くと信之はそう呟いた。

「さて、これからお前がどう動くのか見せてもらおうぞ。松本麗華」

信之はまたしても微笑みながら言った。

最終話 あの子の意味（後書き）

これで第三章は終了です。やっと終わった。

最後の信之の言葉どおり次の第四章は松本麗華が関係してきます。

フィリアムや世界を滅ぼすうんちやらかんちやらは第五章にまわす予定です。

後、第三章を終わらせようと他の小説を後回しにしていたので第四章のプロローグと用語集を書いたらペースを落とします。

それではまた。

第四部 用語集（前書き）

新たな登場人物は居ませんので用語集だけです。
もしかしたら松本麗華の紹介を詳しく書くかもしれませんが。

第四部 用語集

八神十戒（はっしんじっかい）

フェスターの十戒を管理する人物。

フェスターの十戒に違反したものを処罰する事や、右近神フェスター以外の右近神とその傘下の人間を倒す事などがある。

四つの特別な力を持っていて、しかも右近神並みの力を持っている。しかし今まで使用できるのは上記に書いた二つの時しか使えなかった。

でも今はもう一つ追加されており「世界を滅ぼしかねない力を作ろう」としている人間」にも使用可能である。

また、八神近家やフェスターの十戒など、右近神フェスターに関する事が書かれている八神新書はっしんしんしょを持っているのも八神十戒である。現在は雨宮優子が勤めている。

以下は八神十戒の力の紹介である。

《黄金の剣（エクスカリバー）》

八神十戒が持つ力の一つ。

超能力や銃を相手にはじき返せるほどの力を発揮し、砕け散る事は絶対にない剣。

ソードや二刀流など？？のヴァージョンがある。

ver? ファーストソード 一大剣はごく普通の剣と同じでただ砕ける事がないだけである。

ver? セカンドソード 二大流剣は腕から剣が出ているだけで後はver?と一緒にである。

ver? 蛇腹操作は蛇腹剣ウイップコントローであるり外したとしても軌道操作が出来たりもする。

ver? 自然能力は自然上で発生する雷、炎、水、風、土を使ロキアスキルって攻撃する。

ver? 千本雨は千本の剣を宙に出して、対象者に総攻撃する。サウザントレイン

ver? 地面爆破はver?の地と威力が全然が違い、地面にグラウンドラッシュ

剣を刺して半径1kmに地割れを起こさせ高さ約四百mほどの穴が出来る。

ver? 次元消去は剣を振っただけで空間に切れ目を開け、黄エ金の剣使用者以外の周辺の物や人間を光速並の速さで全て次元空間に飲み込んでしまう。(早美が使う次元切断の次元空間とは別の次元空間であり、抜け出せるものは居ない)

《閃光の壁 (ライトウォール)》

八神十戒が持つ力の一つ。

光の壁を生成しあらゆる攻撃を通さない壁。

応用で壁を相手の周りに生成して閉じ込め、圧縮する事も出来る。

《白銀の翼 (スノウウィング)》

八神十戒が持つ力の一つ。

名前の通り純白な翼を広げる。

最高速度は光速を超える。

《断罪の光線 (ジャッチメント)》

八神十戒が持つ中で最強の力。
虹色の光線を放ち追尾機能が付いている為、ターゲットを確実に
仕留める。

さらに障害物があるうと意図も簡単に貫通してしまう。
また、敵が何人いようがその分だけ分散して攻撃する事も出来る。

フェスターの十戒

フェスターが決めた八神近家との約束。それを破るとその人間は処
罰される。
以下はフェスターの十戒をまとめた物である。

《フェスターの十戒》

以下の十戒を破るものは八神十戒の下にて処罰とす。

第壹条 だいちじょう 八神近家の一族は右近神フェスターの下にて従わなけれ
ばならず。

第貳条 だいにじょう 八神近家長は八神近家を束ね八神近家長の放棄する事を
禁ずる。

第參条 だいさんじょう 八神近家の一族は自分の一族以外の八神近家の一族との
婚姻は禁ずる。

第肆条 だいにじょう 八神宝具は右近神フェスターの命令で定められたものし
か使えず。

追記、フェスターによって新たに追加された真紅宝具は右
近神に従っている人間と世界を滅ぼしかねない力を作ろうとしてい
る人間以外に攻撃する事を禁ずる。

第五條 だいちじょう 八神近家の一族は後継者が居なく途絶えた場合、その傘

下が八神近家にならなければならず。(その傘下も後継者が居なく途絶えた場合もその八神近家の一族は空白とす。)

第六條 だいろくじょう 八神近家の一族は全員家柄戦争以外ではお互いに協力し合わなければならず。

第七條 だいしちじょう 八神近家の一族とその傘下の一族は家柄戦争以外での八神近家同士の殺し合いを禁ずる。

第八條 だいはちじょう 八神近家の当主は八神宝具を超能力者など異能の力を持つていない人間に攻撃するのは禁ずる。

第九條 だいきゅうじょう 八神近家の一族は血族だろつと二年以上本家と関わりを持たなかったものは原則として八神近家の人間とは認めず、その一族の人間とはしないとす。

第十條 だいいじゅうじょう 八神近家の一族は二年に一度は絶対に八神会議を開き、参加しなければならず。

八神新書 (はっしんしんしょ)

八神十戒が持つている八神近家や八神十戒、右近神フェスターの關係などが書かれている。

フェスターの十戒の変更を出来るのはこの本に書き加えたり消したりしたときだけで改定が出来る。

この本を開く事が出来るのは八神十戒と右近神フェスターだけである。

その他の物や動物が触れようとすると物の場合は蒸発し、動物の場合には体に異変が起きて死んでしまう。

十年前の家柄戦争の終戦の次の日に威力が強すぎるという事で禁止された宝具。

しかし、近い内にフィリアムと戦うかも知れないかということとで解禁された。

透明ナイフ（スケルトンナイフ）

竹宮家の真紅宝具。

七百本のナイフを操作して敵に攻撃する。

最後の弓矢（エンドオブアロー）

清水家の真紅宝具。

エンドオブアロー
終焉の弓矢とも言われている。

矢を放つと確実に敵を仕留め、逃げてみても必ずしとめる。

闇光神銃（あんこうしんじゅう）

浅野家の真紅宝具。

あんしんじゅう
闇神銃、光神銃の事を指している。

五神銃と威力は変わらないが、銃を持っただけで身体能力を上げる。

宝剣スペリオキシム

松本家の真紅宝具。

巨大な剣で持ち主しかもてないという剣である。
それでもただの巨大な剣でしかないがキャンセルソード宝剣解除と言うと剣が変化し、
威力と身体能力も上がる。

人間召喚の書

西條家の真紅宝具。

その名の通り、人間の形をした女性の召喚獣を出せ、最大三人まで
出せる。

召喚獣はそれぞれ草樹原桜、十六夜桜、閃光砲香、闇影美刀、風翼
飛空、速筋光奈、葵吸桃花、七罪殺季の八人を使う。

雷拳甲装（ライトニングアーマー）

辻川家の真紅宝具。

ボクシングのグローブの形をしていて金属で出来ている。
装備すると運動神経が速くなり、自分自身に電撃を帯びている。
装備している人以外が触れると感電して即死である。

時間操作（クイックコントロール）

杉山家の真紅宝具。

体内にクイックコントロール時間操作を埋め込み、時間を操作する事が出来る。
時間を進めている間に敵から攻撃を受けているはずだった攻撃は喰
らった事にならない。

また、時間を止めている間に攻撃しても意味が無い。

マテリアルコピー
物質複製

菅野家の真紅宝具

本体は眼鏡の形をしている。

眼鏡をかけている間に敵の攻撃を見ると、コピーまたはそれに似ているものを使う事が出来る。

また、コピーできないものは一つも無い。たとえ右近神の力もコピーする事が出来るのだ。

第四部 用語集（後書き）

ちなみに、真紅宝具は第零章 家柄戦争に出てき。た宝具です。向こうだけ出すのはなんかもったいなかったのでこちらでも使おうと思いました。

後、向こうでも言いましたが真紅宝具の大体はfortissim
oを参考にしています。

プロローグ(前書き)

第四章突入です。

プロローグ

松本麗華。松本鈴奈の母親で八神近家の当主になった人間の中で一位、二位を争う最悪な女。

前回のプロローグでも言った気がするが、家柄戦争の時に邪魔するもの、邪魔しないものを関わらず、無差別に人間を殺した人物だ。

だが、麗華は親父によって殺されてた。

それは表面上の話にだった。

けど、実際は違った。松本麗華は生きている。

確かに親父は殺したと聞いていたが、死体を見たものは居ないらしい。

誰かが持っていったのか、それともその時まだ生きていたのか分からないが、多分まだ生きているのだろうと私は思う。

そしてそのせいによって事件が発生した。

日本全国に無差別殺人が発生したのだ。

犯人は未だに捕まっておらず、誰が犯人なのかも分からないらしい。

でも、無差別殺人というのが場所に関しては大体決まっている。

そう。事件が起こるのは八神近家の家や別荘がある近くなのだ。

だから私はその犯人が何となく分かっていた。

多分鈴奈も分かって居るとだろう。こんな事を簡単にやり遂げるのは自分の母親である松本麗華しか居ないと。

そして一度だけ監視カメラに髪の毛が微妙に映った映像があった。

その映像を見ると髪の毛の色が松本麗華と一緒にいたのだ。

ますます私の推測が当たってきたのだ。

それでもまだ松本麗華と決まったわけでないが私と鈴奈はそう確信していた。

そしてそんなある日、例の殺人鬼が能力都市まで進出してきたのだ。

すぐに夜は歩き回らないように報道があった。

そう。その殺人鬼は夜に行動していたのだ。

それがこの物語の始まりだった。

日常が非日常に変わるとき、物語は始まる。

プロローグ（後書き）

さて、前々回に言ったとおり少しペースを落とさせていただき
ます。

これも前々回に言ったが今回は松本麗華が関係しています。
後、浅野咲も結構登場すると思います。

第一話 いつもとちょっと違う日常

早美 side

「うん……もう朝か」

龍哉おじさんが起こした事件からちょうど二ヶ月、私が能力都市に来たのは六月だったので今は十二月になる。

そして後一週間でクリスマスイブを向かえる十二月十七日。私はいつも通り起きた。

「なんか、慣れちゃったよね。この生活」

私は起きるとすぐにそう思った。

そう。今、朝起きると、二ヶ月前と少し違っているのだ。

ちなみにそれは二つの意味がある。

一つはこの体のこと。相変わらず元に戻る気配はなかった。もう二ヶ月にもなるので逆に慣れてしまった。

フェスターに原因を聞こうと思っても何だかんだいって忙しかったので余り聞ける暇は無かったのだ。

そう。あの事件以降、私達は龍哉おじさんが言ったこの世界を崩壊させる物が能力都市にあるかもしれないという事で、能力都市中を

探し回っているのだ。

しかし、それでは警察みたいになかなかビルの中に入ったりする事は出来ないという事で、私達は能力犯罪者討伐部隊、通称SCSを信之さんが結成した。

警察と同様、能力者が犯罪したときに拘束し、警察に引き渡す部隊。高校生から成人までの幅広い部隊である。

要するにどこかの学園都市で言えば風紀委員ジャッチメントと同じって事だ。

そして私達八神近家の当主と八神十戒の優子はそのSCS部隊の少将と中將をしている。大將は龍哉おじさんが亡くなったので新たに入った統括理事会の一人である蒲海ふかいという人物である。

でも彼は統括理事会の方で忙しいので、名前をSCS部隊に置いてあるようなものだ。

だから事実上、中將である私と優子がトップのようなものである。

ちなみに何故私と優子だけが中將だと言うのかは八神近家長と八神十戒だからという理由らしい。

他の七人は言わなくても分かると思うが少將である。

そしてその少將である七人は七つに区分された地域の安全を守っている。

逆に私と優子の二人の仕事と言えば、SCS本部で毎日資料を見ているとか週に一度行なわれ、少將と中將が集まって会議するくらい

である。たまにこれを利用して八神会議をしたりする事もある。

まあ、大体はその二つで命令とかは少将の七人に大体は任せているし。

後暇になったら優子と一緒にパトロールをするぐらいかな。正直言つて暇な方が多い。

まあ、その分のんびり出来るから良いんだけどね。

それに今の所、何も起こったわけでもないし。

閑話休題

話が完全にそれてた。それで……何だっけ？

ああ、確か私が朝起きたら二ヶ月前と違う事の話をしていたんだっけ？なんか今になつたらどうでも良い事である気がするがとりあえず二つ目も言っておきますか。

それで二つ目は、朝起きると前みたいにあの四人が居ないのだ。

ある意味あれに慣れてたのもあつて最初は寂しいと思つて居たのだが今はそれも思わなくなつていた。

まあ、こちらの方が普通なのだけど。あれに慣れてしまつとつい寂

しくなっていたのだ。

こんな事を杉山に愚痴ったら絶対に殴られるのは分かっていますが、いや、今は私が女だから『百合的な展開!』とか言って逆に興奮するかも……

まあ、そんなアイツだから私は中学の時からつるんでいたのかも知れないけど。

「さて、朝食も食べた事だしそろそろ行きますか」

私は朝食を食べ終わって着替え始めた。

そういえば、いつの間にか一人出来るようになったよね。

何言っているのかというと、着換えの事だ。一ヶ月前まで隣から美羽がやってきて手伝ってもらっていた。

さすがに美羽に手伝ってもらっているだけでは上達し（なんのだよ）できないので一ヶ月前にもう良いといったのだがその時にはもう一人で出来ていたしね。

そんな事を思っていると着換え終わり、私は玄関のドアを開けた。

開けるとそこにはいつもの修道服を着た優子が居た。

優子と私は仕事場所が同じなのでいつも一緒に行っているのだ。

けど今日はいつもと少し違った。

「あれ？今日は早いね。いつもは私が優子の家に行って、迎えに行ってるのに」

「なによ。私が早く起きちゃいけないって言うの？」

「いやそうじゃなくてさ……」

私はそれ以上は言わなかった。言うとなんの惨劇を起こしかねないからである。

何の事かと言うと、いつもなら私が優子の家に行くと優子はまだ寝ていて、私は合鍵（仕事上、優子の家にかかる事が多いからだ）で入って起こすのだが、その時の優子の寝顔を見るためでもあったりする。

まあ、優子の寝顔の件で二ヶ月前に瑞希が大変な目にあっただけ。

ちなみに瑞希だが今はいつも通りに戻っている。けどたまに変態衝動が起きて、私や優子のどちらかがえらい目に合ったりするいは。

つと今はとりあえず話を変えなければ。

「と、とりあえずそろそろ行く。今日は特に大変なのだから」

「そういえばそうだったね。じゃあ、行こっか」

私はこれ以上追及されなかった事にホッとして優子と一緒にSCS本部のビルに向かった。

第一話 いつもとちょっと違う日常（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第二話 SCS会議兼八神会議

早美 side

私と優子がSCS本部に着いてから三時間後の午前十一時、私達は会議室に居た。

そこには合計十一人の席があり、私は大将の蒲海が座る席の右、優子はその左に座った。

でも、この会議室には二人しか居ない。他のみんなはヴァーチャル映像でみんなの映像が現れ、それぞれの場所から通信で話しあるのだ。ちなみに実写とまったく区別が出来ないほどだ。

いつの間に能力都市はこんな科学的な町になったのだろうか最初は思ったりした。

私達が席に座って数分後、瑞希や美羽のヴァーチャル映像が映った。

みんなが揃うと、大将が座る反対側から大きな画面が現れ、そこから映像が映った。

ちなみに大将である蒲海だが、いつも通り統括理事の仕事で忙しいので姿を現さなかった。

まあ、今回は蒲海が暇だとしても八神近家の事も話すらしいのでどの道欠席だったのだが。

ってそんな事はどうでも良いとして話を戻そう。

映像が映り、そこに映っていたのはたのは信之さんだった。

そして蒲海以外が揃ったのでSCS会議は始まった。

「さて、全員揃った所でまずはSCS会議から始めるか。それではまず、何か報告する事はあるか？」

信之さんがそう言つと、すぐに辻川が手を上げた。

信之さんが辻川を指名すると、辻川は立ち上がった。

「第四地区で能力者達が集まって組織を作っている事なんですが…」

「ああ、それがどうしたんだ？」

「もう一ヶ月になるのですが全然手がかりがつかけておらず、向こうが暴れた時にしか捕まえられていない状況です」

「それはお前の得意なパソコンで分からないのか？」

「はい。一応がんばって探したのですがそれらしきものはありませんでした」

「分かった。じゃあこっちで手を打つから本拠地が分かり次第そちらに連絡する」

「分かりました」

とまあ、こんな感じで毎回堅苦しい会議なんだがそれでも毎週やっている。

次に鈴奈、翼が報告をして、それ以上は特に報告は無かった。

「じゃあ、今日はこんなものか。結構少ないな。まあ良いや、じゃあこれでSCS会議は終了する。」

といつもならここで解散なのだが今日は違う。この後そのままこの場所で八神会議を行なうのだ。

ということをもう知らされているのでみんなのヴァーチャル映像は消えなかった。

そして、そのまま続けて八神会議が始まった。

「さて、次は八神会議なんだがちょっとこれを見てくれ」

大きい画面は信之さんから映像が代わり、新聞の表紙が映っていた。今日の朝刊の新聞だ。

そこの一面に書いてあったのは昨日の深夜に起こった宮崎県での一家殺人事件だった。

「これって……」

「そうだ。これは昨日の深夜に起こり、宮崎県に住んでいた菅野家の傘下である前滝家の全員が殺された事件だ」

画面はまた信之に戻り、私達は真剣になった。なぜならこれは八神近家に対する挑戦状だからだ。

八神近家の傘下である一族のある家の家族を全員殺すなんて八神近家を知っている人間でしかない。

一週間前だって秋田県に住んでいた西條家の傘下である林山家も全員殺されたのだ。

完璧に八神近家に関係しているとしか思えないのだ。

しかし、

「それでこれがどうしたの？私達は話す事なんて無いわよ。何もこの情報に関しては何も知らないのだから」

そう。翼が言ったとおり、この情報について私達はまったく持って知らないのだ。だからこれの話し合いと言われても困るだけなのだ。

だが信之さんは微笑んでいた。

「確かに、お前らはこの件について余り知らない。けど、俺はその犯人が分かった」

「犯人が？何人だったのですか？」

美羽は信之さんに聞いた。確かに人数は気になっていた。一家を全員殺すなんて複数で無いと出来ないはずだったからだ。

だが、信之さんから次に言ったのは驚く事だった。

「犯人は一人だ。しかも、俺達が知っている人物でもある」

「ひ、一人ですって。そんなに相手は強いのですか？」

「ああ、アイツは確かに強いよ」

驚愕した。あれほどの殺人をたった一人で全て殺すなんてありえなかったからだ。

だが逆にそんな事を出来るのなら限られた人物になる。前滝家も林家も全員能力者であるので対抗は出来たはずなのだ。

だからこんな事を出来る人物はここに居る八神近家の当主と八神十戒以外で一人居るか居ないかくらいだった。

そんな事を思っていたら、瑞希が信之さんの言い方に疑問に思った。

「アイツってお父さんはその犯人と戦った事があるのですか？」

「あるさ。なんせ、俺を死の直前まで追いやった女なんだから」

「死の直前まで追いやった女？まさか、」

その言葉に鈴奈は嫌な予感がした、そう。鈴奈の予想が当たりなら大変な事になるからだ。

なぜなら、その女の事はこの中で一番知ってるのだから。

「どうやら松本……いや、今は鈴奈は気づいたようだな。この犯人

が

「でもあのクソババアは死んだはず！！生きているわけが、」

鈴奈はおかしかった。何故、犯人が分かっただけでこんなに取り乱したのか。

そしてもう一人、鈴奈の言葉を聞いた瞬間に分かったような顔をしていた人物が居た。

優子だ。優子も鈴奈の言葉を聞いた瞬間に怯え始めたのだ。

「……どうやら、鈴奈と雨宮は気づいたようだなこの犯人が」

「それで、その犯人は誰なの？優子なんか怯えているわよ。そんな酷い女なの？」

「ああそうさ。あの女は自分の為なら邪魔するものを全て殺した女だよ」

「それってまさか……」

私は最後に言った信之さんの言葉でやっと分かった。まさか、あの悪魔の女とまで言われた最悪な女を。

そして、信之さんは私の予想通りの言葉を言った。

「そう。鈴奈が取り乱し優子が怯える人物、松本麗華だ」

刹那、この場が凍りついた。

第二話 SCS会議兼八神会議（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第三話 松本麗華（前書き）

いつもより少し短いです。

第三話 松本麗華

早美 side

「ま、松本麗華……」

私は信之さんから犯人の名前を聞くと、同じ事を呟いた。

「そうだ。前松本家当主で前八神近家長であつた人物」

「何故生きているんだ！！あいつは私の親父が倒したんじゃないの！？」

「確かに倒したさ。だが、死体を見た人間は居ない。俺達だって探したが結局は見つからなかった」

「でも何で今更？恨みのある人間は全員死んでいるじゃないの？」

確かに瑞希の言うとおりだった。一番恨んでいるはずの親父や、家柄戦争の時に幾度も邪魔してきた龍哉おじさんはもう居ない。それなのに何故今更なのか。

「いや、あの二人とはもう関係ないのだろう。多分あいつは自分をこんな目にした八神近家に恨みがあるんだよ」

「でもそんな事を一人で何人も殺すなんてありえない」

「あいつなら可能だよ」

「だとしても何故今更？もつと龍哉さんと風哉さんが死んだ後じゃなければいけなかった訳？」

「多分、唯一弱点を知っている二人だからだろう。それと、フェスターの十戒の違反をしないためだ」

「そ、そういうことですか……」

優子は震えながらもそう言った。なるほど私も分かった。

フェスターの十戒だいきゅうじょう第玖条「八神近家の一族は血族だろうと二年以上本家と関わりを持たなかったものは原則として八神近家の人間とは認めず、その一族の人間とはしないとす。」これによってもはや松本麗華はフェスターの十戒では赤の他人として扱うのだ。

それによつて、

第壹条「八神近家の一族は右近神フェスターの下にて従わなければならず。」、

第陸条「八神近家の一族は全員家柄戦争以外ではお互いに協力し合わなければならず。」、

第漆条「八神近家の一族とその傘下の一族は家柄戦争以外での八神近家同士の殺し合いを禁ずる。」に違反する事は無いのだ。

さらに、第肆条だいにしじょうに追記された「フェスターによつて新たに追加された真紅宝具は右近神に従っている人間と世界を滅ぼしかねない力を作ろうとしている人間以外に攻撃する事を禁ずる。」にも反しているわけでもないので真紅宝具は使う事は出来ないのだ。

完全にフェスターの十戒を全て知っていたのだ。でもそれでも私達

は真紅宝具は使えなくても声唱宝具せいじょうほうぐがあるので特に心配は無いのだが。

あ、一応言うが声唱宝具とは私が使った七刀とか美羽が使った五神銃などの八神宝具である。

「それで、松本麗華が居る場所は分かるのか？そうじゃなければ俺たちは動けないぞ」

「すまんがまだなんだ。だからもうちょっと待ってくれるか？」

「そんなの待ってられるかよ！！」

菅野は怒っていた。そりゃそうだ。菅野家の参加である前滝家の人間が殺されたのだから。

「菅野が怒っているのは分かるよ。けど、こちらには何も情報が無いの。どうやって探すんのよ」

菅野が怒ったのに対し、翼は冷静に菅野に言った。

「お前だってお前の家の傘下である林山家が殺されているんだぞ！なんでそんな事が言えるんだよ！！」

「確かに林山家は西條家の傘だけど、その犯人がどこに居るか分からないのどうやって探すのって冷静に言ってるのよ」

「そういう事だ。少しは落ち着けよ。俺もがんばって探しているんだからさ」

「もういい。俺は勝手に探させてもらう。お前らに頼ってたら時間がかかるからな」

「おい待て!!」

最後に信之さんが止めようとしたが菅野のヴァーチャル映像は消えてしまった。

少し無言があつたが信之さんがため息をついた。

「まったく、勝手に動きやがって。とりあえず他のみんなはいつも通りに地区内の風紀に専念しておいてくれ。後優子には菅野が居る第六学区に向かつてくれ。多分菅野は当分は居なくなると思うから」

『分かりました』

「それじゃあ、これで八神会議を終わる」

会議が終わるとみんなのヴァーチャル映像は消え、私と優子だけになった。

私達も会議室から出ると優子を送る為に本部の入り口である一階に向かった。

「じゃあ、私も第六地区に行かないといけないからじゃあね」

「こっちは私だけで十分だから大丈夫だよ」

「ありがとう。じゃあ行くね」

そう言うと優子は外に出て、第六地区に向かった。

ただ私は優子が居なくなっただけで胸が虚しくなっていたりしていた。

なんだろうこれ？どうして優子が居なくなっただけでこんなに虚しくなるの？

私は訳が分からないままとりあえず自分の仕事をする為に自分の部屋に行く事にした。

第三話 松本麗華（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第四話 松本麗華の過去（前書き）

すみません。スランプ気味で遅れました。

第四話 松本麗華の過去

早美 side

あの後、私はいつも通りに自分の仕事を終わらせていつも通りに家に帰った。

今日も八神会議以外は得にも無かったので家でのもんぶりすることにしようとしたかったが一人のせいで出来なかった。

>なんか、他の事で大変な事に巻き込まれているな<

「聞いてたのですか、フェスター……」

そう。こいつのせいでのもんぶりなんて出来なかったのだ。

>まあな。偶然に起きたら八神会議が行なわれていたんだが<

「本当なの？いつもそういう割には毎回タイミングが良い時に現れるじゃない」

>それは作者の都合だろ<

「は？」

突然訳分からない事を言い出した。【作者の都合ですみません。b

Y竹馬】

> まあそれはどうでも良いとして、お前は俺に聞くことがあるんじゃないのか？<

> 一体何の事？<

なんかフェスターが真面目な話しをしてきたので私は言葉で喋るのはやめて心で話すことにした。

しかし私がフェスターに聞きたい事が無かったのでその質問には疑問に思えた。

> はあ、そこまで言っただけで気づかないのかよ……<

> そこでため息を吐かないでくれるかしら<

私はフェスターがため息をついたのに気に入らなかつた。一体何なのよ……

> あのさ。俺は右近神フェスターなのは分かっているよな<

> 分かっているわよ。だから私に取り付いているのでしょ。八神近家長と言っただけで<

> そうだ。だったらその前の八神近家長は誰だよ<

> ……あ、<

そこまで言われて気づいた。前八神近家長が松本麗華であった為、フェスターは八神近家長と意思を共有していたということになることを。

っていうことはフェスターが松本麗華の事が詳しいと言うことだ。

ちなみに何故前八神近家長が親父でなくて松本麗華なのかは家柄戦争で勝利したとしてもその勝者が八神近家長になる事は無く、後継者が八神近家長になるのだ。

だから次の八神近家の当主が決まるまでの間は八神近家長が居ない事になるのだ。

> やつと気づいたか。まったく、すぐに分かれよ<

> ごめん、確かにすぐそこに気づくべきだったわ……<

> まあいい。とりあえず俺が知っている事を話すからしつかり聞けよ<

ということでは私はフェスターが知っている松本麗華の事を話して貰うことにした。

でもその前に私が松本麗華の事をどの位知っている事を聞く為に、私が松本麗華の知っている事を話せと言ってきた。

私はすぐにそれに答える事にした。

私を知っている事とは、松本麗華は自分の邪魔をするのは全て殺すという冷酷な女だという事と、家柄戦争で水本家やその他の八神近家の一族、当時八神近家の当主であった西條凜夏、辻川鳴滝、杉山燧騎、菅野藐麻の四人が松本麗華に殺された事ぐらいだった。

それをフェスターに伝えたと、やっとフェスターが松本麗華の知っている事を話し始めた。

>まずお前が言った事なんだが、確かに松本麗華は冷酷な女で自分の邪魔をするのは容赦なく殺していた<

>やっぱりそれは当たっているんだ<

>ああ。けど、松本麗華は元々あんな人間でなかったんだ<

>どづいう事？<

私は気になった。松本麗華があんな冷酷な女ではなかったと言うのに気になったのだ。

>二十年前の話だ。松本麗華は二十五歳まで普通に正義感がある女性だった。彼女は竹宮龍哉と同じ世界中で起きている戦争や紛争地帯に行き、一人でも多く救おうとした<

>嘘……。松本麗華が龍哉おじさんと同じ世界を救っていたなんて……<

>ああ、時には竹宮龍哉と一緒に人を救った事もあったよ<

私は驚いた。松本麗華は昔は正義感がある女性なんて思わなかったのだ。

しかも、龍哉おじさんと一緒に人を救った事があったなんて……

>けど彼女が二十五歳の時だった。いつもの様に彼女は世界で人を

救つてた時、ある事件が起こった<

>事件つて？<

>その救つた人間にスパイが居たんだよ。そのスパイは松本麗華が居ない内に仲間を呼んで他の救つた人間達を一人残らず殺したんだよ<

>酷い<

>ああ、あの時は俺も起きていたから実際に見ていたが気持ち悪かったぐらいだ。辺りが血の海で腕、足が切断してあったものあれば目が飛び出ていたものもあった。今思い出すだけで気持ち悪いさ<

>その時救つた人って何人だったの？<

>約二百三十人だ。しかもそれは一ヶ月で救つた人数だ。それがたった一日で全員殺された。それによって彼女の心が壊れた<

>……それで、<

>それから彼女はその敵部隊をたつた一人で全員殺した。たとえ攻撃を喰らっても不神身で傷は消える。そしてその紛争はもう一つの部隊が勝つた事になった<

>でも、フェスターの十戒だいはぢじょうの第捌条「八神近家の当主は八神宝具を超能力者など異能の力を持っていない人間に攻撃するのは禁ずる。」に引つ掛からなかったの？<

>別に引つ掛からなかったさ。不神身は攻撃ではなくて回復の八神

宝具だろ。攻撃するわけで無いから引つ掛からずに済んだのさ<

>……<

私は黙ることしか出来なかった。確かに、これは心が壊れてもおかしくなかった。

松本麗華がこんな悲惨な人生を送っていたなんて思いもしなかった。

>それからさ。彼女が冷酷な女になったのは。もう彼女を昔に戻す人なんて居ないだろう。竹宮龍哉も死んでしまったのだから<

>ところで、これを知っている人間は？<

>清水信之以外の前八神近家の当主は全員知っているはずだ<

>信之さんは知ってないの？<

>ああ、前八神近家の当主だが彼は松本麗華と初めて会ったのは心が壊れた後なんだよ<

>そうだったの<

以外だった。前八神近家の当主だったのだから八神会議で会っていると思っていた。

>じゃあ、これを一週間後の八神会議で話して良いよね<

>ああ、頼んだ。それじゃ、俺は寝るからな<

そう言うとフェスターとの話は終わった。

私は仕事で疲れていたのでもっと倒れてそのまま寝る事にした。

第四話 松本麗華の過去（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第五話 とある二人の日常（前書き）

前回シリアスだったので今回は早美と優子の話です。

っていうかこの章は鈴奈がメインなのに全然登場してないのに今更気づいた。

第五話 とある二人の日常

早美 side

八神会議で松本麗華の話をしてから三日後、私はいつもと違ってのんびりに起きた。

今日はSCS部隊の仕事は無いので、のんびり過ごそうと思っていた。

そしてその朝、私は何故か習慣がなくなっていつも通り六時半に起きてしまった。

「相変わらず、この時間に起きちゃうんだね……」

仕事は休みなのでじっくり寝ようと思ったが、自分の習慣のせいでもいつも通りの六時半に起きてしまったのにため息が吐いてしまった。

「って今日はみんなと出かけるんだっけ？」

偶然にもいつもの四人メンバーも仕事が無いので一緒にショッピングに出かける事になったのだ。

って言っても集合時間はまだ先なのでもうちょっと寝ていたかったりしたかったりする。

「とりあえず、朝食を食べようか」

二度寝するのはめんどくさいので起き上がって朝食を食べる事にした。

「ふう、何しよっかな？」

朝食を食べ終わり、集合時間まで暇になってしまった私は何しようか考えていた。

「家で何もすることも無いし……公園でも行こう」

家に居て何もすることも無かったので洋服に着替えることにした。

もう二ヶ月も女になっているので洋服を着替えたりするときに恥ずかしいと思う事は無くなっている。

逆に私が元男だという事を忘れていくぐらいである。

けど、恋愛感情だけは男の時と同じで女と結婚したいのは不思議にも変わっていなかったりするのだが。

閑話休題

さて、洋服に着替え終わると家を出て公園に向かう事にした。

ちなみに今は十二月だが特に寒いわけではない。能力都市がある所は元々南鳥島の上に造られたので、十二月でも沖繩ぐらいの気温はある。

「やっぱり公園は落ち着くな」

私は良鬼と戦った場所でもある公園に着いてすぐ近くのベンチに座った。

この公園は私のお気に入りである。噴水や鳥の鳴き声や風によって気が揺れる音が聞こえるのんびり出来て心地良い。だから私はこの公園がお気に入りなのである。

少し経つとだんだん眠くなり、寝ようと思ったたら見覚えのある人物が私に近づいてきていた。

「こんな所で何しているの？」

「別に私が何をしているかなんていいでしょ。私がここに居て悪い事でもあるの？」

「そういう訳でないけど……」

私は寝ようと思っていたのでそれを邪魔されたので少し機嫌が悪かった。

そして彼女は私の隣が空いていたので隣に座ってきた。

「それで、優子は相変わらず修道服なんだね」

「まあね。こっちの方が慣れてるから」

「そうなの。ふああ〜」

私は欠伸をしてしまい、本当に眠たかった。

「眠そうね」

「優子が第六地区に向かってから仕事が忙しくてね……」

「そっか。本部に居るときは分担してやってたからね」

「そういう事。だから少し寝るよ」

そう言って私が寝ようとする、優子が膝をはたいていた。

まさかと思うけどこのシチュエーションは……

嫌な予感がした。っていうか嫌な予感しかしなかった。

「ゆ、優子さん？まさかと思いますがそれは……」

「膝枕の準備だけど。座ったまま寝るのは良くないと思うから。別に寝顔が見たいとかそういう理由で無いから！」

「い、良いよ。私は座ったまま寝るから」

「私が良くないの！良いから横になる！」

「は、はい……！」

優子の気迫につい頭を優子の膝に乗せてしまった。

すっごくドキドキしているんだけど!!

私は優子の膝枕のせいで逆に眠れなくなっていた。

「ど、どう心地は／＼」

「う、うん。心地いいよ／＼」

「そう。なら良いんだけど」

最後に優子からそう聞くと、少し落ち着いてきた。

そして私は眠気が来てそのまま寝てしまった。

優子 side

私がホッとしていたら、早美は寝てしまった。

最近は良く早美と一緒に居たが、こつやっつのんびりする事は出来てなかったからね。

そして私は早美の髪の毛を触りながら、早美の顔を見ていた。

「早美の寝顔って可愛い。写真でも撮ろうかしら?」

私は携帯を取り出して写真を撮ろうとしたが、寸前でやめる事にした。

なぜなら、私も寝顔を撮られたことがあったのでそれを思い出したらやめた方が良いと思ったのだ。

それでも、早美を見ていると心地が安らく感じになっていた。

「やっぱり、私って隼人の事が好きなんだ」

そう思うとやはり自分で自覚してしまう。隼人を見ているとそう思ってしまうのだ。今、隼人が女だとしても。

「私も素直でないよね。隼人を前にしたらどうしてもツンツンしちゃうし……」

正直な話、私がツンデレだと言う事は自分でも自覚している。分かっているけど私は隼人を前にすると素直になれなく、ツンツンしてしまうのだ。

素直に慣れたらどんなに気楽でいられるか。それを何度も考えた事もある。

それでも私は素直になれない。そんな自分が憎くてしょうがなかった。どうして私は素直になれないのかと。

しかし私はそれで良いと思っている。いつかは必ず隼人をこっちに向かせて見せれば良いからだ。

それに最近、隼人は私を意識し始めている。これは良い傾向だと思

っている。

私は絶対に諦めない。絶対に隼人を振り向かせて見せると。

早美が私の膝枕で寝てから四時間経った。

私も仕事で疲れていたので寝てしまったのだが、早美は未だに起きる気配は無かった。

私より疲れていたんだなと思い起こさないで置こうと思ったが時間は午前十一時十五分。あと十五分でみんなと待ち合わせなのだ。

集合場所はこの公園なので良いのだがさすがにあの三人に見られると何されるか分からない。だから今の内に起こしておかないといけない。

「ねえねえ、そろそろ起きて。みんなが来ると思うから」

「うん……」

早美はすぐに起きて起き上がった。

少し名残惜しかったけどそれはしょうがない。あの三人に制裁されるよりはましだからね。

「……あ、そっか。私、優子の膝で寝てたんだけ？」

「そうよ。結構良い寝顔だったわよ」

「……写真とか撮ってないよね？」

「別にそんな事はしてないわよ。誰かさんと違って」

まあ撮ろうとはしたけど。

「それに、私は早美の寝顔を見て何も思っていないから!」

相変わらず素直じゃない私はついそんな事を言ってしまった。

心の中でため息を吐くと早美が私に話し返してきた。

「なら良いけど。ところで今何時？」

「十一時十八分。だからそろそろみんな来ると思うわ」

「集合場所はここだからもう少し待つか」

そういつて私達は瑞希、美羽、鈴奈を待つことにした。

数分後、瑞希と美羽がやってきた。

鈴奈は用事があると言って今日は来ないことを美羽から聞いた。

多分、松本麗華のことだと思うので一人にさせておこうと思い、私を含め四人でショッピングをすることにした。

第五話 とある二人の日常（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第六話 鈴奈の過去と行動

鈴奈 side

「はあ、断っちゃった」

私は私の家のベッドに横になっていた。

今日、早美達と遊ぶ約束をしていたのだがそれを断って家に居る。

この三日間、あのクソババアの事を考えていた。何故今更になつてこんな事を始めたのか？

松本麗華

何故、こんな事を考えているのかは自分でも分からない。あんな奴なんか人間の屑なのに……

私は母親に褒めて貰った事なんて一度も無い。

私は家柄戦争が終わるまで悲惨な人生だった。

私は十四歳まで虐待を受けていた。

さすがに二歳まではがそんな事は無かったが、三歳になつてからある日から虐待を受けた。そんな記憶は忘れたいが忘れられずその記

れる叩かれる叩かれる
それ繰り返し返しだった。

さすがに年齢的に自殺しようとは思わなかったが毎日泣きじゃくった。

それでもあいつは私が泣いていたとしても止めなかった。今でも背中に鞭で叩かれた無数の跡が残ってる。

そして、家柄戦争であいつが死んだと聞いて私はやっと開放されると思ってた。

だがそんな事は無かった。

私はあいつが死んだとしても父親と一緒に暮らす事になった。

それからは何も無く平和に暮らしていけると思っていた。

しかし、あいつが死んでから二年後、父親の会社の株が大暴落した。

それにより会社は倒産。父親はそれから変わってしまった。

家を売りさばいて小さなアパートに暮らすことになった。

そして一日に五本以上の酒のビンを飲み、お金をパチンコや競馬に使いまくった。

私はそれに我慢が出来なくなり父親に怒ったが、それが引き金とな

った。

それから父親の虐待が始まり、最初は普通に殴られたりするだけだったが虐待を受けて二年後くらいから性的虐待も受けることになった。

小さい時は母親に逆らえずにいただけが、母親からの虐待が終わると慰めてくれた父親までもが私に虐待をしてきたのだ。

性的虐待はそれから二年続いたが、幸い妊娠と言つ最悪な事にはならなかった。

屈辱だった。あの時、一番信用していた人までが私を裏切ったのだ。

その時はもう十二歳だった。さすがに自殺しようと考えた。

けど、死ぬことなんて出来なかった。いや、私は死ぬということが出来ないのだ。

松本家は他の八神近家とは異なり、十五歳になった時か前松本家当主が死んだ直後に儀式を行なわれるのだ。

そう。私の体の中には不神身が受け継がれていた。

だから私は八神近家を恨んだ。自殺が出来ない体にした八神近家を恨んだのだ。それしか恨むものが無かったからだ。

家出も考えた。けど家出をした所でどこに行けば良いのか分からなかった。

家出はそこで諦めた。だがこれで私の逃げ道は無くなり、父親の虐待を受けるしかなかった。

それからさらに二年。私はやっと開放される時が来た。

父親が警察に捕まったのだ。どうやら私が虐待を受けているのを近所が知って警察に言ったらしい。

嬉しかった。やっと解放されると思った。

私はそれから松本家の傘下であった秋村家に居候することになった。

何故今になって秋村家が動いたのかと言うと、父親の会社が倒産したのは分かっていたが虐待を受けていたのは知らなかったようだ。

それでも私にとっては良かった。やっと自由に出来ると思ったからだ。

それからは平和に暮らし、私が住んでいた秋村家の人たちが一年間家を空けるといって竹宮家に一年間だけ住むことになり、そこで隼人に会って初めて好きな人が出来たりするなど今までに無いくらい幸せだった。

そして今、私はまたしてもあいつ絡みで巻き込まれている。

あいつが生きている事を聞いて、少し考えているのだ。

私はあいつの事を決別できていると思っていた。けど出来ていなかった。

あいつとの思い出は一つもないはずのにあいつの事で悩んでしまう。それによって私は何をすれば良いのか分からなくなっているのだ。

私は自分が分からなくなっていた。どうしてこんな思いをしているのかと。

「それに、この手紙は一体誰からなの？」

そして、もう一つ気になっていたこと。昨日の夕方、ポストを見たら手紙が入ってたのだ。

『松本鈴奈様』と書いてあるので私宛であることは分かるのだが、送り主は不明なので昨日読んでいないのだ。

最初は捨てようと思ったのだが今日の朝になってもう一度見ると、ひよっとするとあいつの事の内容かも知れないと思ったのだ。

私は関係ないかもしれないがとりあえず手紙を開ける事にした。

内容を見るとやはりあいつの事が書かれていた。

『松本鈴奈さん。』

突然こんな手紙をよこしてすみません。

私は貴方の母親、松本麗華と親しかった人です。

ですので貴方の母親が今起こしている事件も知っています。

そのことで話がありますので十二月二十日の午後九時、関西国際空港で待っています。

それでは。

舞田織まいたしき』

私はその手紙を読み終わって少し考えた。

私の母親を良く知る人物。確かにその人から情報を聞きたい。

私は聞きに行くべきだと思っていた。

でも、勝手に行つて良いのかな？多分心配すると思うし……

まあ、置き書きでも書いていれば大丈夫よね。仕事はしようがないとして。

そうと決まれば私は置き書きを書き、最低限の荷物を持って置き書きの紙を早美の家のポストに入れて家を出ることにした。

第六話 鈴奈の過去と行動（後書き）

……予想より結構重い話になってしまった。
本当はプレシアがフェイトにしていたぐらいの虐待にしようかと思
っていたのだがこれはやりすぎた気がする……
とりま、意見、感想お待ちしています。

第七話 鈴奈の捜索（前書き）

久々にあの二人の登場！！

第七話 鈴奈の捜索

早美 side

ショッピングから帰ってきた後、事件が起こった。

「くそ、どこに居るのよ!!」

私は能力都市の中を走り回ってた。

鈴奈が突然居なくなったのだ。

私の家のポストに書置きを置いて何処かに行ってしまったのだ。

置き書きの内容は『しばらくの間、家を空けます。理由はまだ言えません。がとりあえず私を探さないでください。松本鈴奈』と書いてあった。

それを見て私は急いで優子、瑞希、美羽に連絡して鈴奈が居なくなった事を伝えて四人で探す事にしたのだ。

多分、松本麗華の事で何か知って突然居なくなったのだろう。

どんなことを知ったのか分からないが、鈴奈は一人で何とかしようとしている。だから鈴奈はみんなに迷惑をかけないように書置きを書いたのだろう。

けどこれは鈴奈一人の問題ではない。これは八神近家全体の問題だ。

もう、一人で解決するような問題では無いのだ。

しかも、このままだと鈴奈はフェスターの十戒に違反してしまう。

第陸条^{だいろくじょう}『八神近家の一族は全員家柄戦争以外ではお互いに協力し合わなければならず。』

これがあるからこそ私達は鈴奈を止めなければならない。菅野に対してもそうだ。

けど、どこにいるのか分からない。しかも空港に居たとして飛行機に乗ってしまったらもう手遅れだ。

それでも諦める訳にはいかない。だから私は空港に向かっていた。

そして空港に着くと、すぐに発着ロビーに向かった。

「はあ、はあ、一体、どこにいるんだよ……」

探している間にも、飛行機は出発している。それでも諦めずに探した。

しかし、隅から隅まで探したが鈴奈は見つからなかった。

私は空港は諦めてほかの場所を探すことにしようとしたが、何故か分からないが飛行機の発着時間表を見ていた。

その中ですぐに出発する飛行機の行き先をとくに見ていた。

『6時20分発、大阪行き』

只今の時間は6時15分。後五分で出発する飛行機だった。

何故、この飛行機が気になったのか分からなかった。けど、何故か気になったのだ。

そこで私は過去の記憶を思い出していた。

それは三年？いや二年前の話だ。

確か鈴奈が居候していた頃だった。

その時鈴奈は学校の友達と出掛けていて私が暇で私がトイレ行こうと思つて廊下を歩いて居たとき、親父の一室から声が聞こえて来た。

少し隙間が開いていたのでそこから誰なのか見ると、親父と見知らぬ女性の二人が話していた。

それを確認するとすぐにトイレに行く事にした。

そして用をたし終わつてトイレから出て自分の部屋に戻ろうとしたら、先ほど親父と話していた女性が廊下に居た。

彼女は私に自己紹介をしてきて舞田識と言った。

そつだ彼女だ。私が大阪と聞いて気になっていた原因は。

彼女は松本麗華の親しかった人物で、松本麗華の一番の理解者だった。

その彼女が今住んでいる所は大阪だった気がする。

そして彼女が松本麗華が起こしたこの事件を知らない訳が無かった。そこで私は一つの考えが出てきた。

もしかして、鈴奈は舞田識の所に行こうとしているのでは！？
それが一番考えやすかった答えだった。

でも、舞田識は危険であった。

なぜなら彼女は私や親しかった松本麗華でさえも、何を考えているか分からない女性なのだ。

竹宮家に来た時だって舞田識が帰った後に親父が『どうして今になって俺の家にやって来たんだ？』そんな事を呟いていた位だ。

どういう事が分からなかったからそのあとに親父に聞いてみたんだが、話の内容は『松本麗華をどう倒したのか』だったらしい。

もう家柄戦争が終わって八年も経つのに、今になって聞いてきたのかと私も思った。

それに、親父は先ほどの話の後に『舞田識には余り近づくなよ。あいつは、何を考えているか分からないからな』と私に言ってきたぐらいだ。

だから、その考えがあっていると私は困ったのだ。

だから私は大阪に行こうとしたがもう時間が三分前だったのでそれに乗れなかった。もしかしたら鈴奈がそれに乗っていたかも知れないからだ。

能力都市の空港は国際線ではあるが本数が少なく、この前の仙台行きに乗った時もそれを逃したら翌日になるまで仙台行きが無かったのだ。

東京行きや大阪行きだって一日に五本あるか無いかぐらいだ。

それほど少ない為次の飛行機は当分先である。

私はそこで諦めようとしたが、もう一つ方法があった。

「あ、大阪にはあいつも居るじゃない!!」

咄嗟に携帯を取り出してすぐに電話した。

「早く出てよお!!」

私は苛立ちながら繋がるのを待っていた。

そして数秒で通話が繋がった。

「隼人、珍しいな。お前が俺に電話なんて」

「良鬼!今すぐ関西国際空港に向かって!!」

「……えっと、隼人だよな?」

私はそこで気づいた。良鬼は私が今女の子になっている事を知らないことに。

でもそんな事を言っている場合ではなかった。

「そうだけど、今は私の声には気にしないで！！そんなことより重要な事だから今すぐに関西国際空港に向かって！！」

『（何故女声なんだ？）なんでだ？』

「松本鈴奈って言えば分かるよね」

『ああ、俺たちが起こした事件にもそいつが居たけどそいつがどうしたんだ？』

「あゝもう！一から言わないといけないのね。急いでいるから一回しか言わないわよ」

良鬼が全然分かっていないのも当たり前なのだが、私は苛立ちながらも一から話す事にした。

『なるほど。要するに舞田識という人と一緒になると危険だから、松本家当主である松本鈴奈と一緒に居て欲しいと』

「そついう事。多分大阪に向かったから。頼んだわよ」

『ちよつと待て、そのまえに何でお前おんなご』ブツッ、

何か聞こえた気がしたが多分どうでも良い事だと思つので電話を掛け直さなかった。

「多分これで大丈夫だと思うけど、一応能力都市内に居るかもしれないから探しておこう」

空港を離れて私は別の所を探す事にした。

良鬼 side

「まったく、いきなり電話してきたら頼み事かよ」

「良鬼、一体誰からの電話だったの？まさか女からだったりしないよね？」

俺はため息を吐こうと思っていたらマリアドが睨みつけながらこっちを見てそう言って来た。なんか怖いんですけど！！

「ち、ちげえーよ。隼人からだ。ちよつと頼まれ事を受けただけだ」

「そう、でもさっき女声と言ってた気がするのだけど？」

以外に鋭い！と思った。

けど俺にもそれに関しては分からなかった。何故隼人が女声だったかは聞けなかったからだ。

「それに関しては俺にもわからねえ」

「そう。それで今から準備してどこ行くの？」

「ああ、隼人に頼まれて関西国際空港で松本鈴奈を待ち伏せしておけとさ」

俺が松本鈴香と言うとマリールドは何かを思い出したようだ。

「松本鈴香？そっいえばそんな奴ってたしか私達が誘拐した中に居なかったか？」

「居たよ。あいつ、松本家当主だったんだってさ」

「なるほど。だから意図も簡単に逃げ出したのか」

マリールドはそれを聞いてあの時、何故逃げ出せたのか納得いったように見えた。

ってそんな事を知っている場合じゃなかった。

「じゃあ、俺は行くから」

俺が家を出ようとするするとマリールドが『待った』と言ってきた。

「私も行くよ。良鬼になにかあるかも知れないから」

最初『来なくていいよ』と断ろうとしたが、マリールドはこうなると絶対に折れることがない事を最近知った。

俺とマリールドが付き合ってからマリールドは、俺に何か用があると絶対について行くと言う事を聞かないのだ。

俺はため息を吐いて『分かったよ』と言った。

というところで俺とマリアードは早速準備をしてバイクに乗って関西国際空港に向かった。

第七話 鈴奈の搜索（後書き）

意見、感想お待ちしています。

第八話 遭遇（前書き）

スランプだったので少し遅れました。

第八話 遭遇

鈴奈 side

午後九時二十五分。私が乗っていた飛行機がやっと関西国際空港に着いた。

本当はこれの一本前に乗ろうとしたのだが、予定より遅くなってしまい乗れなくてこの時間になってしまったのだ。

三十分くらい遅くなってしまったが、まだ待つてくれている事を祈って舞田織を探すことにした。

けど空港内にはおらず、別の人を見つけてしまった。

「な、なんであなた達が居るの!？」

私が見つけた人は早美の兄である竹宮良鬼と私を誘拐し吸血鬼をまとめていたベアトシツチリーター「マリアード」だった。

「なんでって隼人に頼まれたんだよ。お前が、舞田織と会うと思うから先回りしてお前と合流しろと言われたからだけだ」

「な!？」

驚いた。なぜ私の居場所が分かったのか。

早美に置書きを書いた内容にも私の居場所は書いていない。

しかも私の居場所が分かるのが早過ぎだ。早美が優子達と出掛けて帰ってきて、私の置書きを見たとしても早くて五時半だ。

たったの四時間で私の居場所を分かるわけがない。だとしたらどうやって分かったのか？

つて今はそんなことを考えている場合ではない事に気がついた。今は目の前のことを考えないといけなかったからだ。

どうやってこの二人と別れるかだ。これは私だけの問題だ。早美達も関係しているが、なるべく親子内で解決したい。私はそう思うのだ。

「……悪いけど、あなたたちが私について来ても私は逃げ切れるわよ。松本家は肉体変化系能力なんだから」

「確かにそうだな。でも俺達を舐めるのはどうおもっぜ」

私はそれを聞いてどういふ事だと思った。ハッターだとすぐに思った。

もうあの二人は吸血鬼の力を失っている。吸血鬼は肉体も強化されるがそれはもう無いはずだからだ。

でも、良鬼の余裕の笑みに違和感を覚えた。何故、そんなに慌てていないのか。

ならば私は試してみるだけだと思った。

「なら、私に追いついて見なさい!!」

私は能力を使って脚の筋肉を強化し、良鬼達から逃げて見ることにした。

一分くらいして後を振り返ると二人は居なかった。

「なんだ。やはりハツタリか。余計な考えさせやがって……」

「ならそう思っただけなら良いんじゃない」

「ッ!？」

私は私が逃げて行った方向に戻すと、そこにはマリアードが居た。

「な、なんで追いついたの？」

「なんか吸血鬼だったという名残らしいんだ。人間に戻ったけど、これだけは何故か吸血鬼の時の筋肉と同じなんだよ」

今度は右から良鬼の声が聞こえ、そちらを見たら良鬼が居た。

「どういう事？完全に人間に戻っているわけではないの？」

「かもしれないな。それか、シャイニングワールドの効果に含まれないかだ」

「ちょっと待って。シャイニングワールド光神世界は本来あるべき姿に戻す力ではないの？」

私は気になった。シャイニングワールド 光神世界は右近神フェスターが八神近家長に与えた力であり、本来あるべき姿に戻す力であるはずだ。

なのに良鬼達は未だに吸血鬼の筋肉が残っている。この矛盾はどういう事だと思った。

「もしかしたら少し違うのかもしれないな。まあ、今はそんな戯言はどうでも良いんだ。とりあえずこれで俺達から逃げれないのは分かったはずだ」

確かに今はそんなことはどうでも良かった。これで私が逃げられない事は分かってしまったのだ。

筋肉をさらに強化して逃げる事は出来るが、これ以上強化すると後で脚に激痛が襲って来るのでそこまでして逃げるつもりはない。

「分かった。なら一緒について来れば」

だから私は一緒について来ても良いと言った。けど諦めた訳ではない。

たとえ一緒に行ったとしても、舞田織との会話を聞かせないようにすれば良いだけの話しだからだ。

「じゃあ、とりあえず舞田織を探しますか」

そして私達は舞田織を探すことにした。

最初は手分けして捜そうとして二人と離れる作戦を思いついたが、多分それは失敗すると思うので実行しなかった。

そして数分後、空港内に居なかつたので外に出ると、一台のリムジンが止まって居た。

その運転手らしき人物が私の姿を見るとすぐに近づいて来た。

「松本鈴奈様ですね」

「はい。そうですけど……」

「ではこちらの車に乗ってください。舞田織様の家までお送りしますので。それでこちらは……」

「あ、こちらの二人は私の付き添いですのであまり気にせずに」

「分かりました。ではこちらへ」

そういうと、運転手さんはリムジンのドアを開けて私達に入るように言われた。

なので私達はリムジンに乗り、運転手さんも運転席に乗った。

そして私達を乗せたりリムジンは空港を後にした。

第八話 遭遇（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第九話 舞田識

鈴奈 side

そして数十分後、私や良鬼が乗っているリムジンは舞田識が住んでいる所に住んだようだ。

ちなみに、リムジンの乗っている間に何で早美が私の居場所が分かったのかと良鬼たちに聞いた。

どうやら早美は私の置書きを見てすぐに私を探したらしい。

そして早美が空港に着いてある事を思い出したらしい。

舞田識が大阪に住んでいるという事だった。

何故舞田識が大阪に住んでいると知っていた事は良鬼にも言っていなかったのが分らなかったが、私の母親の事を一番知っているのは彼女しか居ないと察したらしく、すぐに良鬼に頼んだのだと言った。

私はそれを聞いて少し驚いたが、早美ならやりかねない事だったからさほど驚かなかった。

私が竹宮家に居候していた時に早美が頭が良く、頭がまわるのが早かったからだ。

早美のスバ抜けた能力は多分他の八神近家と比べ物にならないだろ

う。あまりそんな顔は見せないが居候していた私には分かっていた。多分良鬼も分かっているはずだ。家出した身であるが一緒に暮らしていた方が長い。

普段はそんな姿を見せないのに本気になればすぐに動く。まるで伝勇伝に出てくる主人公、ライナ・リユートみたいに。

まあ、ライナと一緒にするのはどうかと思うけど。彼の場合は普段ですらやる気がないし毎日昼寝がしたいような人物だし。

でもラノベのキャラで一番近いといえば彼しか居ないのだけど。

ちなみに良鬼も何で隼人が電話をしている時に女声だったのか私に聞いてきたが、それは私も良く分からなかったので答えられなかったけど。

閑話休題。

とりあえずそんな話をしていたら舞田識の家に着いた。

家は一般人からすれば豪華な家だった。まあ私は自分の家や竹宮家に居候していたから見慣れているけど。

大きい玄関の扉を開くと、広いエントランスが迎えてくれた。

そしてその中心に執事が一人居て、私達を舞田識の所まで案内してくれた。

執事に案内されて移動していると、一つの部屋に案内された。

ドアが開くとそこは応接間になっていた。

どうやらここで待っててという事らしい。

私達はとりあえず近くの椅子に座って舞田識を待つ事にした。

待っている間に先ほど案内した執事が紅茶を持ってきたりしたが、数分後に舞田識が部屋に入ってきた。

「松本鈴奈さん、よくおこしになりました」

舞田識は丁寧に私に向かってそう言った。

手紙ではこれほど丁寧な言い方ではなかったので、私は寒気がした。

「と、とりあえず普通に接しませんか？八神近家はもっと接しやすい筈よ」

「ふ、やはりそう言いますか。まあ、それが八神近家とその傘下の良い所ですからね」

舞田識は普通の言い方に戻った。

良鬼から聞いたとおりだった。彼女は本当に何を考えているかわからない。

彼女の行動、口調、仕草、性格、どれが舞田識の本当の舞田識の動きなのか全然分からない。

私も舞田識の事は一応知っていたがこれほど訳が分からない人物だとは思わなかった。

「それよりそちらは、竹宮良鬼と元吸血鬼であるベアトシッチリーター＝マリアーデですね」

「ああそうだ。でもどうやって調べた？」

「私は八神近家の関係者は全て記憶しているの。だから顔を見ただけで誰かというのは分かるの」

「それより本題に入ってくださいますか？私はクソババアのことを知りたくて来たんだから」

私は急いで聞きたかった。母親であるクソババアの事を。

そんな私をみて舞田識は微笑みながら言った。

「本当は麗華の事について言つつもりだったのだけどそれはムリになつたわ」

「は？どういふ事よ」

「だって、今すぐ私に隙を見せたら殺されちゃうもの。ねえ、麗華。さっさと出てきなさい。いつまで隠れているのかしら？」

舞田識は突如顔の表情が変わり、真顔になっていた。

それを聞いた私は驚いていた。

今、舞田識は何って言った？クソババアがここに居るのと思ったのだ。

刹那、私達や舞田識が入ってきたドアとは違う別のドアが突如切り刻まれた。

その後ドアは蹴飛ばされ、壊された。

そしてそこから現れたのは、服は一部血で染まっており、右手に刀を持っていた私の母親だった。

第九話 舞田識（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十話 舞田識の本性の一部

鈴奈 side

私と良鬼はすぐに立ち上がり、あのクソババアの方を向いた。

だが舞田識は冷静にクソババアの顔を見ないで普通に紅茶を飲んで
いた。

「よく、私の家があったわね。麗華。二年前まで私が転々として
家を移動していたのを知っていたはずよ」

「ええ、そんな事は知っていたわ。だから貴方の居場所を知ってい
そうな人物から殺したのだから」

「なるほど。目的は麗華の事を一番知っていた私を殺すのが先だと」

「そういう事。貴方を殺せば私の事を詳しく知らない人物は居ない。
親友だろうが八神近家を潰す為なら誰でも殺すつもりだから」

クソババアがそこまで言っつて舞田識はやっと紅茶をテーブルに置い
た。

そしてクソババアの方を向いた。

「この私を殺すと？不神身が無ければ勝てるわけが無い私を？ふふ、
笑わせてくれる」

「そうよ。そのために十年間、ひっそり暮らしていたのだから」

「まあ、そんな事は私には情報が入っていたけどね。麗華が生きている事なんてね」

私はこの二人の威圧感が凄かった。

お互いに隙を狙っている。それほどお互いに緊張していたのだ。

隙が出れば即死ぬ。とくにクソババアの方はもつとだ。

話を聞いていればクソババアは不神身が無かった時は一度も舞田識に勝った事が無いということだ。だから冷静さが特に必要だった。

私達はそれを見ているしかなかった。割り込んだら即殺されるからだ。

私は不神身がある限り死ぬ事は無いかも知れない。けどあの中には入りたくは無かった。

それほどの威圧感を放っているのだ。私でも勝てるかもしれないが足が進まなかった。

「そういえばその返り血はもしかして私の執事達を殺したのかしら？」

「そうよ。邪魔だったから」

「相変わらずあのときから麗華はその性格なのね」

「だったら何？もう私はあのときから壊れているの。自分でも自覚している。けど、そんな事はどうでも良いの。もう何もかもどうでも良い。何も失うものが無いのが一番の幸せだから」

完全に壊れていると私は思った。私が産まれてくる前から壊れているのは知っていてどんな事情があつたのかは本人から聞いた事が無いが、これほど私の母親が壊れていたなんては思わなかった。

でも一つ疑問に思った。

ならなんで父親と結婚したて私を産んだのかだ。壊れているのならそんな事をしないはずなのに。

そんな事を思っていたら舞田識が話し始めた。

「そう。とりあえず私を殺しに来たのは分かつたわ。でも麗華は一つだけ遅かつた事があるわ。そのせいで麗華は私を殺せない」

「そんなのやってみないと分からないわ！！」

刹那、クソババアは舞田識に向かって一瞬で移動した。

多分足の筋力を強化して即座に舞田識の後ろに回つたのだろう。

だが舞田識は微笑んでいた。

「そう、麗華は私に勝てないなぜなら……」

そして今度は舞田識が消えた。そう、消えたのだ。

十秒くらいして舞田識は現れた。クソババアが持っていた刀を持っていて。

現れてから先ほどの言葉の続きを言ってきた。

「人……人間を捨てたのだから」

私達は舞田識の声がした方を向き唖然した。

なぜなら姿を現した舞田識は背中に純白の翼が生えたのだ。

「な、なんだよそれは!!」

「これ？これは神の器。ようは右近神アーフィクトと契約を交わしたの。私も右近神フェスターと八神近家のやり方には気にくわなかったから一年前にね」

私は驚いた。舞田家は松本家の傘下である。その舞田家の一人である舞田識が別の右近神と契約を交わしたって。

しかも私はその女に堂々と近づいたのだ。ヘタをすると私を殺したのかも知れないのだ。

それは今でも同じだ。私はとてもまずい所に居るのだとすぐに察した。

「……どうやら、もう一人警戒している人が増えたわね。まあ、それは後回しにしてどうするのかしら？私は殺せないわよ」

「くっ、化け物が」

「化け物でも結構よ。人間を捨てたのだからどうとでも呼びなさいよ。それよりまだ戦うの？」

「戦う訳が無いだろ。今の言葉で私の邪魔をしない事が分かったのだから」

「そう。なら帰っても良いわ。麗華の娘が邪魔をするかもしれないけど」

舞田識は私の方を向いてそう言ってきた。

確かにクソババアが逃げるのなら邪魔をしたい。それより今はこの場を逃げたいのが上回っていた。

こんな所から早くも逃げ出したい。無駄な旅になるけどそれでも舞田識から逃げたかったのだ。この女は本当に何を考えているのか分からなかったから。

そんな事を思っていたらクソババアが一瞬だけこっちを向いた。

そして何も言わずに壊してきたドアから逃げた。

それを確認した舞田識は元の姿に戻り、何事も無かったの用に紅茶を飲みだした。

「それで、どうするのかしら？貴方は私に麗華の事を聞きたいの？」

「それは良いわ。それよりも早くここから逃げたいぐらいだし」

「まあ、そうよね。アレを見てしまった以上はそう反応するしかないか。それに、麗華の事は私より右近神フェスターの方が知っていると思うし」

「……あ、」

私はそれを言われて気づいた。

確かに右近神フェスターの方が知っている事が多いはずだ。なぜなら前八神近家長はクソババアだからずっと一緒に居た方が知っているはずだからだ。

「もしかして気づいてなかった？それもそうよね。それに気づいてたらここに来る訳が無いし」

「それより、私は早くここから出たいのだけど？」

「そう、別に出ても良いわ。私が呼んだだけだし強制はしないわ」

「別に良いの？私達は別の右近神に居るのよ。そう簡単に逃がしても良いの？」

「ええ、だって私は右近神アーフィクトと契約をしている身。右近神アーフィクトは時空と平行世界をつかさどる右近神。未来の事も分かるの。だからこのまま返そうという訳」

「ひょっとして、この先に何かが起こるか知っているから」

「そついう事」

「分かった。私は未来に何が待っていていようとそれを受け入れるだけだから。それじゃ、私は帰るわ」

私は未だに怯えていた良鬼とマリアードに声をかけて怯えているのをなくして帰ろうとした。

そしてドアを開けようとしたら舞田識が私を呼び止めた。

まだ話があるのかと思って私は振り向くて何か用と言うと、とんでもない言葉が返ってきた。

「竹宮隼人には気をつけなさい。彼は今後、貴方達の危険因子になるから」

「は？何を言って……」

私はその言葉を否定しようとしたが舞田識の真面目な顔を見て言えなくなった。

私はとりあえずその言葉を切り捨てて舞田識の家を出る事にした。

だが、私の中には舞田識の言葉が気になっていた。

第十話 舞田識の本性の一部（後書き）

意見、感想お待ちしております

第十一話 鈴奈の決意

鈴奈 side

私達三人は舞田識の家の門を出ると、そこには先ほどのリムジンが止まっていた。

どうやら私達を待っていたらしい。

一応舞田識から呼んだ側なので空港まで送ってくれると舞田識が言っていたらしい。

私は躊躇したがこれで舞田識と関わるのは最後にしようと思った。

そう、本当は舞田識とはもう関わりたくも無かった。

何を考えているか本当に分からない人間にさらには右近神アーフィトと契約を交わしている身、そしてあの威圧感。

舞田識に関われば何をされるか分からないと言う脅威で私の体は表面には出してなかったが震えていたのだ。

クソババアが言っていたが本当に化け物ではないかと思った。あんなの、人間ではない。

早くこの家から逃げたかった。もう、二度とこんな所には来たくも無かった。

そして私達はリムジンに乗って空港に向かった。

リムジンに乗ると少し気が楽になった。

先ほどから震えていた体が何とか正常になったのだ。

それに私はホツとしていると舞田識が出る前に言った言葉を思い出した。

『竹宮隼人には気をつけなさい。彼は今後、貴方達の危険因子になるから』

あの言葉、舞田識が嘘を言っているような感じではなかった。

右近神アーフィクト。右近神フィリアムは詳しく知っているが右近神アーフィクトの情報は全然知らない。

確かに時空と平行世界をつかさどる右近神だと言う事は知っている。

右近神フェスターは生物、右近神フィリアムは物質、そしてまだ一度も動きを見せていない右近神ジュペインは地形、空間をつかさどっているのは知っている。

この四つの右近神で世界は出来ている。一つでも欠ければ世界は滅ぶ。

だが彼等は自分達が死なないと言う事を知って右近神の中で上下関係を作るうとしている。

とくに右近神フィリアムは積極的だ。逆に私達が使えている右近神フェスターは消極的で逆にそれを阻止しようとしている。

だから力を人間に与え、世界を安定させようとしているのは八神近家とその傘下のみんなは知っている。

だから八神近家のほとんどは協力的だ。世界を守るために。

閑話休題

さて、話を戻そっか。

多分舞田識が言った事は事実だろう。右近神アーフィクトと交わした身がそう言っているのだから。

でも、私は全てを受け入れる。たとえ、後に隼人が危険因子になろうと全てを受け入れる。

そう決めよう。もし隼人が敵になろうとも私は隼人と戦う。自分の意思に抗うつもりは無いのだから。

私はそう決意した。何が待っていようと私は自分の意思を突き進む！！未来に何が起ころうと。

「まったく、酷い事をしてくれたわね」

鈴香達が帰った後、舞田識は松本麗華が入ってきたドアの方を見ていた。

そこは余りにも酷い惨劇だった。

執事達の死体の数が多くて血溜まりができていたほどだ。

多分その場を通りかかった執事達を一人残らず殺していったのだろう。

だが舞田識はそれを見ても平然としていた。

>お前も良く平然としていられるわよね<

突如、舞田識の脳に直接伝わってくる声が聞こえた。

「確かにそうかもね。自分でもこんなものを見て平然としているだけ
ら」

舞田識はその声に答えるかのように言った。

自分でも異常だと分かっていた。松本麗華ほどではないがこんなものを見て普通にいられるのだから。

>それより、松本鈴香は殺さなくて良かったのかしら？あんなチャ

ンスはもう無いと思うわよ<

「確かにそうね。でも、あのまま生かして竹宮隼人が壊れる姿を見て松本鈴香がどうなるか見てみたくは無い？」

>確かにそれを見ている方が面白そうだわ。竹宮隼人はいずれ、松本麗華のように壊れるわよ<

「そう、壊れる前の麗華と竹宮隼人の性格は似ていて正義感がほとんど一緒に近い。だから大切なものを失えばすぐに壊れる」

舞田識は微笑んでいた。

そう、壊れる前の松本麗華と今の竹宮隼人の性格は似ている。正義感が強いが大切なものを失えばすぐに壊れる。

だからこそ竹宮隼人は危険因子になる。大切なものを失ったときが酷いから。

>ふ、やはり貴方とは息が合うわ。だから私は貴方を気に入ったのかもしれなわね<

「気に入らなかつたら私を殺すのでしょ」

>もちろんそうよ。私には無能な人間は必要ないからね<

「ふ、やはり貴方と話している時が一番楽しいわ。右近神アーフィクト」

>私も同感だわ。まったく退屈しないもの。ふふふ<

舞田識はまたしても先ほどから座っていた椅子に座り執事呼んだ。

そして執事に紅茶を注いでもらい、紅茶を飲んだ。

第十一話 鈴奈の決意（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十二話 早美の決心

早美 side

「どつするべきか……」

私は先ほど閉じた携帯を見ながらそう呟いた。

なぜ携帯を開いていたかというと先ほどまで良鬼と電話していたのだ。

電話の内容は向こうで鈴奈と会って今は良鬼の家で泊ませたらしい。

だがここから先が問題だった。

空港で鈴奈と会ってすぐに舞田識の家に行ったらしい。

そこで舞田識と会って何かを話そうとしていたら松本麗華が現れたのだと言ってきた。

それを聞いたときは大丈夫だったかと私は思ったがそれは大丈夫だったらしい。舞田識によって松本麗華は逆に逃げる事になったらしいから。

けど舞田識がどうやって追い出したのかと聞いたときは驚いた。

右近神アーフィクトが舞田識と交わしていたらしい。

最悪だった。何を考えているか分からないのにさらに厄介になったからだ。

しかも八神近家の当主の鈴奈を殺さなかった。敵同士であるはずなのに。

相変わらず何を考えているか分からない。なぜ敵を生かしておいたのかと。

普通ならそんな事をしない。なのに彼女はそれをした。何か訳があるに違いない。

だがそれが何なのか分からない。いや、一生分からないと思う。

とりあえずそれを聞いて良鬼と電話を切って今に至る。

「はあ、問題は山積みね。右近神が二人も現れるとはね……」

私はいろいろな問題が重なった為、ため息が吐きたくなった。

鈴奈の件は何とかなって明日には帰ってくるらしいのでそれは良かったと思う。

けど鈴奈の件で新たに増えたのだ。

今一番問題の松本麗華と松本麗華を殺すために独断行動を取った菅野文弥、信之おじさんを使って能力都市を滅ぼし、今もそれを狙っている右近神フィリアム、そして今さっき増えた舞田識と右近神アーフィクト。問題が多すぎだった。

この三つが一気に起こったら大変な事になるが、今の所一つしか動きが無いので他の二つはまだ動かないで欲しいと思った。

ともかくこのことをみんなに知らせる必要があった。今回に関しては急がないとまずいと思ったのだ。

「まあ、それは鈴奈が帰ってからでも間に合うだろう。私からも離しておく話はあるから今は……」

私は明日八神会議を開いて話す事にして今はもっと話を聞こうと思った。

>フェスター、起きている？<

>……<

>返事が無い。ただの屍のようだ<

>おい、勝手に殺すな<

私がふざけて言ったらフェスターは突然起きてきた。

もしかして起きていたの？と思ったりしたが、とりあえず本題に入る事にした。

>冗談。それより聞きたい事があるんだけど<

>分かっているよ。右近神アーフィクトの事だろ？<

やっぱり起きていたんじゃないかと思いつきながら話を続けた。

>そう。右近神フィリアムの事は少し知っているから良いのだけど
右近神アーフィクトは何も知らなかったから<

>そのことなんだが……、俺も右近神アーフィクトの事は全然知らないんだ<

>え、どういう事？<

私は何で知らないのかと思った。フェスターは基本右近神がらみは
全て知っていると言っていた。

なら何で右近神アーフィクトの事は知らないのかと思ったのだ。

その答えはフェスターがすぐに答えた。

>それが……彼女は舞田識と同様に何を考え居るのか分からない
だよ<

>舞田識と同種という事？<

>まあそうなるな。あいつの考えている事はまったく持って俺たち
でも分からないんだ。だからまったく知らないんだ<

>そう。まあそれならしょうがないわね。とりあえずそれは保留に
しておきましょうか<

私はその話は保留にしてもう一つ聞きたい事があった。

いや、教わりたい事があった。

> 八神近家長の力を教えてく

先ほど言った三つの問題が一緒に起こった為にも備えておこうと思
ったのだ。

それを聞いたフェスターは少し驚いていたがとりあえず理由を聞こ
うと思った。

> どうしてだ？今のままでも強いと思うのだが？<

> 確かにそうかもしれない。けど今起こっている三つの問題が一緒
に起こったときの為に。それに今後の為にもその力が必要となると
思うから<

> でも分かっているんだろうな。八神近家長の力、八神長化やがみちようかを使い
こなすには大変だという事を<

> 分かっている。けど、もう誰も失いたくないんだ<

私は覚悟を決めてそう言った。

あの時思い知らされた。龍哉おじさんの時、私はあつという間に倒
されさらには駿河大輔に体を奪われるような事が起こってしまった。

もうあの時のように無力でいたく無かったのだ。あの時は優子が八
神十戒だったおかげで倒せたのだからもし優子が八神十戒を持って
いなかったら負けていた。

だから私はもつと強くならなくてはならないと思った。この能力都市と仲間を守るために。

それに気づいたのかフェスターからため息が聞こえた気がした後、話しかけてきた。

>分かった。けど八神長化の力を習得するのは結構難しいのだから半端な覚悟でやったらマジで怒るからなく

>分かっている。そんな生半端な覚悟でやるつもりはないよ。仲間を守るためだから

フェスターは諦めて私に八神長化を教えてください。くれ。事にした。

そして私は家を出て近くの人気りの無い所に移動した。

第十二話 早美の決心（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十三話 八神長化

早美 side

私は能力都市にある人が誰も来ない所に来ていた。

能力都市は隙間無く無駄が無いように建物が建てられている。

ならなんでそんな所があるのかというのは、ここ最近までこの近辺は元々不良の溜まり場に近かったために普通の人は誰も来なく、やっと一週間前に私達SCS部隊が取り締まる事になり建物を全て建て替えるためにこの近辺は立ち入り禁止になっているのだ。

だから私は自分のSCS部隊の中将として簡単に入れたのだ。まあ、職権乱用だけどそんな事は気にしない。

さて、本題に戻ろうね。

そんなこんなで私は八神長化を覚える為に人が来ない所に来たのだ。

今更ながら八神長化とは八神近家長だけが使え、右近神フェスターの力でもあるのだ。

私は知らないのけど、吸血鬼と戦った時に私が意識を失ったときにフェスターがシャイニングワールド光神世界シャイニングワールドというのを使ったらしい。

それが八神長化の一つである。それを使いこなすには並大抵のことではない。

精神を集中させ、いつもの技より神経を使わないとうまく行かない。それほど難しい。

けど私はそれを手に入れるべきだと思った。もう龍哉おじさんの時みたいに無力ではいたくないから。

「それで、私は何をすれば良いの？」

> 本当は日本古来からある滝とかで集中させるのが良いのだが能力都市にはそんな所は無いからなく

まあそりゃそうだろうねと思った。精神を集中させるにはそういうのがあるのだが、そんなのは田舎など行かないとムリなのでしようがなかった。

じゃあ、何をすれば良いのかとっているとフェスターが話を続け始めた。

> とりあえず一度八神長化で一番簡単なのを教えるからそれをやってみてくれ。まあ、それでも精神を集中させる事と神経を結構使うけどなく

「分かった」

私はフェスターの言うことに従い、真剣に聞く事にした。

そしてフェスターが姿を現してどういうのを見せてもらった。

フェスターは目を瞑り始めた。

刹那、顔ぐらいの大きさをした白い玉みたいなのが一つ現れ、目を開いた直後に前方に放たれた。

速さはもの凄う速さで建物に直撃し、その建物は崩壊し跡形も無く一気に崩れ落ちた。

さすがにそこまですれば誰かが駆けつけて来るだろうと思うが誰も来なかった。

つていうより誰も何かが起こっても駆けつける必要は無いと言っているからだ。

能力の練習をする場所が無いからここでやらせると言っているのはSCS部隊の人が来るはずが無かったのだ。まあ、この近辺に住んでいる人は騒ぐかも知れないけどね。

>まあ、こんな感じだな。シャイニングカノン 光神砲丸でもこれほどの威力があるからな。まあ、今を見て分かったらすごいと思うが<

「それで、どうすればいいの？」

私はどうやれば出来るのかと聞いた。

フェスターはそれを聞いてすぐに答えた。

>まず、シャイニングカノン 光神砲丸を想像するんだ<

「想像？」

> そうだ。もちろんそのときに精神を集中しなければならぬからな。とりあえずやってみろく

私はフェスターにやってみると言われたのでやってみる事にした。

目を瞑り精神を集中させ、シャイニングカノン光神砲丸を想像した。

精神集中、シャイニングカノン光神砲丸生成、生成確認……

そう想像すると、私は宙に白い玉が浮いているのを感じていた。

技が私の体に伝わって来ていたのだ。どのようにすれば良いのか全て伝わって来た。

……生成完了、砲撃準備、方向確認、砲撃準備完了、砲撃開始。

そして、私は目を開いてシャイニングカノン光神砲丸を前方に放った。

私が放ったシャイニングカノン光神砲丸はフェスターが当てた建物とは別の建物に当たり、一気に崩壊して崩れ落ちた。

フェスターはそれを見ていて驚いていた。多分初めてでこんなに旨く出来るとは思っていなかったのだろう。

> すごい、たった一度でこんなに……く

「まあ、竹宮家は元々剣の一族だからね。精神を集中するのは簡単に来るのよ」

> なるほどな。ならもうシャイニングカノン光神砲丸はもう大丈夫だな。よし次行くぞく

そうやって私は次の八神長化を覚えてもらう事になった。

第十三話 八神長化（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十四話 麗華の真骨頂

Outside

「なんなのよ！！あの化け物は！！」

隼人が八神長化を覚えている頃、松本麗華は舞田識が居る大阪から移動して岡山に居た。

今考えているのは元親友である舞田識の事だ。

彼女が右近神アーフィクトと契約を結んでいたのに驚いたがそれよりも別のことで驚いていた。

なぜ、アーフィクトの力を使えたのかということだ。

右近神の力は契約を結んでいたとしても簡単に使える力ではない。

使えるようになったとしても、右近神フェスターの八神長化のように簡単に使えるようにしてなければ、普通に3、4年は掛かるものだ。

だが舞田識は使っていた。っていう事は3、4年も前から契約している事になる。

それはありえない。なぜなら二年前に舞田識が竹宮家に訪れた事を知っていたからだ。

なぜ知っているのかというのは分からないがともかく松本麗華はそれを知っていた。

そこで舞田識と竹宮風哉が会っているとしたら竹宮風哉は気づくはずだからだ。

八神長化は一応右近神の力でもある。

右近神の力はお互いに感知でき、誰に契約をしているのかが分かってしまうのだ。

当時の八神近家長は竹宮風哉なので、そのときに舞田識が右近神アーフィクトと契約を結んでいたのなら気づくはずなのだ。

だからありえなかった。彼女が右近神アーフィクトの力を使いこなしているのが。

そう考えていると松本麗華はその思考を止めた。

「ってそんな事を考えなくても良いわね。別に私は八神近家を潰せれば良いだけの事だから」

そう、松本麗華にとっても舞田識はどうでもいい存在だったからだ。

彼女が右近神アーフィクトと契約を結んでいるのなら、八神近家とは無関係の人間になるのだから。

そして松本麗華はそれがとても好都合であった。

一番厄介だった舞田識が八神近家とはもう無関係だと分かれば本格的に動けるからだ。

そう、松本麗華がこれほど動かないで居たのは舞田識の住んでいる居場所を探して即座に殺すために十年も掛かってしまったのだ。

彼女が厄介者で八神近家の当主以外で勝てない人物だと思っていたからだ。

その舞田識が八神近家と無関係になったと分かれば本格的に動けたのだ。

そして松本麗華の真骨頂である統括力が活かされるからだ。

家柄戦争で負けて一度は全てを失ったが、仲間を増やす事は松本麗華にとって容易い事だった。

今までその仲間を動かさなかったのは舞田識が八神近家に付いていると思っていたからなので、付いていないと分かれば仲間達を動かせるのだ。

松本麗華は笑い出した。

「これでやっと本格的に動かせる。そして、私をここまで陥れた奴らを全て殺す！」

松本麗華はもの凄い殺気を放っていた。

あの時、何もかも失った松本麗華にとって生きている意味は八神近家に対しての復讐だけだった。

復讐の為に彼女は生きているようなものだったのだ。それ以外は何もいらな思っていた。

そして何もいらなければ失うものも無い。仲間達は松本麗華にとつてただの手駒としか見ていないのだ。

だがそれを知らない仲間達は松本麗華に仕えているのだ。

それに、松本麗華の仲間達はみんなして恨みがある人間達だったからだ。

なぜならその仲間達は八神近家に恨みがある奴や能力都市で犯罪を犯して逃げ出した人間達だ。

なので積極的に彼らは松本麗華の命令を聞く人間達であるのだ。

しかも松本麗華が厳選した人間達でもある。

不要な人間は全て切り捨てて最低でも居る人間だけを集めたのだ。

それでも松本麗華に仕えている人間はざっと100人は居たりする。

そしてみんなが松本麗華に絶対服従なのだ。

だから裏切る人間は誰一人居ないのだ。

閑話休題

さて、殺気を放っていた松本麗華だがその後すぐに誰かに電話を掛けた。

数回コールすると、電話の相手は出た。

『もしもし、どうかなさいましたか松本麗華さん』

「羽鳥、今日から能力都市と舞田識の家以外の全八神近家の関係のある家を全てぶち壊してそこに居る人間を全て殺せ。警察に捕まった場合は舌をかんで自殺しろ」

『え？でも大丈夫なのですか？そんな事したら舞田識が邪魔をしなくなるのではないですか？』

「それは大丈夫だ。どうやら識は八神近家を抜け出していたからね。とりあえず頼んだわよ」

『分かりました。全員に通告しておきます』

「ああ、頼むわね」

そう言って、電話を切った。

「さて、悲劇のパーティの始まりよ」

そして、松本麗華は微笑みだした。

第十四話 麗華の真骨頂（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十五話

早美 side

私が八神長化を鍛え始め、鈴奈が帰ってきてからが一週間と数日が経った。そして午前九時、私達八神近家の当主は信之さんに招集された。

別に今日は八神会議がある日ではない。なのに突然信之さんから招集がかかったのよ。

一体何の話かと思いつつも、私はSCS本部の会議室に居た。

優子は菅野が勝手に松本麗華を探しに行ってしまったので、第六学区に行ってしまったのでここには私一人しか居なかった。

数分してヴァーチャル映像でみんなの映像が映った。

もちろん菅野は居なかった。やはり帰って来なかったらしい。なので菅野を除いた八神近家の当主が居ることになった。

それからさらに数分して、画面に信之おじさんが映った。

見るといつもの八神会議をする時より、とてつもなく真面目な顔だった。まるで何かがあったかのように。

そんな信之さんを見ていてどうしたのだろうかと思いつつも、八神会議は始まった。

「今回、ここに呼んだのは大変な事態になったからだ」

「大変な事態ってどういうこと？」

信之さんの言葉にどうということかと思っていて、それを代表して私が聞いてみた。

そして一体何が大変な事態になったのだろうかと思った。

「ああ、まずはこれを見てくれ」

信之さんがそう言くと、画面が変わった。

それを見て私は吐き出しそうになった。他の皆もそんな感じをしている人もいた。

何が映されたのかというと、あちらこちらに散らばっている人間の死体だった。

もはや地獄絵図であった。気持ち悪いといわないで何というのかかと思った。

さらに映像は変わり、次々に死体が映された。すべて同じような映像だった。

そしてこれは何なのかと思った。

「これは竹宮家分家、清水家分家とその傘下の増井家、涼鬼原家分家と傘下宗村家、松本家分家とその傘下で舞田識が住んでいる所以

外の舞田家、西條家分家とその傘下の林山家、辻川家分家とその傘下の山原家、杉山家分家とその傘下の枝文家、菅野家分家とその傘下の前滝家にいた人間が全員殺された」

それを聴いた瞬間、私達は言葉を失った。一週間前までなんとも無かった筈なのに、たった一週間でこんな悲劇になっていたのだから。こんな事は今まで無かった。残酷にもほどがある。この一週間で百人くらいの人間が死んだのだ。たった一人によって。

さすがに松本麗華がした事に許せなかった。どうしてここまでするのか。そして、人を殺しておいて何も思わないのかと。

松本麗華の昔の事はフェスターから聞いたが、本当に昔は人を救っていたのかと思った。

そんな人間だったのなら普通はこんな事を絶対にしないはず。しかし松本麗華は普通に人殺しをしている。疑ってもおかしくは無かった。

しかし一つ気になるところがあった。私はその疑問に気になっていた。

そう考えていると、信之さんが何かを言い始めた。

「けど何故か八神近家本家が一つも狙われていない。理由は分からないが何かあるのだろう」

そう、私が疑問に思っていたのはこの事だ。何故八神近家本家を狙っていない。今は存在しない涼鬼原家本家は除いたとしても、これ

はどういうことだろうと私は思っていた。

信之さんが言ったとおり、何か理由があるはずだと私も思った。しかしそれが分からなかった。

「それより、何で私達には伝わってこなかったの？普通、こんな事件ならテレビで伝わってもおかしくないはずなのに……」

翼がそう言った。確かにそうだ。何故これほど大きな事件がテレビで流されていないのかと。普通ならすぐに近所などが気づいてもおかしくないはずだった。

「ああ、確かに日本でその事件についてはニュースで放送されたが、能力都市には俺が規制を掛けてそのニュースだけ排除させて置いたんだ。菅野文弥のように勝手に逃げないようにね」

信之さんはそう言った。確かにそうだ。前回は菅野が前滝家の人間が殺されて勝手に行動し始めてしまった。なら今回はそんな事がないようにするはずだった。

私だってその立場ならそうするだろう。誰も勝手に行動しないように。

そして皆も納得していた。

「それで、私達はどうすれば良いのですか？さすがに私達も待機は嫌ですのぞ」

美羽の言うとおりだった。私だってまた待機といわれたら多分勝手に行動するだろう。親戚の人たちは死んでしまったけど、せめて親

を守りたいから。

「いや、今回は浅野と雨宮以外は全員本家に帰ってくれ。これ以上八神近家の人間を殺させる訳にはいかないからな。能力都市は二人居れば十分だから」

「それじゃ、俺達は家に帰って良いのか？」

「ああ、って言うより今すぐ帰ってくれ。いつ、松本麗華が責めてくるか分からないからな。あ、声唱宝具は持っていけよ。多分、今の松本麗華は強いからな。それでは会議を終了する」

と言って会議は終了し、みんなのヴァーチャル映像は消えた。

そして私は急いで帰る準備をする事にした。

第十五話（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十六話 早美お姉ちゃん（前書き）

超お久しぶりです。大晦日以来ですね。

なんか余り内容が思いつかなかったもので相当時間が掛かってしま

いましたというorz

とりま、遅れてすみませんでした！！

第十六話 早美お姉ちゃん

早美 side

私はあの会議が終了してすぐに自分の家に帰ると、すぐに実家に帰る準備をし始めることにした。

さつき飛行機の時間を調べると後一時間半くらいで出てしまつらしく、それを逃すと四時間も待たないといけなくなる。だから私は急いでいた。

すぐに出る為に必要な衣類とナイフを数本、そして七刀を荷物に閉まって、それを持って私は家を出た。

家に出たのが飛行機が出る時間を調べた時から三十分も経っており、今から行けば何とかその飛行機に間に合う所だった。

「ま、なんとか間に合いそうね」

私はそう思いながら空港に向かおうとしていて、マンションの出入り口を出ると、見覚えのある顔が居た。

「あれ？鈴奈、何しているの？」

そう、そこに居たのは鈴奈で、私は何をしているのかと思っていた。鈴奈も実家に帰らないといけないはずなのにどうしてこんな所で立っていたのかと思った。

そして鈴奈は私の方を向いて、こう話した。

「どうせだから早美と一緒にいこうかなって思っただけよ。なんか一人だとちょっと思っちゃうことがあるから」

最後の言葉には何となく私にも分かった。

一人だとしても松本麗華の事を考えてしまい、その度にどうしてこうなってしまったのかと思ってしまうのだろう。

あんな彼女だが、一応は鈴奈の母親に当たる人物でそれが鈴奈にとっては辛いのだろう。

それにこの前、私に頼んで松本麗華の事をフェスターから聞いていたので、どうして母親があんな風になってしまったのかその原因を鈴香は知ってしまったているのだ。

だからこそ母親の事で今は少しでも悩みたくないから私と一緒にいきたいのだと思った。

「別に良いよ。何となく分かるから。だから私が別の話題で盛り上げて見せるよ。鈴奈の落ち込んでいるならそれを打ち消してあげる」

だから私はそう言ってさらに鈴奈を落ち着かせようとさせる事にした。今の鈴奈にはそれが必要だと思い、そして安心させるのが一番良いのだろうと思ったのだ。そして私のその言葉を聞いて鈴奈は微笑んだ。

「なんか、早美が私のお姉ちゃんみたいに見えてきたわ」

「お姉ちゃんって……」

「だから、空港に付くまでの間だけ早美お姉ちゃんと言って良いかな？」

「でも私達は余り年齢が離れてないよ？別に良いけど」

「じゃあ、早美お姉ちゃん」

それを鈴奈から言われてなんか恥ずかしかった。よく見ると鈴奈も少し顔を赤くしていた。多分恥ずかしくて赤くしたのだろう。私も多分顔が赤くなっていると思うけど。

「そ、それじゃあ、そろそろ行こうか」

「う、うん。そうだよね」

私はすぐにでもこの空気から抜け出したくなったので、そろそろ歩き出そうと鈴奈に行った。鈴奈も自分から言ったけど、さすがにこの空気は抜け出したかったようで頷いて、私達は空港に向かう事にした。

その空港に向かっている間、私達はどうでも良いような戯言などを話したりして、笑ったりしていた。そのときも鈴奈が早美お姉ちゃんとか言っって少し恥ずかしかったが、最初の時に言われた時よりは恥ずかしくもなかったので普通に会話が出来た。

それから四十分くらいして、私達は空港に着いて出発ロビーの前に居た。

「それじゃあ、私は後二十分くらいで出発するから先に行くね」

「うん、でもありがとね早美お姉ちゃん。私なんかにつき合ってもらって」

「別に良いよ。悲しそうな鈴奈を見たくなかったから。それじゃあ行くね」

私はそう言って飛行機に乗り込む事にした。

しかし私はこのとき知らなかった。まさか私と鈴奈にある関係がある事を。

そしてその事を知るのがこの事件が終了してから知る事を。

鈴奈 side

「ありがとね。早美お姉ちゃん」

私は早美が行ってしまつと、そう言っていた。

私は嬉しかったのだ。早美と話しているときだけは母親の事を忘れられた。

少し前までクソババアとか言っていたけど、今はフェスターから母親の過去の事が分かっているのですんな呼び方はしない事にした。

昔の母親はあれほど善人だったのにあの戦争で壊れてしまった事を

知っている。

それにさっきの早美の会話で決心する事が出来た。あの戯言のような話でもこうやって決心する事が出来たのだった。

もう私は迷わない。母親を善人だった頃の母親に戻させてやると。そう決意した。

「それじゃあ、私も行こうか」

私はそう思いながらも自分が乗る飛行機の乗り場に向かう事にした。

第十六話 早美お姉ちゃん（後書き）

意見、感想お待ちしております。

第十七話 私の姿をどれだけ見たいのかしら？ by 早美

早美 s i d e

鈴奈と離れてから飛行機に乗り、予定の時間に飛行機は離陸した。

それからさらに三時間くらい掛かり、飛行機は実家の近くになる羽田空港に着いた。

それから空港内を少し歩いてみると、凄く目立っていたメイドが誰かを探しているように見えた。

多分彼女が母親が空港に迎えに来させた人だろうと思い、私は彼女の方に向かった。まあ、今の私の姿だと絶対に気づかないと思った。だって私は女なので。

何故母親がこっちに来るのを知っているかというところ、私が家を出る前に母親に連絡をしておいて羽田空港に迎えを来させるように言っていたからだ。

ちなみにそのとき母親は私の声に驚いていたが、理由が何となく分かっていたらしくてすぐに隼人だと分かった。多分親父もこうなった事があつたのだろうと思った。

とりあえず私は私を探しているメイドの方に向かい、彼女に話しかける事にした

「あの、竹宮家のメイドですよね？」

「はいそうですね……まさかあなたが隼人様ですか？」

やっぱり彼女は私の姿が分からなかったから、私がどこに居るか分からなかったらしい。まだ母親にも私の姿を知っていないからね。

「まあ、そうですね。理由は母親から聞いていると思いますが、今は女になっているもので」

「それは分かっていたのですが、郁美様からはどんな姿なのかが分かりませんでしたもので」

「それはしょうがないよ。だって母親も私がどんな姿をしていたか分からないと思いましたし」

メイドはそう言って私に謝ってきていたが、そもそも母親が今の私の姿を知っているわけではないのでそれはしょうがないと思った。ちなみに郁美とは私の母親の名前である。

「そうでしたか。とりあえず迎えの車のところまで向かいますので、隼人様はわたくしの後ろをついて来ててください」

「分かったわ。後今の私の名前は隼人ではなくて早美と呼んで。隼人と言われると周りからの目線があるから」

「確かにそうですね。それでは早美様、先ほども言ったとおりになくしの後ろをついて来ててください」

私はメイドにそう言われたので、メイドの後ろについて行った。相変わらずよくしつけがされているなと思ひ、少し関心していた。

そして駐車場に着くと、そこには一際目立ったリムジンが止まっており、私達はその車に向かい、リムジンの中に入り、メイドの方もリムジンの中に入っていき、それからリムジンは動き出して私が昔暮らしていた実家に向かいだした。

「ところで早美様、あのことは平気だったのですか？」

「あのこと？」

リムジンに乗ってから数分すると、突然メイドの方が私に話しかけてきて、あのことは一体何の事だろうかと思った。

「風哉様が龍哉様に殺された事です。早美様は龍哉様の死体を直接見たらしいじゃないですか。あれからもう二ヶ月経っていますけど、郁美様は今でも悲しんでおられますので」

「ああ、そのことね。確かにあのときは悲しかったよ。私にとって親父と龍哉おじさんはそれぞれ父親と私を救ってくれた人だから二人が死んだことには悲しかったよ。けどそもそも龍哉おじさんを殺したのは私達と言っても過言ではないのだけだね。龍哉おじさんは親父以外にもたくさんの人を殺したのだから、私達八神近家が動くのは当たり前だった。けど今はもう大丈夫よ。元々私達はこういう立場だと言う事は分かっているし、何より龍哉おじさんの遺品整理の時に思いっきり泣いたから。それに私も小学生の時に自分が何をしたのか分かっているし」

何の事か理解すると、私はそう答えておいた。もう今なら大丈夫。あの龍哉おじさんの手紙を読んでおけば落ち着いていられたのだ。それに私も昔は何人も人間を殺した事があるし、それで血を見た

りしてもなんとでも思わなくなったし、小学校の時に実の祖母を私は殺しているのでほんの少し慣れていていたのだ。

「なら良かったです。ところで早美様は小学生の時に何かしたので
すか？」

その言葉を聞いて、私はとてもまずいと思った。前にも言ったが、あの駿河大輔という殺人鬼の正体が私だということは龍哉おじさんと瑞希しか知らなかったことを忘れていて、すっかり言ってしまったのだ。

「べ、別に何でもないよ。話すような事でも無いから。それより後どのくらいで着くのかしら？」

「後三十分くらいですね。多分あちらでは早美様を待ち構えている
と思いますか？」

「そうなんだ。で、私を待ち構えているってどういう事？」

何とか話題を変えられたのは良かったのだが、私を待ち構えている
と言うのはどういう事なのかと思った。今まで実家に帰ったときは
そんな事は一度もなかったのですがどうして私を待ち構えているのかと
思った。

「実はあのときの早美様と郁美様の会話を盗み聞きしておりました
メイドがいらっしゃいまして、そこからみなさまに伝わってしまった
たという事です。私もそれを聞いてしまった身なのですけど」

「ああ、そういう事が」

私はそれを聞いて理解し、ため息を吐いた。メイド達は多分私に女になったという事を知って、その姿を是非見たいのだと門の前で待っているのだろうと思った。

私は少し実家に帰りたくなりつつも、それは仕方ないと思いながら再度ため息を吐いた。

第十八話 (前書き)

タイトルが思いつかなかったorz

第十八話

早美 side

それから約三十分後、私を乗せたリムジンは実家であり竹宮家の本家の門の前で止まった。

メイドが先に下りて、私が降りる為に車のドアを開いてくれて、それから私はリムジンから降りて門の前に向かい、そこに居ると門が開き始めた。そして門の先を見ると私はため息を吐きなくなった。

「……………なにこれ？」

そこにはメイド達が屋敷のドアまで横にずっと並んで居てたのだ。今までこんな事はなかったのにどうしてこんな事になっているのだろうと私は思い、私の母親も何も言わないのかとも思ったのだ。メイド達は多分私の姿を見たいのだろうと分かるが、だからと言ってこの対応には少し驚いていたのだ。

『お帰りなさいませ隼人様』

門が完全に開くとメイド達が一齐に私に例をし始めた。これは一体なんだろうと思いつつ、とりあえず私はそのことについては触れずに先を進む事にした。

門と屋敷の距離は階段を含めて十メートルくらいなのでほんの少しの距離だが、これは恥ずかしかった。けどそれを気にせずにとりあえず屋敷に入ることが先だと思っていた。

そして屋敷のドアの前に着くとドアの前に立っていたメイドの二人がドアを開けて、私は屋敷の中に入った。

見覚えのあるエントランスをみて、私は久しぶりに実家に帰ってきたと思った。高校に入ってからというもの、学校の近くの家で一人暮らしで実家からかなり遠い所に引っ越してしまったために、私は久しぶりに帰ってきたのだと思ったのだ。

それからエントランスを抜けて、母親が居るだろうと思う母親の部屋に向かった。私の家は一箇所を除いて洋風になっているが、唯一母親の部屋だけが和室になっており、洋風でも別に平気なのだが和室の方が和むという事なので特別に和室を一つあるのだ。

私は母親が居ると思う母親の部屋の前にたどり着き、そしてドアをノックした。すると中から『はい』という声が聞こえ、その声は母親の声だった。

「帰ってきたよお母さん。声だけだと分からないと思うけど竹宮隼人だよ」

私がそう言って数秒後、ドアが開いて母親の姿を見た。

母親の服装はこの家にはそぐわない和服を着ていて、髪は和服にちよつと合うくらいの長さであった。

「えつと、隼人だよな？」

母親は私が隼人なのか確認するかのように聞いてきた。まあ、今の私の姿だと本当に隼人なのか疑問に思うから確認をするかのよう

に聞いてきたのだらうと私は思い、すぐに言う事にした。

「そうだけど。なんなら七刀を持ってきているから目の前で使ってみせようか。七刀は竹宮家当主しか使えないからすぐに隼人だと分かると思うけど」

「やっぱり隼人なのね」

そう言っただけで母親は私に抱きついてきた。いきなりどうしたのかと思っ

ていて、母親は泣いていた。私は何で泣いているのか何となく分かっていた。親父が死んでからここにはメイドと母親しか居なかった。メイドは雇われている身なので母親とは余り親しくなる訳ではなかった。誰も家族が居なくこの二ヶ月間ずっと一人のようなものだったのだ。

そして私が帰ってきたことにより、今まで溜まりに溜まっていた分の悲しみが一気に溢れだし、泣き出してしまったのだ。

母親にとって親父は夫だし、その夫が亡くなったのだから辛いのは当たり前だったのだ。

こんな事なら一度帰ってくるべきだったと私は少し後悔した。二ヶ月も辛い思いをしていたのに私はその間一度も実家に帰って居なかったのだ。一応親父の葬式の時に母親とは会っているが、そのときは余り話す時間は無かった為、このときまで溜め込んでしまったのだ。

それから数分して母親が泣くのをやめた。

「ごめんね隼人。帰ってきて早々泣いてしまつて」

「別にしょうがないよ。親父はもう帰つてこないのだから。とりあえず部屋の中に入ろう」

私は立っているのもなんなのでとりあえず母親の部屋に入る事にした。

第十九話 偶然に遭遇した悪魔

早美 side

「それで、今日は突然どうしたの？12時頃に突然電話が掛かってきて帰ってくるとは聞いたけど、理由を聞いてなかったから気になったのだけど」

あれから母親は落ち着きを取り戻して、冷静に私に聞いてきた。

これを見て私はやっと元の母親に戻ったと私は思った。私の母親はいつも冷静に対処して、どうすれば一番最善なのかという事をすぐに導き出すような人であるので、私にとってはこういう風に行っているのが母親だと思ってしまうのだ。

けどたまにああやって何もかも一人で抱え込んでしまって、誰にも打ち明けない事が多く、それをどうにかしていたのが親父だったのだが、その親父はもう居ない。だから母親は先ほどまで親父の事を含めて一人で全て抱え込んでしまったのだ。

「お母さんは聞いていない？ここ最近、八神近家関連で何が起きているのか？」

「……ええ、聞いているわ」

私はその話を言うと、先ほど冷静になっていた母親が突然顔を変えて、いつもより真剣な目をしているようだった。後にその真剣な顔になった理由が分かるのだが、このとき私はとても重要な話だろう

と思って母親の表情が変わったと思っていた。

「それで今八神近家の関係で残っているのは本家だけ。だから私達は一度それぞれの本家に戻る事にしてこれ以上、松本麗華の作戦通りには行かせないと思ったの。もう遅すぎているのは分かっているけど」

「……そう。だから帰ってきたのね」

母親はそう言っただけのため息を吐いた。それはまるでよりも寄って今なのかと思っっているかのような感じで、どうしてそんな事を思っているのかと聞きたかった。

そう思っていると、母親は話しを続けてきた。

「本当は明日にはここを移動するつもりだったの。麗華が次に狙ってくるのは絶対にここだと分かっているから」

「ど、どういこと!?!」

その言葉を聞いて私は驚いていた。どうして母親は次に狙ってくる場所がこの家なのかと分かるのか、それが私には分からないでいた。

そして次の母親の言葉に私は衝撃を受ける事になった。

「今日、麗華はここに来るのよ。昨日その連絡があったの。多分目的は夫だと思っただけね。夫が死んでいるのを麗華が知っているのは知らないけど、どの道私達を殺しには来ないのらしいけどね」

その言葉に私はまたしても驚いてしまった。よりもよって今日の

この後に松本麗華が来るとは思いもしなかったのだ。さすがに私は動揺していてどうすれば良いのか分からないでいた。

私その事で悩んでいると、ドアをノックする音が聞こえ、すぐにメイドの一人がこの部屋に入ってきてきた。

「どうしたの？」

「お客様が来ました。門の前で一応待たせておりますが」

「名前は？」

「松本麗華様です。どうやら予定通りに来たようです」

松本麗華という言葉を聞いて、私は何故か一瞬体が動けないでいた。少し前に来たばかりなのに、すぐに松本麗華と遭遇するとは思ってもしなかったのだ。

「分かったわ。中に通しなさい」

母親はそれを聞いてすぐにメイドにそう言い、メイドはそれを聞いて部屋から出て行った。

「それじゃあ、隼人も一緒に行く？一応今は女だから敵意を見せなければ気づかれないと思うけど。まあ気づかれるかも知れないけどね」

「一緒に行くよ。気づかれたとしても何とかかなりそうだし。後、言い忘れたけど女の時は隼人じゃなくて早美の方が良いから。隼人だと変に思われると思うから」

「とりあえず分かったわ。それじゃあ行きましょつか」

私と母親は部屋から出て、少し歩いた所にある客室に向かった。

そこで母親に座るようにならされた所にある椅子に座り、母親もすぐに椅子に座った。

それから数分して、客室のドアが開いて松本麗華が入ってきた。

第二十話 松本麗華と竹宮郁美と舞田識の関係

早美 side

「来たようね」

ドアが開いてすぐに母親はそう言った。私もそちらを見て相手にはれないほどで警戒をしていた。

松本麗華は母親と対面になる椅子に座り、それから少ししてメイドが紅茶を私達に持ってきた。

メイドが立ち去ると、松本麗華はすぐに母親に話しかけてた。

「約束が違うじゃない。誰よこの子？」

どうやら本来は二人で話すようだったようで、松本麗華が私が誰なのかと聞いてきたのだ。

どうやら今のところは私の正体が気づかれていないようで、私はそれを聞いてホッとしていた。

気づかれたら即効で私に攻撃してきたらうし、今の私はナイフを一応隠し持っているが、私の能力が『空間切断』から『次元切断』に変わっている為、どういう風に使えば良いのか未だに理解していない。能力の特訓の時に使ってみたが、どうしても周りを吹っ飛ばしてしまう力も一緒に発動してしまい、ある特定の一人を狙うのはとても出来なくなってしまうのだ。何度もある区間だけに能力を

使おうとしても一度も成功したことがなかったのだ。だから今こ
で使っても、母親を絶対に巻き込んでしまうのでどうしても使えな
いのだ。

空間の時は空気を切断すると言う事だったので一区間の攻撃が出来
たが、次元は空間そのものを切断するのでどうしても空間が元の姿
に戻ろうとする反動で突風が吹き荒れてしまう。そして一度だけ突
風が発生しなかったが、それは杉山に向かって使ったあの最初の時
だけで、それ以降は絶対に突風が起こった。あの時はどうして突風
が起こらなかったのか今は考えているところである。

まあ、とりあえずその話はまた今度にする事にしよう。

「ちよつと突然分家から頼まれちゃってね。麗華が無差別に八神近
家の家を殺していくからという理由でね。一応言うけど、今ここで
この子を殺したら話し合いは中止だから」

「……分かったわ」

松本麗華は数秒考えて、母親の言うことに承諾した。私はやはり母
親が凄いと思った。冷静に対応して焦らずに言い、そして松本麗華
を承諾させたのだ。私には絶対には出来ないような対応で、それに
私は少し驚いた。

「それで、一体何のように来た訳？夫のこと？」

「違うわ。それならあなたに話す必要は無いでしょ。本人に話せば
良いだけの話し出し」

「……それで結局私に何のよう？」

松本麗華の対応を見て、どうやら親父が死んだことをまだ知らないのだと私は思った。多分母親も同じような事を思っていただろうけど。

「あなたのおかしな姉のことよ」

「……識の事ね。どうやら識のことで私に聞いてくるという事は識に会ったという事かな？」

母親から識という言葉聞いて私は少し動揺していた。識ってまさか舞田識の事を言っているのかと思ったのだ。しかも松本麗華は母親の姉と言っていて、まさか母親は舞田識の妹なのかと思ったのだ。あの右近神アーフィクトと契約を結んだあの舞田識と。

「そうよ。妹である郁美なら私より知っているでしょ？よく私達三人で一緒に居ることが多かったけど識と郁美は姉妹だったのだから」

「姉妹というより私は養子だったのだけだね。だから性格も全然違うし識は姉というより友達という感じだったからね」

「それでも一緒に暮らしていたのなら私より分かっているでしょ。だから識について少し教えて欲しいのよ」

「良いわ。それにしても噂に聞いていたほどではなさそうね。久しぶりに会ったけどそれほど壊れたという感じではなさそうだし」

「確かにそうかもね。やっぱりあなたと話しているのは落ち着いていられるという感じかな？」

「それじゃあ私は持つてくるものがあるからそこで待つていてくれるかしら」

そう言つて母親は一度客室から出て行き、客室の中には私と松本麗華の二人だけになった。

母親が出てから少し経つてから、松本麗華は紅茶を一口飲み、そして私の方に向いてきて話しかけてきた。しかもそれは突然の言葉で私が驚くような言葉だった。

「それで、あなたはどうしてここに居るのかしら？どこの当主かは知らないけど、あなたは八神近家の当主でしょ。どうしてここに座つてゐるか？と疑問に思つていたから、すぐにそう結論ついたのよ」

そう、今まで気づかれていないと思つていたのに、私が八神近家の関係者だと気づかれていたのだ。けどどうやら私の正体までは気づかれていないみたいだけど、これはマズイ状況には変わりなかった。

私は諦めて白状する事にした。もちろん自分の名前は伏せて。

「そうですよ。私は八神近家の当主です。けど今ここで私を殺すのですか？そうなると松本麗華さんが欲しがつていた舞田識の情報が入らなくなりますけど？」

「冷静ね。確かに郁美にああ言われなければあなたを即殺していたわ。けどね、別に私は今すぐ識の情報が欲しい訳じゃねえんだよ！だから今すぐお前を殺しても全然きにしねえんだよ！」

刹那、少し離れていた松本麗華が一瞬で私の目の前に移動し、松本

麗華の右足で腹を蹴飛ばされて壁に激突した。

松本家の能力の特徴は筋肉強化であるため、一瞬で移動でき、そして蹴られたりするととてつもなく飛んでいくのだ。

私は壁にぶつかる衝撃で口から血を吐き出していた。

「あら？今の普通なら一瞬で死ぬんで居るんだけどねえ。もしかして私がミスったのか？」

「いや、私が衝撃を抑えるように瞬時に対応しただけだよ。これでも何人もの人間を殺した身でもあるから逆に追い詰められる時もあったからね」

まあ、その記憶は駿河大輔がやった事で何故か体が瞬時に動いたという事なただけだね。

私は壁から離れて、ナイフを構えた。

「それじゃあ、今度はこちらから行くわよ！！」

私は松本麗華の能力に気をつけながら松本麗華と戦う事にした。

第二十一話 早美VS松本麗華(前書き)

なんかサブタイがすごく普通な気が^^;

第二十一話 早美VS松本麗華

早美side

「そんなナイフで立ち向かおうと思っているのか!！」

ナイフを構えた瞬間に松本麗華はすぐに私の目の前に現れた。

けどそんな事は私も読めていて、すぐにしゃがみこんで松本麗華の蹴りを回避し、そのまま松本麗華の足をナイフで切りつけようとした。

しかし向こうもすぐに反応して瞬時に私から遠ざかった。

けど私の攻撃は終わっていない、なぜならナイフを切りつけようとした時に『次元切断』を使用していたのだ。母親が客室から離れているので自由に使えたのだ。

元々避けられるのは承知のうえだったし、だったら大体逃げそうな場所に『次元切断』を打ち込めば良いと思ったのだ。

例え外したとしてもそこから吹き荒れた突風にはすぐには対応できない筈だし、すぐに対応しようとしても『次元切断』はあの龍哉おじさんが右近神フィリアムから力を与えてもらった『空間爆発』と同等な突風を吹き荒らしたらしいので(そのとき私は駿河大輔と入れ替わっていた為、瑞希から聞いた)、対応しきれない内に壁に衝突する筈なのだ。

そして私が予想した通り、松本麗華は『次元切断』で空間を切りつけた少し左に避けていた。

「しまっ、」

すぐに右側に異変を感じて右を見たのだが、気づいたのが遅くて松本麗華は『次元切断』の突風にもろに受けて吹っ飛ばされて壁に激突した。

しかも私が松本麗華の蹴りで壁に衝突した時とは違い、壁を壊すほどに吹っ飛ばされていた。後で母親に怒られると思うけどそんな事は今は気にしていられなかった。

そして私は松本麗華の姿が見える位置に移動してみると、壁を壊した隣の部屋で立っていた。どうやら筋肉を強化して威力を軽減したようだが、頭からは少し血が流れていた。

「よくもやってくれたわね。けど、もうその攻撃は読めたわ。読めればこっちのものだ!!」

またしても松本麗華は瞬時に移動し、私はすぐにナイフを使って前に向かって『次元切断』を使った。けどそこには松本麗華は現れず、私の頭上に現れていた。

「な、」

さすがに予想外にもほどがあり、私の背中に現れたのならすぐに対応できたのだが、頭上だというのは予想外でナイフを切りつける対応が遅れてしまった。

このままだと顔面に蹴りを入れられて完全に死ぬ。私はそう思い、どうすれば良いのか瞬時に考えていた。

そしてすぐにたった一つだけ方法があることに気づいた。けどそれは竹宮家の私がどうして使えるのかという能力だった。

そう、今私が使おうとしている能力は本来、竹宮家が見える能力ではない能力なのだ。何故か早美が昔から持っていてどうしてこの能力を持っているのか自分でも分からないのだ。一応竹宮家として余り使う事はしていないのだが、今は死ぬか生きるかという感じなのでやむおえず使う事にしたのだ。

そして、松本麗華が顔面に蹴りを入れようと思ったとき、私はすぐに右腕で蹴りを止めようとした。松本麗華の能力ならすぐに右腕なんて骨が砕け散る筈だった。

けどそれは、私がこの能力を持っていなければの話だが。

「な、止めただと!？」

私は右腕で松本麗華の能力で筋肉が上がっている蹴りをたつた右腕で止めたのだ。そんなことができるのは松本麗華と同じ筋肉強化をさせる人物だけだった。

予想外に蹴りを止められた事により、松本麗華は一旦私から離れた。すぐに私はナイフを使って『次元切断』で攻撃しようとしたが、松本麗華の蹴りを止めたおかげで右手に持っていたナイフを手から離していたのだ。

そして松本麗華は私を睨みながら話しかけてきた。どうして睨んで

いるのかは私には何となく分かっていた。

「どうしてお前が、松本家以外のお前がその能力を使えるんだ!!」

そう、筋肉強化系の能力を八神近家の参加も含めて松本家以外に使える一族は誰も居ないのだ。私はどう見ても竹宮家の人間だし自分でもどうして使えるのかは分からない。ってか、私が知りたいくらいだった。

なので松本麗華の言葉にたいしてこう答えられる事が出来なかった。

「……分からない。私は生まれながらこの能力を持っていたけど、どうして使えるのかは分からないの」

「そんなわけがない!それはお前の能力だろ。どうして使えるのかくらい分かる筈だ!!」

「本当に分からないのよ。それは私が聞きたいくらいなのだから」

「……まあ良いわ。今のおかげで私と同じく筋肉強化系の能力を使えることが分かったからな!!」

松本麗華はすぐに私の目の前に移動し、私の腹を殴ろうとした。ナイフは手から離れているし今から腕で防御しても間に合わない事にすぐに気づいた。

完全に隙を作っていた事に私は後悔した。この隙が生死を分けるとまでは思っていなかった。

やられた。と完全に私は思っていた。

しかし、数秒をしても松本麗華の攻撃が来なかった。そもそも松本麗華が見ているのは私ではなかった。

松本麗華が見ていたのはさっき私が落としたナイフだった。

第二十二話 最後の生きがい

早美 side

静寂。まるで時間が止まったのかのようになわたしは思えた。

松本麗華が私を殴ろうとした右手は私の腹の寸前で止まっており、私も攻撃を喰らうという覚悟をしていたのだがそれも来ずに動けなくなっていて、まるで時間が止まっているかのようであった。

そして、松本麗華が見ているのは私ではなく私が落としたナイフだという事。何の変哲もなく、ただ竹宮家の紋章が刻まれているだけのごく普通のナイフ。

私はどうして松本麗華がそのナイフを見て攻撃を中断し、そのナイフを見てずっと驚いたような表情をしているのか、私には一体何が起こっているのかまったく分からないでいた。どうして攻撃を中断したのか。またどうしてただのナイフを見て驚いた顔をしているのか。そしてそれは攻撃を中断するような事だということのかと、私には分からない事が多すぎていて状況がつかめないでいたのだ。

「やはり、鎌をかけてみたけどこうなってしまうのね」

ふと声が聞こえ、私は顔を動かす事にして振り向くと、そこには母親が居て。予想通りに起こってしまったという感じをしていた。

そして母親の声を聞いて、松本麗華も私から遠ざかる。そして母親を睨みつけた。

「どういうことよ郁美、どうして彼女が竹宮家の象徴とも言えるそのナイフを持っているのよ!!今、そのナイフを持っているのは風哉、龍哉、良鬼、隼人の四人だけのはずよ」

松本麗華は未だに驚きそうな顔をしながらも言うが、それはさらに驚くような事になるとは思っていなかっただろう。

「確かにそうだったね。けど今はたった二人だけよ。私の息子、竹宮良鬼と竹宮隼人だけね」

「そうでしょ。なら何で……今、なんて言ったの?」

一瞬母親の言葉に肯定しようかとした松本麗華だったが、突然言葉を詰まらせて冷静にもう一度聞こうとしていた。

「だから、良鬼と隼人の二人だけしかそのナイフは持っていないの。どうやら麗華は知らなかったようだけど、竹宮龍哉と私と麗華が愛した竹宮風哉は死んでいるの」

「……嘘だ」

「嘘言つて何の意味があるの。風哉は龍哉に殺され、その龍哉は八神近家の裏から護っていると行っても良い、八神十戒の雨宮優子によつてね。私だって麗華が来るまでは隼人に寄りすがって泣いていたもの」

「風哉が簡単に死ぬわけがない!!しかも弟の龍哉に!!殺されるわけがないんだ」

「!!!」

そして、松本麗華は絶叫をし、涙を流していた。

第二十三話 救われない二人（前書き）

なんか小説の投稿も不定期だな……
まあ、最近結構忙しいもので^^^；

第二十三話 救われない二人

早美 side

そんな絶叫し、涙を流していた松本麗華に母親は近づいていく。そして泣き崩れている松本麗華の前で止まり母親は彼女を見ていた。

松本麗華も目の前で母親の足が止まったのを見ると、母親を見上げて、睨みながらこう言う。

「何よ……まだ私から奪おうとするの？これ以上、私が失うものなんてないわよ。風哉をあなたに奪われ、私と風哉との子どもは生まれたときに死んで、そして最後の生きがいでもあった風哉も死んだ。もう私が生きる意味なんて無いわよ。」

「……」

母親は涙を流しながら訴えている松本麗華を、見ながら黙っていた。いや、黙るしかなかったような感じだった。

「こんな事ならここに来るんじゃないかった。私は今まで何をしてきたのよ。全ては風哉を手に入れるためにこんな事をしてきた。八神近家を崩壊させ、誰も私の邪魔をされないようにしようとしていたのに、風哉が死んでしまったら何の意味もないじゃない!!」

「……そうね。結局、私達は救われない。そう、私もよ。どれだけ麗華を恨んだのか。お互いに風哉を好きになり、そして崩壊した。風哉を愛しすぎたせいで、何もかも失った。そう、何もかもよ」

「嘘だ。あなたは風哉と結婚できたじゃない。あなたは何も失っていないじゃない」

「それは違うわ。風哉は私と結婚しても麗華を見ていた。そう、私ではなくてね八神近家の掟があつたから、仕方なしに私と結婚したのよ。それを知った私はショックだったわ。そして麗華に負けたと思つた。もう私はそこで終わったのよ。そして麗華を恨んだ。恨み、恨み、恨みまくつたわよ！風哉が選んだのはあなただったのよ！家柄戦争の時、アレは風哉があなたを殺したとなつているけど私は知っている！！あれはあなたの自殺だつて！！風哉にあなたを殺せるはずがないもの。好きだったあなたを、彼が殺せるわけがないじゃない！！本当に麗華が羨ましかつた！！そして今でもよ！！あなたを殺したいほどに、あなたが羨ましいのよ！！」

母親は途中から怒鳴りながら松本麗華に言っていた。あれほど冷静な行動をする母親がここまで乱れたことなんてなく、私はそれを見て驚いていた。何もかも本音を暴露している母親を見て。松本麗華もこんな母親を見たことがなかつたのか少し驚いていた。

しかし、先ほどまで取り乱していた母親だったが、先ほどの松本麗華を恨んでいる顔から、優しそうな顔に変化した。

「けどね。一つだけ、嬉しい事があつた。それは風哉の子どもを産めた事。麗華も同じだったけど、それだけは嬉しかった。そして今も生きていると言う事よ。麗華の子どももね」

「ど、どういう事？私と風哉の子どもが生きている？私の子どもは鈴奈しかいないはずよ。私と風哉の子どもは生まれたときに死んだのだから、生きている事なんてないはずよ！！」

「いえ、生きていますわ。なら麗華はそのとき、子どもの死体を見たの？そもそも、風哉と麗華の子どもなんて、竹宮家と松本家が許す訳がないじゃない。ならばどうすると思う？さすがに殺すことは殺人になるからそんな事は出来ない。だから世間では風哉と私の子どもにしたのよ。竹宮家と松本家はそれで了承し、麗華の有無を問わずに、私が双子を産んだことにされたのよ」

私はその言葉を聞いて驚いていた。今の母親の言葉には衝撃の事実だったのだ。竹宮家で双子といえれば俺と良鬼しか居ない。しかも、まったく性格や容姿が似ていない双子の兄弟として言われていた俺たちだが、母親が言った言葉が本当ならば辻褄が合っていた。昔母親が私を軽蔑し、良鬼だけを褒めていた理由がそれだったのだと言うことを。私はそれ以上聞かなくても分かってしまった。どちらが母親の子どもで、どちらが松本麗華の子どもなのかが。

「……生きていたの？私と風哉の子どもは生きていたの？」

「これが証拠よ。これには私と麗華、良鬼と隼人のDNAが入っているわ。まあ、当の本人は気づいていたようだけど」

母親は先ほどから持っていた茶色の封筒を松本麗華に渡しながら、一度こちらを見ていた。どうやら私がどちらが母親の子どもで、どちらが松本麗華の子どもなのかが分かっている事に気づいたのだ。

そして、松本麗華がその封筒を受け取り、中身を取り出した。そこには二枚の紙が折りたたまれており、松本麗華はその二枚の紙を見つめて、そして驚いたのか、二枚の紙を手から離していた。

「……生きてる。私と風哉の子どもが、生きていますなんて！」

「そうよ。そして今もね。昔は恨んでいた時もあったり八つ当たりを
していたけど、今ではそんな事は思っていないわ。二年前に良鬼が
居なくなつて、今まで私がやってきた事に後悔していた。なんでこ
んな事をしていたのだろうかって。親友だった私達はいつの間にか
お互いに一人の男に巡って睨み合い、お互いに傷つけた。本当に
何をやっていたのだろうかって思ったわ」

「……私もよ郁美。今なら分かるわ。私達は気づくのが遅すぎた。
何もかも」

「麗華!!」

母親は地面に座っている麗華に向かって抱きつき、そして泣き出し
た。麗華も両手を母親の後ろを支えるようにして、またしても泣き
出した。

私はその光景を見ているしかなかった。今までの言葉を聞いて、私
が言えるような立場ではないし、何より二人の邪魔をしたくはなか
ったのだ。

そして、その光景は数分間続いた。

第二十四話 けじめ

早美 side

「本当に行くのね」

「ええ、これが私の最後の仕事だから。私が撒いた種は自分で終わらせるべきだから」

母親と松本麗華が抱き合うのをやめてから数分後、松本麗華は身支度をして帰る準備をしていた。

そう、先ほど松本麗華は自分が起こした事件を自分で終わらせると言い、そのために娘である鈴奈と敵対すると言ったのだ。私は鈴奈がこの竹宮家本家に居候する前にどんな事をされていたか知っている。松本麗華が姿を消した後、鈴奈はそれから実の父親にレイプされ、暴力を受けていて酷い仕打ちを受けていた事を。今更松本麗華が鈴奈に謝っても絶対に許す訳がないだろうし、会ったとしてもすぐに松本麗華を殺しにかかるだろう。鈴奈には松本麗華に対してそれほど憎み、恨んでいるのだ。実の娘を捨てて十五年も酷い目にあっていたのだから。だからこそ松本麗華は娘の願いをかなえてあげようと最後の罪滅ぼしをする事にし、自分をやられ役になろうとしたのだ。たとえ自分が殺される事になろうとも。

「そう。それで麗華に従っている人達はどうするの？本当のことを言ってもあなたが殺されるだけよ」

「それは大丈夫。元々こう命令するつもりだから。』後は自分でや

るから』とね。本家の人間と戦つてもどうせ返り討ちにあつただけだろうと思つていたからね」

「なら良いけど」

「それじゃあ、私は行くわ。つと最後に一つ言い忘れていたわ」

そう言つて松本麗華は私の方に顔を向け、こちらを見てきた。一体私に何のようなのだろうかと思ひながら、私は松本麗華の言葉を待つ事にした。けど次に松本麗華が発した言葉は予想外の言葉だった。

「そちらの方も頼むよ。他の八神近家には誰も邪魔させないようにしてもらわないと困るからね。竹宮隼人」

「っ!？」

「き、気づいていたの!？」

私はその言葉を聞いて驚いて言葉が出せないでいたが、母親が変わりに私が言いたい事を驚きながらも聞いてくれた。その反応に松本麗華は微笑みながら答えた。

「ええ、私もさつき分かつただけだね。郁美が一旦この部屋を出たときに、私は隼人と戦つてそのとき隼人が八神近家長と自分から言つたのよ。今誰が八神近家長なのかなんて分かつていなかったけど、竹宮家に来る人間なんて八神近家の当主でも限られてくるし、今私が起こしている事件を考えれば、八神近家の当主は多分一度本家に戻つてそこで私を打ち構えようとしたのだろうと私でも分かるわ。だからすぐに彼女が竹宮隼人だと分かつたのよ。性別が女性になつていたとしても、私も八神近家長をやつていた身であるから、

多分右近神フェスターの力のせいで性別が変わったのだらうと隼人と戦っている間に推測したのよ」

「たったあの言葉だけでそんな事まで推測するなんて……」

あんな短時間でそこまで推測するなんて凄いなと思った。さすが判断力が早く、行動も早いと親父から聞かされた事はあった。それは今でも健在で、多分あのまま戦っていたら私は負けていたかも知れなかった。

「まあそうね。とりあえず頼むわ。これで全てを終わらせるために」

「……分かりました。こちらは何とかしておきます。それで鈴奈と戦うのはどこで？」

「松本家本家でやるわ。もう、あの家ならお互いに存分に戦えるから。もうあの家を残しておく意味も無いし、鈴奈もあの家が残っていると私の事を忘れないだらうし。それじゃあ、今度こそ行くね」

松本麗華は私にそう伝えて、今度こそこの部屋から出ようとした。その後姿はここに来た時とは違い、自分の重荷が消えて何もかも吹っ切れたような感じだった。

けどまたしても松本麗華は一旦足を止め、顔をこちらに向けずこう言った。

「……元気に生きなさい。私の息子」

その言葉を言った後、松本麗華は部屋を出て行った。

松本麗華が部屋を出て行くと、私は母親の方を向いた。もう分かっているけど、あの事について母親からもう一度聞くためである。

「お母さん……と言って良いのかな？」

「別に良いわよ今更。何年もそう呼んでいたのだから。それで何？」

「私は確認をしたいことがあります。多分、私が何を言いたいのかなんて分かりますと思いますけど」

「ええ、何を聞きたいのか分かっているわ。あなたの母親についてでしょ。早美の考えていることで合っているわ」

「って言う事はやっぱり……」

「そうよ。あなたは風哉と麗華の子どもよ。麗華も最後にあなたを『私の息子』って言ってたでしょ。私は二年前まで早美を冷たくしていたのはそれでよ」

やっぱりそうなんだ、と私は思った。二年前まで母親が私に対して冷たく、良鬼に対しては優しくかった理由がそこにあつた事を本人から聞いたかったのだ。双子なのに俺と良鬼は全然似ていないのも前から思い、何かあるとは思っていたが、こういう事だとはそのときは思っていなかったのだ。

「……やっぱりそうなのか。それだけ聞ければ良いよ」

「ごめんね。今まであんな事をして」

「もうそれは過去の事だよ。もう何も思っていないから。私の母親は今でもあなたですから」

「……ありがとう」

母親はそう言うと、目から涙が流れていた。多分、私にあんなに酷い事をしたのに、それでも私が母親だといった事が嬉しかったのだろうと私は思った。

「それじゃあ、私もそろそろ行くね。一度鈴奈以外の皆を戻さないといけないから」

「……そうね。それじゃあ見送ってあげるわ」

私はそう母親に告げて、一度荷物を置いたところに二人で戻って玄関まで二人で歩いて行った。

玄関に着くと、リムジンが一台止まっており、荷物をリムジンの中に入れて一度振り返った。

「それじゃあ、私は行くね。また会いに来るから」

「分かった。また会えるまで待っているから」

私はそう言ってリムジンの中に入り込み、リムジンは動き出し、リムジンのまどから母親に手を振った。

そして私がリムジンで見えなくなった後、母親はこう言った。

「また会いに来るね。多分、その願いは叶えられそうにないわ。私もやらない事があるのよ。例えば私が私が殺される事でも。海野、予定通りリムジンをもう一台用意して。舞田識の家に向かうわよ」

母親は近くに居た執事に頼み、リムジンを用意すると言って舞田識の家に向かう事になっていたのだった。

第二十五話 行間（前書き）

5 / 18

完全にミス。竹宮郁美の右近神を右近神エムリスと言いましたが、第四部第十一話でまだ動いていない最後の一人である右近神を右近神ジュペインという名前が出ていたことに気づいたので右近神エムリスから右近神ジュペインに訂正しました。

?<

ふとそこで、舞田識に声をかけてくる者がいた。しかしそこには舞田識しか居ないはずなのに、もう一人の声が聞こえるのだ。別に隠れて舞田識に話しているわけではなく、元々姿なんて存在しない者が話しているのだ。そう、そんな事が出来る者はたった四人だけで、舞田識と知り合いなのは一人しか居ない。

「右近神アーフィクト、突然現れるのは止めてくれるかしら。さすがに私でも驚くからね」

>そうか。なら今度からは気をつける。それでどうなんだ？お前が人間だった時はこの世界は退屈だったのか？<

「ええ、本当に退屈だったわ。昔は妹の郁美と麗華との三人で仲良かったけど、あのときから私は退屈でしょうがなかった。平和すぎて何も起こらないで日々暮らしていくこの世界が。だからあなたと会ったときすぐに人間を捨てたかったのよ。だから今でも感謝しているわ。あなたに会えた事を」

>それは俺もだ。俺が探していたのはお前みたいな性格だからな。この世界に対して何も思わず、退屈と思っていた人間にこの世界の面白さを教えたかったからな。お前みたいに何を考えているのか分からない奴をなく

「それはどうも」

舞田識はそう言って紅茶を一口飲み、またしてもテーブルの上に置くと、執事の一人がノックをして『失礼します』と言ってドアを開けて入ってきた。

「何の用かしら？」

「識様にお電話です」

「電話？一体誰から？」

私に電話してくる人なんて居るのかしら？と思いつながら舞田識は執事に聞いた。舞田識は数年も誰とも連絡を取っていなかったし、密かに暮らしていた。だから自分に電話が掛かってくるなんてほとんどないに等しかったのだ。

そして執事は舞田識の質問に答えるかのように言った。

「竹宮郁美様です」

「郁美からの電話？用件は聞いたかしら？」

「一応聞こうとはしましたが、本人と直接電話をしたいと仰せになられましたので」

「……分かったわ。回線をこちらにつないで頂戴」

舞田識は執事にそう頼み、執事は部屋の外に出て行った。

そして舞田識は電話がある所に向かい、受話器を取った。

「久しぶりね郁美。一体何のようなのかしら？」

「大体分かっているんじゃないのかしら姉さん。今何が起こってい

る事は姉さんも分かっているはずよ」

「ええ、そうね。でもそれは私に関係ないじゃない。どうせそちらで解決できるのでしょうか？」

「たしかにそうね。けど、私はその事を聞きたいんじゃないの？」

「じゃあ一体何なのかしら？」

舞田識はなら何のようなのかと郁美に聞こうとした。そして郁美はすぐに答えた。

「姉さんの目的は何？突然居なくなっていたのまにか右近神アーフィクトと契約を結ぶなんて何を考えているのかしら？」

「……それは郁美も同じでしょ。郁美も右近神ジユペインと契約を結んでいる癖して何私だけの事を聞こうとしているのかしら？」

「やっぱり、私が右近神ジユペインと契約を結んでいた事を知っていたのね」

「ええ、右近神アーフィクトは時空を操れるのだから過去や未来を知る事なんてたやすいのよ」

「……知っているならしょうがないわね。やりたくはなかったけど、これしかないのだからしょうがないわ」

「一体何かしら？」

舞田識は次に郁美が何を言うのか分かっているながらも、そう聞いた。

「姉さん、いや舞田識。あなたを右近神ジュペインと契約した人間としてあなたを殺しに行きます」

「ほう、是非楽しみに待っているとしますか」

「今度会うときはお互い敵同士だから。それじゃあ」

そう言つて郁美は電話を切り、電話が切れると舞田識も受話器を置いた。そして先ほどまで座っていたソファーまで戻つて座つてまたしても一口紅茶を飲んだ。

「本当に退屈はないわね」

舞田識はそう言つて、またしても紅茶を飲んでいくのだった。

第二十六話 私の役割 1 (前書き)

本当はもっと先まで行くことと思ったのだけど、ここで一旦区切ることにしました。

第二十六話 私の役割 1

早美 side

竹宮家本家から離れた後、空港に向かっている間に夜になったが、私は飛行機で能力都市に戻り、翌日の朝に能力都市に着いた。そこで連絡してあった優子と美羽とあってSCS本部に移動し、SCS本部に着くと、そこにある私の仕事の部屋に移動した。

そしてすぐに椅子に座ると、携帯を取り出して優子と美羽以外の八神近家の当主全員に連絡した。

内容は「松本麗華の居場所が分かったから、今すぐ能力都市に戻って明日の正午にそのことで会議を始めるわ」という事を言い、鈴奈以外は全員呼び寄せたのだ。もちろん文弥とかは「今すぐ教える」と返ってきたが、私がなんとか言い包めて能力都市に来させるようにした。

けど鈴奈には別の内容を言っておく事にした。今回、私達は脇役なのだから。私の問題でもあったりするが、この問題は松本麗華と松本鈴奈の親子の問題なのだ。だから今回の件で誰かが邪魔をするのなら、私はそいつを殺すくらいの覚悟で立ち向かってもいい。

私が鈴奈に電話で言った内容は、「松本麗華が松本家本家に移動しているから、松本家本家にいる鈴奈はそこで待機しておいて。今回、私達は動かないから鈴奈一人で戦ってね。それは鈴奈が望んでいる事でもあるのだからそれで良いでしょ？多分明日の正午にはそちらに着いていると思うから、終わったら報告してね。報告待っている

から』と言い、鈴奈もすぐに了承してそこで待機させたのだ。

その後、優子と美羽にも同じような事を言い、翌日の正午にSCSの会議室に来るように伝えておき、信之おじさんにもその事を伝えておく事にした。

それから私も一度家に戻って、荷物を置いたりするなど夜になり、その間に優子と美羽が遊ぼうとか言っていたが結局その時間はつぶれて終わってしまった。まあ、帰ったら忙しかったから仕方がなかったんだけどね。ちなみに、私達が居なかった時に能力都市では特に大きな事件は起きてなかったらしく、優子と美羽が出るほどではなかったらしく、ずっと暇をしていたらしい。

そして翌日の正午、私達はSCS本部の会議室に集まり、画面には信之おじさんの姿が映っていた。

「よし、全員揃っているね」

私は鈴奈以外の全員が居る事を確認してそう言ったが、瑞希が私の言葉に疑問を思っただけで話しかけてきた。質問内容は私の予想通りの内容だった。

「ねえ、早美がまだ居ないけど？」

そう、みんなにはまだ鈴奈が来ないと言う事は言っていない。全員が集まったら言おうとしていたので、まだ誰にも言っていないかったのだ。

「鈴奈なら来ないわよ。後で分かると思うけど、鈴奈には別の事を頼んでいるからね」

「でも鈴奈なら松本麗華の居場所が分かったと知ったら、すぐにこっちに来ると思うんだけど？」

「そのことも鈴奈には言っているよ。最も、鈴奈に頼んだ事はこちらに来る事より大切な事だからね」

「それより、早く話してくれないか？俺はそのために戻ってきたのだからな。それで無いといったら俺はお前に対して攻撃するぞ」

私と瑞希の話に文弥が割り込んで来て、瑞希との話を一旦区切る事にして本題に入る事にした。

「さて、昨日電話で言ったとおり、松本麗華の居場所が分かったわいや、向かっている場所が分かったと言った方が良いのかもね」

「それでどこなんだ？あれだけ頑張っても居場所は分からなかったのにどうやって分かったんだ？」

「それは後で話すわ。まずは最初に居場所だけを言うから。」

私はそこで深呼吸して一旦区切り、そしてみんなに松本麗華の向かっている場所を言った。

「松本麗華が向かっている場所は松本家本家。今、松本鈴奈が待機させているわ。そして、この事件を終わらせるには最も相応しい場所よ」

第二十七話 私の役割 2 (前書き)

前回の続きなんですけど前回より倍の長さになってしまった……

第二十七話 私の役割 2

早美 side

私の言葉にみんなは誰もが声を出せなくなり、一瞬の静寂が訪れた。みんなが声を出せなくなるのは当然であった。松本家本家はもはや存在すらしないのに、どうしてそんな所に向かったのかと思ったのだろう。何も無い所に向かう松本麗華の行動が普通なら分からない筈なのだ。

けどそれは違うわ。これは私と鈴奈と信之おじさんは分かっていた事なのだが、松本家本家の跡地の地下にはたくさんの八神近家の情報から右近神の情報がたくさん眠っており、今現在もその中に眠っていたりする。けどその地下に入る入り口は誰もが知らず、その本家である松本家当主の松本鈴奈、そして八神近家長である私ですらその場所を知らないでいる。知っているのは右近神フェスターと、八神近家の裏で動いているような役割を持っている者で、最近その正体が分かった雨宮優子だけだった。しかし優子を見る限り、そこに何があるのかという事は知らないような顔をしているので、地下への入り口の解き方は知っているが、場所までは知らないのだろうと私は思った。

それに多分、私と鈴奈と信之おじさん以外のみんなは実家に戻るように信之おじさんに命令された時、何故松本家本家の建物がない筈なのに松本鈴奈を松本家本家の跡地に向かわせたということに疑問に思ったはずだが、あの時は信之おじさんのかなりの真面目な顔だったのですぐに関係なさそうな話は無視していたのだと思う。だから私が松本家本家に松本麗華が向かっているとと言う言葉にはさす

がにみんな気づいたのだろう。またしても松本家本家が関連しているのだから、そこには何かがあるのだろうと思っているのだろうと私は思った。けどそれはみんなには教える訳にも行かないと三人で決めていて、理由は八神近家長にも場所が知らないと言う事は、それほどの情報がそこには眠っているのだと大体分かってしまう為、無闇に出さないようにしておく事にしておく事にしたのだ。

「それでどうしてそこだと分かったの？鈴奈を松本家本家に向かわせた時もあったけど、あの場所には一体何があるというの？」

そして案の定、翼がその質問をしてきた。この質問は誰かがしてくるとは思っていたのだが、予想通りしてきたので私は会議が始まる前に考えていた嘘の答えを言う事にした。

「あの場所には松本家に伝わるあるものがあるのよ。私は鈴奈が居候していた時に鈴奈に聞いたのだけど、松本家本家には一時的に力を上げる物があるらしいのよ。私達を倒すにはそれが必要になるかも知れないから、一度は松本家本家跡地に向かうんじゃないかなって思ったから鈴奈にもそこに向かわせたのだと思うよ。そうですよ信之おじさん」

「あ、ああ……そうだ。まあ予想通りに引つ掛かったからな」

「まあそれは良いとして、どうして早美は松本麗華がそこに向かっているって分かったんだ？」

信之おじさんは私の対応に少し驚いたのか、少し反応が遅れて答え、そしてすぐに文弥が私に対してそう聞いてきた。多分そのとき翼は信之おじさんに対して違和感を感じたと思うけど、文弥が先に私に話しかけてきたおかげで話す場面をなくしてしまい、そのまま諦め

たのだらう。けどこれは私の計画通りで、翼がこういう時って良く鋭いのだとはこの三ヶ月でよく分かったので、私はそれも分かった上でこう言い、そしてこの後に文弥が私に対して質問してくるだろうと思ひ、そして翼は信之さんに聞こうと思つていた事を話す場面がなくなつてしまふ事まで考えたのだ。これから信之おじさんに聞くと言ふ手段もあるが、今はそんな事を話している場合でもないのだ。そして私は今まで勝てなかつた翼にやつと勝つたと思つた。

とりあえず私は内心では翼に勝つたと喜びながら、文弥の質問に答える事にした。つてか私は何をしていたのだから……

「それは竹宮家本家に松本麗華が私の母親に会いに来たからよ。理由は右近神アーフィクトの力を手にした舞田識の事を聞きにね」

その言葉にみんなは一斉にこちらを向いた。このことは私が鈴奈に聞いただけだったので舞田識が右近神アーフィクトの力を持っていることはあの場に居た鈴奈と良鬼から聞いた私しか知らないのだ。だから他のみんなはその事を聞いて驚くのも当然だった。しかも三ヶ月前に右近神フィリアムの件があつたのに、今度は別の右近神が現れるとはさすがに動揺しないほうがおかしかったのだ。だから私は今はそのことを後回しにさせようとした。

「けど今はそのことは後回しでも大丈夫よ。舞田識は昔から何を考えているか分からないけど、右近神アーフィクトは並行と時空の力が最も強いからこの後何が起こるのか知っているのよ。それに今動いたとしても逆に右近神アーフィクトの力を公開するようなものでしょうからね」

「確かにそうだな。ならそのことは大丈夫なのだな？」

「双太のその通りよ。それでこの後の事なんだけど……」

「もちろんその場所に向かうんだろ。だったら今すぐに「全員、この能力都市で待機していつも通りいつもの仕事場所に帰って頂戴」は？何を言っているんだ？」

文弥は私の言葉に驚いたようだ。それは文弥以外のみんなでもあったが、信之おじさんや翼は私がどういう事なのかが分かったような顔をしていた。

そう、私の役割はこれなのだ。あの二人の戦いを誰にも邪魔はさせず、その為には全員をこの能力都市に集めて、そして能力都市から外に逃げ出さない。それが私の役割なのだ。私はこの事件はあの二人で解決させるものだと思うっていて、それ以外は私も含め全員脇役なのだ。私も少しは関わりはあるが、そんな事はもう終わっている。私の本当の母親だけ分かったただけ私も私は良いのだ。

けど文弥は私の命令に対して少し怒りを感じているようだった。まあ今までの行動から見て当然なんだけどね。

「どういうことだ。能力都市で待機とは！！何で松本家本家に向かわない！！」

「それは鈴奈一人で大丈夫だからよ。それに今から行ってももう終わっているけどね」

「お前はそれが目的だったのか？俺をわざわざここまで連れてきたのは……」

「……ええそうよ。この事件はあの親子意外は全員脇役なの。今ま

で母親に愛されなかつた松本鈴奈と今更娘の事を謝りたいと思つて
いる松本麗華の二人の事件なのよ。そしてそのことは誰にも邪魔を
させる事は私が許さないわ」

「じゃあ分家とその傘下が全員殺された俺達はそのままそれが終わ
るまで待つていると？ふざけるな！その為に何人の人間が殺され
たと思つてゐるんだ！そんな事だつたら俺はまた勝手に行動させ
てもらつぞ」

文弥は立ち上がり、会議室から出ようとした。その様子を見ながら
私はある言葉を文弥に言い付けた。それは文弥でもどうする事も出
来ないような言葉だつた。

「……フェスターの十戒だいじやくじょう第陸条、『八神近家の一族は全員家柄戦争
以外ではお互いに協力し合わなければならず』。これに違反しても
良いなら別にその扉を開けても良いけど？」

「っ！？」

そう、私が文弥に言い付けたのはフェスターの十戒の第陸条である。
前は黙つていたが今回は私も容赦はしないつもりでいた。

「そ、それがどうした。どこに違反があるというんだ」

「確かにそうね。けどこれは先ほど言ったとおり、松本鈴奈と松本
麗華の問題なの。松本鈴奈だけの問題ならそれを八神近家で協力す
るのが私達の役目ではないのかしら？だから文弥が松本家本家に向
かうというのならそれはフェスターの十戒に違反しているという事
になるわよ」

「なんでそこでお前が決めるんだよ。それを決めるのは八神十戒の
兩宮優子だろ！お前が決める事じゃあ「早美の言った第陸条を承
認するわ」っ!?!」

なんか自分で首を絞めちゃったよ。優子はこの場に居るのにね。し
かも優子が鈴奈と松本麗華の戦いを邪魔する訳がないのにね。

そして文弥はこれで何も言い返せなくなり、それでも松本家本家に
向かうというのなら、菅野文弥はフェスターの十戒に違反し、処罰
を受けるのだ。これくらいでは殺されるという事は無いが、菅野家
当主は剥奪されるだろう。そうしたら八神宝具の力を失う事になる
し、自由に動けなくなってしまふ。それだけは文弥も回避しないと
いけなかったのだ。

なので文弥はこの怒りをどこにぶつけければ良いのか分からず、結局
自分が座っていた椅子を蹴った。

私はその様子を見ながらこう言った。

「じゃあ先ほども言ったとおり、それぞれいつも通りの仕事に戻っ
てね。それじゃあ解散」

私がそう言うと、みんなは会議室から出て、文弥も仕方なく会議室
から出て行った。そして信之おじさんに繋がっていた画面も切れて
会議室には私一人となった。

「さて、こっちは終わったから後は鈴奈の問題だけよ」

私はそう呟きながら、戦いの結果を待つだけだった。

第二十八話 鈴奈の過去と仕打ちと虐待（前書き）

この前から、Got Force 神と少年の非日常の修正版を書き直しました。

用語や設定などが少し変わっておりますが、それ以外の事は一応こちらと同じです。

後、こちらと違って三人称視点で書いております。この小説は今までのを見てみると一人称視点より良いと自分で判断した為です。

一応こちら最後まで書いていきます。第一編で終わらせるとか言いましたが、やはり第二編も続けてやった方が良さそうだったのでタイトルは『Got Force 神と少年の非日常』では無く、『People Cosmos 非日常と抗う未来』となっておりますが、その第一幕が『Got Force 神と少年の非日常』の修正版となっておりますので、それも一応言っておきます。

また、ひよっとしたらこちらも用語修正をされるかもしれませんが。まあ訂正するとしても『能力都市』を修正版で使っている『デイメンシヨンスカルティア』、略語で『デイメスティア』に訂正すること本部の名前である『スカルティア』を追加するだけなんですけどね。一応まだ『能力都市』という名前のままですが、もしかしたら変更するかも知れないと言う事で。今更なんですけどねww
とりま、Got Force 神と少年の非日常の修正版は下のアドレスです。

<http://ncode.syosetu.com/n2613t/>

後、第二十五話で竹宮郁美に契約をしたのが右近神エムリスだと言いましたが、その前に第四部第十一話で最後の右近神を右近神ジユペインとなっていたので訂正しました。本当にすみませんでした！！

それでは第二十八話 鈴奈の過去と仕打ちと虐待をどうぞ!!

第二十八話 鈴奈の過去と仕打ちと虐待

鈴奈 side

私は松本家本家跡地の上に立っていた。ここにはもう何も建っていないわけではなく、本家の家はもう十年以上に壊されているために、辺りはまるで雑草がかなり伸び、周りは普通の一軒家やマンションなどが立ち並んでいるので、かなり場違いである広い草原になっているだけであった。

私はその中央くらいに立っている。そこは前に本家の建物があった所であり、今ではもう何も残っていない。いや、この場所自体に残っているものなんてたった一つだけ。どこにあるかは分からないが八神近家の情報から右近神の情報がたくさん眠っている地下にある秘密の部屋だけである。それがあからこそこの土地はまだ松本家の敷地であるし、見つかるまではずっとこのままの状態なんだろう。けどこの草原みたいな感じを見ると、どう見ても探した気配が無く、雑草を踏んだような後も一つも残っていないかった。多分誰もがそんなものを信じておらず、探すだけ無駄だと思っているのだろう。秘密の部屋の存在は知っている人は結構いるが、その大半は存在しているかというのが曖昧だろうと思っっているもので、探す気はないのだろう。しかし秘密の部屋は存在する。なぜなら私は一度そこに入ったことがあるからだ。それがどこから入れたかはかなり幼い頃、わけの分からない部屋に繋がる秘密の扉らしきものを見つけ、た事があり、そこに入った記憶は何故か私の記憶の中で一番の印象に残っているのだ。だからこそ私は秘密の部屋が存在する事を知っているのだ。

まあそんな話はどうでも良い。今大事なのは今日であのクソババアに対する恨みを晴らせることだ。恨みは後悔しか沸かないと言われるけど私はあのクソババアだけはどうしても許せないのだ。あのクソババアのせいで私がどんな目に合い、どれだけ非日常の暮らしをしてきたか。私は友達みたいな平和な日常を何度望んだか。友達が羨ましいと思ったのは何度あったか。もう数え切れなくらいだ。

最初はクソババアからの虐待から始まった。五歳くらいになってクソババアとは離れて暮らせる事になったが、今度は父親に七年も最初は暴力から始まり、三年位して性的虐待をされ、さらに二年くらいになって小学校五年生になるとレイプまでされた。12歳の時に父親が勝手に蒸発し、それから竹宮家本家に二年間引き取られその二年は平和だったが、竹宮家から出ると龍哉さんに勧められて同じ八神近家である杉山双太に出会って杉山の家で居候してもらい、そのとき杉山は親と別居していて一人暮らしだったので二人で暮らしていたが、ある事がきっかけで杉山と私の二人で岐阜の白川村で起きた無差別殺人の真相を探る事になり、そこで私は吸血鬼に捕まり数ヶ月間はおとなしくしていたが、脱出を試みたがまたしても捕まったのだが、そのとき隼人が居たりその後龍哉さんや優子などと会って私はそこから逃げ出して、それからは今までと比べてかなり平和に暮らして今に至るのだ。

今更ながら不幸というよりかなり酷い目に合わされていたものだ。けどこれは全部最初のことが無ければ今までこんな目に合うことはなかったのだ。父親の性的虐待の理由だってクソババアの代わりとしてやらされていたぐらいなのだ。しかも、父親が虐待していたのだってクソババアが私に虐待していたからだと聞いていたのだ。だからこそ私はこんな目に合わせたクソババアこと松本麗華が許せない。こんな不幸な目に合い、毎日が非日常な生活をさせられたあいつが許せないのだ。だからこそ私はこの日を待っていた。やっと恨

みを晴らせる日をずっと待っていたのだ！

そうして私がクソババアに対して恨みを増大していると、後ろから叢を踏む音が聞こえてきた。もう誰が来たのかなんて分かっている。早美から聞いて彼女がここに来るのはとくに知っているのだから。それにこんな所に来る人間なんてかなりの少人数に絞られるし、その少人数だってこんな所に来る人間はほとんど居ない。だからこそ私は叢を踏んだ人物が誰なのか分かっているのだ。

そして私はその人物に話しかけ、体をそちらに向ける事にした。

「早美の言ったとおり、本当に来るとはね。私がこのときをどれだけ待っていたか分かっているんでしょ？ 松本麗華」

「実の母親にフルネームで呼ぶのはどうかと思うけどねえ、仮にも生みの母親なのよ」

「あなたを一度も母親なんて思ったことは無いわ。あなたのせいで私がどれだけ酷い目にあつたというの？」

「ええ、知ってるわ。あなたがどんな目にあつたのかを。父親に暴力や性的虐待されていたことも吸血鬼に捕まっていた事もね」

その言葉を聞いてキレそうになった。何もかも知っていたのにどうして何もしてこなかったのかと思ったのだ。けどそれはクソババアなら有り得ない事だと思い、怒りを治める事で済ませる事にした。

「それでテメエは秘密の部屋を探しに来たという訳？ 私たち八神近家の情報を知るために」

「そうよ。そのために私はここに来たのよ。邪魔だからさつさとどいてくれるかしら？」

「そうさせない。そのために私はここに居る。そして今までの恨みを含めてお前を殺す！！」

「なら来いよお。例え私の子もだからといって容赦しねえからよ！！」

刹那、クソババアこと松本麗華は私に目の前に一瞬で現れ、左脚で私を蹴ろうとしている体制だった。

けど私もその動きは読めていた。同じ肉体強化系能力者として瞬時に私の目の前に現れてくるだろうと。だから私はあえて蹴りが来るだろうという位置に右腕と右手の筋力をかなり強化し、松本麗華の蹴りを右手を握り締めた拳で止めようとする。そしてその直後、私の拳と松本麗華の左脚は相對していた。

しかしそれだけでは終わる訳が無い。今の松本麗華は両手が開いている状態である。脚をとめられたら次ぎは絶対に手で攻撃してくるはずだと私は分かっていた。だからこそ私はその行動を起こす前に動くまでだ！！

私は松本麗華の両手からの攻撃が来る前に左脚で松本麗華の右脚付近を引っ掛けようとする。さすがに向こうもその行動は分かっているだろうけど、左脚が私の右手と相對している時点で松本麗華は一旦私から離れるしかないのだ。そして私の予想通りに松本麗華は左脚の攻撃を突如止め、一旦私から離れて行った。

「さすが私の子もだわ。相手の攻撃を先読みしているなんて」

「あなたに言われても褒められるなんて気分が悪くなるわね」

「でしょうね。けどそれが私なのよ。さて、手始めは終わったから次こそは本気で行くぞお!!」

第二十九話 侵入者

Outside

一方こちらは一週間と数日前に鈴奈が母親である松本麗華のことに
ついでの情報貰う為に訪れた舞田識が暮らしている家で、舞田識
は松本麗華と対峙したあの応接間で座っていた。未だにその時のま
まの状態で松本麗華が通った廊下やこの応接間には血の匂いが漂っ
ている。けど舞田識はそんな事を気にせず何語事も無かったかの
ように紅茶を飲んでいた。何故彼女がこんな場所で飲んでいるのか
と言うのは誰にも分からなく、彼女が昔から言われていた通り何を
考えているのかさっぱり分からない。今の舞田識を見る限り、どう
見てもこの場所が気に入っていたからという訳でも無いし、そうな
らばとつづくにこの応接間を執事達に頼んで綺麗にしているはずな
だ。

舞田識は紅茶を一口飲み、カップを置くと松本麗華が侵入してきた
ドアではなく、その娘である鈴奈と良鬼とマリアドが入ってきた
ドアからノックの音が聞こえた。舞田識は入ってきてと言いつつ、ノッ
クをした執事の中には入った。そしてその執事は舞田識の近くによ
ると、舞田識がその執事に話しかけてきた。

「何、もしかしてもう郁美がここにやって来たの？」

「いえ、その事ではなくて別件で話がありました」

「別件？ 一体何なのかしら？」

舞田識は余り来ないこの家の来訪者であり、妹である竹宮郁美がもうやって来たのかと思ったのだが、どうやらそれとは違う件でこの執事は舞田識に用があったようだ。一体何の事だろうと思いつながら舞田識は用件を聞くことにしていた。

「この舞田識様の家の敷地内に女性が進入したのを他の執事が見つけ、追い出そうとしたのですが一瞬にして姿を消したのです。敷地内に入ったという事は多分、舞田識様に関係があるかと思って一応報告を」

「分かったわ。でも今はほっといて良いわ。私に用があるとしたらどうせ向こうから現れてくるだろうし。そうでなくてただ間違えただけだったら別にそれで良いわけだし。とりあえずそいつはどんな格好だったのかしら？」

「かなり遠くで分かりにくかったらしいのですが、髪の毛は赤く、大きなピンが付いている帽子を被っていたらしいと。後は赤い服が目立ったと言っております」

「分かったわ。とりあえず今は持ち場に戻っていなさい。また見つけたら私に教えてくれるかしら？」

「分かりました」

舞田識がそう言い、その執事は応接間の部屋から出て行く。ドアが閉まる音が聞こえると、舞田識は先ほど執事が言っていたその女性の事を考えていた。

その女性は何の為に侵入したのか。舞田識は全てを捨てて知り合っても知らないこの家を建ており、本来ならば来客というのは本当に珍

しく、こんな所に来る人間なんて一人も居ないと言って良いくらいで、来るとしたら自分が呼んだ客だけなのだ。だから間違えて進入してしまったのと意図があつて進入した場合はかなり違ってくる。その女性が意図的に侵入したら誰に用があるなんてすぐに分かる。ここに住んでいるのは舞田識一人で他は全員執事がメイドである。なので舞田識は自分に用があり、それ以外には考えられないのだ。

そうなると一体その女性は何の用があつてここにやってきたのかと思う。自分に用があると言うのなら鈴奈みたいに八神近家関連か、八神近家に恨みを持っている人間、そして右近神関連の事しかないのだ。特に最後の一番ありえるわけがなく、執事からの話を聞く限りではかなりありえないと思つていた。その女性の姿を聞いたときに松本麗華は誰なのかと言うのは分からなかったし、右近神フィリアム以外の右近神は全員契約を結んでいる。だから右近神関連の事ではないと言う事はすぐに分かったのだが、結局何の用までは把握できなかつた。

「ねえ、右近神アーフィクト。今起きているかしら？」

「さっきの執事が言った女性の事なんだけどどう思う？」

「ここ最近？一体何で聞いたの？」

「貴方達以外に永遠に生きられる者なんて居るの？」

舞田識は右近神アーフィクトの言葉を聞いて少し驚いていた。この世で永遠に生きられるのは神と神によって作られた右近神見たいな奴らだけだ。それ以外に存在すると言うのは聞いた事が無かった。一体どんな奴なのかと思つて居たのだ。

「まあ、その話は今度にして、今は私の家に侵入した女性の話よ」

「分かつたわ。頼むわね」

舞田識が右近神アーフィクトにそう頼むと、また紅茶のカップを持つて一口飲む。それからカップを置き数分経つと先ほどの執事が入ってきたドアからまたノックの音が聞こえてくる。先ほどと同じように入ってきてと言つて今度はメイドが応接間の部屋の中に入ってきた。

「今度は何のよう？」

「竹宮郁美様がこちらにやってきた事を報告します」

「そう、分かつたわ。それじゃあ執事とメイド全員に言つて。今日は全員この家から出て自分の家に帰りなさいと」

「分かりました」

そのメイドがそう言つて部屋を出ると、舞田識は自分の足で玄関に

向かう事にした。執事とメイド達を帰らせたのは、この後ここで戦いが起こるからだ。人を殺すような戦いが。その邪魔になると思ったので全員を家に帰らせたのだ。

舞田識は玄関の前に立ち、竹宮郁美を待つことにする。そして玄関のドアが開くとそこから竹宮郁美の姿が見え始めていた。

第二十九話 侵入者（後書き）

気づいた人は気づいたでしょう。侵入した女性が誰なのかを。って
かやっとな彼女を出せた

第三十話 衝突する姉妹

Outside

「やっと来たわね」

「もしかして待たしてしまっただかしら？それならごめんなさいね」

「別に謝らなくても良いわよ。郁美が何しに来たのかは知っているのだから」

「それもそうね。会うのは二年ぶりだけど、今日会ったのは姉さんと再会しに来た訳じゃないしね」

舞田識と竹宮郁美の二人は何か裏がありそうな微笑み方をしながらお互いに会話をしていた。二年ぶりだに再会したというのに二人の表情はお互いに隙をつらないようにしており、またお互いに隙が出てこないかと狙っていた。先ほど会ったばかりなのに二人はいつ時間も隙を見せない警戒している状態が続いていた。

しかしそれを先に破ったのは舞田識で、一旦ため息を吐いて背を向け歩いていった。郁美は隙が出来たと一瞬思ったが舞田識の行動にはどう見ても攻撃を誘っているように見えず、その時点で攻撃に移らなかった。今の郁美の行動は正解で、舞田識は郁美が反射的に攻撃してくる事を誘っていたのだ。しかしそれは結局起こらなかった為、すぐに次の行動に移ろうし、どうするか考えていた。

「とりあえずここから移動しましょ。エントランスで戦ってもいい

けど、今のままじゃ時間が過ぎていくだけで永遠に決着が付きそうにないし」

「そうね。お互いに睨み合っているだけだと意味が無いからね」

郁美は舞田識の言葉に賛成し、かなり冷静に考えてみるとそうした方が得策であり、早く決着がつくだろうと思ったのだ。

二人はお互いに警戒しながらも廊下を歩いていき、舞田識が足を止めたところは松本麗華と戦った後が未だに残っているあの応接間だった。先ほども舞田識はここにあるソファで座って紅茶を飲んでいたが、どうして毎回ここに来る回数が多いのかというのは誰にも分からないだろう。舞田識は本当に何を考えているのか分からないのだ。

そして舞田識の後ろを付いて行っていき、舞田識がその応接間に入った後に続いて入った郁美はその部屋の見て少し驚く。舞田識が松本麗華と戦ったままの状態なのでもう一つのドアが壊れている方からは固まった血の跡が見え、未だに血の匂いが漂っていた。しかしすぐに冷静となり、そしてすぐに舞田識に警戒し始めた。その一瞬の隙を狙おうと思っていて舞田識はすぐに自分に警戒してきたので攻撃を仕掛けようとしたら逆に返り討ちにされる所だったと思い、そうなるかと分かっていたのだがため息を吐いていた。

「やっぱり、こんな事じゃ郁美に攻撃できないよね。さすが私の妹だとは思っけど」

「やっぱりここに連れて来たのはそれが目的だったのね。もしかしてこうなると思ってずっとこのままにしていたと言うの?」

「そういう訳じゃないわ。だったらこんな所で紅茶なんて飲まないわよ。私が何を考えているか分からないというのは知っているでしょ」

「それを自分で言うのね。ってか自覚していたんだ」

「一応ね。それでどうする訳？このままだと永遠に睨み合っているだけよ。さすが姉妹とも言えるけどね」

「そうね。お互いに相手の動きを見て動くタイプだから、確かにこのままだと永遠に続くだけね。ならばこちらから動くしかないわね」

刹那、郁美は姿を消し応接間の中で舞田識から一番離れた辺りに立っていた。普通なら一瞬にして姿を消した事に驚くだろうが、舞田識は些細な事で驚く事や動揺なんてするわけが無い。舞田識はあの冷静な行動をする竹宮郁美、旧姓舞田郁美の姉なのだから妹と同じように冷静な行動をする女性であるのだ。だからこそ郁美の行動なんかに驚く事や動揺なんか以前に冷静な判断をするのが当たり前といっても良いのだ。それが舞田識、竹宮郁美姉妹の真骨頂であり、冷静な判断が出来るために分析力も他の人間より遥かに高いのだ。

「それで、その力はどっちの力なのかしら？郁美が昔から持っている超能力である『神速移動』なのか、それとも空間と地形を操れる右近神ジュペインの力なのかしら？」

「さあ？そんな事を教えると思っているの？私達は姉妹でしょ。そんな事で聞き出せないのは分かっているとは思っているけど」

「それもそうね。けど、私の分析はこうね。私を殺しにきたと言うのなら本気で来るはず、それくらいでかかって来ないと自分が殺さ

れるからね。だから結論を言うと、今の力は右近神ジュペインの力という事になるわ」

「なるほどね。けど今の姉さんの考えは不正解よ。確かに姉さんに戦うのなら全力で戦わないと私が殺されてしまうわ。けど今の時点で右近神の力を使用する意味なんてどこにも無い。私の神速移動は普通に訳せば人間ではありえない速さで移動するという事になるけどそれは違う。私の『神速移動』は神と同等の力の速さで移動するという事よ。だから今の移動にあなたは絶対について来れないと分かった。なぜなら神より弱い右近神が今の速さについて来れるわけが無いのだから。まあ、さすがに右近神に対してこの『神速移動』だけで戦ったら逃げられるかも知れないけど負けるけどね」

郁美は舞田識の答えに不正解と言い、『神速移動』の力を教えていた。

神速移動は先ほど郁美が言ったとおり、人間がどう頑張っても出せる訳が無い速さという本来の意味での神速という意味ではなく、神と同等な力の速さという意味での神速なのだ。けどこれは速さだけの事であって、普通に右近神と戦ってもこの『神速移動』を使ったとしても絶対と言っていいほど右近神が勝つ事には変わりがないのだ。『神速移動』をどんな能力かと言うならば神のほんの一部の力だけということなのだ。まあ、実際は神の力と言う訳でもなく普通の超能力と同じであるのだが、分かりやすく言うならばそんな感じだろう。

「チツ、めんどくせえ能力を持っているな。けど、私もこの戦いには負けてられないのね。短時間で始末してやる」

「それはこちらの台詞よ。さっさと終わらせて姉さんを殺す」

舞田識と郁美はお互いに右近神の力を使い、舞田識の背中には白い翼が、郁美の方は特に変わりが無いがオーラが変わっていた。そして二人はお互いに走り出してぶつかるといった。

第三十一話 不神身の力VS意味不明な力(前書き)

最近、毎日更新しているね。まあ、当分はこんな感じだろうと思うけど。

第三十一話 不神身の力VS意味不明な力

鈴奈 side

「なるほどねえ。さすが私の娘であり、八神近家の当主であるだけの力はあるわねえ」

「それはありがとう。けどそれをあなたに褒められるなんて反吐が出るわ」

私達は本気で殺し合いをしてもう二十分も経過しており、お互いに少し離れた所に立っていた。しかしお互いに怪我や出血というのが無く、まったく無傷のまま時間が過ぎていくだけだった。私が攻撃した時はクソババアはすぐに防御するかカウンターを仕掛けるかで、逆にクソババアが攻撃してきた場合も同じで、私が防御するかカウンターを仕掛けるだけだった。何度も隙があるところをお互いに狙ったと思うがそれでも防がれてしまい、ただ時間が過ぎるだけだったのである。さすがに何か攻撃のやり方を変えないとまずいと思っっている所だった。

「仕方ないわねえ、やり方を変えるか」

と私が別の攻撃の方法を探していると、先にクソババアがそう言い出した。どうやら向こうも同じ事を考えていたらしく、さすがにこのままだと時間が過ぎていく一方だと思っていたようだ。なら私はその技がどんなものなのかを考えるべき！！

しかしその刹那、私の右の頬から一瞬何か触れた感触と痛みを感じ、

右手でその頬を触つてみると手に血が付いていた。

訳が分からなかった。私はクソババアをずっと見ていたが、奇妙な行動なんて一度もしておらず、さらに言うならばその場から動いてすらいなかった。一体何が起こって、あのクソババアは一体何をしていたのか。私の頭の中はその事でいっぱいになっていた。けどそれをずっと考えている訳にはいくわね行かず、今はその攻撃を避ける方法を探るしかなかった。しかしクソババアは私がそうそう思っていると突然舌打ちをしてこう言うのだった。

「ほんとめんどくさいわねえ、その不死身の力は。昔は自分も使っていたけど、敵にするとこれほどめんどくさいものとは思わなかったわねえ」

どうやら私が考える間に先ほどの意味不明な攻撃で頬を少し切られた部分は、いつの間にか傷から血が止まっており、まるで何も無かったような綺麗な頬に戻っていたようだ。自分では触ってみないと分からないが多分そうだろう。それが松本家当主が使える声唱宝具、不神身の力であるのだ。例えば挟られようが切断されようがすぐに再生して元の体に戻すという不死身に近い。しかし一つだけ弱点があり、それは心臓を刺す事だ。別にただ刺しただけで刺した刃物を抜いてしまつたら再生してしまう。しかし刺したままにしておくとも再生能力を永遠に繰り返し、その間に心臓が止まってしまふ為に死んでしまうのだ。それが唯一の弱点であり松本家の一族は全員知っているため、クソババアもそのことは知っている。だから私はそれに気をつけながらずっと戦っていた。しかし、

「まあ、まだ先ほどの攻撃の仕組みが分かっていないようだからこちらのほうが有利になつただけどねえ！！」

そう、私には先ほどの攻撃の仕組みがまったく分かっていない。この時点で私が不利だというのは自分でも分かっていた。さらには先ほどの攻撃は何が起こったのかすら分からないというのに、攻撃した武器そのものが見えないという事もありまったく攻撃が読めないでいるのだ。このままだと負ける。私はすぐに何か方法を見つけないと勝ち目が無いと悟っていたのだった。

「さあさあさあ、早く続きを始めようぜえ。てめえが私に勝てるのはまだはええという事を見せてやるからよお!!」

「くっ、」

私はとりあえず自分の勘で避けるしか方法がなかった。どこから攻撃してくるか分からない攻撃をどうすれば良いのかなんてすぐに思いつくはずもなかったのだ。もしその攻撃が私の心臓を刺したら一巻の終わりでは死んでしまうだろう。だからこそ、それでも避けられるなら良いだろうと思って自分の勘を信じるしかなかったのだ。しかしそれでも完全に避けきれぬ訳が無い事は自分でも分かっていた。あらゆる方向に走ったり、またはジャンプしながら移動したりするなどを繰り返しているがそれでも体のあらゆる所を切り付けられたりしていた。それでも不神身の力のおかげで再生をしているが今度は別の所、別の所とその繰り返しをしているだけだった。拳句の果てには肘より先が切断される所まで追い詰められ、さすがにこれ以上はまずいと思い始めていた。

本当にどうやってこの攻撃を対処すれば良いのか。またまったく見えない攻撃にどうのように戦えば良いのか。私はそう考えていたが結局見つからなかった。

「だったら、一つ一つ試すしかないわね!!」

私は自分の勘で避けながらも考えられる攻略方法を一つずつ潰して
いく事にし、何とかして形勢逆転する方法を考える事にした。

第三十二話 宝剣スベリオキシム

鈴奈 side

「ほらほらほらあ！逃げているばかりだと私になんか勝てねえぞ！」

クソババアはそんな事を言っていたが、私はその言葉をまったく聞かなかった。否、そんなそんな言葉を聞いている暇な時間は無かったのだ。今の私はどうやってクソババアに近づけるかをずっと考えていた。大体こういう攻撃は本体を攻撃すれば、一時的にだが攻撃が止まるだろう。しかしそんな事をあのクソババアが許す訳が無いし、絶対に私を近づけさせないだろう。だから私は一つ一つ風漬しにする前にその事を何とかしないとイケなかったのだ。何とかしてクソババアに近づく方法を。

いやまてよ。一つだけ近づける方法があつたもしれない。使いこなせるかは分からないが、アレを使えば何とかなるかも知れない。そしてこの状況でアレを使うのはフェスターの十戒に違反しない！！ならばアレを使うまでだ！と、私は咄嗟に思い、その行動に移る為に一度立ち止まった。立ち止まった時に左腕を切断されたがすぐに不神身で修復するので、痛みを感じるが今の私にとってはどうでも良い事だった。

そしてまたクソババアもい突然私が止まった事に不自然に思っ居る感じだった。まあ当然の半のだろうと私は思う。だって立ち止まったら確実に心臓を突き刺せるのだから、私にとっては逆に不利にさせるだけなのだから。そしてクソババアは私が突然立ち止まった事によってあの攻撃を一度止めて私に話しかけてきた。

「どういつつもりだあ？どうして突然足を止めた。」

「さあ、何ででしょうね？」

「もしかして怖じ気づいたからか？いやそれは一番ない。私の娘がそんな諦めが早いわけが無いし、そもそも私を殺しに来た奴が今の攻撃だけで怖じ気づくわけがねえよな。って言うことは何か策を見つけたと言う事か」

「その通りよ。まあ、大体分かってしまうとは私も思っていたけどね」

「ならばその前にお前を殺すまでだあ！」

クソババアは先ほどと同じように何も動いていなかったが、多分先ほどの攻撃を私の心臓を目掛けて狙ってきたのだろう。このまま私が何もしなければ確実に私の負けで殺されるだろうが、私には二ヶ月前までは使えなかったアレが八神近家にはもう使えるのだから！！

「チェインバースト不神身鍵解除。階級真紅、宝剣スペリオキシム」

「なっ！？」

私の言葉にクソババアは驚いていた。まあ当然だろう。何故真紅宝具が使えられるのかと思っっているのだろう。真紅宝具は前回の家柄戦争によって禁止された宝具なのだから。

そんな驚いているクソババアを気にせず私の右手から剣の柄つかが現れて私の右手に握られゆく。それから横幅がかなり長い刃がだんだ

んと出来てゆき、最後は刀身まで出来上がっていた。そして私はそれを自分の胸元の少し前にもっていき、前から飛んでくる見えない何か、私が持っている大剣にぶつかる音が聞こえて何かを跳ね返した。

私が持っているのは松本家の真紅宝具、宝剣スペリオキシム。とても大きな大剣であり、重量は普通の人間では絶対に持てないというほどの重さである。切れ味は頑丈な壁をいとも簡単に切り刻みこんでしまうほどの剣であり、切れないものの方が少ないというほどだ。そしてそれだけではなく、この宝剣スペリオキシムにはもう一つの力を秘めているのだ。

「ど、どうして真紅宝具が使える！？真紅宝具は家柄戦争の時に禁止されたはずだろ！」

「ええそうね。けど二ヶ月前、竹宮龍哉さんがあなたの愛していた竹宮風哉さんを殺したあの事件の時、本来なら普通に竹宮風哉さんが絶対に勝てるというのにどうして竹宮風哉さんが勝ったと思っっているわけ？」

「そんなのただの偶然だったんじゃないか！」

「ただの偶然？そんな事で竹宮龍哉さんがあんな事件を起こすと思う？そんなわけが無いでしょう。竹宮風哉はある奴に力を貰ったんですよ。私たち八神近家を売ってね」

「……まさか」

クソババアはあの事件に奴らが関わっているとやっと分かったようだ。私はそれに答えるように言った。

「そう、右近神よ。正確に言うならば右近神フィリアムだけだけだね。物質の右近神といわれている彼女よ。だから私たちの右近神フェスターはすぐに他の右近神が動き始めているという事を知ったのよ。そしてそれに対抗する為に真紅宝具を解除したのよ。てめえも、何故舞田識が右近神アーフィクトと契約をしていたのかと思ったでしょう。だからもうのんびりしている暇なんて無いのよ。まあ、真紅宝具には一応世界を滅ぼそうとする力を持っている人間以外には使うなとフェスターの十戒に追記されたけど」

「　　そういうことねえ。どうりで最近何か異変を感じていたのね。それで、その真紅宝具を使う条件だけど私も世界を滅ぼそうとする力を持っている者として加えられているという訳ね」

「まあ、これは私で判断しただけだけどね。けどてめえが世界を滅ぼすほどの力を持っているとは思っていないけど」

「じゃあ何で使っているんだ？使えばフェスターの十戒に違反するんじゃないのか？」

「確かにそうね。けどフェスターの十戒には書かれていないことだけど、それはこうとも解釈できるのよ。『八神近家に重度の危険があるときは真紅宝具を使って良い』という事にね。だって、私たちが世界を滅ぼしかねない力を持っている者と戦う事になる前に、私たち八神近家が滅んだら意味が無いからね。」

そう、確かに私たち八神近家が死んだらまったくもって意味が無いのだ。だからフェスターの十戒に書かれてないだろうが、私たち八神近家の当主が死んでしまったらまったくもって意味が無い。だから私たちが危険な目にあっている時は真紅宝具を使っても良いとい

うことなのだ。右近神フェスターは多分そんな事は分かっているだろうから私たちにはいわなかったのだらうと思っただ。

「さて、そんな戯言はいつでも良いのよ。私はてめえを殺せれば良いだけなんだからさ！」

「それもそうだなあ。今度こそ確実にてめえの心臓をぶっ刺してやるからさあ！！！」

私が真紅宝具の事についての戯言を切り上げると、宝剣スペリオキシムを握り締めてクソババアの方に突っ込むのだった。

第三十三話（前書き）

……サブタイ思いつかねえorz

第三十三話

早美 side

みんながそれぞれ仕事に戻ったとしても、私はずっと会議室の中に居て、会議した時から座っている椅子に座っていた。別に私だってやる事はあるが、今日はそれを放棄してずっとそこに座っていたのだ。理由は二つある。

一つは鈴奈と松本麗華との戦いの結果だ。

あの場を用意したのは間接的だけど私も関わっている。鈴奈が持っている松本麗華に対する恨みを全部無くす為に私と松本麗華はそれぞれ自分の役目に徹し、そのために私は全員を絶対に邪魔をさせない。それが私の役目だ。だから私はその結末がどのように終わったのか、いち早く知りたくて仕事なんてしてられないのだ。

そしてもう一つ、これはある報告を待っているだけなのだが、その報告は私にとって重要な事である。

私が竹宮家から出た後に、母親がどこかに向かい、翌日になっても帰ってきていないらしくて、どこに向かったか私の部下に頼んだのだが未だに分からず、行方をくらましたらしいのだ。しかもそれだけではない。一昨日の夜、私が飛行機に乗っていて寝ようとしたときに、突然右近神フェスターが話しかけてきた。そのとき私はこんな夜に何の用かと聞くと、とんでもない事を言い出したのだ。

『竹宮家の中に右近神ジユペインと契約した人物が居た』と。

これを聞いたときは思わず跳ね上がる所だった。誰かまでは分からなかったらしいのだが、そのことが本当ならまずい事であった。もしかしたらそれは私の母親の可能性だつてあつたのだ。その情報は聞き捨てられなかった。しかも母親は私が竹宮家から出た後に竹宮家から居なくなっている。こんな偶然があるのだろうか。もしこれが偶然じゃなければある考えが立てられる。

あの時母親は松本麗華が母親の姉である舞田識の事を聞こうとしていたのに疑問に思った。何故今更舞田識の事を聞いてくるのだろうか。そしてあのときの松本麗華は八神近家の本家を除く八神近家に関係している一族を一人残らず殺していた事を知っていた。なので多分そのときに舞田識と戦つたのだろうと母親は思う。松本麗華と舞田識がお互いに超能力で戦つたら、たとえ松本麗華が八神近家の当主ではなからうと松本麗華の方が勝つだろう。しかし、松本麗華は舞田識の妹である自分にどんな人物か聞いてきた。ということは松本麗華は舞田識と戦つて負けて逃げてきたのだろうと思う。普通に戦つたら松本麗華が勝つのにどうして松本麗華が負けたのだろうかと考え、舞田識が松本麗華より何かもの凄い力を入れたのだろうかと分かつてしまう。しかし急激に強い力を入れる方法は数少ないし、そんな力はごく一部に絞られてしまうし松本麗華が逃げほどの力だ。そして、その中で八神近家の一族が最も身近に存在するのが右近神だ。だから姉さんは私と同じように右近神と契約したのだろうと母親は思い、そして右近神として舞田識を殺しにいったのだと。

この考えが正しければ、今二人はどこかで戦っているという事なのだ。しかも右近神同士の戦いを。右近神同士の戦いは一度も見た事が無いが、壮絶な戦いである事を聞かされている。そんな戦いを住宅街やビルが多いこの日本で戦つたらどうなるだろうか。龍哉おじ

さんが右近神フィリアムによって能力が上げられ、それによってロシアの町を吹っ飛ばした時に出した時と同じくらい、いやそれ以上の数の犠牲者が出てしまう。それはさすがに阻止しなければならぬ為、私は部下に頼んで急いで母親の居場所を知るためにここで待っていたのだ。

そうやって私がこの会議室で待つてから約一時間後、会議室のドアが開く音が聞こえ、私はそちらを見た。しかしそこに居たのは右手に何かを持っている優子だった。

「なんだ優子かよ。紛らわしいじゃない」

「なんか、私以外に誰かを待っていたかのような。一体誰のことなのかしら？」

「まあそういうことだよ。それより、何で優子がここに居るのよ？」

「何でって私は早美と同じで本部の担当よ。なんか忘れてるようだけど」

「あ、そうだったわね。なんか忘れてたわ」

「それで、早美はだれをずっと待っているわけ？」

「ああ、それは俺の部下にある事を頼んだんだ。ある事について調べてもらっている所んだけど、それが気になって仕事も出来ないからさ」

「それってこれの事？」

優子はさつきから右手に持っていた物を私に見せてきた。優子が持っていた物は私が母親の居場所の情報が載っているプリントだった。

「な、なんでそれを持っているの!？」

「さつき、私を見かけた一人が早美にこれを渡しておいてくれないかと言われたからね。なんかその人他にも忙しい事があつたらしくて」

「あ、そうだったんだ。何か悪い事したかもね。とりあえず、それをくれる?」

「別に良いけど、何で早美のお母さんである郁美さんの事を調べたの?」

「それはね……っ!？」

優子は私に持っていたプリントを渡しながら聞いてきた。私はそのプリント受け取って母親がどこに居たのかを確認しながら優子の質問に答えようとしたが、母親の居場所が分かると優子に質問に答えている事ではなかったのだ。私が考えた予想が当たってしまったからだ。そう、母親が舞田識の家にいるという事を。

「優子、今はそれどころの問題じゃないわ。ここは頼んだわね」

「は、早美!?! 一体この情報に何があるというのよ!?!」

「その情報で分かった事があるの。舞田識と私の母親は二人とも右近神なのよ!?!」

「っ！？じゃあ、早美が郁美さんの事を調べていたのって」

「そういう事。どうして分かったのかというのは後で話すから優子も一緒に来て！もう遅いかも知れないけどこれだけは止めなければならぬわ！」

「わ、分かった！他のみんなはどうするの？」

「そんな呼んでいる暇はないわ！！だから私と優子の二人だけで行くわよ」

二人がぶつかったら龍哉おじさんがやったことみたいに大変な事になる為、もうかなり遅いけどこれだけは何としても阻止しなければならぬ。今私達は八神宝具も何も持っていないが、私達二人はそれぞれ右近神フェスターの力と八神十戒の力がある為一応大丈夫であった。そして私は急いで椅子から立ち上がって、優子と一緒に会議室から出て空港に向かう事にした。

第三十四話 断罪者（前書き）

……第四部の終わる気配が見えない。もしかすると四十話を超えるかも^^^;

第三十四話 断罪者

第三十四話 断罪者

outside

竹宮郁美と舞田識はお互いに体中が傷だらけであり、出血している
と事もあった。それでも二人はお互いに目を……いや、突然現れた
彼女を見ていた。

この傷はお互いに戦って出来た傷ではなく、彼女によってやられた
ものだった。年齢は早美や瑞希と同じ高校生くらいで、赤い髪に大
きなピンが付いている帽子を被っており、彼女の周りにはそれぞれ
七色の色をしている何かが浮遊していた。舞田識が先ほど執事が聞
いていた侵入者と同じだと舞田識はすぐに分かった。

「それにしても予想外に弱いわね。右近創世神テュデユスティアが
作った右近神だと聞いたけど、所詮は神以下の力しか使えないただ
の雑魚だったなんてね。あの人が言ったとおりこれならあたし一人
でも何とかかなりそうだし」

「あ、あなたは何者なの？」

舞田識は突然二人の戦いに入り込んできた彼女に向かってそう聞い
た。

「あたし？あたしの名前を言っても良いのだけど、あの人に余り正

体を明かすなと言われているからね。まあ、言える範囲だとこれくらいかな？『断罪者』と」

『断罪者』。舞田識はその言葉を少し前に聞いたばかりだった。右近神アーフィクトから聞いたばかりだった。

「ちょっと待って、『断罪者』はもうとっくに滅んだ筈よ！ある一人の『断罪者』によって！！」

「ああ、神の間ではそうなっているんだっけ？言っておくけどそれは真実じゃないわよ。現にあたしとあの人は生きているもん。それに他の『断罪者』達を皆殺しにしたのは他でもないあの人なんだからね」

突如どこからか声が聞こえてきた。普通の人間なら驚くところだが、この場に居る人間はそれが誰なのか分かっている為に誰も驚かなかった。

そしてその質問をしてきた本人に、彼女はそれに答える。

「そういうこと。今ではあたしとあの人しか居ないけどね。たまに人間から『断罪者』になる者が現れるけど、彼らはあたし達の目的には邪魔だから全員殺しているけどね。これで良かったのかな？右近神アーフィクト」

『断罪者』は元人間でありながら神を簡単に殺す事が出来る。なの

に郁美と舞田識の前に彼女が現れてから、彼女は右近神ごと殺す勢いで二人に戦っている感じだったことを郁美、舞田識、右近神の二人は分かっていた。だから右近神を殺すならその生みの親である右近創世神テュデュスティアを殺せばいい話なのだ。なのに彼女はそんな事をせずにわざわざこの場に現れて、右近神の二人を殺そうとしていたのに、その事を聞いた右近神アーフィクトも含め、郁美、舞田識、右近神ジュペインは疑問に思っていたのだ。そして彼女はその質問に数秒もしない内に答えるのだった。

「そのことね。理由は二つあるのだけど、その内一つが右近創世神テュデュスティアを殺してしてしまうと、あたし達のシナリオが壊れてしまうから。詳しくは言えないけどね。そしてもう一つがあたしとあの人がある右近神に力を貸してあげているから。もちろんここに居る右近神では無いよ。なので右近神フェスターか右近神フィリアムのどちらかに絞られるけどね。とまあ、そんな理由で右近創世神テュデュスティアには手を出せないというわけ。別に右近創世神テュデュスティアはそういうことが無ければ殺していたけどね」

「さすがにそこまで教えられないし、そもそもあんた達に教えても意味無いしね。だって今からあたしに殺されるだから」

「高校生位の年齢が調子こいているんじゃないぞ!!」

その言葉を聞いてこの場に緊張感が走った。先ほどの話とは違っただけの殺気を彼女が放っていたのだ。

しかし舞田識だけは彼女の言葉をずっと聞いていると、まるで自分が彼女のシナリオどおりに動かされているかのように聞こえて腹が

立って怒っていた。今までの冷静さをなくして。

「言っておくけど、『断罪者』は年を取らないから一応これでも普通に生きていたら二十七歳なんですけどね!!」

舞田識は彼女に近づいて攻撃をしようとしたが、簡単に避けられる。そして浮遊している七つの物の先端から光線が舞田識に放たれた。舞田識もすぐに対応して自分を守る為に右近神の力を使うが、それすらも簡単に打ち破って彼女の右腕に直撃する。

「がっ、」

「それで、さっきまではあたしの強さを見せるためだったけどどうよあたしの強さは。あんた達は絶対にあたしには勝てないと分かったでしょ。そこで提案なんだけど、あんた達が契約している右近神との契約を解除してくれない？そうしたらあんた達の命までは奪わないから」

舞田識の右腕からは焼けるような痛みが舞田識に襲っていた。そして彼女は先ほどまでの攻撃は重症を与える為ではなく、郁美と舞田識に自分の強さを見せるためであったのだ。全ては二人が契約している右近神との契約を解除する為に、彼女は今まで重症までは与えなかったのだ。

「それでどっちにするの？契約を解除するかしないのか。なるべく早めに決めてもらわないとこっちが困るから。さあ、どっちなのよ!!」

彼女は二人に迫るかのように聞いて、二人の答えを聞くこととするのだった。

第三十四話 断罪者（後書き）

前にも言ったけど、彼女が誰なのか分かる人もいますよね W W

第三十五話（前書き）

サブタイは思いつかないし、かなり短いです……

第三十五話

鈴奈 side

私が宝剣スペリオキシムを使ってからと言って、余り戦況が変わってしまかった。

「チツ、不神身にしろ宝剣スペリオキシムにしろ自分で使っている時はわからねえが、敵が使うとこれほど厄介なものだとはねえ」

「私だつてテメエの訳分らない攻撃に戸惑っていつているのだけどね。例え宝剣スペリオキシムを持つていたとしても、心臓を狙うものなら何とか防げるけど確実に防ぎきれないのだから。それに未だにテメエに近づけていないし」

私は宝剣スペリオキシムを使ってからと言うもの、先ほどよりは攻撃を受ける事もなくなつたが、それでも一度もクソババアの目の前まで近づけていないのだ。それに未だに見えない攻撃からは完全に防ぎきれている訳ではなく、四肢全部に切りつけられているのだ。一応不神身のおかげですぐに治るが、きりつけられた時にする痛みは自分に来る為、さすがにそれだけは自分でも慣れるわけがないのだ。痛覚は普通の人間と同じなのだから。

このまま続ければ時間が経っていくだけでお互いに疲労が溜まるだけだ。私はそう思うと仕方なさそうな感じのため息を吐くのだった。

「仕方ないか。本当はこれまで使うつもりは無かつたけど、このままだと決着が着かないからね」

「ほおう、まだとっておきの物があるというのか」

「まあね。でもこれはテメエも分かっていると思うけどな。なんせ元松本家当主で真紅宝具である宝剣スペリオキシムを使った事があるんだからね」

「宝剣スペリオキシムを使った事があるから私にも分かるだ。そんな力がそれに……まさか!？」

「気づくのが遅い!!」

刹那、私は一気にクソババアの目の前に瞬間移動して現れ、その時点で私は宝剣スペリオキシムをすぐに振れるように構えるのだった。そして、

「キャンセルソード宝剣解除!!」

クソババアの腹辺りに向かって宝剣スペリオキシムを一気に振りかざすのだった。しかしクソババアを切ったときに違和感を感じたのだ。切った感触がまったく無く、まるでそこに何も存在していなかったような感じだったのだ。そしてクソババアの姿はまるで塵気楼のように消えていった。

「なっ!?!」

何が起こったのかまったく理解できていなかった私はすぐに動けなかった。先ほどまでずっとここに居たのにそれが偽者だとは思っていなかったのだ。それにクソババアの能力も私の同じで肉体強化系であるために、塵気楼なんか使えるとは思っていなかったのだ。だから

らあのと看私はあの攻撃にかなりの勝負を賭けていたのだ。

「じゃあ、クソババアは一体どこに居ると言うの？今までここに立っていたのが偽者だったら一体……っ！？」

私はクソババアがどこに居るのか考えていたせいで気づくのに遅かった。私の背中の方から何かはこちらに向かってきている事に。

そして私は避ける暇も無のまま、背中から心臓に当たるように何か刺されるのだった。

第三十六話（前書き）

最近、サブタイが思いつかないほうが多くなってきている希ガス。
r
z

第三十六話

鈴奈 side

油断していた。先ほどの攻撃が当たらなかつたらすぐに私へ攻撃してくると普通なら分かっていたはずだ。けど私はそれが避けられなかった。クソババアが先ほどの攻撃を肉体強化以外で避けられた事に、私は驚いてしまったのだから。そして最後の私の攻撃は余りにも無謀だと今更ながら気づく。まったく持って避けられた事を想定内に入れていなく、あの攻撃で絶対に勝てると思以外的事はまったく考えていたのだ。本当に情けない。こんな最後の大きなミスのおかげで自分の人生を終わらせるなんて、自分をあざ笑いたい位ほどに情けないと思った。

背中から心臓に向けて刺された見えないナイフを未だに刺されたまま私は地面に膝から倒れるのだった。どんとんと意識が無くなつていき、このまま死んでしまおうと言うのが自分でも分かっていた。

（もうちょっと隼人達と一緒に居たかったな。そして自分の願いが叶えば隼人と結婚したかったな）

“ならそなたはここで人生を終わらせるのか？”

私自分が死ぬという事実を認め、もう生きられないのだと諦めてかけて目を瞑ると、ふと私の頭の中に直接何かの声が聞こえてきた。けど私は口調とかが可笑しいと思わなく、しかも誰かが話しかけているのかという事もまったく考えずに答えるのだった。

(ええそうよ。どうせもう私は死ぬのしかないのから……)

“それは誰が決めたのだろうか？それにまだそなたはこんな事で死んでいないだろうか”

(それは無いわよ。確かに私は不神身を持つているおかげで心臓以外の攻撃されてもあつという間に治るから死なないけど、今回は心臓を刺されているのよ。このままナイフが抜けなければ私は死ぬし、私にナイフを抜く力はもう無いのよ)

“本当にそう思っているのか？そなたはまだ生きられるのに何故そう思うのだ？”

(それはどういう……)

“なぜなら今刺さっているナイフは心臓に刺さっていないのだから。そなたの体が麻痺しているだけで、死ぬと思っっているのはそなたの『幻想』しかないんだよ。いい加減目を覚ませ。本来なら我が出る立場ではないだから”

(一体あなたはなに……)

私が先ほどから話していた人物に聴こうとした刹那、私は目が覚めた。そして目が覚めると今の自分の状態がどんな事なのか何となく分かってきていた。

体中はどういう訳か分からないが、先ほどのナイフを刺される影響で麻痺が出ており、今すぐ動けるような状態ではない事。私が突然倒れたのは麻痺によって足が支えられなくなって膝から倒れていったからで、死んだと思って意識がなくなっていたのかというのも、

麻痺の影響とここ数日の疲れの溜まりと自分はここで死ぬのだろうと思つた事だろうと私は思った。しかし私の頭の中に直接話しかけた人物は結局分からずじまいだったが、それは今度考えれば良いと私は思い、今はその話は切り捨てる事にした。そして未だに麻痺をしているが、力を振り絞つて立ち上がり、さらに見えないナイフを抜き、倒れる時に手を離してしまつた宝剣スペリオキシムを持つ事にするのだった。私が立ち上がると目の先にクソババアが立っており、私が立ち上がるのを見てか舌打ちをするのだった。

「やっぱり狙いを外したか。あれほどのチャンスはもうやってこねえだろうな」

「そうね。私もあの時は死んだと思つたわ。あの力に勝負を賭けていた自分の判断ミスはもうするつもりは無いからね」

「そうかあ。折角のチャンスを見逃したけど、今度こそ絶対に心臓をぶつ刺してやる」

「それはそつちの台詞よ！！松本麗華あ！！」

私は未だに体中が麻痺をしていたが、足を一気に体重をかけてクソババアのところまで走る。クソババアは先ほど同じように動かさずに見えないナイフの攻撃を繰り返すのだった。しかし見えないナイフに刺されたおかげである事が二つ分かつたのだ。

一つは刃物の形状。刃物の大きさからするとナイフぐらいの大きさだと分かつた。このことが分かつただけで少しは戦い方を変えられるのだ。

そしてもう一つは本当にそれで合っているのか今確認している所だ！

私は宝剣スペリオキシムで見えないナイフの攻撃を防ぎながらクソババアの所に向かっていたが、突如それをやめて立ち止まる。しかし見えないナイフの攻撃は止まる訳が無く私はそれを防いでいくだけだった。

「おいおいどうしたんだよ。どうして私のとこに来ないのかしら？もしかして諦めたのか？」

「いえ違つわ。一つ確認したい事があるのよ。そしてその考えが正しいければこの戦いは絶対に私の勝ちだからね」

「どうせまたそう言つてミスるんだろ？ならやめた方が良いと思うわあ」

「さっきみたいな失敗はしないわ。だってもうすぐに終わるのだから」

私は宝剣スペリオキシムを右手だけで持ち地面と垂直になるように縦に持った。そして私はクソババアからの攻撃を待つのがだった。

「大回転切り」

攻撃が来るだろという寸前で私は自分の体と宝剣スペリオキシムを回転させるのがだった。そして一回転すると何かを吹っ飛ばす感触を感じ、何かが松本家の敷地と隣の家を区切る壁に激突する音が聞こえて壁が少しへこむのがだった。宝剣スペリオキシムの横幅はかなり長く、柄から刀身までの長さも三メートルもある。さらに私自身が肉体の筋肉をかなり強化していたために、そんなものが合わさったもので吹っ飛ばされたらたまらないだろう。そして壁に激突したの

はクソババアだった。

そう、今までずっとクソババアは姿を見せずに自分の姿を消して私に攻撃してきていたのだ。姿を見せていたのは全て屋気楼で出来たもので、私に自分はそのに居ると惑わせるためであったのだ。元々本体はずっと私の前でナイフを使って攻撃していたのだ。普通にそんな事をしたらすぐにやられるだろうというのを逆手にとって、クソババアはあえてそうしていたのだ。これがもう一つ分かった事である。

どうして分かったのかと言うと、まず最初にクソババアをキャンセルソード宝剣解除で切り刻んだ時、私は今までそこに立っていたクソババアは屋気楼だという事に気づいて、その後背中をナイフで刺された。そのときの刺された感触がまるで人間が手に持って指したような感じだったのだ。私は一度その経験をしていたのですがすぐに違和感を覚え、もしかしたら見えない攻撃をしているそのものが本人ではないかと推測したのだ。確証は持てなかったため、宝剣スペリオキシムを縦に持って大回転切りみたいな事をしたのだが案の定であり、クソババアは宝剣スペリオキシムの大回転切りで吹っ飛ばされたのだ。

また、どうして横にしないで縦にしたのかというのは訳がある。本当なら横にしてクソババアを切り刻んでも良かったのだが、戦っている途中にクソババアから違和感を感じていたもので、その事を聞くためにわざと縦にして大回転切りをしたのだ。そして私はその事を聞くために未だに体が少し麻痺していながらも、クソババアが吹っ飛ばされた方に歩いていった。クソババアの前に着くと、クソババアは右膝を押さえながら地面に座っており、どうやら壁にぶつかった衝撃で骨折したらしいかったのだ。たとえクソババアが肉体強化系能力者で筋肉を強化しても、かなりの速さで吹っ飛ばされたら骨折ぐらいはしてもおかしくなかったのだ。けど私はそんな事を気に

せずにクソババアに聞いたかった事を聞き出すのであった。

第三十六話（後書き）

これにて松本鈴奈VS松本麗華の戦いは終了です。多分二話分を書いたらエピソードに入ると思います。エピソードかなり長くなりそうですけどww

第三十七話 真実（前書き）

ちょっと遅れましたが、書き終わりました。

第三十七話 真実

鈴奈 side

「どづいつつもりなの？」

「一体、何を言っているんだ」

「とぼけないで。あの時、テメエなら確実に私を殺したはずよ。私も一瞬はこれで死ぬのだろうかと思っただけど、テメエはあんな確実に背中から心臓を狙える攻撃を外したのよ。なのにどうしてあんなチャンスヲテメエは外したのかと聞いているのよ」

「私が間違えたところを刺しただけよ」

「それは嘘ね。テメエほどの人間がそんな止めをさせる事で失敗するはずが無いわ。八神近家の本家を除く八神近家の関係している一族を一つ残らず殺してきたあなたが、あんな場面に間違えるなんてありえないのよ。だから本当のことを言っテ。テメエは何が目的だったのよ？」

クソババアは何も事かとはぼけたような感じで返してきたのに私は少し怒りが湧いてきたが、そこは何か冷静に返して私が宝剣解除キャンセルでクソババアの屋気楼を攻撃した後、クソババアは私の背中からナイフで心臓に目掛けて殺そうとしていたが、その攻撃が心臓に刺さらずに少し心臓からずれた所に刺さっていた。あれほど確実に心臓を狙えるチャンスヲクソババアは外したので、私は本当に私を殺すつもりはあったのかと思っただ。

そしてクソババアは諦めて私に本当のことを話すのだった。

「そうよ。確かに私はあなた……いや私の娘である鈴奈を殺すつもりは無かったわ。あのときの攻撃もわざと心臓を狙わないで外したということであっているわ」

「どうして私を殺さないと言うの？」

「もう私には殺す意味なんて無いのよ。私の目的はとつくのとうに意味が無かったのよ。あの時、私が戦争で救った人間を敵のスパイによって全員殺されたとき、私は何もかも絶望した。それから私に敵の奴らを皆殺しにして、何もかもどうでも良くなって自暴自棄になっていた。それから少し前まで私はそんな感じで生きてきた」

「それで、それと私がどう関係してくるのよ」

「いいから最後まで聞きなさい」

現時点でまったく私に関係が無いと思ったので、どこに私が関係してくるのかというのを聞くと、最後まで聞けと言われたので私は黙る事にした。

「それで自暴自棄になっていたそんな私には誰一人も私に近づくかなくなった。けどたった一人だけ私に手を差し伸べてくれる人がいたの。それはあの時の私と密かに付き合っていた竹宮風哉だった」

「え、それって隼人のお父さん!？」

「ええそうよ。私達は付き合っていたの。お互いに愛しい、私は

風哉と一緒に居る時だけは幸せだった。けどそれは結局幸せになれるわけではなかった」

「……フェスターの十戒第參条、だいさんじょう『八神近家の一族は自分の一族以外の八神近家の一族との婚姻は禁ずる』。それが問題だった」

「そういう事よ。現に風哉は政略結婚として郁美と結婚していて、時間が空いている度に私に会いに来ていている感じだった。けど結局私達が付き合っていることはばれてしまうわ。けどそのとき私は風哉と私の子どもを授かっていたのだけど、郁美も風哉の子どもを授かっていた。そして運が悪かったのか、同じ日に私達は出産をしたの。けど私の子どもは出産してすぐに死んでしまい、郁美は双子の兄弟を生んだの。それを聞いたときはもう何もかもが怒り狂いそうだった。どうして私だけこんな不幸な目に合い、他の人間は幸せになれるのかと。それから一年後に私は政略結婚で結婚し、鈴奈を生んだのよ。けどそのときの私はそんな事はどうでも良くて、八神近家とこのを潰したかった。潰したくて潰したくてたまらなかったのよ！！」

私はクソババアから聞いたことはかなり衝撃的な事実だった。まさかこんな事があったとは思わなかったのだ。けど私が驚くのはこれだけではなかった。

「そして家柄戦争の時、私は八神近家を潰す事しか考えてなくて、自分の邪魔をする人間は一人残らず殺していった。今思えばアレは何の為に戦っていたのか私でも分からないし、人を殺してもなんとも思わなかった。けど私は家柄戦争をするなら絶対戦いたくなくかつた唯一の生きがいである風哉と戦い、そして完膚なきまでに叩きのめされた。このとき私は死ぬのだらうと思ひ、風哉に殺されるならもうそれで良いと思っただけど、風哉は私を殺さずに最後に私を『愛

してた』と言つて私を殺した事にして逃がしてくれた。けど私は八神近家のせいで人生を狂わされたのは変わらなかつたので、それから八神近家を潰そうと一昨日まであらゆる手を使って行動していたのよ」

「一昨日まで？」

「そう、識の家で識と戦つた時に歯が立たないと分かつた私は一昨日に竹宮家本家に行つて識の性格を妹である郁美に聞こうとしたのよ。郁美の旧姓は舞田郁美だから舞田識とは姉妹になる訳で、学生時代はよく三人で話していたの。だから私は妹である郁美に聞きに行つただけで、色々あつて私は今まで自分が知らなかつた事を聞かされた。風哉は龍哉によつて殺された事や、死ぬまで私を愛していてくれた事。そして、私と風哉の子どもは未だに生きており、それが竹宮隼人だという事を」

「う、うそでしょ。隼人が私のお兄ちゃんだというの！？けどなんで子どもが生きていたのよ！生まれてすぐ死んだんじゃないの！？」

「郁美から私と隼人のDNA結果を貰つて家族だと一致したから事実よ。あの時、私の子どもは郁美の双子の弟として、私の子どもを生まれてすぐに死んでしまつた事にしたのよ。現に郁美は兄の良鬼には優しくして、弟の隼人にはかなり厳しくしていたらしいの。郁美もかなり昔から風哉の事が好きですつと私達はライバルみたいな感じだつたから、風哉と結婚したとしても風哉が私はずつと好きだつたから、私の子どものみである隼人に八つ当たりをしていたのでしょうね。子どもは関係ないと思うけど、それでも無いと郁美は多分ストレスを発散されなかつたのだらうね」

私は驚いて何も口に出せなかった。衝撃的な事でありすぎたのだ。隼人が私の父親違いの兄妹だったのだと思わなかったのだ。ってかそんな事を思うわけが無いし、早美に『お姉ちゃん』と言ったのも姉っぽく感じたからであって、別に他意はなかった。けど本当に兄——（今は姉だけ）だとは思わなかったのだ。

「そして、ここに来た理由は鈴奈が私に対する恨みを晴らさせる為それが最後に出来る私の仕事で、役割だと思ったのよ。だからそのために隼人に手伝ってもらってみんなを足止めしてもらったのよ。本当なら私は鈴奈に殺してもらい、こんな事は隼人に言ってもらったつもりだったのだけどね」

「私はどうすれば良いの？」

「それは鈴奈に任せるわ。私を殺しても良いし、生かしているのも良い。私は鈴奈の為に何でもするから。そしてこんな母親で今までごめんなさい。こんなに酷い目にあわせてしまって。だから私は

」

私はクソババア……いや母親が話し終わる前に母親に抱きついた。母親もこんなにも不幸な目にあっていたと言う事が分かり、私だっ
て母親みたいな目にあったら絶対にそうなってしまっただろうと思っ
たからだ。母親が私を暴行していた事などもあったので、トラウマ
で怯えてしまっただけで母親が許せないとは思っているが、それは私がな
んとかすべきことだろうと思ったのだ。

母親は突然私が抱きついてきた事に驚いていたが、私はそれを気に
せずに話し始めた。

「これからは、こんな争いをしないで平和に暮らしましょ。今まで

何人も人を殺したのには許せないけど、それはお母さんが生きて罪を償えば良いじゃない。警察がお母さんを捕まえにクルカも知れないけど、清水統括理事長なら何とかしてくれるからさ。それと、お母さんは泣いても良いんだよ。色々溜め込んでいるとおもつからさ」

「鈴奈……」

母親は両手を私の背中に置き、そして泣き出した。約二十年間、本当に色々溜め込んでいたのだろう。それが今一気に崩壊したのだと私は思った。

そして、母親は約二時間も泣き続けるのだった。

第三十八話

早美 side

「ゆうこ急いで！」

「分かっているけど、主導服は走りにくいのよ！」

私達が飛行機で関西国際空港に着くと、急いで自分の荷物を持って走っていた。

時間は夜の七時。もうすぐクリスマスに近い十二月ということもあって外の気温は能力都市の気温と違ってかなり冷える頃だった。そして外はもう夜になっており、外は電灯などの電気で光っていた。

私達は空港を出てタクシー乗り場に着くと、急いで乗り込んだ。そして運転手に能力都市の空港に行く前に良鬼に連絡して舞田識の住所を教えてもらいそれを運転手に言っ、それを聞いた運転手はどこか理解したようで舞田識の家に向かうのだった。

「ってか優子、修道服が走りにくいなら着替えれば良いのに」

「だって私、私服持っていないもん。それに修道服の方がもう慣れちゃったし。ってか修道服が私服みたいな感じだし」

「こんど何か洋服買ってあげようか？」

「うーん、でも早美に買ってもらうのは私が嫌だから、少し考えさ

せてもらおうわ」

優子が修道服しか持っていないという事を聞いて、それを聞いた私が洋服を買ってあげようかと言うと、優子は人に洋服を買ってもらうのは余り好きではないらしいので、考えさせてくれと返ってきた。まあ、人に買ってもらうのはなにか遠慮したいくなくなるのは分かるので私は「じゃあOKだったら私に言ってね」と言うのだった。

そんな他愛無い話を舞田識に着くまで二人で話し合い、そして数十分後、私達を乗せたタクシーは舞田識の家に着き、運転手にお金を支払った後、すぐに出て舞田識の敷地内に入るのだった。しかしタクシーから降りて私達は舞田識の屋敷を見て、外見がまったく壊れていない事に少し驚いていたのだった。

「どういうことなのかしら？右近神と戦っているなら何か壊れても可笑しくないのに何も壊れていないと言うのは？」

「分からないわ。とりあえず屋敷の中に入れば分かるんじゃない」

「優子の言う通りね。それじゃあ行きますか」

私達はそんな違和感を思いながらも、屋敷の中に入るのだった。中に入るとメイドや執事の姿が見えず、本来なら普通居るはずなのに誰も居ない事にさらに違和感を感じ、それでも私達は先に進んで行く。屋敷の中はかなり広そうなので、二人で手分けして探しても霧がなさそうな感じだった。けど私達は手分けして探す訳でもなく二人で一緒に行動して母親と舞田識を探すのだった。

そして数分後、私達が一つ一つ部屋を開きながら探していると、優子があるものを見つけてのだった。

「早美、ちよつと来て！」

私は優子に言われて優子のほうに向かうと、そこには階段があつてそこに一人の執事の死体があるのだつた。しかも、今日殺された感じではなくて、もう二週間くらいは経っている感じだつた。多分、松本麗華がここに来た時に殺したのだろうと私はすぐに分かつた。

「もう、この人は死んでから二週間くらい経っているわ。多分、松本麗華がここに来た時に殺したのでしょう」

「え、松本麗華はここに来たの？」

「そういえば私以外の八神近家の当主は知らなかつたわね。松本麗華は二週間くらい前にここに来ているのよ。一番厄介な舞田識を殺すために。まあ、返り討ちにされたらしいけど」

「じゃあこれはそのときの死体だというの？」

「そういうことになるわ」

「じゃあこの血の足跡は松本麗華の足跡だという事なの？」

「そういうことになるわね。まあ、とりあえず今はそんな事より…」

…」

私はふと何かを思いついた。舞田識は誰から見ても何を考えているか分からない人物で、人が好かない場所だつて行くような方だ。だから私はもしかしたらこの足跡を辿っていけば、舞田識と母親がいる所に行けるのではないかと思つたのだ。私はそう思うとすぐに足

跡が続いている階段を上るのだったのだ。

私が突然階段を駆け上がったので、優子もどうして私が走ったのか
と思いつつもその後ろをついて来ながら私に聞いてきた。

「ちよつと早美！？一体どうしたのよ！」

「もしかしたらこの足跡を辿ったらお母さんと舞田識が居るかも知
れない！だから私について来て！」

私は完結に優子に言い、優子も何となく分かったらしいく、私の後
をついて来たのだった。

そして松本麗華の足跡を辿って行くと、途中でメイドや執事達の死
体を見たが、それにはまったく気にしないで先に進んで行った。そ
して足跡を辿って行くと、足跡の先に一つだけドアが壊されている
のを見つけてそこに向かって走っていった。

そのドアが壊されている部屋に入ると、すぐに見覚えがある二人の
死体を見つけるのだった。

「な、何がここで起こったの？お母さんと舞田識の二人とも死んで
いるってどういふ事よ」

そう、見覚えがある死体と言うのは私の母親である竹宮郁美と舞田
識の死体だったのだ。しかも二人とも心臓がかなり抉られており、
すぐに別の第三者にやられたのだと私は分かった。けど右近神と契
約している人物を殺せる奴はかなり絞られてしまう。けど右近創世
神が直接殺すわけが無いし、今の神の世界で右近創世神に刃向かう
神なんて居るはずが無い。刃向かったらその神が右近創世神によつ

て殺されるからだ。だから他の神が殺したという考えは一番ありえないのだ。

しかし神以外にも一つだけ右近神に契約した人物を殺せる奴等がいる。けどそつちはもう一人も存在する訳が無かった。約百年前に同じ種族の一人によって全滅され、その一人も自殺したのだから存在する訳が無いのだ。

なら一体誰が母親と舞田識を殺したのか？上で挙げた二つしか右近神と契約した人間を殺すことは出来ないのだから。

そう思っていると突如カップをテーブルに置くような音が聞こえてきた。私達はその音を聞いてすぐに警戒すると、突如声が聞こえてくるのだった。

「 やつと来たんだ。まったく、あの人がもしかしたら竹宮隼人と雨宮優子がここに来るかも知れないからと言われて待っていたけど、何時間も待たせるのよ。待ちくたびれたじゃないのよ」

一体どこから私達を見ているのかと私は思っていると、私達からの視界から見て、座っているのが見えなかったソファから誰かが立ち上がったのだ。赤い髪に大きなピンが付いている帽子を被っていて、私達と同じくらいの年齢の女性だった。

第三十八話（後書き）

次回は最終話なのですが、かなり長めの予定なので明日には投下できないかも知れません。

後、里村紅葉と聞いて気づいた方もいますよねww

最終話（前書き）

なんか右近神フェスターの台詞が消えていましたorz

最終話

早美 side

「あなたは一体誰なの？」

私は彼女に問いかける。多分、彼女が母親と郁美を殺したのだろうとなんとなく分かったので、私はそう聞いたのだ。それに私と優子の名前を知っていたので、まったく無関係な人物とは考えられず、しかも私達を待っていたようだった。

そして彼女は私の質問にどう答えようかと悩んでいるような顔をして言うだった。

「うーん、あたしが殺した二人にはあたしの名前を教えるつもりは無かったけど、二人には別に教えても良いとあの人から言われているから、別に名前を言っても良いのだけどね。でもどれを使えば良いのかな？旧姓の名字で言えば良いのか、今の名字で言えば良いのか、それとも『断罪者』としての名前で言うべきなのか分からないんだよ〜」

「『断罪者』ですって!？」

「ええそうだけど。あたしは『断罪者』の生き残り。もう一人『断罪者』の生き残り入るけどね」

その言葉を聞いて私と優子は驚いた。まさか、『断罪者』の生き残りが存在するなんて思わなかったのだ。なんせ『断罪者』は元八神

近家であつた竹馬ちくま家を滅ぼし、『断罪者』になつた当時八神近家の最強と言われた竹馬ちくま釜彩かさいによつて『断罪者』は全滅させられ、その後彼も自殺したのと言われているのだ。なのに、まさかまだ『断罪者』が生きているとは思わなかつたのだ。そして私達が驚いていると、この後彼女の名前を聞いてさらに驚くのであつた。

「とりあえず全部言つても良いだろうからあたしの名前を全部言おうか。どうせあたしの名前は旧姓の名前が里村紅葉さとむらもみぢで、今の名前が竹宮紅葉。そして『断罪者』としての名前が紅葉・A・F・チクマよ。今は里村紅葉と呼んでもらつた方が良くから里村紅葉で呼んでくれると良いかな？」

「竹馬ですつて!？」

「え、そうだけど? ああ、竹馬と言うとあの人の事を思い出しちゃうのか。八神近家だとプシー又は嫌われているからね」

「あの人つてまだアイツは生きているの?」

「そうよ。だつて『断罪者』は同じ『断罪者』に殺されない限り、永遠と生き続けるからね。まああたしが『断罪者』になるまでは約百年も一人でひっそりと暮らしていたらしいけどね。ちなみに今は竹馬釜彩ではなくて『断罪者』名でプシー又アルカウエルトルク・A・F・チクマだけだ」

私はそれを聞いて驚くしかなかつた。八神近家で今でも嫌われているあの竹馬釜彩が未だに生きていなんて想像もしていなく、しかも『断罪者』として今も生き続けているなんて思いもしなかつたのだ。彼が八神近家の当主をしていた時は勝てるほどが誰も居ないと言われた人物らしく、それは今でも八神近家の歴史としてその事を

受け継いでいるのだ。歴史上、八神近家の中で最強と言われ、そして『断罪者』となる為に全てを犠牲にする為に竹馬家の一族を全員殺害した人物。それが竹馬釜彩なのだ。

「って、かなり話しすぎちゃったな。プシー又の事は話すつもりは無かったのだけだね。どうせあんた達二人はこの後の『非日常という物語』の鍵となるのだから」

「なんか、その良い方だとまるで私たちの未来が見えているみたいわね」

私も優子と同じ事を思った。里村紅葉の言い方はまるで未来がどうなるのかを分かっているかのような言い草だったのだ。しかし里村紅葉は優子の言葉に肯定するのだった。

「それであっているわよ。まあ、未来が見えるのはプシー又だけなんだけどね。あたしは竹馬が目指している今ある未来を手伝っているだけ。そうしておかないと、この先に起こる未来で『非日常』から『日常』に変えられるのは無いのだから」

里村紅葉は顔を悲しそうな顔に変えるのだった。けどそれはすぐに戻って話を続ける。

「さて、やっと本題に入るけど、あたしはあんた達二人を待っていた理由があるの」

「理由？」

「そ、『非日常という物語』の鍵となるあんた達二人にね。先に言うっておくけど、あんた達に二人はこの先とても残酷な運命が待って

いる。しかも後数日にある十二月二十四日のクリスマスの日に」

「一体、十二月二十四日に何が起ころうとしているの？」

優子はその日に何が起ころのかと聞く。確かに年に一度ある日に一体何が起ころのだろうと思ったのだ。

「それは言えないわよ。それによって未来改変されたらあたし達が困るもの。それにあたしさえ未来に何が起ころのか知らないし、知っているのは何百年も先の話に起ころ事だけ。それ以外はプシー又があたしに教えてくれないから、プシー又しか知らない訳。それに未来を知ったらなんか裏技を使うみたいでつまらないし」

「話はそれだけなの？」

「まあ、他にもあるといったらあるけど今はいつかな。余り良い過ぎるとあたしがプシー又に怒られるし。それじゃあ最後にあたしに聞きたいことはある？」

「じゃあ一つだけ。お母さんと舞田識が契約していた右近神はどうなったの？」

「ああ、あの二人は逃げられた。正確に言うと逃がしたと言った方が良いのかもしれないね。今回、あたしの役目は右近神を警戒させる事だから。ちなみに竹宮郁美と舞田識の姉妹を殺したのはあたしだけ、この二人があたしに刃向かってきたから殺したただけよ。別に殺すつもりなんて無かったし」

「そう」

「あれ？怒ってくると思ったけど怒らないんだ。とりあえずあたしはこれで失礼するわね。あんた達にはまた会うでしょうけど。それじゃあね」

里村紅葉はそう言うて窓から出ようとするが、何かを思い出したのか突如足が止まってまた私達の方を向くのだった。

「あ、そうそう良い忘れたけど、竹宮隼人はいつまで女の姿でいる訳？もうとつくに元の姿に戻れると言うのにな。もしかして右近神フェスターから教えてもらっていないとか？それだったらかなり最高なんですけど」

「え、私ってとつくに元に戻れたの！？」

私が里村紅葉にその事を聞こうとするが、腹を抱えて笑い出していたので答えられるような感じではなかった。

「ご、ごめん。後は右近神フェスターに聞いて。マジで笑えるから答えられそうにないから。とりあえずあたしはこれで失礼するから」

今度こそ里村紅葉は腹を抱えながらも窓から出て行ったが、私はさっきの事を右近神フェスターに聞こうと話しかけるのだった

「一体どういふ事だというのかしら？どうせ起きているんでしょ？」

> ……ばれてたか。確かに、もうとつくにお前は元の男の姿に戻れるぞく

「じゃあなんで言わなかったのかしら？」

>それはそっちの方が面白そうだったからで……<

「ほう、じゃあ一度姿を現しなさい。私のナイフでぶった切ってあげるから」

>誰が現れるか！！とりあえず後で元の姿に戻る方法を教えるから今は寝かせてくれ<

「ってそう言っただけで逃げようとしなさいよ！！」

>ZZZZ……<

「本当に寝るなあ！！」

私は右近神フェスターに怒りを覚えながらも寝てしまったので、ため息を吐きながらも仕方なく優子のほうに振り返る。

「とりあえず今日は良鬼の家に泊めてもらって明日帰りますか」

「そうね。結局ここには何しに来たか分からないけど」

「まあ、来たおかげで分かった事もあったから良いでしょう。とりあえず行こう」

私達はそう言っただけで舞田家を後にし、舞田家の前で電話でタクシ―を連絡してここに来るように頼み、数分してタクシ―がやってくるとそれに乗って良鬼が住んでいる家に向かうのだった。

それから二日後、わた……いや俺は右近神フェスターから元の姿に戻る方法を教えてもらい、それからSCS部隊の仕事をしているのだった。

久々に男に戻ってかなり嬉しかったが、優子、瑞希、美羽、鈴奈の四人は何故だかガツカリしていただが、それほど俺の女姿が良かったのだろうか？まあ男でも女装があう俺なのですけどね。

ちなみに松本麗華もとい私の本当の母親は能力都市にやってきて自分の罪を生きて償う為に信之おじさんの下で動いてもらっているらしい。また、松本麗華が生きているというのを知っているのは俺、鈴奈、前八神近家のまだ生きている信之おじさんと浅野咲だけらしい。まあ、文弥に知られたら松本麗華を殺そうとするだろうし、それ以外にもいろいろと大変な事になるだろうと思つて、なるべく生きていくつということを知らせずに死んだ事にしておく事にしたのだ。

また、母親もとい竹宮郁美と舞田識の死体はあの後信之おじさんが部下に頼んで回収してもらって墓に埋めたらしい。今度俺も行く予定だけど、二人には安らかに眠って欲しいと思つていた。どうして母親と舞田識がそれぞれ右近神ジューペインと右近神アーフィクトと契約したのかと言うのは、結局分からずに終わってしまったが、別に知らなくても良いだろうと俺は思つたのだ。

時刻は午後六時。俺は今日やるべき仕事を全て終わらせて、SCS

本部から家に帰る事にした。昨日は二週間分の溜まっていた書類を全て消費させるのに深夜を回るくらい頑張って疲れていたが、今日はそれほど無かったのでのんびりと出来ると思っていた。

「ん？あれは鈴奈か。一体なんでこんなところで待っているんだ？」

俺がSCS本部の出入り口から出ると、何故か鈴奈が待っており、俺が出てきたのに気づくとこちらに近づいてくるのだった。

「もしかして俺を待っていたのか？」

「うん、ちょっと隼人に話したいことがあったから」

「じゃあ、歩きながら話すか」

俺はそう言って鈴奈と一緒に帰りながら話す事にしたのだった。

「それで、一体何の話なんだ？」

「お母さんから聞いたのだけど、隼人があの場を作ってくれたのでしょ」

「ただ頼まれただけだよ。けど、うまくいって良かった」

「別に良いんだよ。まあ、未だに小さい時の記憶があるからお母さんを見るとたまに怖いんだけどね」

「それは仕方ないだろ。それはトラウマに近いことなんだからさ。少ずつ頑張っていくしかないからね」

「そうだね。私も頑張らなきゃね」

鈴奈は俺の言葉を聞いて少し元気付く。そしてそれから鈴奈は俺にある事を聞くのだった。

「そういえば隼人も知っているんだよね。隼人の本当の母親が私のお母さんだって」

「知ってるさ。さすがに最初聞いたときは驚いたけどな」

「じゃあさ、今度から隼人と二人の時は隼人の事をお兄ちゃんと呼んで良いかな？」

「別に構わないけど。一応俺達は親違いの兄妹なんだからさ」

「じゃあ、今度から二人の時はそう呼ぶね」

鈴奈は笑顔で俺にそう言うのだった。

そしてそんな他愛無い話をしていると、俺たちのマンションに着き、俺達はそれぞれ違うマンションなので鈴奈のほうのマンションの出入り口の前で立っていた。

「それじゃあ、私に行くね」

「ああ、また明日な」

「うん、また明日ね。そしてありがとう、お兄ちゃん」

鈴奈はそう言ってマンションの中に入っていき、それを見送った俺

は自分の家に戻る為に自分のマンションの方に向かうのだった。

o u t s i d e

「結局、私は動く必要は無かったわね」

「まあ、結果論だから仕方無いだろう」

『能力都市』の統括理事長室に二人の人間が居た。

一人は統括理事長である清水信之であり、もう一人は浅野咲だった。

浅野咲は今回の件は裏で動いていたのだが、結局は何もしないまま決着がついてしまった為に、能力都市に戻ってきたのだ。

「そつえば松本麗華に会ったのか？」

「まだ会ってないわ。明日辺り会うつもりよ」

「そつか。それで今回は何のようであつたんだ？」

そつ、今回は浅野咲が清水信之に用事があつたためにここにやつてきたのだ。そして浅野咲は清水信之に用件を話し始めるのだった。

「実は松本麗華の事を裏で動いていたら、ある事を知つたの」

「それは一体なんなんだ？」

「右近神フィリアムが動き出したわ」

「……それは本当か？」

清水信之は本当のことなのかと疑うかのように聞く。

「ええ、多分数日もしない内にこっちに攻め込んでくるでしょうね」

「それは警戒しておいた方が良さそうだな」

「そういう事。とりあえず用件はそれだけよ。それじゃあ私はこの後も忙しいからそろそろ行くわね」

「分かった。情報をありがとうな」

浅野咲はそう言って部屋から出て行く。一人になった清水信之は一人になると何かを呟き始めた。

「まったく、俺達は本当に『非日常』しかないな」

そしてこちらはある部屋の一角。その部屋の中には二人の人物いた。

一人は里村紅葉。そしてもう一人は普通の洋服に黒いマントを羽織

ってる人物だった。

二人は紅茶を飲みながら会話をしていたのだった。

「それで、そっちはどうだったんだ。竹宮隼人と雨宮優子には会えたのか？」

「一応ね。けど、あたしの口が滑って色々な事を言っちゃったけど」

「まあそれくらいは良いさ。我々の目的にはそんなことで障害はないだろうからさ」

「そっちは今まで何していたの？あたしにも教えてくれなかったけどさ」

「別に大した事ではないさ。ただ松本鈴奈と松本麗華の戦いを観戦していて、松本鈴奈が背中を刺されたときに少し助言をしたくらいだ」

「何していたのかと思ったらそんな事をしていたのね」

里村紅葉は自分に何も言わなかったからもっと重要な事をしているのかと思っただが、まったくもってどうでも良い事で、自分は殺し合いをしたのにそんな事をしていたのかと思っただけ、ため息を吐くくらいだった。

そう、鈴奈が自分がこの後死ぬと思ったとき、鈴奈に話しかけていたのは彼だったのだ。彼は鈴奈と松本麗華の戦いをずっと観戦しており、戦いが終わるまでずっと見ていたのだ。

里村紅葉は紅茶のカップを持って一口飲み、それをまたテーブルに置く。と彼にある事を聞く。

「それで、あたしはこの後どう動けば良いの？」

「まだ動く必要は無い。十二月二十四日までは我も紅葉もすることが無いのだから」

「じゃあそれまではのんびりしよう。久々に遊びたいからさ」

「分かった分かった。じゃあ明日にでも行くか」

彼、プシーヌ・A・F・チクマと里村紅葉こと紅葉・A・チクマは明日遊ぶ約束をし、お互いにカップを持って紅茶を一口飲むのだった。

瑞希 side

私は携帯電話を開いたまま、右手に持ちながら呆然と立っていた。理由は先ほどの私に掛かってきた電話である。非通知で掛かってきたのだが、電話に出るとかなり懐かしい声が聞こえてきたのだ。この世にもう居るはずの無い人物の声が。

まさか彼が生きているとは思わなかった。あの時、彼はある事件で殺されたと思っていたのだから。

「生きていた。神郷栗栖しんこうりしが生きていた！」

そう、私に電話を掛けてきたのは隼人、良鬼、私の親友で三年前に殺された神郷栗栖しんこうりしだったのだ。

そして物語は本格的に動き出す。この事件がそれぞれの人生を狂わせる前兆であったのだ。

最終話（後書き）

次回から第五部突入します。一応主要人物は全員でましたね。

プロローグ（前書き）

第五部、残酷な記念日突入！！
クリスマス・イブ

やっとここまで来ました！ まだ半分も終わっていないのですけど
ねww

それではどうぞ！！

後、書き方かなり変えました！

プロローグ

神郷栗栖しんこうりす

俺、良鬼、瑞希の親友であり、瑞希の初恋の人物である。そして、三年前にある事件によって殺された人物でもある。

あの時の事件は今でも鮮明に覚えている。なんせ、俺と良鬼の目の前で殺されたのだから。

三年前、良鬼が家出する前に俺たち四人はよく遊んでおり、四人で遊ぶのは当然という感じであった。小学校の頃からずっと四人で遊んでおり、そのときの俺は唯一の安らぎでもあった。あのときの俺は、家では当時は本当の母親だと思っていた竹宮郁美に毎日のように叱られ、家に居るのが一番辛かった時期であった。さらには小学校六年生の時に、もう一つの安らぎ場所であったお婆ちゃんである竹宮才華たけみやさいかが天壤によって実験台にされ、自分の手でお婆ちゃんを殺すことになって、それから殺人鬼駿河大輔として天壤の人体実験にされた被験者達を全員殺していたという裏の姿があった為に、唯一の安らぎがここしかなかったのだ。

しかし、俺が安らぎにしていたこれも、三年前の十二月二十四日に崩壊してしまう。

あの日、クリスマスパーティーを瑞希の家である清水家本家に俺と良鬼と栗栖は招待され、俺達は清水家に行く前にプレゼント公開に使う物をそれぞれ選びに三人で買い物をしてデパートに来ていた。栗栖が先に決まって先にデパートの入り口で待っていると言う事になって、栗栖は先にデパートの入り口の前で待っていたのだが、それがいけなかった。

俺と良鬼もプレゼント交換で使う物を選び終わって、外で待っている栗栖と合流する為にデパートの中から出て栗栖を見つけたのだが、栗栖が俺達に気づいてこちらに手を振っていると、後ろから三十代くらい男性が栗栖に近づいていたのだ。俺は途中から駿河大輔に殺人鬼を任せたが、一時期は俺も何人も人間を殺していたのです

ぐにその男性が栗栖に殺気を放っているという事が分かってしまうのだ。すぐに栗栖に逃げると叫ぶがすでに遅く、俺が叫んだその数秒に栗栖はその男性に背中から刺されたのだ。多分その男性が栗栖を殺そうとした理由は神郷家に恨みがある人間だろう。栗栖の名字である神郷家は八神近家とはまったく関係ないが、神郷グループと言われている大会社でかなりの大富豪家族であり、竹宮家と清水家とはかなりの良い付き合いだった。そして栗栖の父親で神郷グループの社長である神郷武信しんこうたけのぶは使えない社員は即刻切り捨てているというかなり傲慢な人間なのだ。なので神郷グループに入社した社員でもすぐにクビにされる人間は多数いて、それによって社長である神郷武信に恨みを持つ人間が多数居る。社長に仕返しは出来ないからと言って子どもに八つ当たりをしようとする人間は今までも多数いたのだが、今まで殺そうとしている人間は誰も居なかったのだ。そしてその日、栗栖はその男性に背中を刺されて前に倒れていき、すぐに俺達は栗栖に近づいて携帯で救急車を呼んだ。俺はその男性を追おうか悩むが、今追って彼を殺したら俺が殺人鬼の駿河大輔だとはれてしまうと思い、彼を追わずに救急車を待つ事にしたのだ。そして救急車が来てすぐに栗栖は病院に搬送されて、俺達も一緒に救急車に乗って病院に向かい、病院に着いて栗栖が集中治療室に入ってから数十分して、栗栖の両親と俺たちの両親がやってきて俺達は竹宮郁美と一緒に家に帰らされる。そして翌日残酷な事を聞かされるのだった。栗栖が死んだと。

俺はそれを聞いたとき頭がまっ白になった。その一年前に俺は自分の手でお婆ちゃんを殺して、帰ったときに泣きじゃくったのに、今度は親友を殺されてしまったのだから。そして俺はこういう人間も現れてもおかしくなかった事を知っていた。なのに俺は栗栖が殺されてるのを見ているしか出来なかった。もっと早くその男性が栗栖を殺そうしている殺気に気づいていればこんな事にはならなかったと思っただのだ。

そして、その事件を皮切りに俺達の間もかなり変わってしまった。

俺達は三人で遊ぶ回数がかなり減り、その事件が起こった一年後に良鬼は行方不明になってしまう。そして俺は瑞希にサポートしてもらいながら天壤によって人体実験にされた人間達を何度も殺していった。その途中で殺人をするのが嫌になって駿河大輔に任せたりし、俺はもう現実から逃げたくなっていたのだ。今でもそうであり、俺はSSC部隊の中将をしているが、本当はそんなことすらしたくないで仕方なかった。けど皆には困らせない為に今まで俺は頑張ってきたのだ。

けどそれもぶち壊されてしまう。生きているはずも無い神郷栗栖によって。

そしてこの事件によって俺は今まで身近にいても最愛な人物を失くすのであったのだ。十二月二十四日のあの事件によって。

日常が非日常に変わるとき、物語は始まる。

第一話（前書き）

二か月ぶりですね……

遅れた理由は電撃小説大賞に応募する小説を優先的にしていた為に遅れました……

少しずつ更新していけたらいいと思っています。

それではどうぞー！！

第一話

隼人 side

十二月二十三日。クリスマスイブ前日であり能力都市も町中がクリスマス準備やらクリスマスツリーなどとクリスマス一色だった。けど俺はそんな事よりも気になることがあった。ここ数日考えていた事だ。

それは俺の本当の母親である松本麗華が起こした事件が終わって二日後の夜。突然瑞希から連絡があったのだ。

その時の内容が俺でも驚かされることだった。

栗栖が生きていた

それは俺達にとつてとても驚かされることだった。何故なら彼はあの時に殺されていたと思っていたことなのだ。

しかも、あの時俺と良鬼は目の前で栗栖が殺された所を目撃しており、病院で亡くなったという事を聞いたはずなのだ。なのになぜ生きているのかそれが疑問に思った。どうやら瑞希は栗栖が生きていたことがかなり嬉しくて、そこまで考えが回っていないような感じだったので、俺は瑞希とその電話を切ったあとすぐに良鬼に連絡した。

良鬼は俺が栗栖が生きていたという事を言うと、最初は良鬼も驚いていたが、すぐにどうして生きているのかという疑問になった。あの後、確かに葬儀は行われたし俺達もそれに参加し火葬されるま

で見届けたからだ。そう、栗栖が生きている事なんて絶対にありえないのだ。なら瑞希の冗談という事になるが瑞希が栗栖の事でそんな嘘をつくはずがないのだ。瑞希の初恋の相手は栗栖のだから冗談半分でそんなことを言うわけがないわけで、瑞希の話は事実なんだろう。

そして俺と良鬼が出した結論は、栗栖は生きているがきつと何かがあるという事だ。死んだ人間を生き返すなんて言うことは絶対にありえないし、人間を生き返すなんて言うことは人間には不可能な話だ。さらに言うのならばもしあの時栗栖が死んでなかったとしても何故今更になって連絡を掛けたのかという事であり、生きていたとしても絶対に何かを企んでいるという事はすぐに分かったのだ。しかも俺と良鬼には栗栖からの連絡はないまだ一度もないという事も考えると、そうなんだろうと俺達は確信が持てたのだ。

なので良鬼は一度能力都市に訪れるという事になって、瑞希の様子を見るという事になった。吸血鬼の一件があるかと良鬼は今でも四人で遊んでいたことは忘れておらず、今でも思い出であり、そして親友なのだ。

そして今日、俺は良鬼と会うために空港に向かっているところなのである。

「で、なんで優子がついて来るわけ？」

「偶然見かけたからだけけど？べ、別に隼人がどこに行くかなんて気にしていないんだから！」

「ようは俺を見つけて、どこに行くのかと思ったからついて来るという事か」

「だ、だから違っつてば！」

俺は優子をからかっていると、優子は軽く顔を赤くするのだった。

「冗談だ。けど、今回の事は優子に来てもらっては困るのは事実な

んだ」

「……なにかあったの？」

「まあ、そう言っちゃえばそうだな。それに、別にそれほど大きな問題でもないしな」

「なら私もついて行っても良いじゃない？」

「確かにそうなんだけど……」

俺はこのままだと優子がついて来るだろうと思ひ、どうやって優子にさせないようにするか考えていた。

俺が考えていると、優子が突然微笑みはじめた。

「分かった。今回の事は私に関係ない事なんでしょ。だったらこれ以上は言わないわよ」

「あれ、さっきまで気にしていたのに？」

「それは隼人が戸惑っている顔を見たかっただけ。っていうかさっきのおかえしだし。それじゃあ頑張ってるね」

そう言っつて優子は俺から離れていった。

そして俺は優子が離れて行ったあと、優子がどうして突然諦めたのかという事に気付かされた。多分、優子は俺がどうしても優子に来てもらっては困ることなんだろうと察したのだろう。今更分かったところで遅いのだが。

「　　ありがとうな、優子」

俺は優子が走って行った方を向いて、修道服を着た優子の後ろ姿を少しだけ見届けた後、空港へと向かうのだった。

第二話（前書き）

超お久しぶりです。

一応プロットは終わりまでできていますので、いつでも書ける状態なのですよね。

まあ、今は応募する小説をメインに書いているので、不定期更新ですが、なるべく更新できるようにしたいです。
それではどうぞー！！

第二話

隼人 s i d e

空港に着くと、この前に竹宮家に戻った時と同じくらいの賑わってだった。いや、それ以上に賑わっている感じだった。

なぜならみんなが俺の姿を見て来ているのだ。

どうして俺の姿なんかを見ているのかと疑問に思っていると、俺と同じ年ぐらいの少女が突然話しかけてきた。

「あの、竹宮隼人さんですよね？」

「え、ああそうだが……」

「ぜ、是非サインをください!!」

「はあ、別にいいけど……」

突然のことに俺は少し戸惑っていたが、その少女にサインをする？すると突然、俺を見ていた周りの人たちまで俺に集まってきて初め、先ほどの戸惑いよりもさらに戸惑い始めることになった。

四方八方から俺のサインを求める人が集まって来て、どんどんと人が俺に集まって来るばかりだった。

「ど、どういうことだぁ!!」

俺はどうして俺へのサインが求められるのかサッパリ分からないでした。分かっていた事と言えば、男に戻ってからはなんかさまざまなどころから視線を感じていたことで、あの時からどうして俺に向けて視線がたくさん感じていながらも気にしないことにしたのだ。

そして今回のことで俺は、自分がいつの間にか俺は有名になって

いたのだということ。どうして俺が有名になったのかということとは知らないが、どう見ても俺の名前を知っているようだし、何かで有名になったのだろう。

「どうしてこうなった……」

俺は今の状況をどうすればいいのか分からず、溜め息を吐くのだった。

「はいはい、ちょっとどいてくれるかしら？」

すると人の間を通り抜けてきて、金髪の女性が俺に近づいてきて突然俺の腕を握って引っ張っていき、俺も俺に集まってきた人々も突然の事で驚いて、俺の周りに集まっていた人々は動けないでいて、俺はそのままその女性に引っ張られるのだった。

そして俺は引っ張られたまま、空港の中で人気がない所まで移動し、そこで捕まれた腕を離した。

腕を話したところで俺はその女性に話しかけることにした。

「で、俺を助けてくれたのは嬉しいが、どうしてお前までいるのだけ？ ベアトシツチリーター＝マリアード」

「別に私はただ良鬼に付いてきただけよ。良鬼が居ないと一人でつまらないし」

「……それで、その良鬼はどこに？」

「私と良鬼の荷物を取りに行ってるわ。私もついて行くこととしたのだけど、誰かさんが囲まれているのを見かけたから。まあ、ここに来るまで誰か分からなかったけど」

「まあ、そりゃそうだろうな。でもあのままだったら数十分は抜け出せそうになかったから助かったよ」

「別にお礼をされるほどではないわ。それに、私たちはあなたには

救われたのだから」
「それでも助かった」

俺はあの場から抜け出せてくれたマリアードにお礼をするのだった。

マリアードはお礼されるほどではないと言われたが、それでも助かったのは確かなのでお礼するのだった。

「おいマリアード、突然居なくなるなよ。さすがにどこ行ったか慌てたぞ」

「ごめんね。周りを見渡したら誰かが囲まれている所を見かけたから助けにいっただけ。まさか隼人さんだと思わなかったけど」

「俺も誰かに助けられるとは思ってなかったけどな。しかもマリアードに。それとマリアード、俺の事は呼び捨てでも良いぞ」

「あら、別に良いの？」

「あんまり気にしてないからさ。この前も鈴奈を手伝ってもらって助かったからさ」

「じゃあ、お言葉に甘えて言わせてもらおうわ」

「……おい隼人、なに俺の彼女をたぶらかしているんだよ」

それから数分すると、良鬼が荷物を引っ張りながらこちらにやって来るのだった。

そして俺とマリアードが二人だけで話し合っていたからなのか、良鬼は俺に向かって怒りを向けてきた。

「別にたぶらかしてねーよ。ただ、さん付けで呼ばれるのはなんか違和感を感じたから呼び捨てで貰おうとしただけじゃないか。もしかして妬いたのか」

「べ、別にそんなんじゃない……」

「顔を赤くしてまで言われても、嘘にしか思えないぞ」

「まあ、私に妬いてくれたことは嬉しかったな」
「うう、うるさい！ と、とにかく行くぞ」

良鬼が顔を赤くしているのを見て、俺とマリアードは良鬼をからかうのだった。

早くこの空気から抜け出したいのか、良鬼は空港の入り口に向かっていき、俺とマリアードもその後について行くのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8907/>

God Force 神と少年の非日常

2011年11月16日20時25分発行